

研 究 紀 要

39

愛知文教女子短期大学

2018.3

目 次

原 著／論 文

保育者としての資質向上を目的とした表現活動の研究 ～サンドアートシアターの取り組み～	伊 藤 久美子	1
保育者養成校における音楽表現の効果的支援 ～保育現場から導き出すピアノ学習の教育的支援方法～	国 藤 真理子 玉 田 裕 人	21
人的環境としての保育者の支援の在り方 ～発達障害幼児とその保護者に関わる保育者に焦点を当てて～	仲 森 みどり	29
大学生の人権意識について ～県民の人権意識との比較から～	保 科 潤 一 田 中 基 夫	45

研究ノート

化学的膨張作用を利用した焼き菓子の製法の検討 ～有 尾 正 子 原 真由美 岩 田 侑 子～		69
ニュージーランドの就学前教育の現状 ～幼稚園・保育施設の現地視察調査より～	赤 塚 徳 子	75
社会におけるピアノ奏者の在り方 ～伊 藤 真理子 倉 田 弓 堀 内 恵理子 伊 神 千 愛～		89
音楽講師が保育者育成で心掛けたいこと ～園児の音楽性を伸ばす保育者を育成するために～	太 田 由美子 山 本 雅 士 天 石 佐保子 大 橋 昌 代	107
ニュージーランド英語に特有の発音と語彙について	笠 井 紀世史	131
豊かな言葉を育むために（現場経験を通して）	加 藤 智 子	145
家庭支援における教授内容の検討 ～「家庭支援論」「保育相談支援」「相談援助」の科目の連携に向けて～	祢 宜 佐統美 浅 野 順 子	153
造形表現の基礎的理解と指導法への活用	早矢仕 清 貴	161
保育実践指導の検討 ～絵本の読み聞かせを通して～	真 下 あさみ 伊 藤 久美子 柴 田 法 子 安 藤 彩 子	171
実習指導授業におけるグループワークの取り組み ～村 上 浩 美 朴 賢 晶 星 野 秀 樹 国 藤 真理子 伊 藤 久美子 玉 田 裕 人～		185

原著（論文）

保育者としての資質向上を目的とした表現活動の研究

～サンドアートシアターの取り組み～

伊藤 久美子

Improving Students' Level of Knowledge and Skills with Regard to Expressive Activities for Care Providers

—An Approach to 'Sand Art'—

Kumiko Ito

Abstract

One of the qualities that care providers should achieve is the ability to express lively on the spot what they feel in their hearts and minds while perceiving a variety of expressions and feelings children reveal to them. In other words, it is indispensable for care providers to acquire ability to express themselves for the purpose of extracting children's individual sensitivity and constantly stimulating their growth and development. However, there are many who are not able to fully express themselves in the presence of others and fail to interact with children.

In this report, we made a research on students' ability of self-expression and their consciousness of it. We took up 'Sand Art Theatre', one of the children's favourite sand plays and divided the students into groups to perform it efficiently.

In the 'Sand Art theatre' students create the whole story, music, and drawings sharing their concept with other members of the group. The gentle touch of the sand liberates their minds and they have great fun working with group members creating sand art works by using various kinds of techniques, which leads to mastering an effective way of communication by deepening mutual understanding among group members.

Our future theme is to organize data on each student's ability of self-expression and find the way of making the best use of them in practical training.

キーワード：表現、保育者の資質、サンドアートシアター

1. はじめに

保育者を目指す幼児教育学科の学生は、保育の専門的な理論や、保育技術を実践的に学び、幼稚園、保育所、施設の実習を通して子どもや、保育者の役割を学ぶ。子ども一人一人の個性を認め、表現を読み取っていく力が、保育者の資質として求められる。

現代の子どもを取り巻く社会情勢は、少子化、核家族化が進行し、子ども同士が集団で遊びに熱中するという体験が減少している。また、都市化や情報化が進展し、外出せずに必要な情報をインターネットで得ることが可能となり、SNSでの情報発信や、顔の見えない相手と通信することでゲームを楽しむことができるようになった。子育てをする親も、様々な情報を簡単に入手することができるようになり、子育てに対する疑問や不安を解消するため、大量の情報の中から正しい答えを選択することが必要になった。

このような状況から、一見すると便利な時代となったが、バーチャルな体験が日常化し、人と人との関わりが減少することにより、人間関係の希薄化が進んでいることは、昨今多く叫ばれていることである。

筆者が養成校で指導している学生は、このような情報化社会の進展が加速している時代に幼少期を過ごしており、幼少期の体験が現在の学生の姿を作り上げてきた。

筆者が学生に様々な指導を行う際、対人関係の中で表現する場面において、自分の能力を十分に発揮できない学生が多いと常々感じている。自分がどのように評価されるかを気にする傾向があり、人前で発表したり、自分の意見を述べたりする事に自信がなく、抵抗感を感じていると考えられる。また、人間関係について「自分は人見知りである」という理由で他人との交流を避けたり、相手に合わせて行動したりすることを煩わしいと思う学生もあり、保育者として子どもや保護者と関わっていくうえで、対応ができるのか大変不安である。本研究では、子どもの遊びの一つである「砂遊び」を取り上げ、「サンドアートシアター」として、グループ活動を中心とした授業を実践し、学生が持つ表現力や、自己の表現に対する意識を調査した。また、他人とコミュニケーションを取る方法をどのように身につけてきたのかを探りながら、養成校での学びの中でどのように表現力を引き出すべきかを検証していく。今後、保育者として子どもや保護者、職場の人たちと良好な関係を築いていく能力や、保育者としての資質向上を図るため、保育者養成における表現力の指導方法について、改めて追求したいと考えた。

2. 「サンドアート」と「サンドアートシアター」

「サンドアート」とは、砂を使って表現される芸術活動全般のことである。のりやボンドを塗った画用紙に、着色した砂を振りかけて描く砂絵や、海岸の砂を立体的に彫刻する砂像彫刻、ガラスの中に着色した砂を積み重ねていくガラスサンドなどがある。本研究で行う「サンドアート」は、半透明のテーブルの上に砂を敷き、下から光を当て、テーブルの上で、手を使って砂を薄く広げる。オーバーヘッドでスクリーンに映しながら、砂の陰影を利用してさまざまな絵や模様を手で描いていく表現技法である（図1）。「サンドアート」の表現を、

観客に見せるためにストーリーを考えて実演することを、筆者は「サンドアートシアター」と名付けた。



図1. サンドアートの様子



図2. サンドアートテーブル

日本ではテレビ番組で紹介されたり、ミュージシャンのプロモーションビデオに使用されたりするため、近年では「サンドアート」の知名度も上がってきた。しかし、映画館で映画をみたり、好きな音楽のライブに行ったりするように簡単に見られるものではない。筆者は、テレビの映像を見て感動し、自分でもやってみたいと考えた。「サンドアート」は、主に大人に向けて演じられることが多い。子ども向けにアレンジされたわかりやすいものもあるが、基本は大人主体の舞台である。砂に絵を描くという動作は、子どもたちの砂遊びに通じるものがある。また、原始的な自然素材を使った表現でありながら、ライトやオーバーヘッドを使って演じることが、現代のICT教育の導入により保育現場でも受け入れられると考えた。「サンドアート」の表現の面白さを子どもたちに伝え、子どもの遊びと成長を表す集大成として、将来「サンドアート」を子どもの舞台発表の新しい演目にしたいと考えている。そのためには、子どもたちを指導する保育者が、指導方法を身につける必要がある。

また、保育者養成では、学生の実習指導において、保育者としての質の向上を目指し日々奮闘しているが、保育者になる前段階の今、このような活動を広めて行く基礎的な表現力を身につけることで、今後必要となる保育者としての資質向上につなげたいと考える。

「サンドアート」を演じる際には、サンドアートテーブル（図2）を使用する。しかし、「サンドアート」を演じるという事はまだ一般的ではないため、既成のサンドアートテーブルが見つからなかった。そのため、工務店に依頼して作成してもらうことにした。テーブルの素材は、強化ガラス、ポリカーボネートがあり、砂の影だけが映るように乳白色になるように加工しなければならない。ガラスの場合は裏に障子紙のようなものを貼り、ポリカーボネートは乳白色のものを使用したりして砂の影以外が映らないようにしなければならない。サンドアートテーブルを授業で使用したり、今後保育現場で使用したりすることを考えると、強化ガラスではなく、軽くて割れにくいポリカーボネートを使用することにした。テーブルに乗せる砂の重量は2kg～3kgであるが、手で砂を動かす時にかかる圧力があるため、ある程度の強度が必要である。歪まないことを考慮して厚みを5mmにした。厚くすれば強度が増すが重量が増し、テーブルを持ち運んだり、設置したりすることが不便になる。ポリカーボネートのデメリットは、手で砂を撫で広げながら、絵を描いていると、静電気が起こり、小さな砂の粒がポリカーボネートのテーブル面で小さくはじけることである。しかし、「サ

ンドアート」の仕上がりに大きな問題はない。演者が二人並んで表現できるよう、テーブルの大きさを70 cm × 90 cm にした。テーブルの脚は、下から照らすライトの光が漏れないようにベニヤの板で四方を囲うようにし、その脚の上にテーブル面を乗せて設置する。テーブル面を囲う枠の部分は、鋼製で上から撮影用のカメラが取り付けられるような装置も取り付けけた。手元を映し出す機材はオーバーヘッドを使用せず、演じながら録画ができるように家庭用のビデオカメラを取り付けることにした。カメラを取り付ける装置は、高さや位置が微調整できるようになっており、ビデオカメラのズーム機能と合わせて調節ができるようになっていいる。テーブルの下から照らすライトは、光の広がり方や、熱による問題を考え、蛍光灯を利用した。使用する砂は、オセアニアの砂で、きめが細かいため、より細かな絵が描けることと、影の濃淡がはっきり出るという特徴がある。また、愛知県常滑市の海岸の砂も準備した。オセアニアの砂とは違い、砂の粒が少し大きい。常滑の砂で絵を描いてスクリーンに投影すると、やわらかいタッチの絵になる。

3. 保育者に求められる表現力

子どもが社会で生きていく上で必要な表現力を養うためには、近くにいる親や保育者の存在は大変重要である。初めての集団生活の場となる幼稚園や保育所では、保育者が人的環境として存在し、子どもたちにとって、その頃の経験やさまざまな学びが大人になるための土台を作る。こうして成長した大人が、次世代の子どもに教えるといった循環は、保育者がこれまでに身につけてきた表現力が子どもたちの成長に大きく影響するということである。そして、これらのことが複合的に絡み合っ、て、子どもの育ちに影響を及ぼしている要因になっているものと考えられる。しかしながら、少子化、核家族化が進行し、子どもどうしが集団で遊びに熱中し、時には葛藤しながら、互いに影響し合っ、て活動する機会が減少するなど、様々な体験の機会が失われている。

また、都市化や情報化の進展によって、子どもの生活空間の中に自然や広場などといった遊び場が少なくなる一方で、テレビゲームやインターネット等の室内の遊びが増えるなど、偏った体験を余儀なくされている。子育てをする親も、情報化社会の中で育っ、てきた世代に当たるため、子育てのツールとしてスマートフォンやパソコンなどを使用することに抵抗がない。育児不安を解消するには、膨大な情報の中から必要なものを選択し、確信のない子育てをしている母親も多い。電車の中やレストランで親子の様子を観察すると、会話をせず、スマートフォンを触っている母親を多く見かける。これが、少子化、核家族化の家庭の中で普通に行われていると考え、ると、子どものコミュニケーション能力の低下が止まるはずがない。

さらに、人間関係の希薄化等により、地域社会の大人が地域の子どもの育ちに関心を払わず、積極的にかかわろうとしない、または、かかわりたくてもかかわり方を知らないという傾向が見られる。こうして成長してき、てきた子どもたちが、現在、保育を学ぶ学生の子育てしてきた環境であり、これからを担う新しい時代の子どもの育てていく保育者や、母親となっ、ていくのである。

平成20年改正の幼稚園教育要領ⁱでは、5領域の中の「表現」において、感じたことや考えたことを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにすると書かれている。また、1ねらい(1)「いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。」と言うように感性について取り上げている。内容の取り扱いの留意点として(1)「豊かな感性は、自然などの身近な環境と十分にかかわる中で美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに出会い、そこから得た感動を他の幼児や教師と共有し、様々に表現することなどを通して養われるようにすること。」と明記されている。また、保育所保育指針ⁱⁱの中の保育のねらいでは、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」となっている。保育に関わる全般的な配慮事項の中でも、「子どもの健康は、生理的、身体的な育ちとともに、自主性や社会性、豊かな感性の育ちとがあいまってもたらされることに留意すること。」というように、子どもが体験を通して感じたことを表現もしくは表出した時に、保育者はその子どもの感動した気持ちを受け止め、他の子どもたちとも共有するために保育者自身が表現しなければならない。小柴(2008)ⁱⁱⁱは、保育者の役割は、幼児理解が不可欠であると論じている。幼児理解とは、発達の理解と共感的理解であり、発達の理解とは、幼児に関する知的な理解であり、一定の知識の学習によって習得されるものである。発達を客観的に理解することによってのみ保育者の役割が図られるわけではなく、一人一人の幼児の行動は幼児と保育者の相互関係を除いて考えることはできないと考えている。一方、共感的理解の能力は相手の心情をあたかも自分自身のことのように感じて理解することであるため、単なる知識の学習だけでは習得できないものであると論じている。物事を感じとる能力、つまり、感性を基盤とした理解力の習得が必要であると提唱している。こうして、共感的理解から信頼感が生まれるため、一人一人の子どもの置かれている背景を把握し、保育者は、子どもの表現との関係を理解した上で共感し受け止めていくことが大切である。

また、片岡杏子(2013)^{iv}は子どもの見本となる保育者の表現力について、「教員」は集団としての子どもたちの様子に目配りしながら、同時に子どもの表現を感じ取る感情を働かせると論じている。子どもが楽しんで遊んだり、ふと我に帰って笑う場面に共感をしめしつつ、同時に次のイメージの展開を提案したりする。子どもの遊びにまつわる高揚感を、保育者はやり取りの中で他の子どもに向けて表明しながら、その輪郭をはっきり浮かび上がらせると示している。つまり、保育者が必要とする表現力とは、子どもの反応を見ながら、その場に応じて、内面で感じたことや心で思ったこと、頭で考えたことを表すことである。美しいものを見て感動したり、楽しい時には声を出して笑ったり、悲しい時は表情を曇らせたりすることが重要である。表現することで他人との関わり方を学び、コミュニケーション能力を向上させる。コミュニケーション^vとは、「心やからだをめいっばいはたらかせて、まわりの世界とかかわりたいという主体の発達と、それを支える人々とかかわりのなかで、さまざまな形でことばが展開されていく。安心して自分を出せる関係や環境があるからこそ、ことばで思いを分かち合おうとするようになり、また、制限を加えられても「通じるはず」と言わんばかりに自分を主張できるのである。」というように、言葉で使える表現がコミュニケーションの手段として重要になる。

ジャン・ピアジェ^{vi}は、「言語の出現の最も明白な結果は、個人同士のたえざる交渉と交流を可能にするという点だ。おそらく、これらの個人同士の関係は、生後一年間の後半から、模倣のおかげで、生じかけている。」と論じている。言葉よって、「個人の可能な交渉。つまり、行動の社会科のはじまり。」「話し言葉の内面化。つまり、思考そのものの出現。この思考は、その支えとして、内言と記号体系をもつ。」「行動そのものの内面化。これは、今までのような純粋に知覚的で運動的なものから、そののち、イメージ及び「心内経験」という直感的な面で、再構築されることができる。」というように、言葉の発達において子どもが自分を表現する過程には、模倣するモデルの存在が関係する。このように、保育者の表現力は、子どもと関わる上で必要な力であり、保育の中で営まれる表現活動の質によって子どもの成長が左右されるものであると考えられる。

子どもの表現は、年齢や発達、個性などにより異なる。身体の表現でもっとも初期に出現するのは表情である。ピアジェが言うように、乳児は、模倣の遺伝的な技能が存在していないのに、大人の表情に共鳴して模倣することが明らかになっている。模倣の進歩は、感覚運動発達と、密接に結びついている。模倣の対象となるのが、多くは近くに存在する母親であり、保育者である。身体的な機能や構造が発達し、身体そのものを媒体とする表現が発達していくが、模倣から演じることへと発達し、より複雑になっていく。

ジョン・ボウルヴィ^{vii}の研究の中の一例を挙げれば、子どもは、生育歴や現在の環境において、多種多様な表現を行う。例えば、母性的養育の喪失において、母親から隔離された幼児の行動や感情の変化について、劇的で悲惨な変化が起こる。隔離児の特徴は、無関心、沈黙、不幸感、微笑やあやし言葉に対する無反応などであり、これらの現象は、他者とのコミュニケーションを妨げ、社会生活を送る上で大変困難な状態に陥る事になる。自分の表現を受け入れられた子どもは、相手を信頼し、自信を持ち、良好な人間関係を築いていく基礎を作る事ができる（図3）。

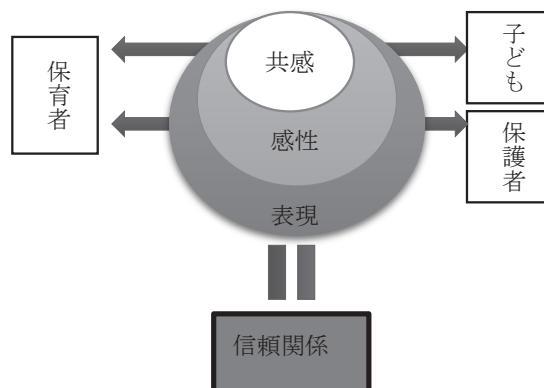


図3. 表現と信頼関係構築の関係

4. 研究の目的

子どもを取り巻く環境としての保育者は、子どもにとってどのように存在するべきか、様々

な視点から考えることができる。子どもが遊びを通して身につけることは、その後の人生を生きていく上で大変重要な人間としての土台を築く。そのためには、保育者の適切な援助や関わりが大切であるが、時代とともに、保育現場で子どもと関わる保育者も様々な個性を身につけて成長し、子どもの手本となる保育者となる。子どもが親や兄弟から離れて、初めて信頼する他人が、保育者であるとするならば、その存在の意義は大変重要である。保育現場に出れば、すぐに先生と呼ばれ、全てが子どもたちの手本となるため、保育を学ぶ学生時代から、一人の大人の保育者として感性や表現力を身につけておく必要があると考える。子どもとの適切な関わりを持ち、子どもの成長を導くことで、その子どもが大人になり、子育てをしていく。子どもと関わる保育者の力が今後の日本を作っていくといっても過言ではない。

自然を感じ、五感を刺激しながら思う存分遊ぶことは、子どもの感性を豊かにする。また、子どもたちの自発的な活動としての遊びを通して、表現力が発達する。子どもが他者との関わりを持ち、自然の物を使って自発的に遊ぶ代表的な場所には「砂場」があり、「砂場」での自発的な遊びには、本来の自分を表し、他者との様々な関わり合いで社会性を養う。他者とぶつかり合いながら相手と折り合いをつけていく方法を学んだり、共同して砂で物を作ったりする遊びを通して、対話し、言葉の表現をさらに発達させる。表現が豊かになれば、コミュニケーションが良好になり、今後生きていく上で必要となる社会性を身につけていくことができるのである。

現代の学生は、情報化社会で育ってきており、自然体験や人との関わりが豊富ではないため、表現力の乏しい学生が多いと考えられる。学生が、表現についてどのような認識を持ち、何を苦手としているのかを探り、表現指導の方法を検討する上での手掛かりとしたい。特に、言葉での表現力や、対話していく力を養うことは社会人になるにあたって必要である。そこで、子どもの遊びの一つである「砂遊び」を取り上げ、「サンドアートシアター」として、グループ活動を中心とした授業を実践する。

グループのメンバー同士が、一つのストーリーを考えて場面の絵を描くという活動を通して、対話による表現力の向上を目的とする。また、人前で発表するために、メンバー間で内容を共有する必要があるため、対話の必要性を知り、コミュニケーションが生まれることで、表現の楽しさを感じ、さらなる表現力の向上が期待できると考える。

5. 研究の方法

(1) アンケート調査

対象：短期大学幼児教育学科の学生85名

実施日：2016年2月～6月

サンドアートシアター実践の前後に行う。

保育者として必要な資質能力についての認識と、「サンドアートシアター」の取り組みを通して保育者として必要な表現力について何を学んだかを調査した。

なお、調査においては研究目的や個人情報保護について説明し、同意を得た上で実施した。

（２）「サンドアートシアター」の実践

時間：90分授業で3回実施

内容：ストーリーを考え、「サンドアート」で表現する。

上演時間は10分以内、音楽を選曲して流す。

各クラスを4グループに分け、各グループ6～8人でグループ活動として行う。

① 第1回目

グループ分けをし、発表までの流れを確認する。ストーリーと音楽を考える。

砂で練習する。

② 第2回目

ストーリーと音楽を確定し、全体の流れをグループで共有して練習する。

③ 第3回目

各グループで発表する。

6. 結果と考察

（１）学生の表現に対する意識

保育現場における表現活動は、さまざまな視点から考えることができる。その中でも、子どもの遊びの中には、多くの表現があり、子ども一人一人がさまざまな表現をしながら、自分と他人との関わりのなかで共に成長していく。保育の現場に出たらすぐに「先生」と呼ばれ、子どもたちの見本となる。子どもの育ちを支え、保護者との信頼関係を作るためには、コミュニケーション能力が欠かせない。コミュニケーション能力を養うためには、心や頭で考えたり感じたことを言葉にしたり、表情や雰囲気伝えるなど、さまざまな表現力が必要である。

そこで、保育を学ぶ学生を対象とし、保育現場で行われる保育者や子どもの活動において分類される表現、すなわち「言葉であらわす・物語る」「身体であらわす」「かく・つくる」「音であらわす」「うたう」「扮する・演じる」に関する意識がどのようなものであるかアンケート調査を実施した結果が次のとおりである。

質問内容

- ①思ったことを言葉で表現することは好きである。
- ②人前で歌ったりダンスをすることは好きである。
- ③空想したり、物語のストーリーを考えることは好きである。
- ④イメージしたものを形にする（作る）ことは好きである。
- ⑤水、砂、土、粘土で遊ぶことは好きである。

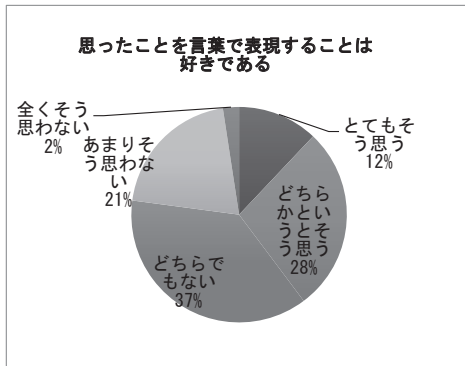


図4. 言葉の表現

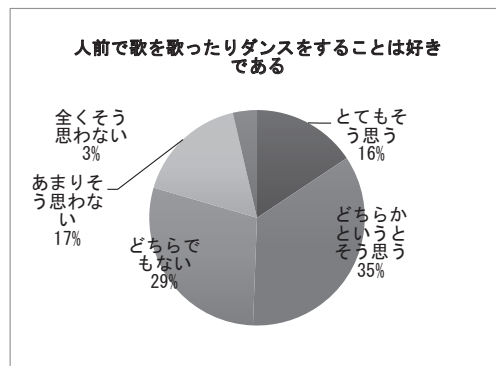


図5. 歌やダンスの表現

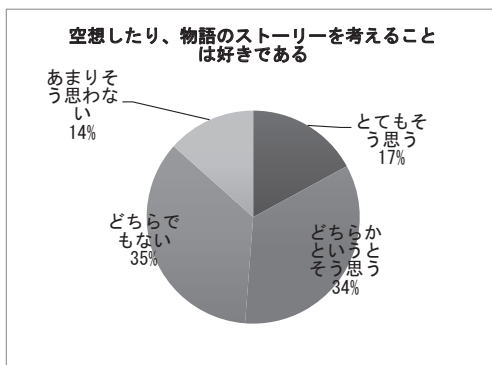


図6. 空想や想像の表現

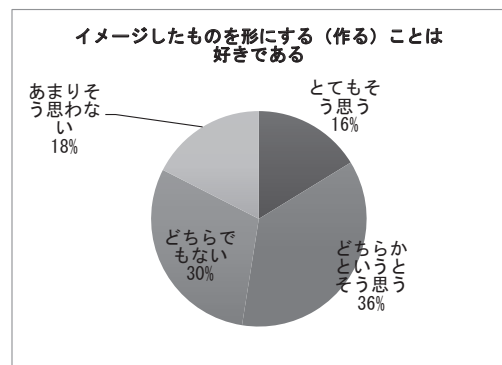


図7. 造形の表現

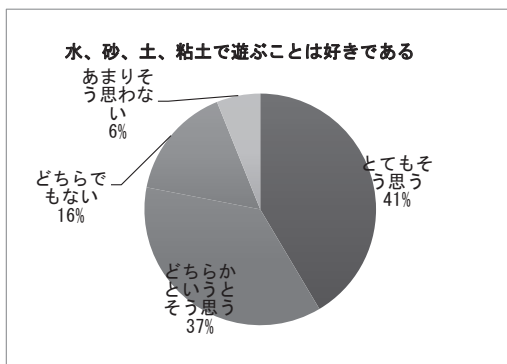


図8. 自然物を使った表現

今回のアンケートでは、表現の中に含まれる中心的な活動をいくつか挙げて、好きだと思いかどうかを調査した。(図4)では、「とてもそう思う」と、「どちらかというと思う」が約40%、「どちらでもない」が約37%となっており、言葉での表現が好きでな学生は少ない。受動的に授業を受けてきたこれまでの経験や、成長とともに恥ずかしいという感情が強くなるためであると考えられる。また、グループディスカッションなどを行うと、言葉の表現が

苦手な学生が多く集まったグループでは、ディスカッションが発展しにくく、グループディスカッションが無駄な時間になってしまう恐れもある。どちらでもないという学生は、言葉の表現を行う場面によって、好きではないと感ずることがある。大勢の人の前で話することが苦手な学生は、少人数の場合は好きであるが大人数では好きではないと感ずるため、どちらでもないという答えを出すことがある。また、表現する相手がそれほど仲良しではない人と、仲のよい友人同士とでは答えが違ふ場合や、言葉での表現という解釈が曖昧で、具体性がないため、積極的に言葉の表現を好きだと答えた学生が約40%に留まったのである。

(図5)(図6)(図7)では、質問内容に示した表現方法が具体的であるため、答えに少し変化が見られた。(図6)の、空想や、物語のストーリーを考えることについて好きかどうかという質問については、空想やストーリーを考えるということは、自分自身が楽しみ、頭の中だけでその情景が存在するものであるため、自分以外のものに表すことではない。発想力や想像力のある学生が好きと答えていると考えられる。

(図5)の、人前で歌を歌ったりダンスをしたりすることや、(図7)の、イメージしたものを、手先を使って作ることは半数以上の学生が好きと答えている。(図6)では、子どもが園生活の中でよく関わる自然環境の代表的なものを挙げて、好きかどうかを尋ねたものである。これに関しては、約78%の学生が好きであると回答しており、子どもの頃の体験が記憶の中にあり、これらの環境が自分たちに良い影響を与えていたことを、保育を学ぶ中で理解しているからである。しかしながら、好きではないと答えた学生が約6%いることについて、その理由について探る必要がある。

(2) サンドアートシアターの実践

幼児教育学科の学生を7人～8人のグループに分け、グループで一つのストーリーを考える。ストーリーの内容は、既存の話でもオリジナルでも良い。学生の自然な表現を引き出すため、テーマに関しては特に指定せず、自分達が希望する内容を実践させた。そのため、見せる対象も自由とした。上演時間は10分以内。絵のカット割りを考え、絵を描くタイミングに音楽を合わせることや、場面ごとの絵をどのように書くか、構成を考える。使用する音楽は、各自携帯電話に保存し、上演する際に携帯電話から音楽を流しながら演じることとする。ナレーションは自由。必ず全員が砂を触って絵を描く表現をすることとした。

① グループ活動の様子

グループ活動(図9)で進めていくため、メンバーを出席番号順で振り分けた。メンバーの中にコミュニケーションが苦手な学生がいると、話が盛り上がりず、ストーリーの構成もなかなか完成しない。最初はいくつかのグループでそのような様子がみられた。テーマを自由としたため、幅広いジャンルから考えを起さなくてはならず、想像力、発想力に乏しい学生はグループでの討議ができない。自分の考えを頭の中で整理し、言葉として発することが苦手な学生はほとんど発言しないまま、他人の意見だけで決まったことを行うだけになる。いくつかの意見が出始めると、積極的な学生がまとめ始める。なかには、先に音楽を選んでからストーリーを考えようとするグループもある。イメージがしやすいように、サンドア

トの砂を触ってみると、少し冷たく、さらさらの感触に学生は「きもちいい」と声を上げたり、ただひたすら手で触ったりしていた（図10）。

砂の感触を確かめたところで、自分なりに手を動かし、どのような書き方の技法があるかを試した（表1）。

サンドアートテーブルが一台しかないため、すべてのグループが絵を描きながらストーリーを考え、まとめていくことが難しいため、時間を決めて交代でサンドアートテーブルを使用する。使用しているグループ以外は、模造紙を机上に広げ、その上に砂を広げて、絵を描く練習や構成を考える（図11）。



図9. 話し合いの様子



図10. 砂の感触を確かめる



図11. 模造紙で練習する様子



図12. サンドアートテーブルを使って



図13. 内容を共有



図14. 全体を確認する様子

② 砂で絵を描く

指の使い方と砂の扱い方でさまざまな絵や模様を描くことができる (図12)。なかなか思い通りにいかず苦戦する学生もいるが、感触が気持ちいいことと、思い通りの絵が描けなくても、さっと手で消して、何度もやり直すことができる。描いた絵が満足のいくものでも、すぐ消して何度も繰り返して描く姿が見られた。絵を描くことや、発想力が豊かな学生は、思い思いに自分の好きな絵を描く。うまくいかないところも工夫をして描き直し、最適な描き方を見つける。グループのメンバーで相談しながら内容を共有し (図13) (図14)、試行錯誤して思ったことが描けると、達成感を味わう。また、上手な学生が描いた絵を見て、苦手な学生が真似をして描いてみたり、どのようにしたらうまく描けるかのコツを伝えたりして、グループで活動することで個々の学生がなんらかの反応を示し、現段階での表現力の差を無意識に縮めたい欲求が生まれてくるようである。

あまり絵を描くことが好きではない学生も、知らずに夢中になっている姿が多く見られた。しかし、数名の学生が積極的には砂を触らず、傍観に近い状態で立っている姿が見られた。その場合、他の学生が声をかけ、砂を触ってみるように促していた。結果、全員が砂を触ることはできたが、その様子は学生ごとに様々であることが分かる。

③ 作品の内容と傾向

学生が考えた作品は、自由テーマであったが、どのようなテーマを選ぶのかとても興味深い。ほとんどのグループが、子どもたちに向けた内容ではなく、今の自分たちに直接的に興味のある内容が多く選ばれるのではないかと予想した。現に、好きなミュージシャンの曲をいくつか挙げ、曲から先に決めていくグループが多い。しかし、幼児教育学科で保育を学ぶ学生であることから、12グループのうち5つのグループが子ども向けの内容を選択した。その内容は、子どもたちに馴染みの深い昔話や物語で、自分たちもよく知っているものである。これは、既存の物語や昔話は、聞き手が知っていることも多いため、伝えたいことが理解されやすく、元のストーリーがあるため、アレンジもしやすいというメリットがあることから選択されたと考えられる (表2)。

表 1. サンドアートにおける描き方の手法

手を握ってげんこつにし、小指側の部分を使って描く。	太い線や、大きな丸を描くことができる。
手のひら全体を使って描く。	全体に砂を広げたり、砂の濃淡を調節したりするときに用いる。大きな模様を描くことができる。
指 1 本を使って描く。	線や模様を自在に描くことができる。小さな部分の砂を払って、白く抜ける部分が描ける。
爪を使って描く。	より細かい線や模様を描くことができる。
適当な量の砂を握ってテーブルにふりかける。	絵の上に重ねて絵を描く場合や、全体をぼかすことができる。新しく絵を描き始めるときにも用いる。
適当な量の砂を握って、少しずつ落としながら描く。	白く抜ける線ではなく、黒く影として残る線が描ける。塗りつぶしの時に効果的な技法。
2 本の指で砂をつまんで、砂を乗せるように描く。	小さなパーツを描くことができる。

表 2. グループ別作品のタイトル

誕生日	Love Story	青春	はらぺこあおむし
桃太郎	さるかに合戦	かぐや姫	3 びきのこぶた
日々	赤い糸	平和の祈り	先生ありがとう

それぞれのストーリーの内容は、オリジナル、既存の物語であっても、10 分の内容にまとめていくことは難しい。1 チーム以外はナレーションがなく、砂の絵と音楽のみで表現しており、音楽に合わせてその場面の絵を描いていくことは、ナレーションという言葉の表現を加える場合とどのように伝わり方が違うのかも興味深いと感じた。

音楽の選び方はとても重要で、選んだ曲によって表現に大きく影響する。曲にはそれ自体に多くの表現があり、聞いたことのある有名な曲は、多くの人がその曲の成り立ちや使用された場面を記憶しており、そのイメージと今見ている表現とを結びつけて受け止める。例えば、映画の中で使用された音楽の場合、あるシーンと、その時に流れる音楽が一つの記憶として残る。そのシーンで意味することや、見た人の感じ方がそのままその曲のイメージとなっていて残っていることがある。したがって、ストーリーが決まっている場合、その場面に合わせた音楽を、過去の自分の経験や記憶を辿って選ぶ傾向がある。有名なアニメ映画に使用された音楽を選んだチームは、その映画のシーンと類似したシーンを絵で表現している。

また、歌詞がある曲を先に選んだチームは、その曲が伝えたいことを読み解き、その曲自体の表現をサンドアートで視覚的に表した。つまり、歌詞が、音楽に乗せたナレーションであるという考え方である。曲は一定のリズムで進んでいくが、絵を描くことは、描く絵によって完成までのスピードが様々である。サンドアートは、絵を描く手元をビデオカメラで写しながら、描いている経過も表現と捉えるため、表す絵のデザインを工夫しながら音楽と調和させなければならない。また、サンドアートは、次々と絵が描かれていき、消され、変化しながら場面が変わっていくが、場面変換のタイミングで文字を書き入れることができる。言うならば、絵が動く絵本や紙芝居のような捉え方である。そして、歌詞とともに耳から入る

メロディーと視覚情報が、見ている人の感性によって解釈されるのである。

描く表現は、学生個人の感性が表れる。一般的に絵を描く画材は、鉛筆、パス、絵の具、ペン、などがあるが、この場合、道具は使わず全て手と指を使って描く。今回のアンケートでは、今までにサンドアートを経験したことがあるかという質問に、84名中83名が初めてであると回答した。普段は絵が得意で、描くことが好きな学生も、サンドアートとして絵を描くことは初めてで、仕上がりよく描くのはなかなか難しいようである。指1本を使って描くと、幼児が描くお絵かきのような絵になるため、前述した描画の方法を使って何度か描き方を試して練習した。一つのグループが7～8人で構成されているため、全員参加の条件を満たすためには、交代で絵を描いたり、サンドアートテーブルを囲んで、4人程度が一度に画面の中の絵を描くことがある。全体の絵のバランスや、その場面の絵が完成するタイミングを合わせることも必要である。

(3) サンドアートを体験して

サンドアートの体験を通して学生がどのように感じ、何を学んだのかのアンケート調査の結果は、次のとおりである。

- ① 砂を触っているときどのような気持ちになりましたか
- ② サンドアートの体験をして感じたことはなんですか
- ③ グループでサンドアートの活動を行って感じたことはなんですか
- ④ サンドアートを体験をして表現する楽しさを感じましたか

対象：幼児教育学科の学生84名

実施：2016年6月

各グループのサンドアートの発表後

今回の調査も研究目的や個人情報保護について説明し、同意を得た上で実施した。

サンドアートの砂は特殊なため、見ただけで触りたくなる学生が多くいた。指示を出していないにもかかわらず、自分から砂を触り、サラサラの感触を楽しんでいた。見たものに興味を示し、無意識に行動する姿はまるで幼児のようである。実際の感想は、質問①(図15)のように、砂を触るだけではなく、サンドアートをシアターとして行うことも含めて「楽しい」と答えた学生が65名いた。また、感触として「サラサラして気持ちいい」と64名が答えており、そのうち51名は「楽しい」と感じていることがわかった。感触が良いということは楽しいという感情につながる事がわかる。「サラサラして気持ちいい」と答えた学生は31名が「もっと触りたい」と感じている。「絵を描くことに夢中になった」と回答した学生は、上手に描けなくても何度も描き直しが可能であることから、砂の感触を楽しみながら繰り返し描くという行動をする。これは、子どもが遊びに夢中になる感覚と似ており、主体的な活動となっている現れである。気持ちが落ち着くという学生は、手の感触が情緒を安定させるためである。

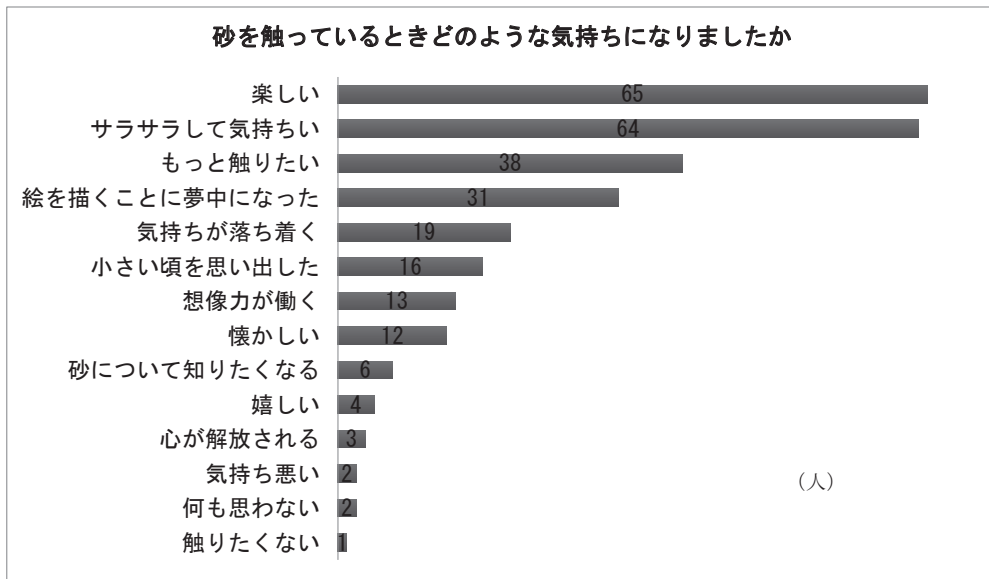


図15. 砂を触っているときの感想

なかには気持ち悪い、触りたくないといった回答もあるが、気持ち悪いと回答した学生のうち1名はサンドアートの実践前のアンケートで「水、砂、土、粘土で遊ぶことは好きである」の質問に対して全くそう思わないと答えた学生である。

次に、質問②サンドアートの体験を通して感じたことについて質問した（図16）。

「難しい」と答えた学生が一番多く、砂に絵を描くという技術が作品の出来栄に影響するため、上手く描かなければならないという気持ちが働いたと考えられる。サンドアートに費やした時間は、実質250分程度で、ストーリーの構成からBGMの選曲、描画の練習すべてを行うにはタイトな時間設定であった。そのため、技術を習得するには圧倒的に時間が少ない。「難しい」と感じている62名のうち41名が「もっとうまく描きたい」と思い、34名が「もっとやりたい」と感じている。約2／3が難しいことに挑戦する気持ちが起こっていることがわかった。しかし、「難しい」と感じている学生のうち3名が「描きたくなくなった」と答えており、約5％が挫折感を味わっていることがわかった。

「おもしろい」と感じる学生も多く、難しいがもっとやりたい、もっとうまく描きたいと感じている学生が約60％である。簡単に描けたという学生は2名で、大変少ないと感じた。この2名は、表現が得意で好きであるということではなく、サンドアートで自分がどの程度できるかの予想と実際やってみたことの差について自己評価していると考えられる。思ったよりできたと感じたことで自信がつき、意欲につながった。

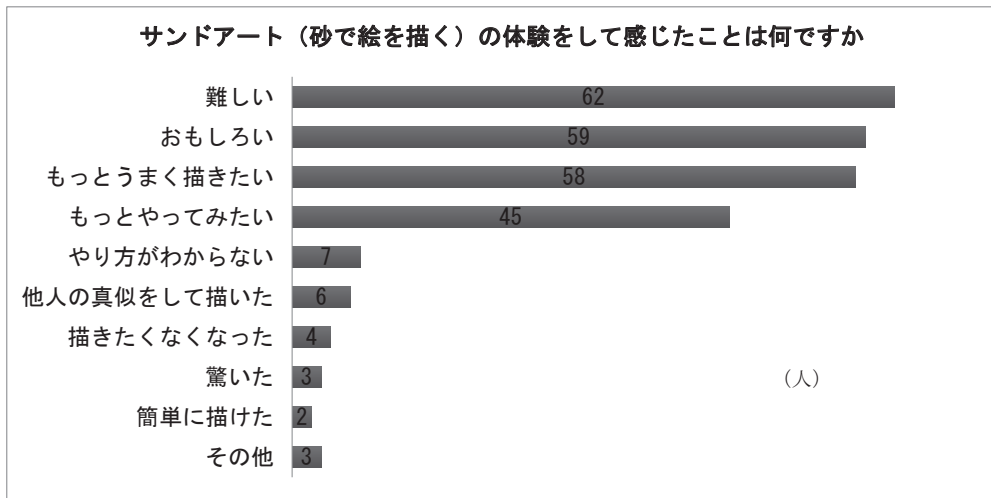


図16. サンドアートを体験した感想

「他人の真似をして描いた」は6名で、子どもと同じように、模倣によって経験し、経験を重ねることで自分の表現方法を見つけることができる。子どもでなくても、大人でも模倣で学ぶことができると考えられる。「その他」の項目では、「砂がもともと好きではなく、触りたくない」「独特な香りがした」「もっと練習をしたい」という回答があった。

質問③（図17）では、「楽しくなかった」と回答した学生がいなかったことは、本研究を進めていく上でとても嬉しいことである。グループ活動によってサンドアートの表現が楽しくなった可能性がある。一番回答数が多かった「一人ではできないがグループだからできた」という解釈は、一人で人前に立つということの恥ずかしさと、自分一人で考えたものや、作り出した作品を表現することに対する不安があると考えられる。一人で表現するということは、自分の内面をさらけ出すことであるため、見る側の評価を気にしてしまうのである。質問②（図16）でも「おもしろい」という回答は多数あったが、グループ活動の感想も「楽しくできた」と答えた学生が64名いた。また、15名の学生が「対話の必要性を感じた」と答えており、話し合いを持つための言葉の表現力がなければ、グループ活動が難しいと考えている。一つの作品を作り上げるためには、まず全体像をメンバー全員が共有しなければならない。メンバーが7人いれば7通りの考え方や感じ方がある。それを一つに練り上げていくことはとても難しいことである。メンバーの人間関係に左右されることもあれば、活動を通して人間関係を深めていくことも可能である。人間関係を深めていくことは、各個人の表現と表現の呼応によって起こる。表現を苦手だと感じたり、好きだが恥ずかしいと感じたりすることで、本来持っている表現力を発揮できずに大人になっていく学生を目の当たりにしていると、グループ活動で表現の楽しさを知り、自分の表現が、見ている人たちに受け入れられ、認められることで自信をつけることが可能になる。

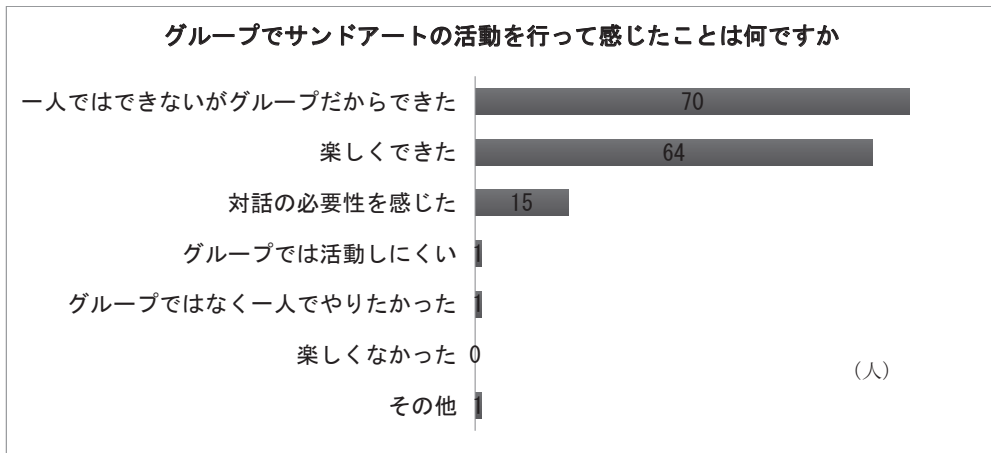


図17. グループ活動の感想

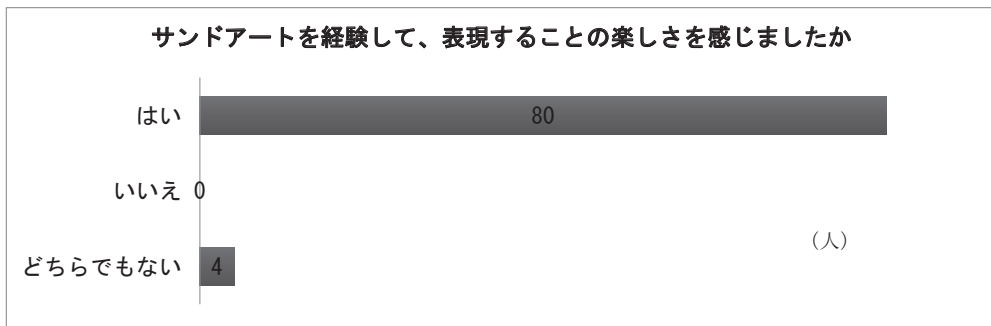


図18. 表現の楽しさ

質問④（図18）の結果から、多くの学生が表現の楽しさを感じていた。幼児期に体験した砂遊びを思い出しながら、砂の感触を「気持ちいい」と感じて無心に描き、グループ活動で行うことで、自分の考えを仲間と共有する「安心感」によって心が解放されたことによると考えられる。

「サンドアートを通してどのようなことを学びましたか」について、自由記述で回答を求めた。結果、グループのメンバーがコミュニケーションをとって協力していくことの大切さを学んだと考える学生が多数おり、話し合いを重ねて作品が出来上がる過程を楽しむことができたようである。また、砂だけを使って物語を表現できることの発見と、その難しさを感じている。「サンドアートシアター」では言葉を使わずに表現しているが、作品に仕上げるまでに、対話が大切であるということも、コミュニケーションをとるためには重要であるということが理解できた。その他、「子どもの気持ちが理解できた」「自然に触れる大切さが理解できた」「作品を作る達成感を味わった」「今まで知らなかった砂遊びを知ることができた」「いろいろな考え方を持つことの大切さを知った」という回答があった。

7. まとめ

学生の表現活動は、個人ではなくグループ活動によって活性化され、新しい表現の発見や芽生えが起こる。過去の実体験を、模倣という遊びを繰り返しながら創造力を養い、今現在まで成長してきた。しかしながら、各個人の経験値やその質により、一人一人の表現力には大きな差がある。これを「個性」というならば、その「個性」を表し、外部や人に伝える方法を理解することが必要である。「サンドアート」の取り組みは、グループのメンバーと話し合いを重ねることで、言葉の持つ力を知り、協力していくことを改めて学んだ。一つの作品に仕上げるために、対話によってコミュニケーションを図り、実践した。メンバーの描く絵に触発されて、自分も上手に描きたいという欲求も芽生えた。したがって、子どもの頃にほとんどが体験する砂遊びの要素を取り入れたこの「サンドアートシアター」は、表現する喜びや楽しさを味わう新しいツールとして有効であることが、今回の取り組みでわかった。人の内なる思考や情操を外に表出するツールとしては様々な種類があるが、子どもの心を思い出し、子どもの気持ちを理解して寄り添うことができる保育者は、子どもの感性や表現力を引き出して伸ばすことができる。「サンドアートシアター」は、子どもの気持ちを取り戻すことができる表現ツールであり、その体験を通して、これからの社会を担っていく人間を育てていくために研鑽したい。

しかし、各個人の表現力を「個性」ではなく優位で評価する時、表現力が劣っている学生は社会的にどのような不利が生じるか、将来社会人になった時にどのような難題にぶつかるのか、漠然と想像はできるものの、具体的にはわからない。今回の研究では、グループ活動の大切さや、表現することの楽しさを理解できた学生が多数いたが、表現が苦手な学生が「サンドアートシアター」の取り組みで、どれだけ成長したかを検証しなければならない。そして、保育者を体感できる実習において、身に付けた表現力を活かして実りある実習とするための指導方法を確立していきたい。

また、保育現場で「サンドアートシアター」を取り入れ、子どもたちの情操教育にどれだけ有効であるかを研究し、新しい保育の舞台表現となるよう研究を重ねていきたい。

引用・参考文献

- i 文部科学省「幼稚園教育要領」平成20年改訂，2008
- ii 厚生労働省「保育所保育指針」平成20年改訂，2008
- iii 小柴隆「幼児理解の理論と方法」（富山短期大学紀要第四十三巻），2008
- iv 片岡杏子「子どもの表現プロセスにおける大人の役割—感情の相互性と対話のリアリティから考察する—」美術教育学（美術教育学会誌第34号），2013
- v 武藤隆「事例で学ぶ保育内容 領域 言葉」萌文書林，2010
- vi ジャン・ピアジェ「思考の心理学」みすず書房，2004
- vii ジョン・ボウルヴィ「乳幼児の精神衛生」岩崎書店，1965
- ・ 伊藤久美子「サンドアートシアターを通して身に付く保育学生の表現力」日本教育情報学

会 年会論文集32, 2016

- ・レイチェル・カーソン「センス・オブ・ワンダー」新潮社, 2001
- ・井上勝子・青木理子・青山優子・小川鮎子・小松恵理子・下釜綾子・高原和子・瀧信子・宮嶋郁恵「豊かな感性を育む身体表現遊び」ぎょうせい, 2015
- ・平山宗宏・安藤美紀夫・高野陽・田村健二・野村東助・深谷昌志・森上史朗・柚木馥「現代子ども大百科」中央法規, 1988
- ・星野秀樹・鈴木陽子・岡田摩紀・国藤真理子・玉田裕人・村上浩美「保育所における遊びの多様な動きの獲得」日本保育学会第69回大会, 2016
- ・ジャン・ピアジェ「遊びと発達心理学」黎明書房, 2000
- ・中島千恵子「保育内容・表現」(第5章) 同文書院, 2008

原著（論文）

保育者養成校における音楽表現の効果的支援 ～保育現場から導き出すピアノ学習の教育的支援方法～

国藤 真理子 玉田 裕人

Effective Support Method of Developing Musical Expression Ability Necessary for Preschool Teachers.

—Instructional Support Program for Piano Lessons to Be Adopted at Schools
for Childcare Education—

Abstract

One of the objectives of music lessons at schools for childcare education is ‘to sing with the piano’, that is, singing and playing the piano at the same time. Students are all required to learn its technique during their school days. Acquiring piano playing skills takes a long period of time especially for beginners. It is often pointed out, however, students nowadays are lack of strong will and patience in general. Accordingly, they are not willing to practice piano unless they really realize the necessity of practicing it. Student will be able to play the piano from their heart’s content only after they accumulate years of practice. As will be understood, beginners need a lot more practice, patience, and high motivation than advanced learners. It is so regrettable to say this, but some beginners are not patient enough to continue practice on their own. They tend to be gradually getting demotivated to practice, so that their levels remain on a plateau and will not improve at all.

Students aiming to become preschool teachers should learn piano playing skills in line with the concept of early childhood education. In other words, they should enjoy music together with children. (Kamiya, 2001) Thus the best approach to acquiring the ‘singing with the piano’ skill for beginners is very simple, to love and enjoy music, which will prompt them to practice independently.

The purpose of this study is to discuss effective support method for piano lessons. Hence, we conducted an opinion survey on the status quo of music activities at preschools among teachers working there.

Key word: 音楽活動 保育現場 ピアノ学習 ピアノ初心者 楽しむ

Keywords: music activities, preschools, piano lessons, beginners in piano, enjoy

【目的】

保育者養成校における音楽関連には、「弾き歌い」が目標の一つとなり学生は二年間または三年間で保育に必要なピアノ技術を習得しなければならない。ピアノ奏法を身に付けるためには長期の習得期間が必要でとくに初心者には絶対に必要である。現代の学生気質は一般的に見てすべてに意欲が乏しく忍耐に欠けている。従って根気のいるピアノ練習はその必要を認めなければ、なかなか自主的に練習しようとししない（柏瀬・佐地・森久・伊藤、1992¹⁾）このようにピアノ学習には自主練習の継続が不可欠となる。ピアノ初心者はピアノ経験者よりも日々の自主練習の積み重ねが必要とされ学生の高いモチベーションと根気がある。しかし、ピアノ初心者の中には自主練習の継続ができない学生がいるのも実状であり、このような学生はピアノ学習の成果が上がらずモチベーションが下がっていき根気も薄れピアノ学習が困難になっている。将来、保育者となる学生のピアノ技術は、子どもを視点に置き音楽と一緒に楽しむために幼児教育に則したピアノ奏法が必要である（紙屋、2001²⁾）こうした背景から目標である「弾き歌い」のピアノ技術を習得するには、ピアノ初心者が音楽の原点と考える音楽を好きになること、また音楽を楽しむことができるようになれば長期に渡りピアノ学習に向き合って自主練習に取り組むことができるのではないかと考える。（国藤真理子・玉田裕人・村上浩美2017⁴⁾）そこで本研究は、はじめに保育現場に目を向け保育現場の音楽活動から現場で活躍する保育士を対象に調査する。そして保育現場における音楽活動の現状を把握してピアノ初心者のピアノ学習の支援方法を検討する。よって本研究の目的は保育現場から音楽活動のキーワードとなるものを明らかにし、そのキーワードからピアノ初心者のピアノ学習の支援方法を導き出すことである。

【方法】

対象者：某県 K 市内の公立保育所に勤務する保育者 216 名（保育所、子育て支援センター、子育て支援課、児童館、母子通園施設）調査期間：平成28年8月～9月に実施した。質問紙回収率は78.4%、有効回答率は89%であった。

質問紙の内容は、1. 保育所内における音楽活動について工夫していることを4件法で行った。項目は歌、聴く、合奏、その他である。2. 音楽活動で心がけていることを自由記述で行いカテゴリー化した。3. 一日の園生活における弾き歌いの曲数。4. 一ヶ月間の新曲数を明記した。

【結果】

保育所内における音楽活動について

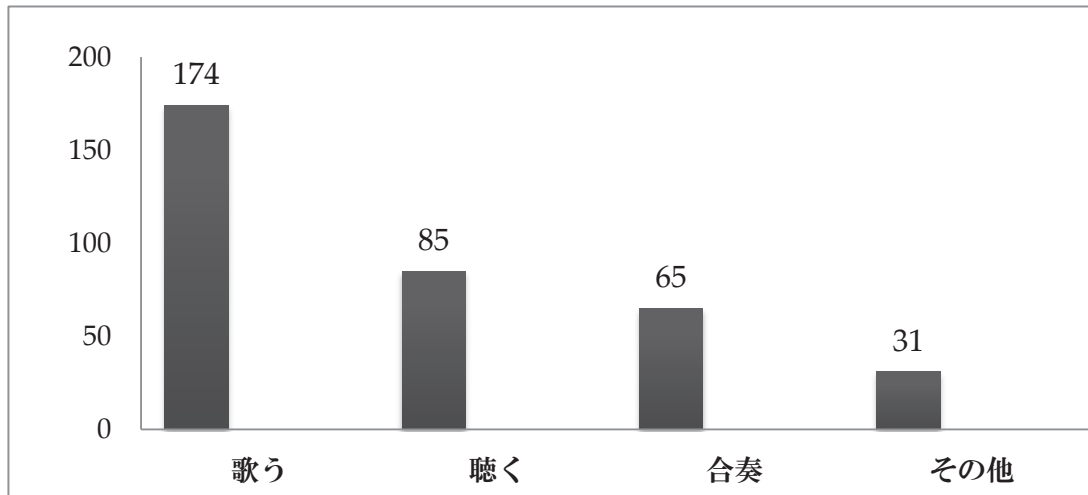


図1 音楽活動の工夫（数値：回答人数 重複回答有り）

図1のグラフから保育者の工夫している音楽活動には大半が歌うことであった。歌うことは身体が楽器であるため身体と音楽が他の楽器より直結しており音楽活動を行う上で取り入れやすいと考える。聴く、合奏は半数以下であった。その他の項目には身体表現、リズム遊び、絵を描く時間、片付けの時間、自由時間等におけるバックグラウンドミュージックであった。

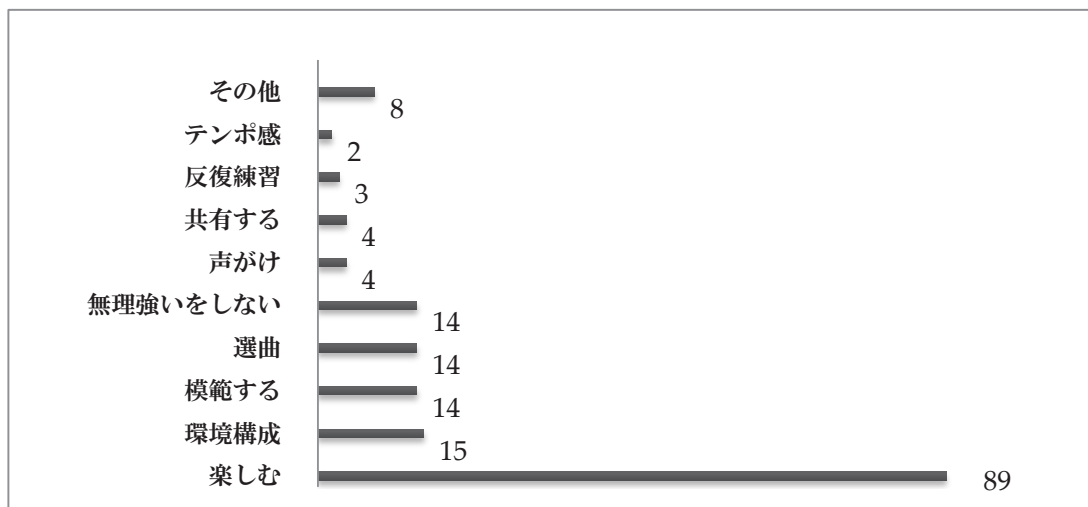


図2 音楽活動で心がけていること（数値：回答人数）

図2は音楽活動で心がけていることを自由記述によってカテゴリー化した。89人（53%）の保育者は保育現場で「楽しむ」を心がけていたことが明らかとなった。

環境構成、模範、選曲等は「楽しむ」の四分の一以下となりほぼ横一線であった。声がけ、園児と保育者が共有する、反復練習、テンポ感は回答数の低いことが分かる。

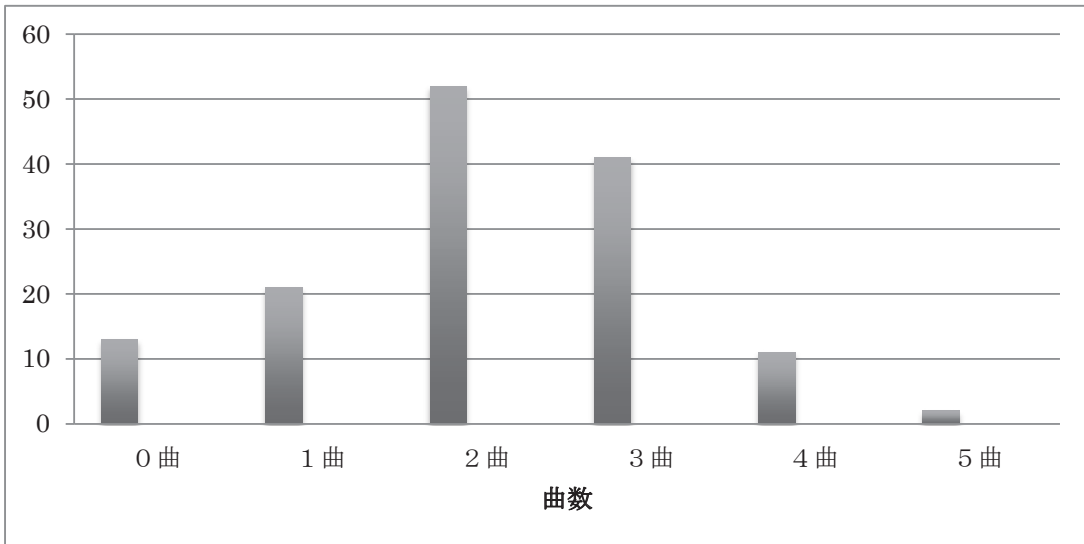


図3 一日の園生活における弾き歌いの曲数（数値：回答人数）

一日の園生活における弾き歌いの曲数は2曲～3曲が最も多かった。対象年齢や環境構成によっては全く弾き歌いを実施しないことも実態であった。

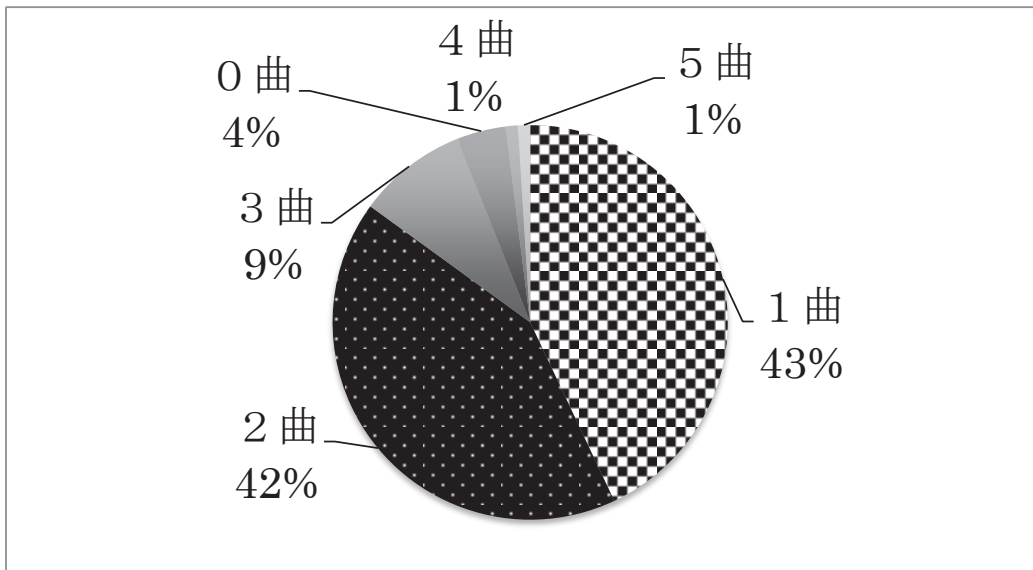


図4 一ヶ月間の新曲の数（単位%）

一ヶ月間で取り入れる新曲の数は主に1曲または2曲を占めていた。低いポイントではあ

るが、中には新曲を4曲から5曲を取り入れている園があった。図1で示されたように保育現場の音楽活動には、保育者は歌の指導に重点をおいていることが明らかとなった。一方で図2の音楽活動において心がけていることは、歌や音楽の基礎ではなく保育者自身が「音楽を楽しむ」ことを重要視していた。そして、図3では一日の園生活の中で弾き歌いの曲数が2～3曲であり、図4の一ヶ月間における新曲数は1～2曲であることが明らかとなった。

【考察】

音楽には音を「楽しむ」ことが根底にあり、人から人へと伝え音に触れ合うことが原点であると考え。保育者はこの根底にある「楽しむ」に視点をおき、主に歌を通して子どもに音楽の楽しさや表現を伝えている。保育における歌の活動は子どもと音楽を共有する。そして歌うことは身体が楽器であるため感情や心情に直結し、表に出す発信や受け入れる受信が他の楽器よりも容易で取り入れやすいと思われる。これらを含めアンケート調査の結果から歌の活動が高く保育者自身が「楽しむ」を重要視していることが立証された。

そこで、アンケート調査から「楽しむ」に着目し、音楽の根底と重なる「楽しむ」を取り入れたピアノ学習の支援方法を提案する。ピアノ初心者の理想とするルーティンを以下のように示す。(国藤真理子・太田由美子・玉田裕人・麓洋介・富田健弘・朴賢晶、2016³⁾)

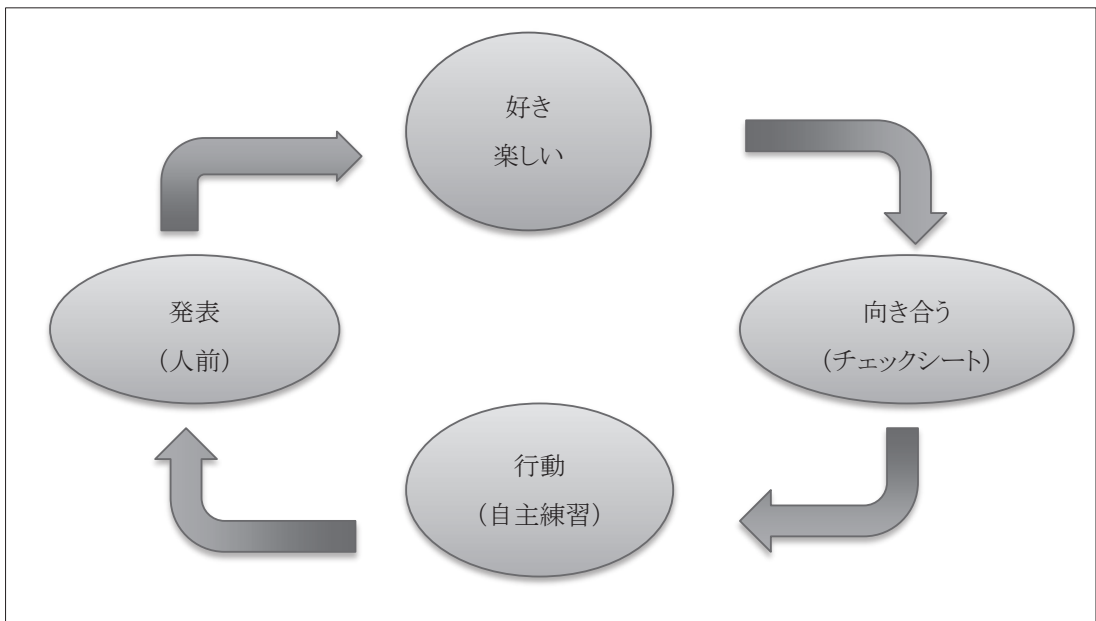


図5 ピアノ初心者の理想のループ

ピアノ初心者はピアノ学習をする上で音楽を楽しむことに視点を置いていない。ピアノ学習の困難なピアノ初心者には原動力となる音楽を好きになることが必要であると考え。次に教材と向き合う。ここではチェックシートを導入した教材の支援とする。次に行動に移動

する。行動とはチェックシートを活用しながら自主練習への取り組みと考える。次に目的意識となる演奏発表を設定しチェックシートを活用しながらの自主練習の持続が発表へとつながる。この発表が充実した内容であればピアノが好きになるという理想ループを描いた。ループが1周、2周、3周とスパイラルのようにぐるぐると回りながら上昇していくことでピアノ初心者の意欲、技術の向上、自主練習の持続が有効的になると考える。また、このピアノ初心者の理想のループを取り入れた教育的支援では、原動力となる音楽が「楽しい」と実感できる取り組みも提案する。ピアノ基礎技術に楽しさを取り入れたプログラムを図6で示す。

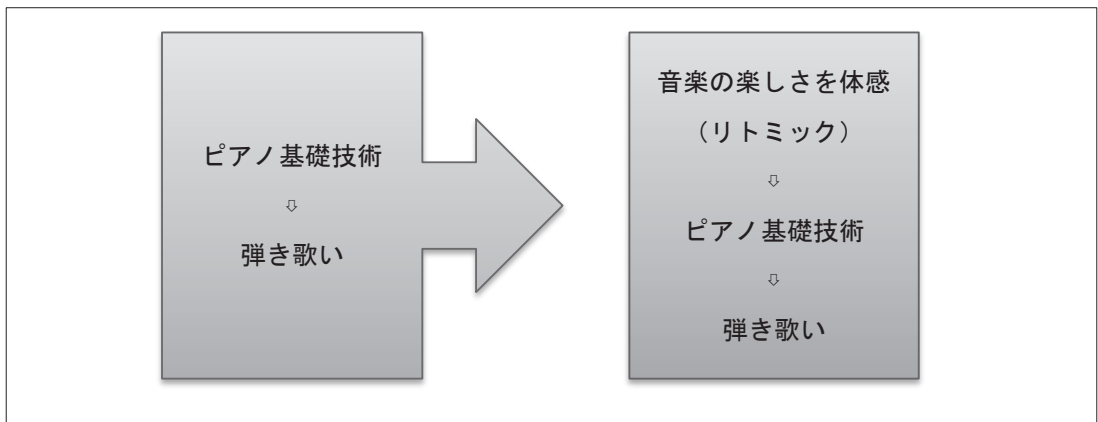


図6 ピアノ基礎技術のプログラムの改良

これまでのピアノ学習の流れは、ピアノ初心者はバイエル教本を中心にピアノの基礎技術を習得してから弾き歌いへと進んだ。そこで今回の調査により保育者が音楽活動で心がけている音楽の「楽しさ」を体感させるプログラムを導入し改良する。改良においては、はじめに学生の音楽の基礎能力に対応したリトミック的な音楽遊びを促進し、ピアノ基礎技術へ転換する。そして弾き歌いへと段階的に手順を追ってピアノ学習の教育支援を行う。ピアノ初心者の理想ループに挙げたように楽しさを体感したうえで次のステップとなるチェックシートを活用して自主練習の継続とつなげる。冒頭で述べたようにチェックシートの活用が有効的となれば設定目標となる発表へとつながって成果が上がり達成感、意欲、楽しさ、スキルアップへと結び付きループが確立すると考える。次にステップとなるチェックシートを提案する。チェックシートを図7で示す。

このチェックシートはスモールステップ法の原理を取り入れた。最初から高い目標を掲げるのではなく前期と後期の目標、そして今週の目標と細分化して学生自身が目標を掲げる。今日のレッスン内容は教員が記載する。注意点は学生の自己評価、教員評価を記載する。今回のレッスンの課題は教員が記載し、自主練習の期間は学生がチェックシートを持ち帰り一週間の自主練習を記載する。このような項目及び内容がチェックシートである。

今日の授業日 月 日 (授業 回目)	前期の目標		後期の目標		今週の目標							
今日のレッスン内容												
注意点	項 目	習熟度 自己評価				習熟度 教員評価						
	1) 音符を歌いながら弾く	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	
	2) 拍を数えながら弾く	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	
	3) 聴きながら弾く	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	
	4) 指使いに気をつけながら弾く	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	
	姿勢	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	
	指のフォーム	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	
今日の習熟度	自己評価	1	2	3	4	5	教員評価	1	2	3	4	5
次回のレッスンの課題												
♪自主練習の期間 月 日～ 月 日	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目	7日目	練習日数 合計 /7				

図7 チェックシート

【まとめ】

本研究の目的は、保育現場から導き出すピアノ学習の効果的な支援方法である。調査は保育者に保育現場の音楽活動の現状を把握するため実施した。その結果、保育者の工夫している音楽活動には大半が歌うことであった。しかし、音楽活動において心がけていることは、歌や音楽の基礎ではなく保育者自身が「音楽を楽しむ」ことが明らかとなった。音楽活動において音楽を楽しむことは原点でもある。そこで、導き出された「楽しむ」をキーワードにピアノ初心者のピアノ学習の効果的な支援方法としてピアノ初心者の理想ループ図を構想し、図の要点項目にある「好きになる」と「向き合う」の2項目の教育的支援方法を提案した。今後の課題はピアノ初心者のスキルアップ、モチベーションの向上となるように、リトミック的な音楽あそびのプログラムメソッド及びチェックシートの活用法を検討する。

参考文献

- 1) 柏瀬愛子・佐地多美・森久見子・伊藤充子～器楽教育に関する一考察～名古屋女子大学紀要38 (人・社) 111～122 1992
- 2) 紙屋信義～保育者養成機関におけるピアノ教育についての一考察～日本保育学会大会研究論文集2001
- 3) 国藤真理子・太田由美子・玉田裕人・麓洋介・富田健弘・朴賢晶～ピアノ初心者が主体的にピアノ学習に取り組むための指導方法の検討～保育士養成協議会第54回研究大会研究発表論文集 2016
- 4) 国藤真理子・玉田裕人・村上浩美～ピアノ初心者の効果的支援方法3～日本保育学会第70回大会発表要旨集2017

質問紙

保育所内における音楽活動について

1 子どもが音楽を好きになるために工夫していることは何ですか

項目に○をつけて工夫をしている内容をお書きください下さい(複数回答可能)

- ①歌う
- ②聴く
- ③合奏する
- ④その他

2 現在、ご担当されているクラスは何歳児ですか、またクラスではどのような音楽活動を
されていますか

- 0歳児
- 1歳児
- 2歳児
- 3歳児
- 4歳児
- 5歳児

3 音楽活動において心がけていることは何ですか

4 一日の園生活の中で弾き歌いは何曲取り入れていますか 題名もお書き下さい
曲数(曲) 題名()

5 一ヶ月間で新曲をいくつ取り入れていますか 曲数(曲)

原著（論文）

人的環境としての保育者の支援の在り方

—発達障害幼児とその保護者に関わる保育者に焦点を当てて—

仲森 みどり

A Way of Support Provided by Childcare Workers as Part of an Interpersonal Environment

**—Focusing on Childcare Workers Engaging in the Care for children
with Developmental Disorders along with Their Parents—**

Midori Nakamori

Abstract

We asked 21 preschool teachers engaging in the care for children with developmental disorders along with their parents to fill in a questionnaire about their jobs. It is frequently pointed out that families taking care of children with developmental disorders are worried about a variety of psychological burdens and difficulties of dealing with them. Thus it is required to give mental support to both the children and their families. Specifically, some mothers are said to become mentally unstable while raising young children. It is, therefore, essential to give a helping hand to them over this period. ‘Nursery School Policies’ and ‘Course of Study for Kindergarten’ indicate the significance of providing support for parents as well as developing childcare workers’ professional skills and qualities.

It is true that in the previous studies we can find some articles about teaching methods of ‘Environment’ or those discussing the environment configuration of plays or nature. There are, however, few remarks on the childcare workers’ support for and understanding of children with developmental disorders and their parents with a view of an interpersonal environment.

The above has led to the conclusion that it is appropriate for this study to discuss the ways of helping and understanding parents who have children with developmental disorders as well as supporting those children themselves.

Among the free-style questions for childcare workers about how parents look like in their eyes, “they look nervous and uneasy” is the most common answer.

キーワード : 人的環境、保育者、発達障害幼児、保護者、支援

I. 問題と目的

平成16年には、「発達障害者支援法」が成立し、平成17年に「発達障害者支援法施行令」及び「発達障害者支援法施行規則」が策定された⁸⁾。近年、このことも大きく影響し、社会も発達障害についての関心が随分と高まっている。この法の施行によって、国及び地方自治体は発達障害児・者はもとより、その家族に対しても支援を行うことが記されている⁸⁾。

文部科学省による「幼稚園教員の資質向上について—自ら学ぶ幼稚園教員のために—報告(2002)」では、幼稚園教員に求められる専門性の重要性について次のように示している。「幼稚園教員は、幼児を理解し、活動の場面に応じた適切な指導を行う力をもつことが重要であり、さらに、家庭との連携を十分に図りつつ教育を展開する力なども求められている。具体的には、幼児を内面から理解し、総合的に指導する力、具体的に保育を構想する力、実践力、得意分野の育成、教員集団の一員としての協働性、特別な教育的配慮を要する幼児に対応する力、小学校や保育所との連携を推進する力、保護者及び地域社会との関係を構築する力、園長など管理職が発揮するリーダーシップ、人権に対する理解などが、教員に求められる専門性として挙げられる」とある⁹⁾。この報告によっても幼稚園教員は、国・及び地方自治体と同様に、特別な教育的配慮を要する幼児に対応する力及び保護者との関係を構築する力や支援が求められている。

また、保育所保育指針(厚生労働省2008)でも幼稚園教員同様、保育士に対し、資質の向上及び専門性の重要性について示している。「一人一人の保護者の状況やその意向を理解、受容し、それぞれの親子関係や家庭生活等に配慮しながら、様々な機会を捉え、適切に援助すること」とある¹⁾。このことからいかに発達の心配がある子どもや発達障害児、その保護者への支援が重要であることが言えるだろう。

実際、現在は過去の教育現場、保育現場と比較しても発達障害児に対してただ困った子という認識は少なくなってきたと思われる。その反面、保育者たちが子どもやその保護者たちに対し、どのような関わりや支援が良いのかという困惑もあり試行錯誤していることも否めない。

発達障害の関心の高まりや研究の進展がある中、高橋・遊佐・鶴巻¹⁵⁾は、発達障害のある子どもの保護者は、我が子に発達の心配や障害があることがわかると戸惑い、対応に悩むのが常である。特に、自閉スペクトラム症や注意欠如多動症などの発達障害では、行動障害や社会不適応が見られるため、知的には遅れていないにも関わらず何度言っても行動修正がされない我が子に対するストレスが生じ、良好な親子関係が成立しにくいと懸念されると述べている。

発達障害がある子どもの家族は、障害のない子どもの家族に比べて、様々な心理的な負担感や困難を抱えていることが指摘されており、発達障害のある子どもの親にはうつ病あるいはうつ状態が多いことを述べている^{6) 12)}。特に、直接的な養育者である母親の精神的健康に関する研究は多く、自閉症のある子どもの母親は、障害のない子どもをもつ母親よりもスト

レスが高いことが報告されている¹¹⁾。

また山下¹⁷⁾は、定型発達をしている子どもの親と比較すると、ADHDのある子どもの親は、重症度が高いほど育児ストレスが高く、睡眠障害、夫婦間の不和、離婚率の高さ、アルコール依存や母親の抑うつの高さなどが知らされている。眞野・宇野⁵⁾は、ADHDのある子どもの母親と、定型発達の子どもの母親と比較して、ADHDの子どもの母親の育児ストレスは高く、否定的な養育態度をとる傾向が有意に見られたと報告している。また、ADHDのある子どもは、親を喜ばせる反応が少なく、不注意／多動の行動特性によって、母親の子どもに対する愛着を減少させ、厳格で非難的養育態度と結びついていることが示唆されている。これらのことから、ADHDのある子どもは、虐待を受けるリスクが高くなることが考えられる。そのため、親に否定的な愛着感が生まれないような早期からの育児支援、育児ストレス対策が必要である¹⁷⁾。

湯沢・渡邊・松永¹¹⁾の研究では、自閉症児の母親が子育てに関するストレスを最も強く受けた時期について、4段階の年齢群に分類したところ、88名中、幼児期69名(78.4%)、学童期13名(18.6%)、思春期・青年期1名(3.7%)、成人期5名(50.5%)だった。母親の8割近くが幼児期に最も強くストレスを受けたと回答しており、幼児期に強いストレスを受けやすいことを述べている。仲森・大谷¹¹⁾の研究では、発達障害児の母親は、育児疲れや抑うつ傾向のパーセンテージが高いことがわかった。森口⁷⁾らは、発達障害がある子どもの母親は、子どもの乳幼児期に精神的に不安定になり、その時期が最も支援が必要であることを指摘している。

発達障害のある子どもの保護者は、子どもの行動特性から、幼稚園・保育園時代に保育士からの頻繁な指摘や注意、他児の保護者等の周囲から批判を受けることが考えられ、孤立感を抱きやすくなる。また、幼稚園・保育園では初めての集団生活となりわが子と他児との違いに気づく機会となる。そういった背景もあり、筆者自身は、保育園、幼稚園での生活を経験する乳幼児期は、子どもも保護者も不安を抱え気持ちが不安定になる第1の段階ではないかと考える¹¹⁾。

その重要な時期に子どもや保護者に人的環境として身近に関わってくるのが、幼稚園、保育園の保育者であることが言えるだろう。保育所保育指針では、「保育の環境には、保育士等や子どもなどの人的環境、施設や遊具などの物的環境、更には自然や社会の事象などがある。保育所は、こうした人、物、場などの環境が相互に関連し合い、子どもの生活が豊かなものになるよう留意しなければならない」とある¹⁾。また、佐藤¹³⁾も、保育の営みの基本は、「環境を通して行う教育」と述べている。ただ身近な環境がそこに存在するだけでは、子どもの相互関係が成立し、成長へとつながるものではない。そこには保育者の存在が不可欠である。保育において、人的環境としての保育者の重要性は疑う余地はないだろうとも述べている。

先行研究にて、保育所保育指針や幼稚園教育要領の中での保育内容「環境」についての教授法、遊びや自然などにおける環境構成について論じているものはあるが、保育者が人的環境として、発達障害児やその保護者への理解や支援の在り方について論じているものは少ない。

以上のことから、保育者が人的環境として発達障害児への支援は当然のことながら、その

保護者への理解や支援の在り方について検討していく。また、保育者が発達障害児の保護者の様子や姿を見てどのように感じるか等の自由記述回答結果をまとめた。

Ⅱ．方法 一保育士・幼稚園教師へのアンケート調査一

1. 調査時期

2014年 9月上旬～12月中旬

2. 調査協力者

対象者は、A市公立の幼稚園（3園に依頼）に勤務する幼稚園教師（16名）、B市など他の市町村の公立保育園に勤める保育士（3名）、学童保育所に勤める保育士（1名）、公立幼稚園に勤める幼稚園教師（1名）合計21名

A市公立の幼稚園園長、各、幼稚園教諭、保育士に承諾を得て実施した。調査用紙は、無記名方式で郵送にて回収。

3. 調査項目の概要

年齢、性別、保育歴、幼児教育歴、現在の勤務先

(1) 今までに、発達障害（自閉スペクトラム症、AD/HD、LD など）のある子ども、又は、発達障害があると思われる子どもの保育・幼児教育に（以下教育）に携わっていたことがあるか（又は、今現在携わっている）。（はい・いいえ どちらかに○をつけて選択）

(2) 資料1の質問（2-1～3-2）までは、現在を含め過去3年以内で保育・教育に携わり、最も印象に残っている子ども、一人を思い浮かべて回答をお願いした。

①何年前か ②思い浮かべた子どもの性別 ③思い浮かべた子どもの年齢

(3) 該当する幼児について当てはまるものを選択（1つを○で選択）

①保育・教育に携わっていた（又は携わっている）発達障害と思われる子どもが診断を受けており、保護者も診断を受け入れている（又は受け入れていた）。

②診断を受けており、保育士側、教諭側（園側）も把握しているが保護者が診断を受け入れていない様子である。

③通院等はしているが、診断は受けていない。

④受診をすすめている（すすめた）が、まだ通院はしていない。

⑤何らかの要因はあると思われるが、保育士側、教諭側（園側）としては受診を言い出せないでおり、判断しづらく通院していない。

⑥その他

(4) 保育・教育に携わった、又は携わっている対象児（発達障害があると思われる子ども）のことを、主にどなたに具体的に相談されたか（又はするか）。(3つを○で選択)

- ①対象児の保護者《母親，父親，祖母，祖父，その他（ ）》 ②園の職員
③関連する同職種の関係者 ④関連する他職種の関係者 ⑤医療関係者 ⑥その他
⑦いない

(5) 保護者への支援についての質問

対象児（発達障害があると思われる子ども）の保護者への園での支援（働きかけ）は十分だ（だった）と思うか。（①②③④からそれぞれ1つを○で選択）

- ①十分である ②おおむね十分である ③やや不十分である ④不十分である

(6) 対象児（発達障害があると思われる子ども）の保護者への支援（働きかけ）をすることで、対象児に良い変化があらわれたことがあったか。（①②③④からそれぞれ1つを○で選択） ①よくあった ②少しあった ③あまりなかった ④なかった

(7) 思い浮かべて頂いていた子どものことだけではなく、全般的な形での回答をお願いした。通園している（していた）対象児以外の保護者の方たちは、発達障害について（発達障害がある子どもに対して）一般に理解があると感じるか。（①②③④から1つを○で選択）

- ①多くの保護者がよく理解してくれている ②十分ではないが理解してくれている
③理解していただけない保護者が少しいる ④理解していただけない保護者が多い

(8) 通園している（していた）対象児以外の保護者の方たちに、発達障害について（発達障害がある子どもに対して）理解をして頂くためにどのような工夫をしているか。（自由記述回答）

(9) 対象児（発達障害があると思われる子ども）の保護者の様子や気持ちはどのように見えるか。またはどのように感じるか。（自由記述回答）

(10) 対象児（発達障害があると思われる子ども）の発達を支援していくためには、保育園や保育士、幼稚園や幼稚園教諭には何が必要だと思うか。（特に重要だと思うもの3つを○で選択）

- ①園内の協力体制 ②園内のカンファレンス ③障害に関する知識の向上（勉強会，講演会に参加する） ④対象児の保護者との面接（状態把握，信頼関係の構築） ⑤関連する業種の専門家との対象児の情報交換，協働 ⑥障害のある子どもの親の会の充実 ⑦その他

(11) 発達障害のある子どもの保育、教育を充実させていくために、どの分野の方と連携していくとよいと思うか。（該当するもの全てに○）

- ①対象児の母親 ②対象児の父親 ③対象児の祖母 ④対象児の祖父 ⑤園の職員
⑥関連する同職種の関係者 ⑦関連する他職種の関係者 ⑧医療関係者 ⑨対象児以

外の保護者 ⑩その他

(12) 対象児（発達障害があると思われる子ども）の保護者への支援を行う上で、どのようなことが重要だと思うか。（自由記述回答）

Ⅲ．結果

1. 保育士・幼稚園教師と該当幼児の概要

(1) 幼稚園教師・保育士に対するアンケート調査結果

（回答者数21名）

保育士・幼稚園教師の年齢は、20代前半～50代後半まで 平均年齢は41歳であった。幼稚園教師・保育士の性別は、女性18名、男性2名、未記入1名。保育歴（保育年数）の平均が6.8年 計21人中、未記入が10名。幼児教育歴の平均が11.9年 計21名中、未記入が5名。21名、全員の幼稚園教師・保育士が今までに、発達障害のある子ども又は、発達障害があると思われる子どもの保育・幼児教育に携わったことがあると回答した。

最も印象に残っている子どもは、現在携わっている子どもが1番多く9名だった。男児が18名、女児3名と女児に比べ男児の方がかなり多い結果となった。思い浮かべた子どもの年齢が、2歳～6歳 平均年齢が4.6歳。

表1 思い浮かべた該当する幼児について

	人数	(%)
保護者は、診断を受け入れている（又は受け入れていた）	8	38
診断を受けたが、保護者の受容は難しい	1	5
通院等はしているが、診断は受け入れていない	0	0
受診をすすめている（すすめた）が、まだ通院はしていない	6	29
受診を言い出せない	5	24
その他	1	5

思い浮かべた該当する幼児についての質問（表1）に対して「診断を受け入れている（又は受け入れていた）」と答えた保護者が8名で、全体の38%だった。また、「受診をすすめている（すすめた）が、まだ通院はしていない」が6名であり、園側は気になる行動等があるため保護者に園での様子を伝え受診をすすめてはいるが、受診には至っていない。「受診を言い出せない」は5名であり、園側は受診を言い出せないでおり、判断しづらく通院していないという結果だった。「受診をすすめている（すすめた）が、まだ通院はしていない」と「受診を言い出せない」の%を合計すると、53%という結果であり、半数余りが、受診には至っていないという結果であった。

表2 対象児についての相談相手

	人数	(%)
対象児の保護者（母親）	9	43
対象児の保護者（父親）	1	8
園の職員	15	71
関連する同職種の関連者	10	48
関連する他職種の関係者	3	14
医療関係者	2	10
その他	0	0
いない	1	5
(3つ選択)		

(3つを選択する質問なため、あてはまるもの全てに○の場合よりも％は下がる。3つ選択した場合の以下からの質問も同様)

最も相談する相手として多かったのが、「園の職員」であり、15名で71％という結果だった（表2）。次に多かったのが、「関連する同職種の関係者」であり、園内での職員との連携は勿論のこと、園内だけでなく関連する同職種の連携が重要であると幼稚園教師や保育士たちが考えていることがわかる。また、「対象児の保護者（母親）」と回答した教師や保育士も43％おり3番目に多かった。

(2) 保護者支援について

表3 対象児の保護者への園での支援は十分である（十分だった）と思うか

	十分である	おおむね十分である	やや十分である	不十分である
人数	2	16	2	1
(%)	10	75	10	5

対象児の保護者への園での支援は十分である（十分だった）と思うか（表3）の質問に対して、「おおむね十分である」が16名で75％という結果であり、多少の不十分さを感じてはいるが、園側としての支援を十分だと思っている教師や保育士が多いという結果だった。「十分である」、「おおむね十分である」を合計すると18名で85％であり、支援できていると思う教師・保育士が多い結果となった。

表4 対象児の保護者への支援をすることで、子どもに良い変化があらわれたか

	よくあった	少しあった	あまりなかった	なかった
人数	5	12	4	0
(%)	24	57	19	0

対象児の保護者への支援をすることで、子どもに良い変化があらわれたかという質問に対して（表4）、「よくあった」、「少しあった」の合計が21名中17名で81％であり、保護者への支援を行うことで子どもに良い変化が現れたという結果だった。保護者への支援を行うことで子どもにも良い影響が現れるということがわかる。

表5 対象児以外の保護者の方たちは、発達障害について理解があると感じるか

	人数	(%)
多くの保護者がよく理解してくれている	1	5
十分ではないが理解してくれている	7	33
理解していただけない保護者が少しいる	9	43
理解していただけない保護者が多い	4	19

対象児以外の保護者の方たちは、発達障害について理解があると感じるかを尋ねた質問では、「理解していただけない保護者が少しいる」、「理解していただけない保護者が多い」が、21名中13名で62%という結果だった(表5)。「理解していただけない保護者が少しいる」が「理解していただけない保護者が多い」より多かったが、合計すると半数以上が、少なからず理解してもらえないと感じているという結果だった。

表6 対象児以外の保護者の方たちに、発達障害について（発達障害がある子どもに対して）理解をして頂くためにどのような工夫をしているか。

(保育士、幼稚園教師の記述通りに記載)

a. 対象児以外の保護者に発達障害について理解をしてもらうための工夫について
1. 特に工夫はしていない。質問があればその子どもの特質を姿を通して話す等している
2. どのように発信したら良いのか悩んでいるのが現状だと思う
3. 対象児の魅力や良さを丁寧に伝えていく
4. 子どもの姿だけでなく、その中にある思いを知らせながら、関わっていくようにした。
5. 一般的なこととして対象をしばらくずに様々な場面での動きや活動について話をするように心がけた。
6. 市から配布されたものを配ることから始め、まずは知ってもらう。
7. 同じクラスに対象児がいる場合は、その子の嫌なこと、どういうことが苦手なのかなど伝えていく。
8. 保護者向けの人権講演会やクラス懇談会で理解を深めていく。
9. 遊びの場面を通して、対象児の特性として出てくる場面を具体的に伝え、周りの幼児や教師のかかわりの姿も伝えるようにする。
10. ○○が苦手みたいですなどと伝える
11. 特になし
12. 発達障害だけに限らずトラブルが起きたときには、「○○さんはこういうことが苦手で、教師はこのようにかかわってます」と個別に伝えている。
13. (自分が主担任で) クラスの主活動にも対象児をどんどん参加させたり、他児とのかかわりをたくさん持たせる事によって、まず子ども同士のつながり絆を作っていた。子ども同士が理解し合えることによって保護者の理解も深まると思います。
14. まだ1年目で理解をしてもらうために他の保護者の働きかけることは十分にできなかった。普段の生活の中で“共に助け合う”ということを大切に保育することで子どもたちが支援の要する子に対しての見方、考え方が変わり、その姿が他の保護者に伝わらなければ良いなと思っています。
15. なるべく指導員がそばに居る様心がけ、1人になれる空間を用意した。
16. 障がいやを“特別なもの”として伝えるのではなく、園で過ごす“なかま”として共に育ち合っていることの大切さを伝えるように心がけています。
17. 特別支援学級がある園だったので、障害をもったお子さんも通っていることを理解してもらっていたと思う。特別支援学級という名称があるが、他の子どもたちと一緒に通常学級で生活していたので、保育参観でも、他の保護者との関わりがあった。
計17名
(21名中17名回答4名未記入)

表7 対象児の発達を支援していくためには、保育士・幼稚園教師には何が必要か

	人数	(%)
園内の協力体制	17	81
園内のカンファレンス	6	29
障害に関する知識の向上（勉強会、講演会に参加する）	12	57
対象児の保護者との面接（状態把握、信頼関係の構築）	18	86
関連する業種との対象児の情報交換、協働	8	38
障害のある子どもの親の会の充実	1	5
その他	0	0

対象児の発達を支援していくためには、保育士・幼稚園教師には何が必要かを尋ねた質問では、「対象児の保護者との面接（状態把握、信頼関係の構築）」が1番多く18名で86%であり、2番目に多かったのが「園内の協力体制」であり17名で81%だった。3番目に多かったのが「障害に関する知識の向上（勉強会、講演会に参加する）」が12名で57%だった。「対象児の保護者との面接を重要（状態把握、信頼関係の構築）」と多くが考えており、保護者との面接をする中で話を傾聴し、信頼関係を築いていくことの重要性を考えていることが伺える結果だった（表7）。

表8 発達障害のある子どもの保育、教育を充実させていくために連携していく分野について

	人数	(%)
園内の協力体制	17	81
園内のカンファレンス	6	29
障害に関する知識の向上（勉強会、講演会に参加する）	12	57
対象児の保護者との面接（状態把握、信頼関係の構築）	18	86
関連する業種との対象児の情報交換、協働	8	38
障害のある子どもの親の会の充実	1	5
その他	0	0

発達障害のある子どもの保育、教育を充実させていくために連携していく分野について尋ねた質問では、「対象児の母親」と「園の職員」を選択した方が20名で95%という高い結果となった（表8）。また、「対象児の父親」を選択した方が18名で86%という結果だった。母親だけが、保育士や幼稚園教師と連携するのではなく、父親も子どもの様子等を把握してもらい子育てに協力的であることが子どもの心身の健康につながると支援者側は思っていることが伺える。

表9 保育者から見た発達障害児の保護者の気持ちや様子、支援を行う上で重要と思うこと

（保育士、幼稚園教師の記述通りに記載）

a. 保護者の様子や気持ちはどのように見えるか。 またはどのように感じるか。	b. 保護者への支援を行う上で、どのようなことが重要だと思うか
1. 周りに迷惑をかけていないか、また先のことを不安に思っていたり、お子さんの姿をマイナスに捉えたりする。どうすると良いかということをお子さんの姿を受け止めたうえで一生懸命考え関わる姿があったりする。	1. 園での様子をただ伝えていくだけでなく、何度も話をしていく中で家庭での様子の中でも同じように困っていることはないかなど一緒に考えていきたいという思いを伝えていくことは大事なかなと思います。

2. あまり子どもに関心がないようにも見られるが、ことさらその都度声をかけながら家庭との連携をとっていきたい。	2. 未記入
3. とても疲れているように思う。子どもをほめて育てられないように感じる。	3. 保護者に発達障害についての正しい知識や理解を促す（知らせる）自分の子育てをせめてしまわないよう、どのように子どもとかかわればよいのか具体的なスキルを知らせていく。
4. 自分の子どもの事よりも、自分の子どもがまわりのお子さんの迷惑になっているだろうか・・・といつも心配していると感じる。	4. 保護者との信頼関係を築くためにも、コミュニケーションが大切だと思う。保護者の願いや思いを聞いて寄り添っていききたいと思う。
5. とまどいや不安やあせりなど	5. 園での様子を密に伝え、家庭での具体的な関わりを共に考え、専門的機関にもつなげていく。
6. 子どもの姿をどのように周りの人にとらえられるのか不安に感じているようにみえる。周りの幼児と比べて何か発達が遅れているように感じてはいるものの何か判断が出ることに對して恐怖心が強い。	6. まずは何でも話合える信頼関係をつくる。園の姿だけでなく、こちらのかかわり等による子どもの変化や気づき等を伝え、その子や保護者のことを認めていくことがよく感じられるようにする。
7. 自分（保護者）自身の中で納得しなければならないことは少しずつわかってきているようであったが、最後まで納得して受け入れることが難しいようであった。	7. 未記入
8. 自分の子の姿を“何となく他の子と違う”と感じながらも受け止められない（受け止めたくない）でいるように感じる。	8. 信頼関係
9. 受け入れられない保護者も受け入れられるとすぐ心に余裕が出来るようで顔つきも変わり家のこともたくさん話してくれるようになる。	9. 一人だけで育てているわけではなく、皆で育てていこうということ
10. 発達障害を受容できず、園や子どもに不安をぶつける方や他児との成長の違いもそのうち追いつくと自分に言い聞かせようとしている方、いずれも大きな不安を抱えている。	10. 対象児の園生活での成長を保護者と共に、喜び、見守っていく姿勢を持つことが大事だと思います。
11. 見えにくい姿の部分では、周りにどのように伝えていったら良いかという姿が見られる。	11. 対象児とどのように育てたいか、将来どのような力をつけていきたいか。保護者と話をしながら、対象児にとって楽しい園生活を過ごせるよう、職員で連携をとりながら関わっていくことが大切である。
12. お子さんのことをよく理解していて、積極的に相談したり話したりしている。	12. お子さんの様子を伝える。その中でも変化があり成長したことなどを伝えていくとよいのではないかと思う。
13. 今までに特に問題がないように思って過ごされてきていた。園からの働きかけによって子どもと向き合う姿が見られてきた。成長した様子を園側に伝えられてこられるなど、信頼関係が築けてきているように思える。	13. 信頼関係を築き、保護者の方が悩まれた時や相談されたい時に話をしたいと思えるような教師、園であること。
14. 常に不安そうである。周りの子と違うことがとても気になる様子。性格なのか障害による特性なのか見分けにくい。	14. 保護者が不安ならその気持ちをまずは受け止めること。現状（何ができて、何が苦手か）を話し、共に今後の課題、目標をすすめること。登降園時に様子を伝え合うこと。
15. 健常児とは違った、イメージ、感じ方をすることができる。	15. 良い点を伝えながら、本児や保護者の自尊感情を高めること。課題を共通理解すること。
16. 現実逃避をしている方でした。子どもの現実をどうしても受け入れられず、障害の原因を神がかり的なものにしていました。	16. 保護者と保育士（担任だけでなく園全体）との信頼関係がまず大切だと思います。対象児は、園全体（どの職員も）で見て育てているのだという安心感を与える事も大切です。
17. 子どものことに一生懸命で、勉強会等にもたくさん参加しており、“母はすごいな”と思った。しかし、悩みや苦労もたくさんあり、保護者支援は、本当に大切だと感じた。	17. まずはよく信頼関係を築くことだと思う。良いことも悪いことも何でも話合える関係がベースとなり、その子へのより良い支援につながると思う。また、職員間の連携を密にしていき、“園全体で保育をしている”という組織作りが重要となると思う。

18. 同じ症状や似た様子の先輩ママなどに話を聞いていた。ある程度のルールというか、先を知っている人の意見がとても参考になると言っていた。	18.1番にあるのは不安だと思う。その不安を少しでも緩和できる様、配慮しなければならないと思う。
19. 子どもの障害を受け入れること。私たちが考える以上に保護者は受け入れることは容易ではない。時として、自分を責めたり、子どものことを愛せないと感じたりなど、保育士の立場としても、“子どもの現状”を保護者に伝える際は、親の気持ちを考え、細心の注意を払っています。	19. 子どもも大切にすることは、大前提だと思いますが、それと同時に保護者の気持ちを大切にすることがとても重要だと思います。保育士という立場上、一生その親子を支えていくことは不可能です。ですが、自分たちがその親子と関わっている間は、“共に子を育てる者”として、同じ立場に立ち、目線になり、共に悩み、考えていける存在でありたいと私は考えています。
20. 成長していく上での不安（対象児が大人になって保護者が亡くなっていたら、誰が対象児を支えてくれるか）がある様子だった。	20. 他の保護者との関わりが持てるように配慮したり、保護者の気持ちに耳をかたむける。対象児が通所している施設に見学に行ったりして、他職種との連携をし、保育計画を考え、保護者にも相談していくようにすることが大切だと思う。
計20名 (21名中20名回答 1名未記入)	

IV. 考察

1. 発達障害幼児の保護者への理解と支援

(1) 保育者による発達障害幼児の保護者への理解と支援

仲森・大谷¹¹⁾の研究によると、発達障害幼児の保護者が発達の心配に気づいたときの気持ちとして、自由記述回答結果で最も多かったのが「不安」だった。「不安」でも様々な「不安」があり、将来への不安、世間から偏見の目で見られるかもしれない不安、先の見えない不安等について書かれていた。中には、死を考えたというものもあり、保護者の心理的・精神的負担や深刻さが伝わる内容ばかりだった。

保育者たちへの対象児（発達障害があると思われる子ども）の保護者の様子や気持ちはどのように見えるか、またはどのように感じるかという自由記述回答の質問（表9）では保護者は「不安を感じている」ように見えるという結果が最も多く、保護者の気持ちと一致している。また、保育者から見て保護者の障害受容の難しさについても記されている。

湯沢ら¹⁸⁾の研究でも、幼児期の診断告知に伴うストレスの大きさを報告している。この時期、自制できないほどイライラして夫にあたり散らし、子どもを叩いてしまう等、死を考えてしまうほどに追いつめられていた者がいたことを報告しており、そのストレスがいかに深刻であるか計り知れない。

幼児期ということもあり、子ども特有の行動特徴や個々の成長発達があるため、期待と不安や否定と肯定を繰り返しながらの子育ての時期となる。筆者自身は、障害受容というものは、決して順序よくいくものではなく、様々な気持ちの揺れを日々繰り返していくものではないかと考える。

仲森・大谷¹¹⁾の研究では、発達障害幼児の保護者が保育園・幼稚園の保育士や幼稚園教師（支援者側）に希望することとして、最も多く選択された項目が、「共感性と支持」ということがわかった。次に多かったのが「人間関係へのサポート」であり、「専門性に裏づけされた具体的な助言」という結果だった。保護者が支援者に希望する支援、サポートとして、まず

支援する態度として、「共感性と支持」ということは大前提であると考える。

湯沢ら^{11) 18)}の研究でも、母親が欲しかったサポートの内容として2番目に多かったのが、母親の心理面へのサポートであった。子どもの問題だけでなく、母親自身の辛い気持ちを受け止め傾聴して欲しいという気持ちの表れであると述べられている。また、専門家との関わりがサポートとして有効であったと述べる母親も多く、専門家が温かい態度で母親の相談に応じ、具体的なアドバイスをし、子どもの状態に合わせた働きかけを行うことが、母親の心理的安定感につながると述べられている。

保護者は日々気持ちや感情の変化や揺れはあるものの、子どもがほぼ毎日登園している身近な存在と言える保育の専門家である保育者から、温かい態度や言葉があることで多少なりとも不安や心配等が軽減されるのではないかと考える。

(2) 保育園・幼稚園の保育士・幼稚園教師に対するアンケート調査結果

保育士・幼稚園教師に対するアンケート調査結果からは以下のような特徴が認められた。

特別支援教育の進展により、幼稚園に特別支援教育コーディネーターが指名されるなど、支援体制が整備されてきている。保育園も幼稚園同様、障害のある子どもの保育について、専門機関と連携を図り、必要に応じて助言等を得ることが言われている。だが、その整備されてきている近年でも、通常の保育園や幼稚園の保育士・幼稚園教師は、日々の気になる子どもとの関わりの中で、難しさを感じている現状がある。また、気になる子どもとともに、保護者とのかかわりに課題を感じている保育者は多い³⁾。

思い浮かべた該当する幼児についての質問(表1)に対して「受診をすすめている(すすめた)が、まだ通院はしていない」が6名であり、園側は気になる行動等があるため保護者に園での様子を伝え受診をすすめてはいるが、受診には至っていない。「受診を言い出せない」は5名であり、園側は受診を言い出せないでおり、判断しづらく通院していないという結果だった。「受診をすすめている(すすめた)が、まだ通院はしていない」と「受診を言い出せない」の%を合計すると、53%という結果であり、半数余りが、受診には至っていないという結果であった。

渡辺・田中¹⁶⁾らによっても、低年齢児の保護者の揺れ動きやすい心理状態にある保護者に対して、医師でもなく障害児支援の専門職でもない保育者が、障害の可能性を指摘し、受診を勧めてもすんなりと助言を受け入れられないというのは親としてむしろ自然な反応であることが述べられており、そのような現実が今回の調査結果によっても表れている。

また、保育士・幼稚園教師が、最も相談する相手として多かったのが、「園の職員」であり、15名で71%という結果だった(3つを選択する質問なため、あてはまるもの全てに○の場合よりも%は下がる。3つ選択した場合の以下からの質問も同様)(表2)。

次に多かったのが、「関連する同職種の関係者」であり、園内での職員との連携は勿論のこと、園内だけでなく関連する同職種の連携が重要であると幼稚園教師や保育士たちが考えていることがわかる。「対象児の保護者(母親)」と回答した教師や保育士も9名で43%と3番目に多かった。保育士・幼稚園教師の意識として、母親に子どもの気になる行動等をどのように理解をしてもらい、伝えるべきか等の困り感はあるが、母親との信頼関係の構築や相互

理解をしたいということが表れている結果だと考える。

一方、最も相談する相手の質問の結果として、「園の職員」、「関連する同職種の関係者」、「対象児の保護者（母親）」が多くあがった理由として、保育現場から他機関に相談をしにくいということがあげられる。なぜなら、連携にあたっては、保育現場が単独でできるものはごく限られており、親権者である保護者の了解がなければできないことがほとんどである。子どもたちの障害や発達への心配に対して、保育現場だけでは、対応しきれない問題も多く、特別支援学校や保健所、医療機関、療育機関等幅広い専門機関と連携しなければ対応できないものも少なくない⁴⁾。保護者の子どもの障害や発達への心配についての受容という課題が影響している結果ではないかと考える。

対象児の保護者への園での支援は十分である(十分だった)と思うか(表3)の質問に対して、「おおむね十分である」が16名で75%という結果であり、多少の不十分さを感じてはいるが、園側としての支援を十分だと思っている教師や保育士が多いという結果だった。「十分である」、「おおむね十分である」、を合計すると18名で85%であり、支援できていると思う教師・保育士が多い結果となった。この質問については、園側の意識であり、保護者には聞いていないため、保護者と園側の相違が考えられる。

対象児以外の保護者は、発達障害について理解があると感じるかを尋ねた質問では、「理解していただけない保護者が少しいる」、「理解していただけない保護者が多い」が、21名中13名で62%という結果だった(表5)。合計すると半数以上が、少なからず理解してもらえないと感じているという結果だった。幼児の年齢ともなると、子ども本人から、保育園・幼稚園での子ども同士のトラブルを聞くことも多くなることや、他児との行動特性の相違を保護者が感じる事となる。保育園・幼稚園側がどのように理解をしてもらうか、園の雰囲気作り、保護者とのコミュニケーションや信頼関係形成ということが重要となってくる。

対象児以外の保護者の方たちに、発達障害について(発達障害がある子どもに対して)理解をして頂くためにどのような工夫をしているかという自由記述式の質問(表6)では、「他児との関わりをたくさん持たせる事によって、まず子ども同士のつながり、絆を作っていく。子ども同士が理解し合えることによって保護者の理解も深まると思う。」という回答や、「普段の生活の中で“共に助け合う”ということを大切に保育することで子どもたちが支援の要する子に対する見方、考え方が変わり、その姿が他の保護者に伝われば良いなと思っている。」という回答があった。勿論、始めは保育者が中心となって関わっていくのだが、大人主体の考えや支援ではなく、子ども同士の関わりの中でお互いを認め合っていくことの大切さを言っている。保育者が、いかにクラスの雰囲気作りをしていくかということが重要になってくる。先述した通り、ただ身近な環境がそこに存在するだけでは、子どもの相互関係が成立し、成長へとつながるものではない。そこには保育者の存在が不可欠である1) 13)ということが言えるだろう。

また、発達障害のある子どもの保育、教育を充実させていくために連携していく分野について尋ねた質問では、「対象児の母親」と「園の職員」を選択した方が20名で95%という高い結果となった(表8)。また、「対象児の父親」を選択した方が18名で86%という結果だった。母親だけが、保育士や幼稚園教師と連携するのではなく、父親も子どもの様子等を把握して

もらい子育てに協力的であることが子どもの心身の健康につながると保育者側は思っていることが伺えた。

V. 終わりに

共感性と支持ということは、保育者が傾聴し保護者の気持ちを受け止め、共感することによって、保護者が安心感を持ち、信頼関係の構築につながることになる。牧野³⁾も、保育者は、基本的姿勢として、保護者の話を傾聴することが重要になる。保育者は、つい自分の意見を言いたくなることや、指導をしたくなるものであるが、まずは、保護者の思いを十分に受け止めることが大切である。保護者の話を受け止め理解しようとする保育者の姿勢から、保護者への支援を行う上で最も大切な相互の信頼関係が形成され、保護者の理解や協力が得られるようになる」と述べている。

保護者が保育者（支援者）に希望する支援、サポートとして、まず支援する態度として傾聴することと同様、「共感性と支持」ということは大前提であると考ええる。これからの課題として、障害や発達のみならずに対する支援に当たっては、医療・療育との連携が重要だと言われているが、保育園・幼稚園との連携も必然でありお互いの内容を保護者をはじめとした関係者と共有していく道筋を明らかにしていくことが重要である⁴⁾。

そして、発達障害のある子どもの保育、教育を充実させていくために連携していく分野について尋ねた質問（表8）では、1番多く選択されていたのが、「対象児の母親」だった。この結果は、母親との連携が大変重要と認識している結果だと考える。このことからわかるように同僚や専門家との連携も勿論のことだが、子どもにとって一番身近な存在である母親との連携を重要と考えている保育者が多く、母親にとっても心強い結果と言えるのではないかと考える。

保育者が保護者を支援していく場合には、子どものありのままの姿を認めていくことに加え、子どもの成長や発達について期待や希望を込めて語っていくことが、重要である。子どもや保護者たちにとって保育者は、重要な役割を担う人的環境と言って良いだろう。保護者の気持ちが少しでも理解できるよう想像力を膨らませ、思いに寄り添う姿勢が大切になってくると考える。幼児期は、保護者の気持ちの揺れの大きい最初大切な時期であるため、保育者は保護者にとって、子どもの未来と希望を語る信頼できるパートナーとなっていかなければならない。

尚、本研究は、三重大学大学院修士論文を加筆、修正したものである。

引用文献

- 1) 厚生労働省 保育所保育指針 平成20年度版
- 2) 呉栽喜・岡田節子・朴千満・中嶋和夫 (2006), 障害幼児の発達特性と母親のニーズの関係 大東文化大学紀要 44, 15-21
- 3) 牧野桂一 (2012), 保育現場における子育て相談と保護者の支援のあり方, - 筑紫女学園

- 大学短期大学部人間文化研究所 23, 181－182
- 4) 牧野桂一 (2012), 保育現場と療育機関とが連携した子どもの支援のあり方 筑紫女学園大学筑紫女学園大学短期大学部紀要 23, 222－223
 - 5) 眞野祥子・宇野宏幸 (2007), 注意欠陥多動性障害児の母親における育児ストレスと抑うつとの関連 小児保健研究 66, (4) 524－530
 - 6) 道原里奈・岩元澄子 (2012), 発達障害児をもつ母親の抑うつに関連する要因の研究－子どもと母親の属性とソーシャルサポートに着目して－ 久留米大学心理学研究 11, 74－83
 - 7) 森口香・岩満優実・山本賢司・金生由紀子・中村賢・井上勝夫・宮岡等 (2008), 広汎性発達障害の子供をもつ母親のソーシャルサポートの検討 ストレス科学 23, 104－114
 - 8) 文部科学省 発達障害者支援法施行について 平成17年4月1日施行
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/main/002/001.htm
 - 9) 文部科学省 「幼稚園教員の資質向上について－自ら学ぶ幼稚園教員のために」(報告) 2002
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/019/toushin/020602.htm
 - 10) 中嶋和夫・斎藤友介・岡田節子 (1999), 母親による育児負担感に関する尺度化 厚生 の指標 46, 11－18
 - 11) 仲森みどり・大谷正人 (2016), 発達障害幼児の保護者への理解と支援－A市療育施設の保護者を対象としたアンケート調査より－ 三重大学教育学部研究紀要 67 87－98頁
 - 12) 新美明夫・植村勝彦 (1980), 心身障害幼児をもつ母親のストレスについて－ストレス尺度の構成－ 特殊教育学研究 18, 18－33
 - 13) 佐藤有香 (2016), 人的環境としての保育者の役割－現職保育者の視点で－ こども教育宝仙大学紀要 8, 57－64
 - 14) 田中康雄 (2012), 幼児期から青年期までのADHD症状の年齢による変化 精神神経学雑誌 114, 447－454
 - 15) 高橋純一・遊佐千尋・鶴巻正子 (2016), 子どもの行動に対する肯定的捉え直しが発達障害幼児の保護者の養育スタイルに及ぼす影響 障害理解研究 (17) 17-28
 - 16) 渡辺顕一郎・田中尚樹 (2014), 発達障害児に対する「気になる段階」からの支援－就学前施設における対応困難な実態と対応策の検討－ 66, 33－34
 - 17) 山下裕史朗 (2011), 注意欠陥多動性障害 母子保健情報 63, 6－10
 - 18) 湯沢純子・渡邊佳明・松永しのぶ (2007), 自閉症児を育てる母親の子育てに対する気持ちとソーシャルサポートとの関連 昭和女子大学生活心理研究所紀要 10, 119－129

原著（論文）

大学生の人権意識について

— 県民の人権意識との比較から —

保科 潤一 田中 基夫

Research for Consciousness on Human Rights of College Students
— Compared with That of People in Aichi —

Jyunichi Hoshina, Motoo Tanaka

Abstract

As for human rights education, a variety of measures, including development of various systems and accession to treaties concerning human rights have been taken under the Constitution of Japan. However, there still exists unreasonable discrimination on the grounds of one's social or family status, race or ethnic group, sex, physical or mental disorder, and so forth. Furthermore, new challenges have arisen with the development of globalization, information technology, and an aging society. It is imperative to cultivate in each of us the spirit of esteeming human rights for the purpose of creating a peaceful and prosperous society where everyone respects human rights and is able to live together.

The authors of this article are now engaging in students' awareness of human rights activity through teaching subjects required for teacher qualifications. The aim of this research is to make further attempts to raise students' awareness about human rights comparing the results of the survey of citizens' consciousness on human rights conducted in Aichi Prefecture in 2012 with those of our students' here.

キーワード：人権意識、学生、県民、差別

I はじめに

わが国の人権教育は、人権教育及び人権啓発の推進に関する法律（平成12年第147号同年12月6日公布・施行）の第7条に基づき、人権教育・啓発に関する基本計画（平成14年3月15日閣議決定）が策定され、総合的かつ計画的に推進されている。

また、基本的人権を保障する日本国憲法の下に、人権に関する諸制度の整備や人権に関する諸条約への加入、人権に関する各施策が講じられてきた。しかし、今日においてもなお、生命や身体の安全に関わる事象や、社会的身分、門地、人種、民族、信条、性別、障害等による不当な差別やその他の人権侵害が存在していることは否めない。さらには、性的少数者やH I V感染者への差別など、人権に対する新たな課題も生じてきている。このような人権問題が生じる背景には、人々の中に見られる同質性、均一性を重視する性行や非合理的な因習的意識の存在等が影響していると思われる。また、国際化、情報化、高齢化、少子化等の社会の急激な変化もその要因になっていると考えられる。さらに根本的には、人権尊重の理念についての正しい理解や実践する態度が、国民の中に十分に定着していないことが上げられる。

人権が尊重され、相互に共存しうる平和で豊かな社会を実現するためには、国民一人一人の人権尊重の精神の涵養を図ることが不可欠であることは言うまでもない。人権教育・教育白書（平成29年度版）によると、文部科学省では、学校、家庭、地域社会が一体となった総合的な取組や、学校における人権教育の指導方法の改善充実について実践的な研究を依頼する「人権教育推進事業」、「学校における人権教育の在り方に関する調査研究」等を実施し、人権教育の推進に努めていると記されている。また、平成27年に改訂された学習指導要領においても、幼児期における道徳教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要な役割を果たすことから、各幼稚園において道徳性の芽生えを培う指導の充実を図ることが求められている。このような観点から、保育者養成校として、将来幼児教育を担う学生の人権意識を調査することは、学生の人権意識を涵養するために必要であると考ええる。

II 研究目的

本研究の目的は、平成24年度に愛知県で実施された「人権に関する県民の意識調査」のアンケートを学生に実施し、県民と学生の人権意識に対する認識の違いを明らかにして、学生のさらなる人権意識の涵養を目指すものである。

III 研究方法

1. 対象者及び方法

平成24年度の「人権に関する県民の意識調査」は、愛知県在住の満20歳以上の男女3,000人を対象に実施され、回収数は1,361人である。同調査の質問項目を使って、学生159人（幼児教育学科1部1年生84人 幼児教育学科3部3年生75人）を対象にして、無記名式のアンケート調査を実施した。回収数は149名で95%の回収率であった。

2. 調査期間

2017年（平成29年）12月に実施した。

3. 倫理的配慮

調査対象者に対して口頭で、本調査への参加・不参加により評価等の不利益が生じないこと、個人名が特定されないことなどを説明し調査依頼を行った。質問用紙提出をもって同意の意思確認を行った。

IV 結果

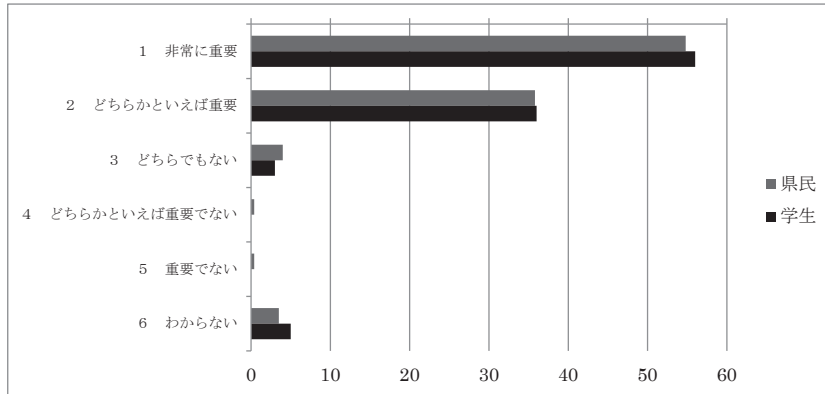


図1 問1 「人権」についてあなたの考えに近いものはどれですか。

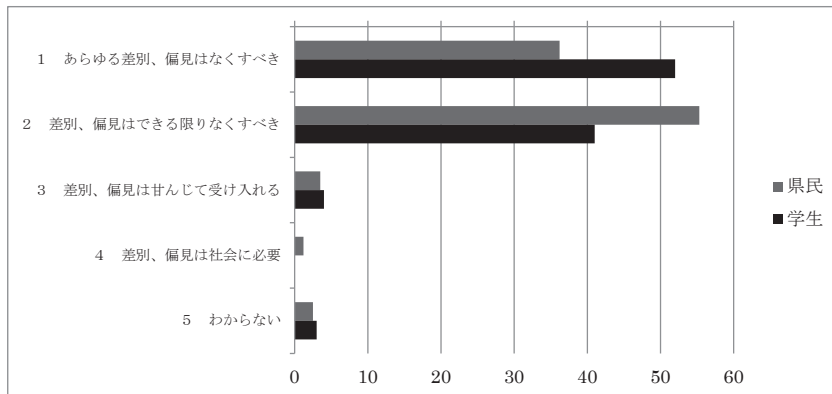


図2 問2 社会の差別や偏見についてあなたの考えに近いものはどれですか。

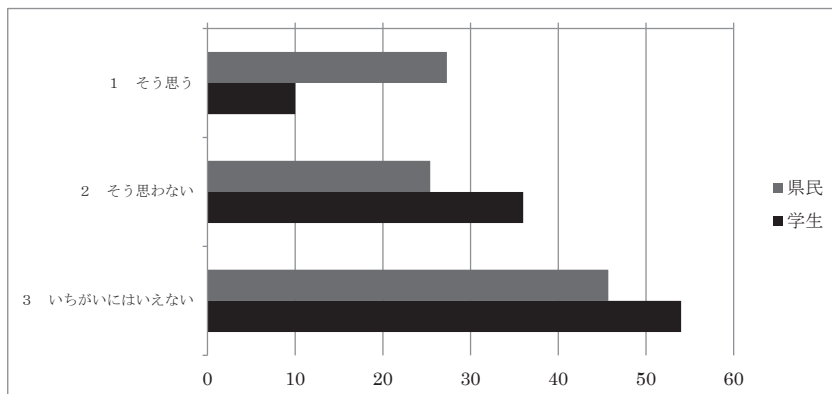


図3 問3 今の日本は基本的人権が尊重されていると思いますか。

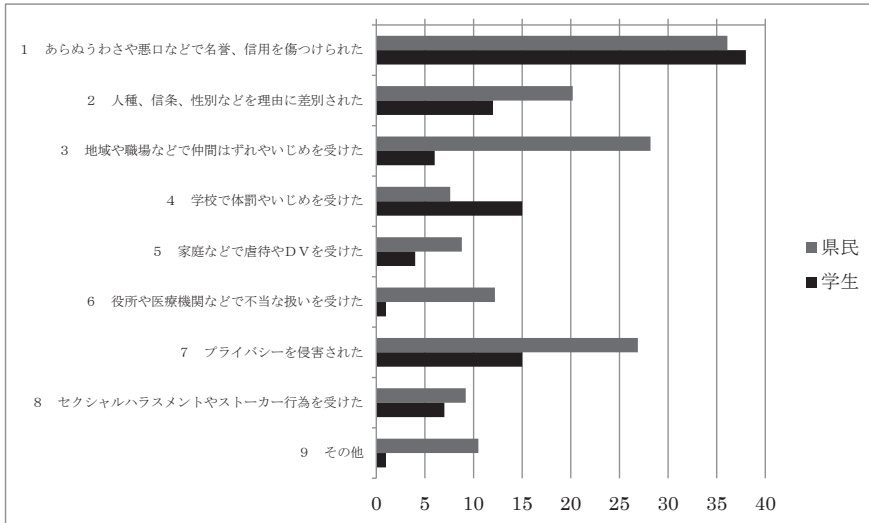


図4 問4 自分の人権を侵害されたと思ったのはどんな場合でしたか。

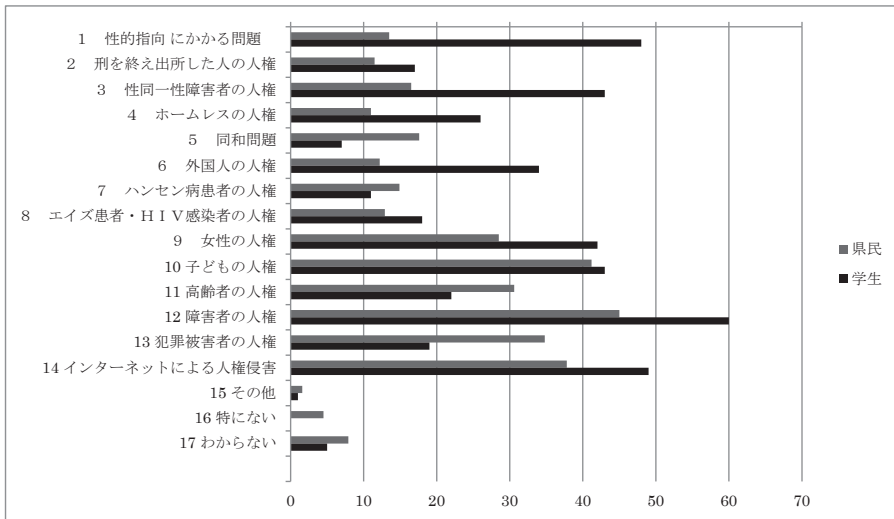


図5 問5 人権にかかわる問題として、重要な問題はどれだと思いますか。

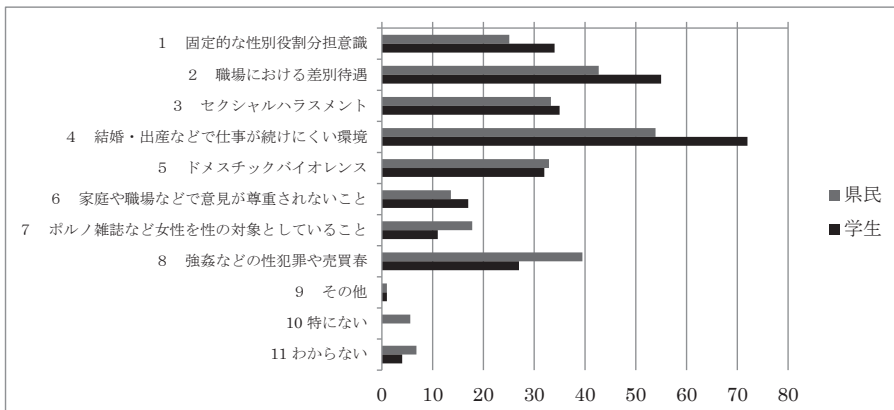


図6 問6 女性の人権で、現在特に問題となっているのはどれだと思いますか。

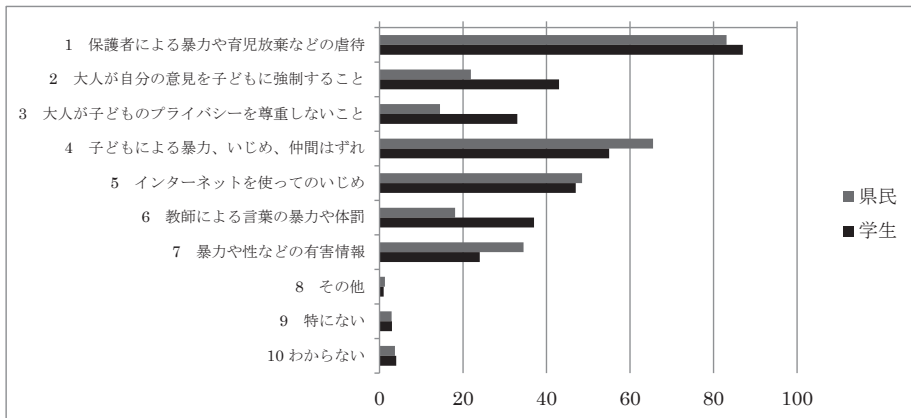


図7 問7 子どもの人権で、現在特に問題となっているのはどれだと思いますか。

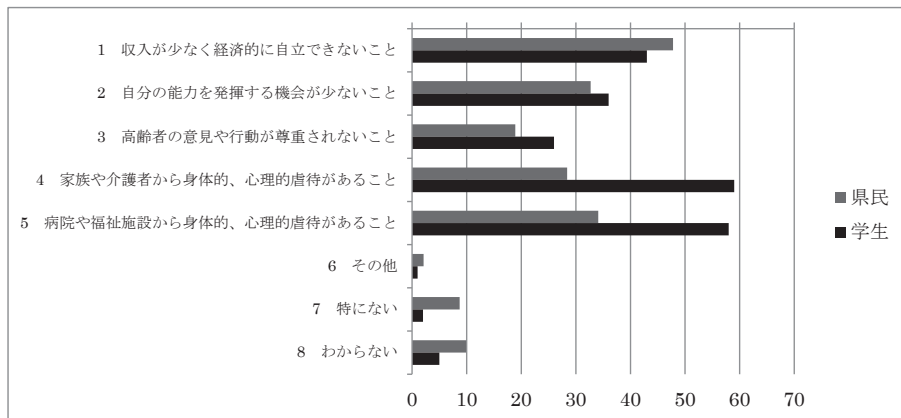


図8 問8 高齢者の人権で、現在特に問題となっているのはどれだと思いますか。

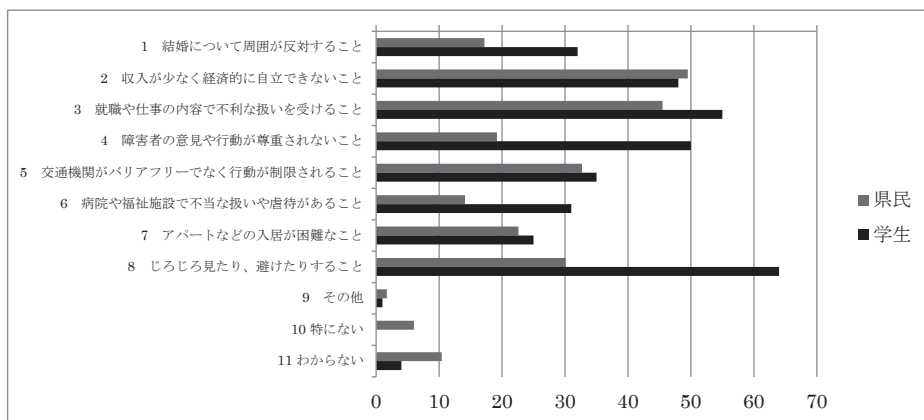


図9 問9 障害者の人権で、現在特に問題となっているのはどれだと思いますか。

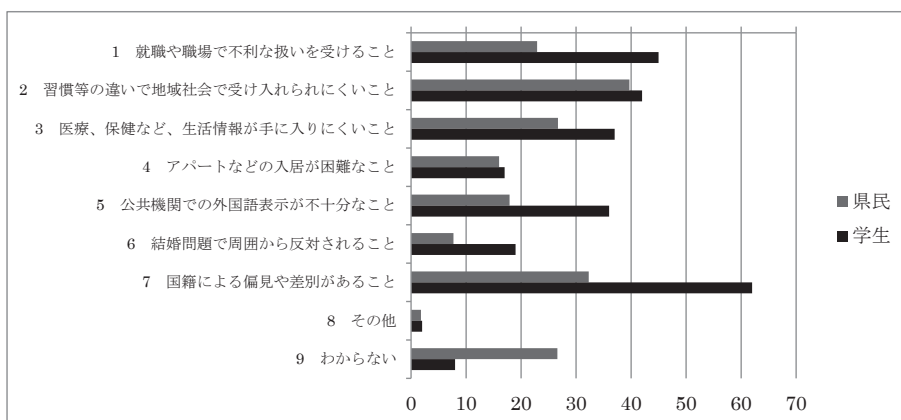


図10 問10 外国人の人権で、現在特に問題となっているのはどれだと思いますか。

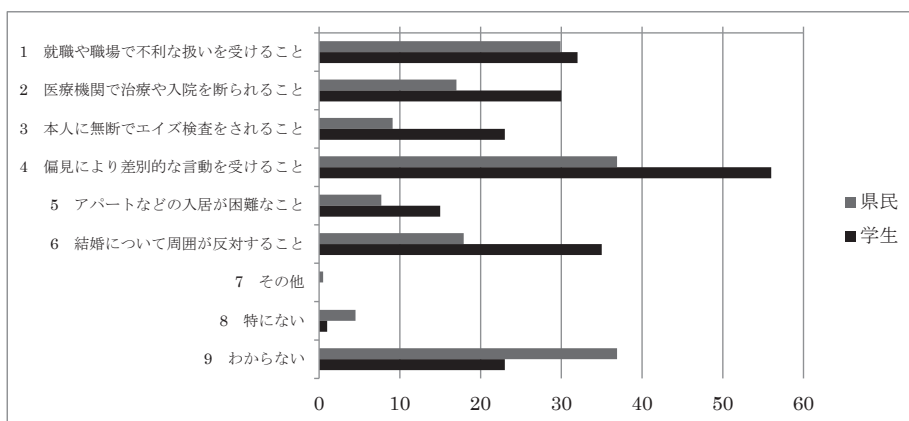


図11 問11 エイズ患者・HIV感染者の人権で、現在特に問題となっているのはどれだと思いますか。

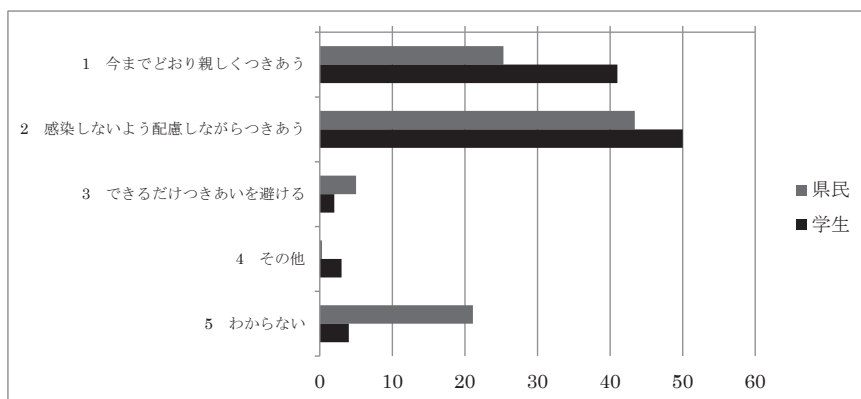


図12 問12 職場や地域で親しい人がHIV感染者であることがわかった場合、あなたはどのようにしますか。

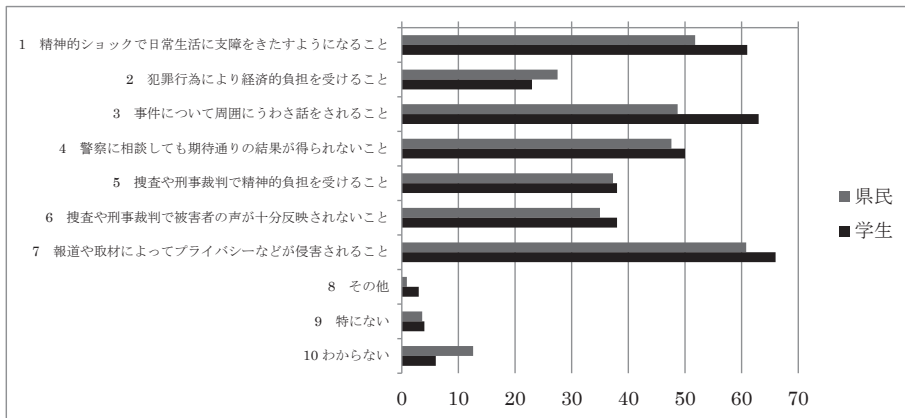


図13 問13 犯罪被害者の人権で、現在特に問題となっているのはどれだと思いますか。

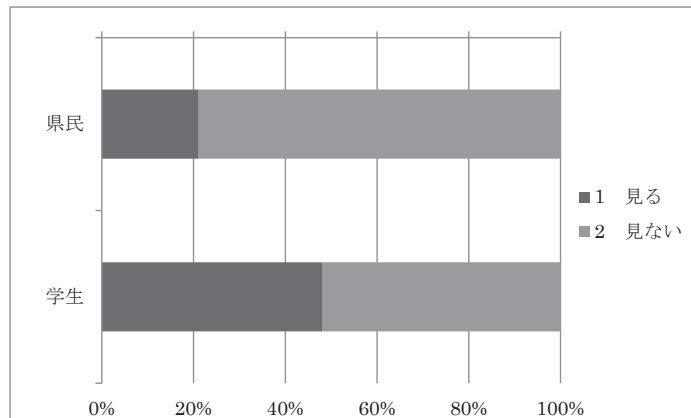


図14 問14 インターネット上で他人への誹謗中傷などの書き込みを発見した場合、あなたはそのページを見ますか。

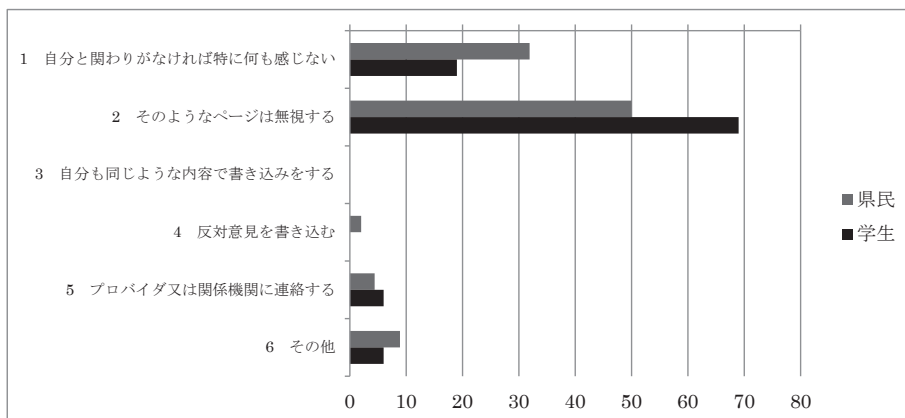


図15 問15 「見る」と回答した方にお聞きます。そのようなページを見たとき、どのようにしますか。

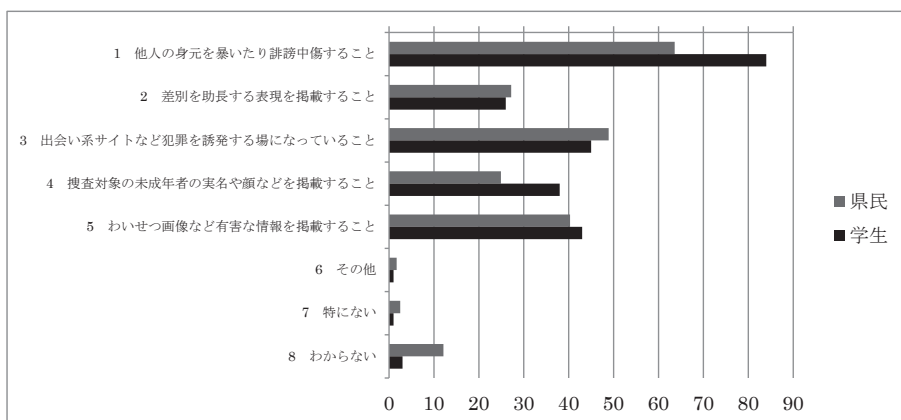


図16 問16 インターネットによる人権侵害で、現在特に問題となっているのはどれだと思いますか。

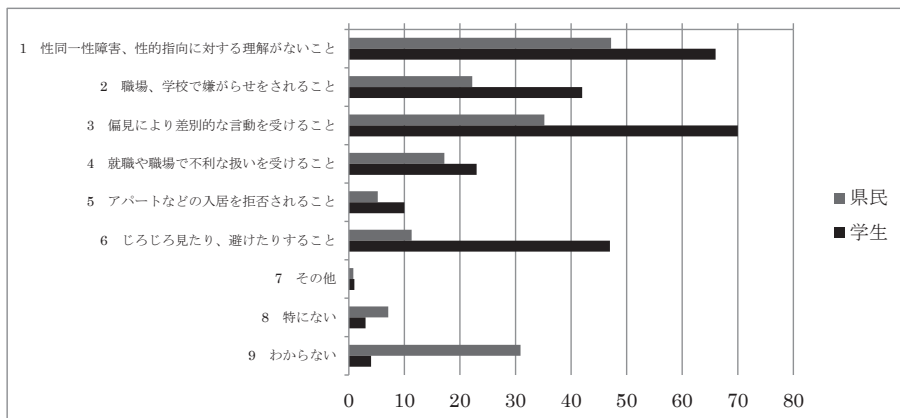


図17 問17 性同一性障害や性的指向に関する人権で、現在特に問題となっているのはどれだと思いますか。

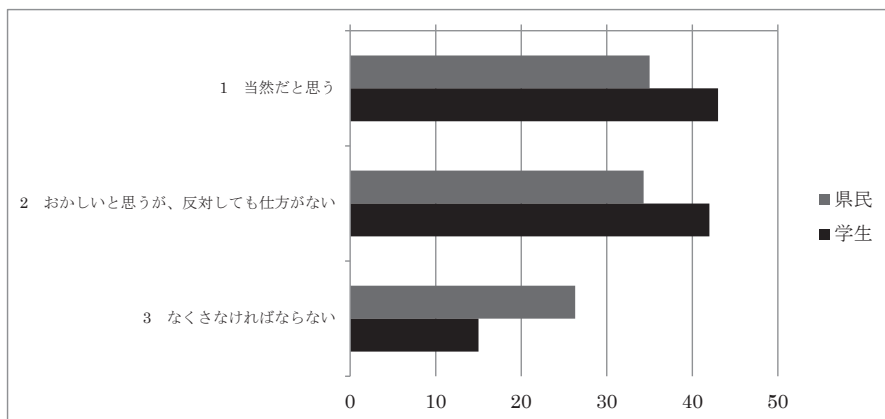


図18 問18 結婚にあたり、家柄や家族状況を調べることについてどう思いますか。

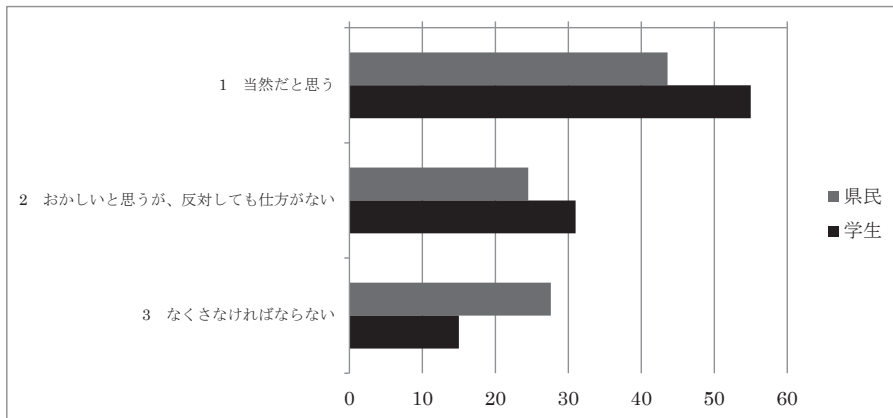


図19 問19 企業が採用選考のとき身元調査をすることについてどう思いますか。

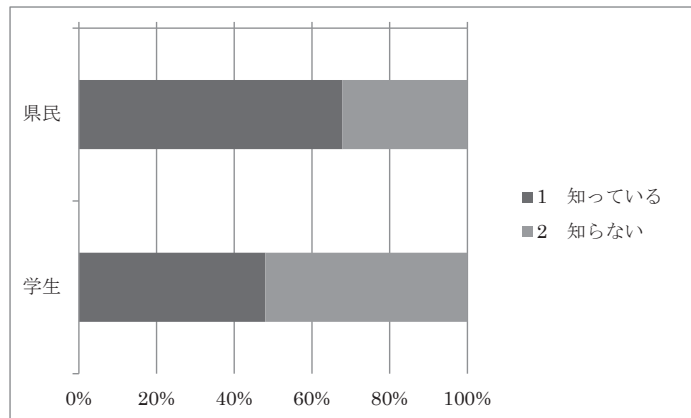


図20 問20 あなたは「同和問題」「部落差別」といわれる問題を知っていますか。

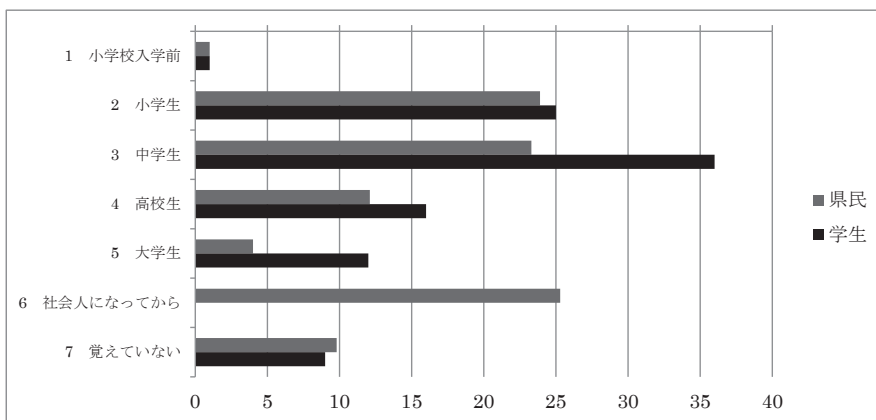


図21 問21 「知っている」と回答した方にお聞きます。あなたがはじめて知ったのはいつ頃ですか。

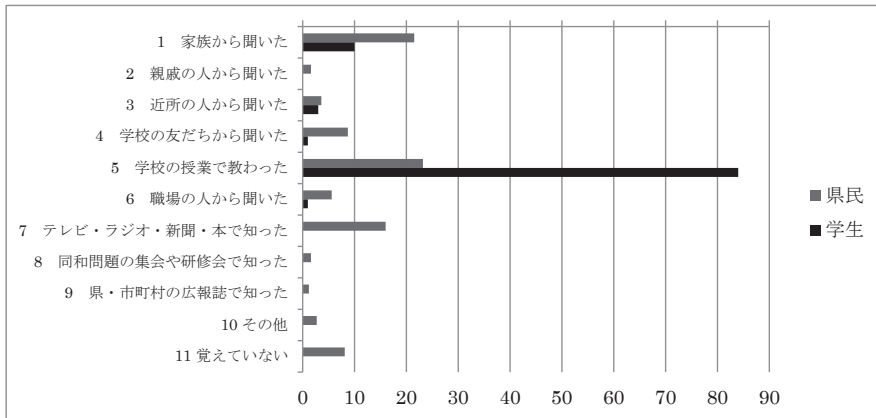


図22 問22 「知っている」と回答した方にお聞きします。あなたが同和問題についてはじめて知ったきっかけは何からですか。

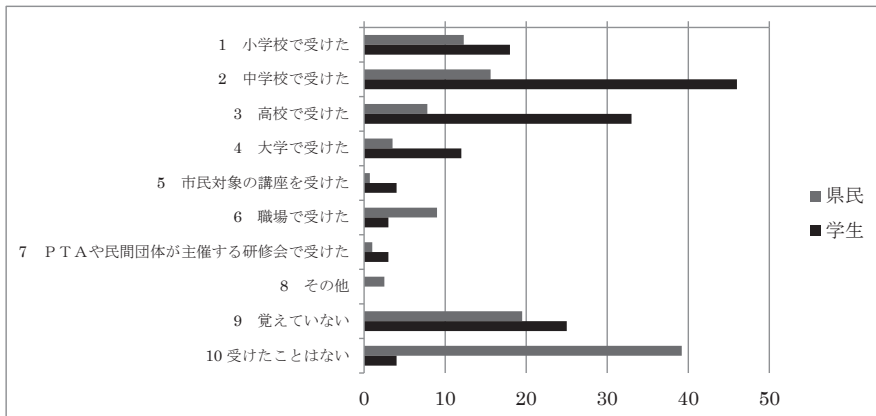


図23 問23 「知っている」と回答した方にお聞きします。あなたは同和問題の教育を受けたり学習したことはありますか。

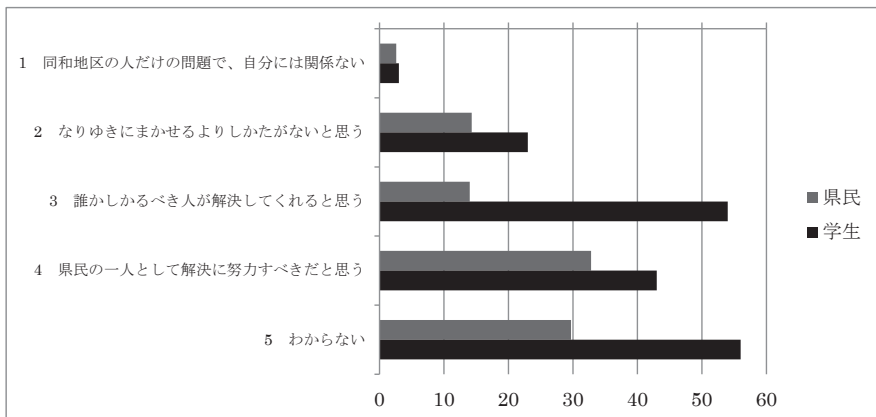


図24 問24 同和問題の解決に対するあなたの考えに最も近いのはどれですか

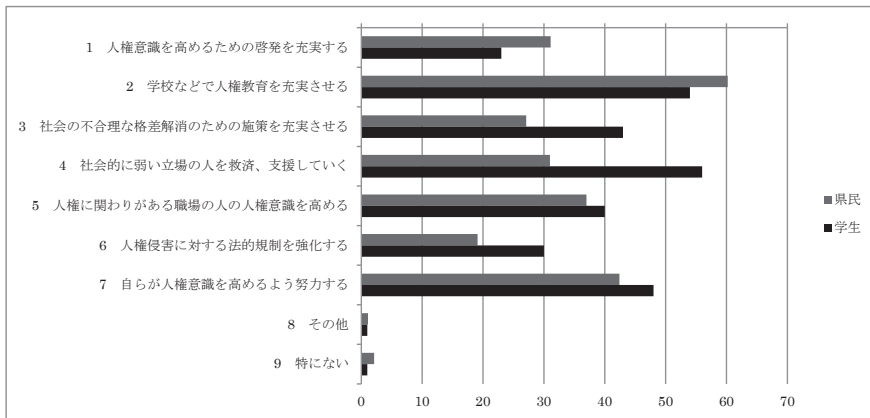


図25 問25 人権が尊重される社会を実現するには特にどのような取り組みが必要だと思いますか。

問1

県民は「非常に重要である」、「重要である」が合わせて91%である。学生は「非常に重要である」「重要である」が合わせて92%である。

問2

県民は「差別、偏見はできるかぎりなくすべき」が55%と最も高く、次いで「あらゆる差別、偏見はなくすべき」が36%である。学生は「あらゆる差別、偏見はなくすべき」が52%で最も高く、次いで「差別、偏見はできるかぎりなくすべき」が41%である。

問3

県民は「いちがいにはいけない」が46%と最も高く、次いで「そう思う」27%、「そう思わない」が25%である。学生は「いちがいにはいけない」が54%と最も高く、次いで「そう思わない」36%、「そう思う」が10%である。学生は県民に比較して「そう思う」の出現率が低い。

問4

県民は「あらぬうわさや悪口などで名誉、信用を傷つけられた」が36%で最も高く、次いで「地域や職場などで仲間はずれやいじめを受けた」28%、「プライバシーを侵害された」が27%である。学生は「あらぬうわさや悪口などで名誉、信用を傷つけられた」が38%で最も高く、次いで「学校で体罰やいじめを受けた」、「プライバシーを侵害された」がいずれも15%である。

問5

県民は「障害者の人権」が45%と最も高く、次いで「こどもの人権」41%、「インターネットによる人権侵害」が38%である。学生は「障害者の人権」が60%と最も高く、次いで「インターネットによる人権侵害」49%、「性的指向にかかる問題」48%、「性同一性障害者の人権」43%、「こどもの人権」43%、「女性の人権」が42%である。

問6

県民は「結婚・出産などで仕事が続けにくい環境」が54%と最も高く、次いで「職場に

おける差別待遇」43%、「強姦などの性犯罪や売買春」が40%である。学生は「結婚・出産などで仕事が続けにくい環境」が72%と最も高く、次いで「職場における差別待遇」55%、「セクシャルハラスメント」35%、「固定的な性別役割分担意識」34%、「ドメスティックバイオレンス」が32%である。

問7

県民は「保護者による暴力や育児放棄などの虐待」が83%と最も高く、次いで「子どもによる暴力、いじめ、仲間はずれ」66%、「インターネットを使ってのいじめ」が49%である。学生は「保護者による暴力や育児放棄などの虐待」が87%と最も高く、次いで「子どもによる暴力、いじめ、仲間はずれ」55%、「インターネットを使ってのいじめ」が47%である。上位3項目は、県民と学生で一致が見られた。

問8

県民は「収入が少なく経済的に自立できないこと」が48%で最も高く、次いで「病院や福祉施設から身体的、心理的虐待があること」34%、「自分の能力を発揮する機会が少ないこと」が33%である。学生は「家族や介護者から身体的、心理的虐待があること」が59%で最も高く、次いで病院や福祉施設から身体的、心理的虐待があること」58%、「収入が少なく経済的に自立できないこと」が43%である。

問9

県民は「収入が少なく経済的に自立できないこと」が50%で最も高く、次いで「就職や仕事の内容で不利な扱いを受けること」46%、「交通機関などがバリアフリーになっていないため、自由な行動が妨げられること」が33%である。学生は「じろじろ見たり、避けたりすること」が64%で最も高く、次いで「就職や仕事の内容で不利な扱いを受けること」55%、「障害者の意見や行動が尊重されないこと」50%、「収入が少なく経済的に自立できないこと」が48%である。県民と学生で上位出現率の項目に差異が見られた。

問10

県民は「習慣等の違いで地域社会で受け入れられにくいこと」が40%と最も高く、次いで「国籍による偏見や差別があること」32%、「医療、保健など生活情報が手に入りにくいこと」27%、「わからない」が27%である。学生は「国籍による偏見や差別があること」が62%と最も高く、次いで「就職や職場で不利な扱いを受けること」45%、「習慣等の違いで地域社会で受け入れられにくいこと」が42%である。学生では上位項目の出現率が高く、また「わからない」と答えたものが少ない。

問11

県民は「偏見により差別的な言動を受けること」が37%と最も高く、次いで「就職や職場で不利な扱いを受けること」が29%である。また、「わからない」が37%で高くなっている。学生は「偏見により差別的な言動を受けること」が56%と最も高く、「結婚について周囲が反対すること」35%、「就職や職場で入院を断られること」が32%である。また、「わからない」が23%で県民と同様に高くなっている。

問12

県民は「感染しないように配慮してつきあう」が43%で最も高く、次いで「今までどお

り親しくつきあう」が25%である。また、「わからない」が21%で高い出現率を示している。学生は「感染しないように配慮してつきあう」が50%で最も高く、次いで「今までどおり親しくつきあう」が41%である。「わからない」は4%で、県民と比較してしっかりとした意志判断力を備えている。

問13

県民は「報道や取材によってプライバシーなどが侵害されること」が61%と最も高く、次いで「精神的なショックで日常生活に支障をきたすようになること」52%、「事件について周囲にうわさ話をされること」48%、「警察に相談しても期待通りの結果が得られないこと」が48%である。学生は「報道や取材によってプライバシーなどが侵害されること」が66%と最も高く、次いで「事件について周囲にうわさ話をされること」63%、「精神的なショックで日常生活に支障をきたすようになること」61%、「警察に相談しても期待通りの結果が得られないこと」が50%である。上位項目は県民と差異はないが、全般的にはどの項目も学生の方が高い出現率を示している。

問14

県民は「見ない」68%、「見る」が20%である。学生は「見ない」52%、「見る」が48%である。学生は県民と比べて「見る」の出現率が高い。

問15

県民は「そのようなページは無視する」が50%と最も高く、次いで「自分とかかわりがなければ、特に何も感じない」が32%である。学生は「そのようなページは無視する」が69%と最も高く、次いで「自分とかかわりがなければ、特に何も感じない」が19%である。

問16

県民は「他人の身元を暴いたり誹謗中傷すること」が64%で最も高く、次いで「出会い系サイトなど、犯罪を誘発する場となっていること」49%、「わいせつ画像など、有害な情報を掲載すること」が40%である。学生は「他人の身元を暴いたり誹謗中傷すること」が84%で最も高く、次いで「出会い系サイトなど、犯罪を誘発する場となっていること」45%、「わいせつ画像など、有害な情報を掲載すること」が43%である。上位3つの項目は、県民と一致している。

問17

県民は「性同一性障害、性的指向に対する理解がないこと」が47%で最も高く、次いで「偏見により差別的な言動を受けること」が35%である。一方、「わからない」が31%で極めて高い。学生は「偏見により差別的な言動を受けること」が70%で最も高く、次いで「性同一性障害、性的指向に対する理解がないこと」66%、「じろじろ見たり避けたりすること」47%、「職場、学校で嫌がらせをされること」が42%である。一方「わからない」は4%で県民と比べて極めて低い。

問18

県民は「当然だと思う」が35%で最も高く、次いで「おかしいと思うが反対しても仕方がない」34%、「なくさなければならぬ」が28%である。学生は「当然だと思う」が43%で最も高く、次いで「おかしいと思うが反対しても仕方がない」が42%である。

問19

県民は「当然だと思う」が44%で最も高く、次いで「なくさなければならぬ」が28%である。学生は「当然だと思う」が55%で最も高く、次いで「おかしいと思うが反対しても仕方がない」が31%である。

問20

県民は「知っている」66%、「知らない」が31%である。学生は「知っている」48%、「知らない」が52%である。学生は県民と比べて、同和問題への関心は低い傾向が見られる。

問21

県民は「社会人になってから」が25%で最も高く、「小学生」24%、「中学生」23%で社会人、中学生、小学生がほぼ同じ比率である。学生は「中学生」が36%で最も高く、「小学生」25%、「高校生」が16%である。

問22

県民は「学校の授業で教わった」が23%で最も高く、次いで「家族から聞いた」が22%である。学生は「学校の授業で教わった」が84%で最も高く、次いで「家族から聞いた」が10%である。

問23

県民は「受けたことがない」が39%で最も高く、次いで「覚えていない」が20%である。学生は「中学校で受けた」が46%で最も多く、次いで「高校で受けた」33%、「覚えていない」が25%である。県民も学生も「覚えていない」の出現率が高い。また、学生は「受けたことがない」が4%で、県民に対して出現率が極めて低い。

問24

県民は「県民の一人として解決に努力すべきだと思う」が33%で最も高く、次いで「わからない」が30%である。学生は「わからない」が56%で最も高く、次いで「誰かしかるべき人が解決してくれる」54%、「県民の一人として解決に努力すべきだと思う」が43%である。「誰かしかるべき人が解決してくれる」の出現率が県民に対して非常に高い。

問25

県民は「学校などで人権教育を充実させる」が60%で最も高く、次いで「自らが人権意識を高めるよう努力する」42%、「人権に関わりがある職場の人の人権意識を高める」が37%である。学生は「社会的弱い立場の人を救済し、支援していく」が56%で最も高く、次いで「学校などで人権教育を充実させる」54%、「自らが人権意識を高めるよう努力する」48%、「社会の不合理な格差解消のための社会施策を充実させる」が43%である。

V 考察

問1,2 人権についての意識や差別、また偏見についての意識については学生と県民に大きな差異はない。

問3,4 「今の日本は基本的人権が尊重されているか」については、学生が県民よりも17%も出現率が低く大きな差異が生じている。具体的に人権を侵害されたと思ったのはどんな場

合であったかとの質問では、学生は「人種、信条、性別での差別」、「地域、職場での仲間はずれやいじめ」、「役所や医療機関などで不当な扱い」、「プライバシーの侵害」などで県民よりも出現率が低くなっている。これらの項目で学生の出現率が低いのは、社会経験の不足により質問に対する実感を持っていないことが考えられる。これから年齢を重ねてさまざまな経験を積む中で人権侵害を実感していく可能性がある。一方、学生で高いのは、「あらぬうわさや悪口などで名誉、信用を傷つけられた」、「学校での体罰やいじめ」などの項目であり、いずれも学生が学校現場で直面している問題である。したがって、問3及び問4における県民と学生の出現率の差は、問3の「日本は基本的人権が尊重されているか」という漠然とした質問に対する受け止め方に、学生と県民でずれがあるのではないかと考えられる。

問5 人権にかかわる問題で、県民と学生で最も関心が高い項目は「障害者の人権」である。県民に対して学生の出現率がきわめて高くなった項目は「性的指向に係る問題」、「性同一性障害者の人権」、「外国人の人権」、「ホームレスの人権」、「女性の人権」、「障害者の人権」などである。このことは、学生の社会的弱者やマイノリティへの関心がきわめて強いことを示している。また、逆に県民に対して学生の出現率が低くなった項目は「同和問題」、「犯罪被害者の人権」、「ハンセン病患者の人権」、「高齢者の人権」である。これは、これらの項目に対する学生の認知度が低いことが考えられ、授業を通じて認識を深めていく必要がある。

問6 女性の人権に関する項目では、学生と県民で出現率に大きな差異はない。共に高い項目は、「結婚・出産などで仕事が続けにくい環境」、「職場における差別待遇」などである。これらの項目では学生は県民よりも出現率が10%程度高く、学生は職場での男女差別に敏感であることが窺える。

問7 子どもの人権で、県民と学生で出現率が高い項目は「保護者による暴力や育児放棄などの虐待」、「子どもによる暴力、いじめ、仲間はずれ」、「インターネットを使ってのいじめ」などである。また、県民に対して学生の出現率が高い項目は、「大人が子どもに意見を強制する」、「大人が子どものプライバシーを尊重しない」、「教師による言葉の暴力や体罰」などで、親や教師とまだ身近で接している学生の肌感覚が表われていると考えられる。

問8 高齢者の人権では、出現率が高い項目が学生と県民で異なっている。学生で極めて高い出現率を示したのは、「家族や介護者からの身体的、心理的虐待」、「病院や福祉施設の身体的、心理的虐待」などである。このことは、学生が虐待問題への関心が非常に強いことを示している。県民で出現率が高い項目は、「収入が少なく経済的に自立できないこと」、「病院や福祉施設から身体的、心理的虐待があること」、「自分の能力を発揮する機会が少なくないこと」などであり、学生とは視点が異なることを示している。

問9 障害者の人権では、出現率が高い項目が県民と学生で異なっている。県民に対して学生の出現率が非常に高い項目は「じろじろ見たり、避けたりすること」、「障害者の意見や行動が尊重されないこと」、「病院や福祉施設で不当な扱いや虐待があること」、「結婚について周囲が反対すること」などである。県民と学生共に高い出現率を示したのは、「収入が少なく経済的に独立できないこと」、「就職や仕事の内容で不利な扱いを受けること」で

ある。学生の出現率の高さは、社会的弱者への関心が強いことを示している。

問10 外国人の人権で、学生が県民に対して高い出現率を示した項目は「国籍による偏見や差別があること」、「就職や職場で不利な扱いを受けること」、「公共機関での外国語表示が十分でないこと」などである。学生の出現率の高さは、国際化の進行の中で学生は外国人への差別意識や共存への違和感が少ないことを示している。また、県民に比べて「わからない」の出現率も低く、明確な意志判断力を備えていることが窺える。

問11、12 エイズ患者・HIV感染者の人権で、学生が県民に対して高い出現率を示したのは「偏見により差別的な言動を受けること」、「結婚について周囲が反対すること」、「医療機関で入院を断られること」、「本人に無断でエイズ検査をされること」などである。また、県民に比べて「わからない」の出現率も低く、明確な意志判断力を備えていることが窺える。

問13 犯罪被害者の人権では、学生と県民で出現率に大きな差異は見られない。学生と県民でいずれも関心が高いのは「報道や取材によってプライバシーなどが侵害されること」、「事件について周囲にうわさ話をされること」、「精神的なショックで日常生活に支障をきたすようになること」などである。

問14～16 インターネット上で他人への誹謗中傷などの書き込みを発見した場合についての項目で、「見る」は、学生は県民より30%も出現率が高くなっている。このことは、県民に比べて学生の情報収集能力の高さや、他者への誹謗中傷に関心が強いことを示している。そのページを見たときの対応については、「そのようなページは無視する」が県民より高く、学生は明確な意思表示を行うことを示している。また、インターネットの人権侵害の項目について学生が県民より出現率が高い項目は、「他人の身元を暴いたり誹謗中傷すること」、「捜査対象の未成年者の実名や顔などを掲載すること」などである。学生は、これらの問題に対して敏感な感覚を備えていることが窺える。

問17 性的少数者の人権では、いずれの項目でも学生は県民に比べて高い出現率になっており、学生の関心の高さが窺える。県民と学生いずれも高い出現率を示した項目は「性同一性障害、性的指向に対する理解がないこと」、「偏見により差別的な言動を受けること」などである。また、学生で高い出現率を示した項目は「職場や学校で嫌がらせをされること」、「じろじろ見たり避けたりすること」などである。また、学生は「わからない」の出現率が低く、明確な意志判断力を備えていることが窺える。

問18、19 結婚や企業の採用選考するときの身元調査については「当然だと思う」や「おかしいと思うが反対してもしかたがない」の出現率が県民よりも学生で高くなっている。また逆に、「なくさなければならない」の項目は、学生の出現率は県民に比べて低くなっている。これらの問題について、学生の姿勢は現状追認的で、やむを得ないという受容的態度が見受けられる。

問20～24 同和問題や部落差別では、学生の認知度は県民に比べて18%も低い傾向がある。この問題を知った時期については、学生、県民共に小学生から中学生の時期が多いが、県民では「社会人になってから」が最も高い出現率である。また、はじめて知ったきっかけは、学生は「学校の授業で教わった」の項目が突出している。県民は「学校の授業で教わった」

が最も多く、続いて「家族から聞いた」、「学校の授業で教わった」が同程度である。この事実は、同和問題を学校で扱うことがきわめて重要であることを示している。教育を受けた時期は、学生は「中学校」、「高校」、「覚えていない」などが突出し、県民は、「受けたことがない」、「覚えていない」が高い出現率である。同和問題の解決に対する考え方では、学生は「誰かしかるべき人が解決してくれる」、「わからない」などの出現率が高く、依存的でこの問題に対する関心の低さが窺える。

問25 人権が尊重される社会を実現するにはどのような取り組みが必要か、については、県民や学生で共に出現率が高い項目は「学校などで人権教育を充実させる」、「自らが人権意識を高めるよう努力する」などである。県民に対して学生の出現率が高いのは「社会的弱い立場の人を救済し、支援していく」、「社会の不合理な格差解消のための社会施策を充実させる」、「人権侵害に対する法的規制を強化する」などである。このことは、学生は同質性・均一性を重視する傾向が強く、非合理的な考え方や社会的弱者に対して敏感に反応する傾向があることを示している。

VI まとめ

大学生の人権意識の特色をまとめると次のようになる。

1. 一般的な人権についての意識や社会の差別や偏見についての意識は、県民と同レベルの認識を持ち合わせている。
2. 人権の重要問題で特に感心が強い項目は、「性的指向に係る問題」、「性同一性障害者の人権」、「外国人の人権」、「ホームレスの人権」などである。社会的弱者やマイノリティの人権には敏感に反応する傾向が見られる。
3. 県民よりも高い出現率が随所の項目で見られ、多くの項目について意思表示が明確である。県民が「わからない」と答えている項目に対しても、明確な意志判断力を備えている。
4. 結婚や出産の差別、職場の差別に敏感な感覚を備えている。また、家庭や介護者、福祉施設での虐待問題にも関心が強い。
5. インターネットに対しては、高い情報収集能力を備えており対応方法も明確である。
6. 外国人に対しては柔軟に対応することができ、国際化の進行の中で差別意識や共存への違和感が少ない。
7. 結婚の身元調査や企業の採用選考時の身元調査については、冷めた目を持ち容認的態度である。
8. 関心が低い項目は、「同和問題」、「ハンセン病患者の人権」、「犯罪被害者の人権」などである。これらの問題は、授業で扱うことにより認識度を高めていく必要がある。同和問題解決に対する考え方は、依存的で関心が低い。
9. 同質性・均一性を重視する傾向が強く、非合理的なものへの反抗心や社会的弱者を擁護する傾向がある。
10. この研究を通じて、全般的に学生は人権意識に関して高い感受性を持ち、また敏感に反応する傾向があることを解明することができた。また同時に、「同和問題」への関心の低

さなど、学生の人権意識についての課題も把握することができた。これからの人権教育を通じて、学生一人一人に対して自らの権利を行使することの意義を理解させるとともに他者に対して公正・公平であり、人権尊重の精神が涵養される教育活動を実践していきたい。

＜参考文献＞

- 1) 愛知県 人権に関する県民の意識－人権に関する県民の意識調査から－
21世紀を人権の世紀とするために
- 2) 法務省・文部科学省 平成29年度人権教育・啓発白書
- 3) 文部科学省 小学校学習指導要領（平成29年3月告示）
- 4) 人権教育及び人権啓発の推進に関する法律（平成12年法律147号）
- 5) 人権教育・啓発の関する基本計画（平成14年3月15日）
- 6) 平成23年度全国高等学校校長会人権・同和教育研究協議会（鹿児島大会）研究発表資料
（P11～18）田中基夫

愛知文教女子短期大学学生人権意識調査

1. 「人権」に関して、あなたが日ごろ感じていること、考えていることをお答えください。

問1 この「人権」についてあなたの考えに近いものはどれですか。（○は1つ）

1. 非常に重要である 2. どちらかといえば重要である 3. どちらでもない
4. どちらかといえば重要でない 5. 重要でない 6. わからない

問2 日本社会にある様々な差別や偏見について、あなたの考えに最も近いものは、どれですか。（○は1つ）

1. あらゆる差別、偏見は、許されるものでなく、なくさなくてはいけない
2. 差別、偏見は、できるかぎりなくすべきである
3. 差別、偏見はなくならないので、甘んじて受け入れる
4. 差別、偏見は、社会にとって必要なものである
5. わからない

2. 今日の日本社会において、人権をとりまく社会的状況として、あなたの考えに近いものはどれでしょうか。

問3 今の日本は、基本的人権が尊重されている社会であると思いますか。（○は1つ）

1. そう思う 2. そう思わない 3. いちがいいにはいえない

問4 あなたが自分の人権を侵害されたと思ったのは、どんな場合であったかお聞かせください。（○はいくつでも）

1. あらぬうわさ、悪口、落書き、インターネット情報などで名誉、信用を傷つけられたり、

侮辱された

2. 人種、信条、性別、社会的身分などを理由に差別された
3. 地域や職場などにおいて仲間はずれやいじめなど不当な扱いを受けた
4. 学校において体罰やいじめなど不当な扱いを受けた
5. 家庭などで虐待やドメスティック・バイオレンス（DV）など不当な扱いを受けた
6. 役所や医療機関、福祉施設などで不当な扱いを受けた
7. プライバシーを侵害された
8. セクシュアル・ハラスメントやストーカー行為を受けた
9. その他（具体的に： _____）

問5 日本の社会における人権にかかわる問題として、重要な問題はどれだと思いますか。

（○はいくつでも）

1. 性的指向（異性愛、同性愛、両性愛）にかかる問題
2. 刑を終えて出所した人の人権
3. 性同一性障害者（身体的な性と心の性が一致しない人）の人権
4. ホームレスの人権
5. 同和問題
6. 外国人の人権
7. ハンセン病患者・回復者の人権
8. エイズ患者及びHIV（エイズウイルス）感染者の人権
9. 女性の人権
10. 子どもの人権
11. 高齢者の人権
12. 障害者の人権
13. 犯罪被害者の人権
14. インターネット（パソコンや携帯電話など）による人権侵害
15. その他（具体的に： _____）
16. 特にない
17. わからない

3. 女性の人権について

問6 女性に関する人権上の問題について、現在、特に問題となっているのはどのようなことだと思いますか。（○はいくつでも）

1. 固定的な性別役割分担意識（「男は仕事、女は家庭」など）
2. 職場における差別待遇（採用、昇格、賃金など）
3. セクシュアル・ハラスメント
4. 結婚・出産などにより女性が仕事を続けにくい社会環境
5. ドメスティック・バイオレンス（DV）
6. 家庭や職場、地域などで女性の意見が尊重されないこと
7. アダルトビデオやポルノ雑誌など、女性を性の対象物ととらえる社会風潮
8. 強姦、強制わいせつなどの性犯罪や売買春
9. その他（具体的に： _____）
10. 特にない
11. わからない

4. 子どもの人権について

問7 子どもに関する人権上の問題について、現在、特に問題となっているのはどのようなことだと思いますか。（○はいくつでも）

1. 保護者による子どもへの暴力や育児の放棄などの虐待
2. 大人が子どもの意見を聞かず自分の意見を子どもに強制すること
3. 大人が「子どもだから」という理由で、子どものプライバシーを尊重しないこと
4. 子どもによる暴力、いじめ、無視などの仲間はずれ
5. インターネット（パソコンや携帯電話など）を使つてのいじめ
6. 教師による言葉の暴力や体罰
7. 暴力や性など子どもにとっての有害な情報の氾濫
8. その他（具体的に： _____）
9. 特にない 10. わからない

5. 高齢者の人権について

問 8 高齢者に関する人権上の問題について、現在、特に問題となっているのはどのようなことだと思いますか。（○はいくつでも）

1. 収入が少なく、経済的に自立できないこと
2. 自分の能力を発揮する機会が少ないこと
3. 高齢者の意見や行動が尊重されないこと
4. 家族や介護者から身体的、心理的などの虐待があること
5. 病院や福祉施設で不当な扱いや身体的、心理的などの虐待があること
6. その他（具体的に： _____）
7. 特にない 8. わからない

6. 障害者の人権について

問 9 障害のある人に関する人権上の問題について、現在、特に問題となっているのはどのようなことだと思いますか。（○はいくつでも）

1. 結婚について周囲が反対すること
2. 収入が少なく、経済的に自立できないこと
3. 就職や仕事の内容、待遇で不利な取扱いを受けること
4. 障害者だからという理由で、意見や行動が尊重されないこと
5. 交通機関などがバリアフリーになっていないため、自由な行動が妨げられること
6. 病院や福祉施設で不当な扱いや虐待があること
7. アパートなどの住宅への入居が困難なこと
8. じろじろ見たり、避けたりすること
9. その他（具体的に： _____）
10. 特にない 11. わからない

7. 外国人の人権について

問10 外国人に関する人権の問題で、現在、特に問題となっているのは、どのようなことだと思いますか。（○はいくつでも）

1. 就職や職場で不利な取り扱いを受けること
2. 習慣等が異なるため、地域社会で受け入れられにくいこと
3. 医療、保健、防災など、生活に必要な情報が手に入りにくいこと
4. アパートなどの住宅への入居が困難なこと
5. 公共機関での外国語表示が不十分なこと
6. 結婚問題で周囲から反対されること
7. 国籍による偏見や差別があること
8. その他（具体的に： _____）
9. わからない

8. エイズ患者・H I V（エイズウイルス）感染者、ハンセン病患者・回復者の人権について
 問11 エイズ患者・H I V（エイズウイルス）感染者に関する事柄で、現在、特に人権上問題があると思われるのはどのようなことですか。（○はいくつでも）

1. 就職や職場で不利な取扱いを受けること
2. 医療機関で治療や入院を断られること
3. 本人に無断でエイズ検査をされること
4. 偏見により差別的な言動を受けること
5. アパートなどの住宅への入居が困難なこと
6. 結婚について、周囲が反対すること
7. その他（具体的に： _____）
8. 特にない
9. わからない

問12 仮に、あなたが職場や地域などで日ごろ親しくつきあっている人がH I V感染者であることがわかった場合、あなたはどうしますか。（○は1つ）

1. 今までどおり親しくつきあう
2. 感染しないよう配慮しながらつきあう
3. できるだけつきあいを避ける
4. その他（具体的に： _____）

問13 犯罪被害者に関する人権上の問題で、現在、特に問題となっているのはどのようなことだと思いますか。（○はいくつでも）

1. 犯罪行為による精神的なショックにより、日常生活に支障をきたすようになること
2. 犯罪行為によって経済的負担を受けること
3. 事件のことにについて、周囲にうわさ話をされること
4. 警察に相談しても期待どおりの結果が得られないこと
5. 捜査や刑事裁判において精神的負担を受けること
6. 捜査や刑事裁判手続きに必ずしも被害者の声が十分反映されるわけではないこと
7. 報道によってプライバシーに関することが公表されたり、取材によって私生活の平穏が保てなくなること
8. その他（具体的に： _____）
9. 特にない
10. わからない

9. インターネットによる人権侵害について

問14 インターネット上で、他人を誹謗中傷するなど、人権侵害と思われるような書き込みやホームページを発見した場合について、お聞きします。あなたは、そのような内容のページを見ますか。

- (○は1つ) 1. 見る 2. 見ない

問15 上の問14で「1. 見る」と回答した方にお聞きします。そのようなページを見たとき、どのようにされますか。(○は1つ)

1. 自分とかかわりがなければ、特に何も感じない 2. そのようなページは、無視する
3. 自分も同じような内容で書き込みをする 4. 反対意見を書き込む
5. プロバイダ又は関係機関に知らせる 6. その他（具体的に： ）

問16 インターネットによる人権侵害に関して、現在、特に問題となっているのはどのようなことだと思いますか。(○はいくつでも)

1. 他人の身元を暴いたり、誹謗中傷する表現を掲載すること
2. 差別を助長する表現を掲載すること
3. 出会い系サイトなど、犯罪を誘発する場となっていること
4. 捜査対象となっている未成年者の実名や顔写真を掲載すること
5. わいせつ画像や残虐な画像など、有害な情報を掲載すること
6. その他（具体的に： ）
7. 特にない 8. わからない

10. 性同一性障害（※1）、性的指向（※2）をはじめとする性的少数者の人権について

※1：身体的な性と心の性が一致しないこと ※2：異性愛、同性愛、両性愛

問17 性同一性障害者及び性的指向に関する人権上の問題で、現在、特に問題となっているのはどのようなことだと思いますか。(○はいくつでも)

1. 性同一性障害、性的指向に対する理解がないこと
2. 職場、学校において、嫌がらせをされること
3. 偏見により差別的な言動を受けること
4. 就職や職場で不利な取扱いを受けること
5. アパートなどの住宅への入居を拒否されること
6. じろじろ見たり、避けたりすること
7. その他（具体的に： ）
8. 特にない 9. わからない

11. 家柄、血筋について

問18 結婚にあたり、家柄や家族状況を調べる（聞き合わせ）について、あなたはどのように思いますか。(○は1つ)

1. 当然だと思う 2. おかしいと思うが、自分だけ反対しても仕方がないと思う

3. まちがっているから、なくしていかなければならないと思う

問19 企業が採用選考のとき身元調査をすることについて、あなたはどのように思いますか。(○は1つ)

1. 当然だと思う
2. おかしいと思うが、自分だけ反対しても仕方がないと思う
3. まちがっているから、なくしていかなければならないと思う

1 2. 部落差別・同和問題について

問20 あなたは、日本の社会に「同和地区」、「被差別部落」などとよばれ、差別を受けてきた地区があること、あるいは「同和問題」「部落差別」「部落問題」といわれる問題があることを知っていますか。(○は1つ)

1. 知っている
2. 知らない → 問25へ進む

問21 上の問20で「1. 知っている」と回答した方にお聞きします。あなたが、同和地区や同和問題について、はじめて知ったのは、いつ頃ですか。(○は1つ)

1. 小学校入学以前
2. 小学生
3. 中学生
4. 高校生
5. 大学生
6. 社会人になってから
7. 覚えていない

問22 問20で「1. 知っている」と回答した方にお聞きします。あなたが、同和地区や同和問題について、はじめて知ったきっかけは、何からですか。(○は1つ)

1. 家族から聞いた
2. 親戚の人から聞いた
3. 近所の人から聞いた
4. 学校の友だちから聞いた
5. 学校の授業で教わった
6. 職場の人から聞いた
7. テレビ・ラジオ・新聞・本などで知った
8. 同和問題の集会や研修会で知った
9. 県や市町村の広報紙や冊子などで知った
10. その他（具体的に：)
11. 覚えていない

問23 問20で「1. 知っている」と回答した方にお聞きします。あなたは、学校、職場及び地域で同和問題についての教育を受けたり学習をしたことがありますか。(○はいくつでも)

1. 小学校で受けた
2. 中学校で受けた
3. 高校で受けた
4. 大学で受けた
5. 市民対象の講座などで受けた
6. 職場の研修で受けた
7. P T Aや民間団体が主催する研修会で受けた
8. その他（具体的に：)
9. 覚えていない
10. 受けたことはない

1 3. 同和問題解決のための対応について 同和問題は、特定の地域の出身であることなどを理由にして、結婚や就職において不利な扱いを受けたり、差別的な言動を受けるという日本固有の人権問題です。

1. これは、同和地区の人だけの問題だから、自分とは直接関係ない問題だと思う
2. 自分ではどうしようもない問題だから、なりゆきにまかせるよりしかたがないと思う
3. 自分ではどうしようもない問題だが、だれかしかるべき人が解決してくれると思う
4. 基本的人権にかかわる問題だから、自分も県民の一人として、この問題の解決に努力すべきだと思う
5. わからない

1. 人権意識を高めるための啓発を充実させる
2. 学校などにおいて人権教育を充実させる
3. 社会に見られる不合理な格差を解消させるための施策を充実させる
4. 社会的に弱い立場にある人を救済、支援していく
5. 人権にかかわりがある職場に勤める人の人権意識を高める
(行政職員、教職員、医療・福祉関係者、警察官、消防士など)
6. 人権侵害に対する法的規制を強化する
7. 個人個人自らが人権意識を高めるように努める
8. その他（具体的に：
9. 特にない
10. わからない

研究ノート

化学的膨張作用を利用した焼菓子の製法の検討

有尾 正子 原 真由美 岩田 侑子

Consideration of a Process of the Baking Snack for which a Chemical Swell Action was Used

Shoko Ario, Mayumi Hara, Yuko Iwata

Abstract

This research prepared the sponge cake which makes the rice flour a principal material and considered the swell state. The result and the combination with the good swell state were rice flour 120g, baking soda 4g, 60 ml of drop of lemon juice, sugar 50g, oil 50ml and water 90ml. This, and, allergy to foods, it'll be reported that it was offered by an event of a patient target.

キーワード；米粉、膨張剤、化学的膨張作用

1. 緒言

米の国民1人・1年当たりの供給純食料は、昭和37年度には118.3kgあり、米を主食とする国民性を象徴するものであった。しかし、供給純食料は年々減少し昭和45年度は93.1kgとなり100.0kgを下回った。その減少量はおさまらず平成28年度では54.4kgとなった¹⁾。日本人の食生活にも変化がおき、さまざまな国の料理や食文化の影響を受けているとみられる。米の消費が落ち込む中、米粉製品の摂取を促し、食料自給率を上げる動きもある²⁾。また、小麦アレルギーの患者にとっても米粉は、小麦の代替品としても幅広く活用できる。

本学では、米粉を用いた菓子を食物アレルギー患者対象の行事で提供してきたが、小麦粉、卵を主材料とする菓子のようなスポンジではなく、生地を天板に流し入れ焼成し、切り分けたものであった³⁾。

本研究では、米粉を主材料とするスポンジの調製をおこない、膨張状態を検討し、食物アレルギー患者対象の行事で提供したことを報告する。

2. 試料の配合と調製方法

試料は、米粉（共立食品株式会社：米の粉）、重曹（共立食品株式会社：重曹タンサン）、レモン汁（ポッカサッポロフード&ビバレッジ株式会社：ポッカレモン100）、上白糖、油（昭和産業株式会社：食用なたね油）、水道水。攪拌には、ハンドミキサー（イズミハンドミキサー：MH-400）、焼成調理機器は、ガス式スチームコンベクションオーブン（株式会社エフ・エム・アイ：CONVO Star OGS10.10）。材料の配合は、A～Eの5回に分量を変え（表1）、調製方法は図1のとおりである。

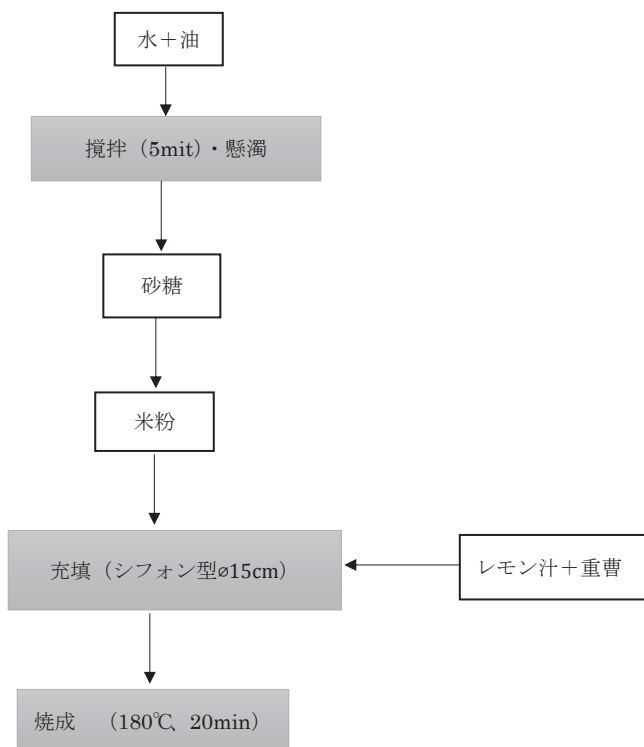


表1 材料の配合

材 料	A	B	C	D	E
米粉	100 g	100 g	100 g	100 g	120 g
重曹	2 g	2 g	4 g	4 g	4 g
レモン汁	10ml	60ml	60ml	60ml	60ml
砂糖	50 g	50 g	50 g	50 g	50 g
油	70ml	150ml	120ml	80ml	50ml
水	100ml	100ml	100ml	100ml	90ml

図1 試料の調整方法

3. 結果および考察

Aは炭酸ガスの発生が進まなかったため気泡が少なく、焼き上がりはゴム状であった（図2）。Bは、炭酸ガスの発生を促すためにレモン汁を6倍、スポンジの老化を避けるために油を2.14倍に調製した。気泡の量には特に変化はなく、油の量が多すぎて十分に攪拌できず、焼き上がってもなお油がしみ出していた（図3）。Cは、気泡を安定的に発生させるために重曹をAの2倍に、油を1.17倍に調製したが、しみ出す油の量は多く、Bのスポンジと変わらなかった（図4）。Dは、油がしみ出る量を減少させるために80mlにしたところ、安定的は膨脹を見せた（図5）。しかし、シフォン型を逆さにすると型からスポンジが抜け落ちて崩れてしまった（図6）。Eは、米粉の量を1.2倍に増量し、油はスポンジの適度な硬さとなってきたため再度減らした。また、水の量も減らし調製をおこなったところ、膨化もよく、気泡も均一であった（図7）。今回、5回の材料の配合の調整をおこなった結果では、Eの配合が最もよかった。焼成中も順調に膨化が進みシフォン型に充填されていき（図8）、焼き色もきれいついた（図9）。



図 2



図 3



図 4



図 5



図 6



図 7

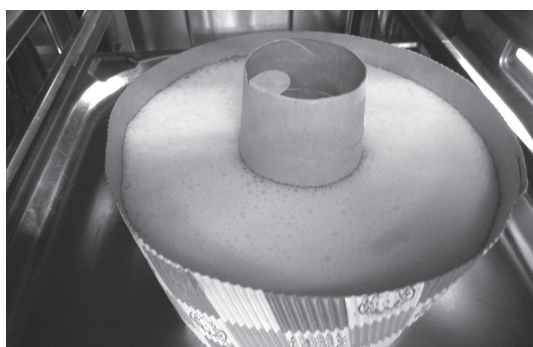


図 8



図 9

米粉は、製菓材料の一つでもあり、和菓子に多用されるもので、うるち米ともち米を製粉してつくられる。うるち米から新粉と新粉のうち粒子が細かいものを上新粉という。うるち米のでんぷんにはアミロースを含んでおり、アミロースの特徴として吸水力が小さく、粘りが弱い。また、老化も早くテクスチャーも悪くなる⁴⁾。老化を遅らせるために油や砂糖を添加するが、添加しすぎるとBのように焼き上がったあとも油がしみ出て味が落ちたり、Dのように形を保つことができないなどの影響がある。油の量や水と合わせてからの攪拌工程で十分に乳化させてから米粉を添加し、さらによく攪拌しなければならないと考えられた。

スポンジは、高さがあり軟らかくきめが細かく整った気泡が分散された状態がよい。卵の調理特性である起泡性を使うスポンジの場合、全卵を用いた共立て法で作る。泡立てる際は、卵白の泡立てを阻害する油脂が入らないようにしなければならないが卵黄中に含まれるレシチンは他の油と異なった構造のため、卵白の泡立てをそれほど阻害することなく作ることができる⁵⁾。今回は、気泡の膨張の原理を使う物理的膨張作用ではなく膨張剤を用い、ガスの発生による化学的膨張作用を活用した。重曹（炭酸水素ナトリウム）に水を加え加熱することで、炭酸ガスが発生する（図10）⁶⁾。

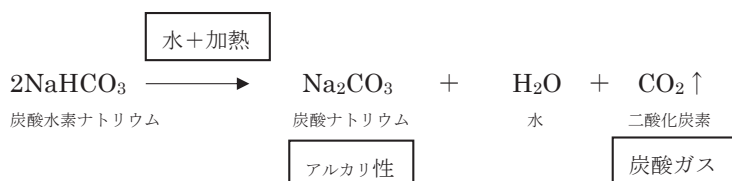


図10 重曹の化学反応

発生したガスにより生地を膨らませることができるが、重曹だけでは、膨張力が弱くアルカリ臭を発散し味が落ちることがあるため⁷⁾、レモン汁を添加しクエン酸によって中和させた。その結果、発泡力もよく独特のアルカリ臭があまり感じられなくなったと考えられる。

材料の配合を変えて得られた結果からEの調製法が、製品としては提供できるものと考えられ、平成29年12月9日の食物アレルギー患者対象のクリスマスパーティーでデザートとして提供した（図11）。パーティーで提供した料理についてアンケートをおこない、次のような結果が得られた（表2）。参加者の85.0%が料理の味について「とてもよかった」と回答している。また、「特に美味しかったもの」の記述の中にケーキと書かれた参加者もいた。ケーキを含め、提供した料理は高い評価が得られたものと思われる。



図11

表2 料理の味について n = 20

とてもよかった	よかった	ふつう
85.0%	5.0%	10.0%

4. まとめ

米の自給率や国民1人・1年当たりの供給純食料を向上させる手立ての一つとして、農林水産省21世紀農政2008には、米を消費が減少している「ご飯」としてではなく、「米粉」としてパン、麺類等に活用する取組を本格化すると記され、米の加工に関して開発が進むことが予測されていた⁸⁾。10年経過し、米粉の製粉技術は進み微粉化された。そのことにより、和菓子に多用されていた米粉が洋菓子にも幅広く用いられるようになった。本研究において、配合を変化させていくことで膨張剤による化学的膨張作用が、米粉のスポンジを調製するのに簡便であることが示唆された。また、小麦、卵、乳製品を使用していないため、食物アレルギー患者への対応食としても応用できるのではないかと考える。今後も材料の配合の検討を続けよりよい割合を追求していくとともに、嗜好性や物性についても検討が必要だと考えられた。

参考文献

- 1) 農林水産省大臣官房政策課食料安全保障室；食料需給表平成28年度，平成29年8月．
- 2) 農林水産省；米粉をめぐる状況について，平成30年2月．
- 3) 安藤京子 編著；愛知文教女子短期大学がお届けするみんないしょの楽しい給食，芽ばえ社，pp9，2013.
- 4) 宮内 昭，西浦孝輝，菓子（その2），調理科学研究会，pp37-45，1984.
- 5) 河田昌子，お菓子の「こつ」の科学，柴田書店，1998.
- 6) 藤沢和恵，南 廣子編著，現代調理学，医歯薬出版株式会社，2001.
- 7) 小西 旭，ベーキングパウダー合成膨張剤，調理科学研究会，1975.
- 8) 長沼誠子，米粉の調理への利用，日本調理科学雑誌，Vol.42，No.3，2009.

研究ノート

ニュージーランドの就学前教育の現状

—幼稚園・保育施設の現地視察調査より—

赤塚 徳子

An Overview of the Current State of Preschool Education in New Zealand
—On the Basis of On-the-spot Investigation of Kindergartens and Nursery Schools There—

Noriko Akatsuka

Abstract

This report is a compilation of data offered by people concerned with the investigation of early childhood education in New Zealand. We visited kindergartens, nursery schools, and Play Centres in Auckland, the largest urban area in the country, conducting research on their childcare environments and services provided there to gain in-depth knowledge about their current state. As the result of this research, it has become clear that all the nursery services are provided following a national curriculum ‘Te-Whariki,’ which adopts Maori culture.

キーワード：ニュージーランド，就学前教育，多文化共生保育，保育環境

1. はじめに

子育て支援先進国として知られるニュージーランドでは、子育て中の家庭への様々なサポートが行われている。就学前教育においては、世界に先駆けて幼保一元化に取り組んだ国であり、統一カリキュラム「テ・ファリキ」は国際的にも知られ、日本の保育者からも注目されている。

本稿は、ニュージーランド最大の都市であるオークランドの幼児教育・保育の現場を視察し、保育関係者からの聞き取り調査から得た情報をまとめたものである。多様な保育形態の現場を訪問し、実際にどのように就学前教育が実践されているか、保育環境や多文化共生保育について調査を実施した。

2. ニュージーランドの幼児教育・保育について

2-1 ニュージーランドの概要

オーストラリア大陸の東南2,250km に位置するニュージーランドは、北島と南島のふたつの大きな島と、周辺の島々から成る。ポリネシア文化を受け継いだマオリ人が10世紀後半に発見し、1642年にオランダ人タスマンによるヨーロッパ人の初渡来、1769年にイギリス人クックによる探検を経て、1840年にイギリスの直轄植民地となった。その後、1907年にイギリス連邦自治領となり、1947年にイギリス連邦の1国として独立した。⁽¹⁾

ニュージーランドの面積は、27万534平方キロメートルで、日本の約4分の3である。首都は北島にあるウェリントンで、国全体の人口は約476万人（2017年3月統計局）である。民族は、欧州系（74%）、マオリ系（14.9%）、太平洋島嶼国系（7.4%）、アジア系（11.8%）、その他（1.7%）（2013年国勢調査）で、言語は英語、マオリ語、手話である。⁽²⁾

調査を実施したオークランドは、北島の北部に位置するニュージーランド最大の都市であり、かつては首都であった歴史がある。

2-2 ニュージーランドの幼児教育・保育の概要

ニュージーランドでは5歳の誕生日に小学校に入学するため、0歳から5歳になるまでが就学前教育となる。幼稚園、保育所の他に、プレイセンター（Playcentres）やコハンガ・レオ（Kohanga Reo）など、多種多様な保育形態が存在する。「プレイセンター」とは、1930年代に創られた保護者による自主運営の施設であり、プレイセンター協会の指導のもとで運営をしている。「コハンガ・レオ」は、先住民族マオリを対象とした幼児教育機関である。

教育・保育のカリキュラムは、1996年に教育省（Ministry of Education）から出された統一カリキュラムである「テ・ファリキ（Te-Whariki）」をもとに一本化されている。「テ・ファリキ」とはマオリ語で織物を意味し、4つの原理「Empowerment（エンパワーメント）」「Holistic Development（全体としての発展）」「Family and Community（家族と地域社会）」「Relationships（関係）」の4つを縦糸、5つの要素「Belongings（所属意識）」「Well-Being（健康）」「Exploration（探求）」「Communication（コミュニケーション）」「Contribution（貢献）」を横糸として織り上げた図で示されている。カリキュラムが統一されていることで、各家庭がどの保育形態を選択しても、教育の内容や質は変わらないということを実現化している。

3. ニュージーランド（オークランド）の現地調査

3-1 調査の概要

調査目的

ニュージーランドの保育環境や保育内容について、現地調査を通して具体的に把握する。

調査期間

平成29年3月28日（火）～4月6日（木）

調査方法

オークランド市内の幼稚園、保育所、プレイセンターを見学し、各施設の関係者から聞き取り調査を行った。現地コーディネーターを通じて各施設に調査目的及び内容の説明した上で依頼し、各責任者の承諾を得て調査を実施した。プライバシーの保護に配慮し、園児の写真撮影は行わないこととし、各施設関係者の承諾を得た範囲内で写真撮影を行った。

調査先施設

- ① A Kindergarten（公立幼稚園）
- ② B Kindergarten（公立幼稚園）
- ③ C CHILDCARE & EDUCATION（私立保育所）
- ④ D PlayCentre（プレイセンター）
- ⑤ E Playcentre（プレイセンター）
- ⑥ F Kohanga Reo（コハンガレオ）

3－2 調査結果

【調査1－公立幼稚園】

調査先：A Kindergarten

調査日：平成29年3月28日（火）

調査方法：施設の見学および職員へのインタビュー

1) 施設の概要

小学校に併設され、入学準備という位置付けで教育を行っている公立の幼稚園である。就学に向けて自分でできること、考えて行動することを教育目標としている。

3歳から小学校就学までの40人の園児に対し、4人の教員と補助教員という体制で、クラス担任はなく縦割りで教育を行っている。保育時間は8：30～14：30で、それぞれが好きな遊びを見つけて自由に遊ぶフリースタイルである。室内に仕切りはなく、室内外に遊びのコーナーが設置され、室内2名、園庭に2名の教員を配置し、それぞれに遊びを担当している。

教員は協会（オークランド キンダーガーデン アソシエーション）のプログラムであるワークショップ、セイフティ、応急処置、障害児保育などの研修を定期的に受け、スキルアップを図っている。

近年、保育時間の延長や、養護的なかわりを求める保護者のニーズから、デイケア（保育所）との違いや、幼稚園のあり方について議論されているとのことである。

2) 園内の環境および保育内容

① イートスペース

各家庭から持参したランチやスナックを食べる食事用のテーブルとイスがある。（写真1）モーニングティータイム（午前のおやつ）は10：00から一斉にとるが、ランチタイム（昼食）

は一斉ではなく、それぞれの子どものタイミングで11：45から12：15の間にとることになっている。モーニングティーはフルーツ、クラッカー、マフィンなど、ランチはサンドイッチ、ピザなどを各家庭から持参している。（写真2）



写真1 食事用のテーブル



写真2 持参したランチ・スナックなど

②室内の遊びのコーナー

室内には、ままごと・製作遊び・ねんど遊びなどの各コーナーが設置され、子どもがそれぞれに好きな遊びを選択できる環境となっている。

製作コーナーには、はさみ、テープ、えんぴつ、ステッキのりなどの道具や、様々な素材（刻んだ紙、モール、毛糸、ペットボトルのキャップなど）が自由に使えるように、種類豊富に用意されている。（写真3、写真4、写真5）素材を接着する道具であるグルーガンはコンセントが入った状態でテーブルの上に置かれている。（写真6）また、製作用のテーブルとは別に、ねんど遊びのテーブルが置かれ、その傍にはねんど遊びに使う道具を入れたスタンドが置かれている。（写真7）

ままごとのコーナーは、ベットやテーブルなどの家具や生活道具が十分に用意されていて、家庭をイメージし、ごっこ遊びが楽しめるスペースとなっている。（写真8）



写真3 製作の道具スタンド



写真4 製作用の材料



写真5 製作テーブル



写真6 グルーガン



写真7 ねんど遊びテーブル



写真8 ままごとコーナー

③テラスの遊びスペース

園庭に通じるテラスに遊びのコーナーが設置されている。絨毯敷きのスペース、イスとテーブルのスペースがあり、それぞれの遊びがしやすいようにコーナーを分けている。レールのおもちゃ、ブロック遊び、お絵かきスタンドなどがあり、ソファでくつろげるスペースもある。(写真9、写真10、写真11)



写真9 レールのおもちゃ



写真10 ブロック



写真11 お絵描きスタンド

④園庭

園庭はフェンスで囲まれているが、フェンスの周りにたくさんの植物が植えられ、緑豊かで開放的な雰囲気である。体を動かして遊ぶ遊具、砂遊びや水遊び、木工遊びなどの様々な遊びのコーナーが設置されている。(写真12、写真13、写真14)

本物のハンマーやのこぎりを使用して木工遊びができるように準備されていたり、大きなたらいに水が入れてあるなど、ダイナミックに遊びが展開できるように環境が設定されている。遊具の周りにはウッドチップが敷かれ、子どもの様子は各遊びのコーナーの担当教員が注意深く見守るなど、安全面に配慮している。遊具の周りにウッドチップやラバーを敷くことは国の規定である。



写真12 園庭の遊具



写真13 砂場



写真14 木工道具の保管倉庫

調査先：B Kindergarten

調査日：平成29年3月30日（木）

調査方法：施設の見学および職員へのインタビュー

1) 施設の概要

小学校に隣接した公立の幼稚園である。在籍は40人であるが、視察した日は29人の園児が出席していた。クラスはなく、全園児と一緒に過ごす縦割り保育である。

2）園内の環境および保育内容

①室内・テラスの遊びのコーナー

室内には、ままごとコーナー、パペットの舞台などの遊びのコーナーが設置され、好きな遊びを選択できるようになっている。（写真15、写真16、写真17）

テラスには、絵を描くスタンドやグルーガンが置かれ、明るい日差しの下で、開放的に造形活動ができる環境である。（写真18、写真19）



写真15 ままごとコーナー



写真16 パペットの舞台



写真17 三面鏡



写真18 お絵描きスタンド



写真19 グルーガン

②園庭

園庭にはマオリ文化を象徴した遊具が複数設置され、遊びの中で自然にマオリの文化に触れる環境となっている。（写真20、写真21、写真22）



写真20 マオリの遊具①



写真21 マオリの遊具②



写真22 マオリの遊具③

【調査2－私立保育所】

調査先：C CHILDCARE & EDUCATION

調査日：平成29年3月30日（木）

調査方法：施設の見学および職員（日本人保育士）へのインタビュー

1) 施設の概要

0歳児（6か月）から5歳児が入所している私立の保育施設である。30～40%の保護者はフルタイム勤務であるが、保護者が就業していなくても入所は可能である。日本人保育士1名が在籍している。

2) 園内の環境および保育内容

乳児から受け入れる施設であり、乳児用のあそびのスペースやおむつ交換台が設置されている。乳児用のあそびのスペースの扉には、マオリのデザインが施されている。（写真23、写真24）

日本人保育士が在籍していることから、壁面には日本文化を伝える目的で、節分の飾りつけがされている。（写真25）



写真23 乳児のあそびのスペース



写真24 おむつ交換台



写真25 壁面飾り（節分）

【調査3ープレイセンター】

調査先：E PlayCentre

調査日：平成29年3月29日（水）

調査方法：施設の見学およびプレイセンター指導員と参加者へのインタビュー

1) 施設の概要

プレイセンターとは、保護者が保育者として協同で保育を行う場である。0歳から入学するまでの子どもと保護者が対象である。参加する保護者はプレイセンター協会の親教育プログラムを受講することが必須で、カリキュラムはレベル1からレベル6まであり、保護者が同じカリキュラムを受講することで一定の保育水準を維持している。また指導員が定期的に各プレイセンターを訪問し、指導を行っている。

プレイセンター間の交流も行われ、保護者が他のプレイセンターを見学し、情報交換をしたり、活動の参考にするなどしながら学び合いをしている。

Eプレイセンターは、月・水・木・金曜日の8：45～12：00に活動を行っている。登録数は38家族で、日本人の親子も参加している。保護者が交代で「その日の活動の責任者」となり活動の企画や準備を行うが、その他の保護者も協力して活動の援助や片づけを行っ

ている。

2) 園内の環境および保育内容

①室内の環境

室内の壁にナショナルカリキュラムの「テ・ファリキ」を掲示し、テ・ファリキに基づいた保育が行われている。(写真26)

遊びのスペースの他に、キッチンや乳児専用の部屋が設置されている。(写真27、写真28) 乳児専用の部屋にはベットがあり、睡眠をとることができる。部屋の入口の案内板は、英語とマオリ語の両方で表示がされている。また、パズルの棚にはマオリの伝統的なモチーフのパズルが複数あり、マオリの文化を取り入れた環境となっている。(写真29)

絵本のコーナーには大きなソファが置かれていたり、ハンモックチェアが吊るされていて、ゆったりと本が読めるスペースとなっている。(写真30)

3歳を過ぎると、幼稚園に通いながらプレイセンターを利用したいというニーズがあるため、毎週木曜日の午後は3歳以上の子どもを対象とした「STAR CLUB」(写真31)を開催し、小学校の教員資格を持つ外部講師によるセッションを行っている。



写真26 テファリキの掲示



写真27 キッチン



写真28 乳児用の部屋



写真29 マオリのパズル



写真30 絵本のコーナー



写真31 「STAR CLUB」のコーナー

②園庭の環境

園庭にある収納スペースには、絵の具や木工遊びの道具類や多くの材料が置かれ、造形遊びが楽しめる環境である。(写真32、写真33、写真34) 子どもは本物の金槌が使えるが、木工遊びをする際にはゴム長靴に履き替えるルールとなっている。(写真35) 造形遊びの他に、園庭には固定遊具や砂場、ウッディハウスなどが設置されている。(写真36、写真37)



写真32 絵の具収納



写真33 木工道具



写真34 木工遊び用廃材収納



写真35 木工遊び用ゴム長靴収納



写真36 ウディハウス



写真37 砂あそび道具

調査先：E PlayCentre

調査日：平成29年4月3日（月）・4月4日（火）

調査方法：施設の見学およびプレイセンター指導員と参加者へのインタビュー

1) 施設の概要

E プレイセンターは、月・火・水曜日の9：30～12：30に活動を行っている。10組の家族が登録し、子どもは13人で、プレイセンターの中では少人数のグループである。母親だけでなく、働く母親に代わり、祖母が参加している家庭もある。

2) 園内の環境および保育内容

①室内の環境

絵本のコーナー、乳児用のスペース、マオリのモチーフのパズルなど、D プレイセンターと同様の室内環境が作られている。(写真38、写真39、写真40)



写真38 絵本のコーナー

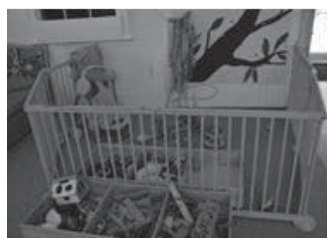


写真39 乳児のコーナー



写真40 パズル

②活動の内容

室内外の遊具や玩具で自由に遊んだり、その日のテーマである遊びに参加する保育内容である。主となる活動は当番の保護者が考え、準備を行っている。視察当日のテーマは、小麦粉ねんど遊び（写真41）や、色水遊び（写真42、写真43）であった。当番の保護者が用意した遊びに他の保護者もかかわっていたが、自分の子どもと遊ぶ姿が多く見られた。

プレイセンターの指導員によると、プレイセンターの目的である「保護者全体ですべての子どもの保育をする」という共同保育の体制がEプレイセンターにおいて十分に確立していない理由について、参加者数が少ないことや、低年齢の子どもが多いこと、新しい参加者が多く、学習中のプログラムのレベル（進度）が低いことなどである。そのため、指導員が積極的に活動にかかわり、保育のサポートや親教育を行っている。保護者主体の保育の場であるプレイセンターにおいても、保育の質が保てるように専門家によるサポートや指導が行われている。



写真41 小麦粉ねんど



写真42 色水遊び



写真43 色水の氷

【調査4－コハンガレオ】

調査先：F Kohanga Reo

調査日：平成29年4月3日（月）

調査方法：施設の見学および保育士へのインタビュー

1) 施設の概要

コハンガレオとは、マオリ人の子どもの就学前教育施設であり、マオリ文化の継承を目的としてマオリ語で保育が行われている。Fコハンガレオの一日の流れは、8：00～8：30の間に登園し、10：00～モーニングティ、11：30～12：00にランチ、15：00～15：30に降園である。視察時は14人の子どもを4人の保育士で保育をしていたが、6月には園児が26人になり、保育者は5人となる予定である。2歳以下の子ども4人に対して保育者が一人、2歳以上は6人に対して保育者一人が基準となっている。この基準はニュージーランドの幼児教育機関に準じている。

2) 園内の環境および保育内容

①園内の環境

遊びや生活のスペース、園庭などの保育環境は、他のニュージーランドの保育施設と大差

はないが、(写真44、写真45、写真46) マオリの文化や言語の継承を主な目的としているため、掲示物がすべてマオリ語で表示されているという特徴的がある。(写真47、写真48、写真49)



写真44 遊びスペース



写真45 おむつ交換・シャワー室



写真46 園庭の遊具

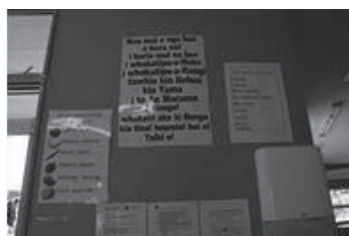


写真47 マオリ語の掲示物①



写真48 マオリ語の掲示物②



写真49 マオリ語の掲示物③

②保育の内容

園児が作った作品が壁面に飾られている。(写真53、写真54) その作品から、保育者が活動を設定し、全員が同じ材料を使い、同じ手順で作品を作っていることが分かる。

5歳になるとマオリ人学校に入学するため、4歳頃には学習ノートを使い、数字や文字を書く練習を保育の中に取り入れている。(写真55) また、降園前の年齢別クラスの時間には、日本の手遊びのようにリズムに合わせて手を動かす遊びを一齐にする姿が見られた。

Fコハンガレオでは、保育者が設定した活動に子どもが取り組む指導法が取り入れられ、マオリ文化の継承や文字や数字の学習といった就学に向けての教育が重視された保育内容となっている。マオリ人の子どものみを対象としているため、他の就学前教育とは異なる保育内容である。



写真53 園児の作品①



写真54 園児の作品②



写真55 学習ノートの説明をする保育士

4. まとめ

オークランドの就学前教育施設の現地視察および聞き取り調査を通して、具体的な保育の状況について情報収集を行った。

ニュージーランドには多様な保育形態があるが、視察先の幼稚園、保育所、プレイセンターのどの幼児教育・保育機関においても、ナショナルカリキュラム「テ・ファリキ」をもとにした保育が行われていた。また、マオリの文化の継承や多文化共生（マルチカルチャー）のカリキュラムを積極的に取り入れて実践していることが分かった。

日本の保育所保育指針（平成29年3月31日告示）には、「3歳以上児の保育に関するねらい及び内容」に、「文化や伝統に親しむ際には、正月や節句など我が国の伝統的な行事、国歌、唱歌、わらべうたや我が国の伝統的な遊びに親しんだり、異なる文化に触れる活動に親しんだりすることを通じて、社会とのつながりの意識や国際理解の意識の芽生えなどが養われるようにすること。」と示されているが、「異文化の尊重」が明確化されているとは言えない。日本の教育・保育現場においては、他国籍の子どもや保護者が日本の言葉や生活文化に適応することに重点が置かれ、多文化共生保育が十分に実践されているとは言い難いのが現状である。在留外国人が増加している日本において⁽³⁾、ニュージーランドの多文化共生保育は課題解決のヒントになるであろうと考える。

また、プレイセンターにおいては、プレイセンター協会独自の親教育プログラムがあり、参加者は同じカリキュラムを学ぶことができ、地域性や参加者の背景によるグループごとの特色はあるものの、どのプレイセンターも一定の保育の質を保てるシステムとなっている。就園時の低年齢化が進む日本において、親として成長する機会をどのように作っていくかが今後の課題であり、ニュージーランドの親教育の取り組みは、その課題解決のヒントになると考える。

しかし、今回の視察での聞き取り調査を通して、ニュージーランドにおいても家庭の状況や保護者の多様なニーズにより、いくつかの課題があることが分かった。今後どのようにニュージーランドの保育が変容していくか、子育て家庭の状況や教育の質に目を向けながら、ニュージーランドの就学前教育の動向について調査を継続したいと考える。

注釈

- (1) 国土交通省国土政策局ホームページ「各国の国土政策の概要 ニュージーランド」より引用

<http://www.mlit.go.jp/kokudokeikaku/international/spw/general/newzealand/index.html>（2018年1月閲覧）

- (2) 外務省ホームページ「ニュージーランド基礎データ」より引用

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/nz/data.html#01>（2018年1月閲覧）

- (3) 法務省ホームページ「平成29年6月末現在における在留外国人数について」参照

http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04_00068.html

平成29年6月末の在留外国人数は247万1,458人で、前年末に比べ8万8,636人の増加（2018年1月閲覧）

引用・参考文献

ニュージーランド学会、東北公益文化大学ニュージーランド研究所編 『「小さな大国」ニュージーランドの教えるもの』2012，論創社

七木田敦、ジュディス・ダンカン編著 『「子育て先進国」ニュージーランドの保育』2015，福村出版

山岡ティ 『多文化子育て 海外の園生活・幼児教育と日本の現状』2007，学習研究社

研究ノート

社会におけるピアノ奏者の在り方

伊藤 真理子 倉田 弓 堀内 恵理子 伊神 千愛

Important Roles of Pianists and Piano Teachers in Our Society

Mariko Ito, Yumi Kurata, Eriko Horiuchi, Chie Igami

Abstract

We music faculty engage in teaching piano to people in various age brackets other than giving lessons at a junior college. We also have performance activities in varied places.

To examine how we can contribute to our communities as being pianists and/or piano teachers, we cited many examples of jobs and opportunities that involved piano performances. Then we carried out questionnaire surveys to people whose who concerned. From the answers of the opinionnaires we found out that there are variety of people of women and men of all ages enjoy the piano; some would love to learn the piano, some love having accompaniments on the piano, and some others respect piano accompanists as wonderful partners for vocalists, instrumentalists, and any other musicians. A lot of people feel that sounds of the piano make their lives richer and soothe their souls and/or spirits.

We also sent out some other questionnaires to pianists and piano teachers at and besides our junior college about meanings of our existence in the society. To our great delight, these investigations tell us that we are certainly able to contribute to our communities. Moreover, we can imagine the possibilities what we could do better in the future to do so. To make it happen we need to have sense of purposes and duties with wide perspectives. We would always love to contribute to the society using our knowledge and expertise that we have acquired.

キーワード：ピアノ奏者、ピアノ講師、演奏と指導、目的意識、社会貢献

要約

私達本学幼児教育学科のピアノ講師は、本学での授業の他に学外で幅広い年齢層のピアノ指導に携わる他、様々な場所で各種演奏活動を行っている。私達はピアノ演奏、指導がどの

様に社会に貢献できているのかを検証すべく、社会の中でピアノが関わっている現場を1つ1つ挙げていき、それらの現場に関わりのある人達にアンケートを実施した。

その結果、乳幼児から高齢者まで幅広い年齢層のピアノを学習したい人達、豊かな音楽ライフの為にピアノ伴奏を必要とする人達、ピアノ奏者をパートナーと考えている声楽家や楽器奏者や幅広いジャンルのパフォーマー達、そしてピアノの音色によって癒しや潤いを受けている人達の存在が明らかとなった。

また本学や本学以外のピアノ講師達の社会的意識も調査し、これからのピアノ奏者（指導者）の在り方を考えたところ、私達が現状で社会に貢献できる事の確認や今後の可能性を模索する事ができた。

私達は個人主義の狭い視野ではなく、社会的な広い視野での目的意識や使命感をもち、これまでに培ってきた音楽の技術や専門知識を惜しみなく社会に還元していく事を提唱する。

1. はじめに

本学幼児教育学科のピアノ講師達は、本学での授業の他に学外で幅広い年齢層のピアノ指導に携わる他、様々な場所で奏者として各種演奏活動を行っている。その中で、ピアノは社会において様々な状況や用途で生かされていると実感している。

今回テーマとする「奏者」には広く「ピアノを演奏する人」という意味を持たせている。特定のプロフェッショナルのみを指し示さない。「奏者の在り方」は「奏者がどのような心構えでピアノ演奏に関わる活動に臨むか」という姿勢も含め捉えていく。総じて「社会の中でピアノという楽器がどう生かされているか、どんな役割と可能性をもっているか」という点に着目していく。

実際の社会においてピアノ奏者は音楽と共に在るのだが、その「音楽」について具体的に例を挙げるとかなり多種多様な形が社会の中にある事が分かる。一般的に音楽と呼ばれるものの種別には、国内だけでも、クラシック、J-pop、歌謡曲、演歌、民謡、邦楽、ジャズ、シャンソン、童謡唱歌…と挙げられるが、例えば、映画やTVドラマやアニメの主題歌や挿入歌も分類に含み、細かく数えると実に100種類以上にもなる。国内で一般に聴かれたり演奏したりされている音楽の種類がそれ程たくさんあるという事に改めて驚かされる。

そして音楽の種別だけでなく、現存している楽器の数も大変多く、例えば鍵盤楽器とされる物では10種類以上、弦楽器や管楽器でそれぞれ50種類以上、打楽器になると数え切れない位存在している。それだけ多種多様な楽器がありながら、現在、私達が学習として集団で音楽と親しみを持つ環境と言える、幼・保育園から学校、児童館等の各種施設まで、保育、教育の現場で最も利用されている楽器はピアノ（電子ピアノを含む）である。

それにはピアノには以下の長所があるからと思われる。

- ・ ピアノはメロディ（旋律）とハーモニー（伴奏）が1人で同時に演奏できる。
- ・ 88鍵盤も有り7オクターブという広い音域をもつ楽器は他に無い。
- ・ いかなる調性にも対応できる。

- ・そして弾きながら歌える為、弾き歌い、歌唱の伴奏に向いている。
- ・他の楽器の伴奏や合奏にも適している。
- ・市販されている童謡唱歌や子供向けの歌唱の楽譜のほとんどはピアノ伴奏で書かれている。
- ・蓋を開ければすぐに鍵盤が出てきて、後片付けは蓋を閉めるだけである。
- ・教諭のみならず、園児達、生徒達でもすぐに音が出せて楽しめたり、演奏できたりする。

また現在、ピアノ以前に、幼児教育に「音楽」は欠かせないという意識は社会一般にすっかり定着し、一般の学習と同じく、始めるのは早ければ早い程良いという考え方と同じ位、周知の事実として浸透していると思われる。私達が考える、音楽が乳幼児期教育にもたらす効果を、歴史上で先駆的思考家・哲学者・心理学者達が、各々の著書や学習理論において述べている。ドロシー・T・マクドナルド & ジェーン・M・サイモンズ共著「音楽的成長と発達～誕生から6歳まで～」の第1章より以下の部分を引用したい。

『多くの教育者達が、音楽の役割を、認知的な技能を教えるための有力な道具として考えている。』『教育における音楽の最も重要な役割はおそらく、それが子どもの生活の美的な要素に加えることができるもの、すなわち、音楽が伝達することのできる感情や印象やイメージに対する感受性を発達させることである。』『イマジネーションを刺激し、情動を揺さぶる音楽的な諸経験は、教育による発達のそうした局面に独自の働きかけをすることができるのである。』

多種多様な種別の音楽や楽器が溢れる現在の社会でも、教育の現場でピアノは実用的な楽器であり、また音楽そのものも価値のあるものとして社会に位置付けられている。そして本学の様に幼児教育学科をもつ大学、短期大学をはじめ、音楽大学、芸術大学の音楽学部等の音楽専門機関から、個人で経営する音楽教室まで、クラシック音楽を教材とした指導を行い、学習者が音楽的技術を培っている。ピアノ奏者たちがピアノの奏法を学び技術を培う基盤となっているのはクラシック音楽だが、それはピアノが西洋のクラシック音楽を演奏する事で発達を遂げてきた楽器の一つだからである。ピアノ奏者たちが培われた音楽的技術を社会の中で生かしていく事ができれば大変意義があり、常にその可能性を模索し広げていけるのが理想であろう。

それでは、教育現場のみならず、一般社会において現在ピアノという楽器はどの様に生かされ、奏者達はどの様に活動しているのか。私達講師が実感している生かされ方をまず明らかにし、奏者の活動を確認していく。本文前半では、「a. 社会の中でピアノと共に在る活動」を紹介する。続いて本文後半では「b. ピアノ指導、ピアノを使った教育、その他」について紹介する。

また社会におけるピアノの生かされ方を調査すべくアンケートを実施した。アンケートではピアノと関わる仕事や活動をしている人達に日頃から感じているピアノや音楽に対する所感を自由に記述してもらった。個人的な所感の中から、社会の中のピアノがどのように在るか考察し、奏者の在り方について提唱する。

2. 本文

a. 社会の中でピアノと共に在る活動

① 演奏分類	
・社会の中でピアノの演奏機会はいろいろとあるが、主に自主演奏と依頼演奏の2つがある(以下、プロフェッショナルかアマチュアかは問わない) ・自主演奏は、個人、又は自分が属する団体において自主的に、公演(一般的に60分～120分程度のコンサート、休憩を挟む事も多い)を企画、開催する事である。俗に「手打ち公演」と言われている ・依頼演奏は、例えば地域の市民会館や小文化劇場等のホールや、地域の学校をはじめ、公共、民間の各種団体から依頼され演奏する場合である。公演としての場合と、この時間に、この場所で、この様な傾向の曲を演奏してくださいと細かく依頼される場合もある。その中にはBGM(バックグラウンドミュージック)も含まれる。依頼演奏の分類には、国海外の著名な演奏家を招聘して開催される音楽祭もある。この場合、招聘した演奏家によるコンサートだけではなく、演奏家によるマスタークラス(公開レッスン)や、受講生との共演が企画される場合もある ・ピアノ学習者による発表会もあり、全国のピアノ講師の元で盛んに開催されている。趣味の集まりとして、ピアノ同好会、ピアノサークルというのも全国に多く存在している ・またコンクールやコンテストという演奏の力試しの場もある。申し込んだ受験者達の演奏を、審査員が審査し、入賞者を選出したり講評したりする。現在は国内外で様々な種類のコンクールが開催されており、年齢制限が無く、学生から年配者まで幅広く受験できるものも増えてきている	

① 演奏場所(会場)		
会館	各地域の市民会館、文化小劇場 ほか。クラシック系のコンサートはここが1番多い。ホールでなく、同じ敷地のロビーにピアノを置き開催するロビーコンサートもある。観客にとってはより至近距離にて生演奏を味わえる等のメリットがある	(参考写真 P-①)
各種学校	幼稚園、保育園、小学校、中学校、高校、短期大学、大学など。それぞれ園や学校の予算で、園児や学生達に演劇、もしくは演奏会を鑑賞させる。学校の体育館にはグランドピアノが常設してある為、それを生かした公演ができる 【例1】一人芝居とクラリネットやピアノが共演する「走れ! メロス」公演という作品があり、年に数回、中学校から依頼を受け公演を行っている。基本的に約90分の公演で、内訳はオープニング演奏5分、本編の前に太宰治についての解説リーディング25分、ワークショップ15分。休憩10分を挟んで、本編40分という配分である。 【例2】中学校公演で吹奏楽団15名とピアノとの共演でG. ガーシュインの「ラブソディー・イン・ブルー」(約20分)を演奏した	(参考写真 P-②)
公民館 児童館 図書館など	【例】成人講座として講演の代わりにサキソフォーン(サクソ)とピアノで、曲の解説や楽器紹介をしながら約100分のコンサートを行った	
医療・介護・福祉施設	病院、各種介護・支援施設、ホスピス 【例】毎月の様に入居者に演奏を聴かせる企画をしている老人介護施設で、電子ピアノではあったが、オーボエとピアノで約60分のコンサートを行った。プログラムは「懐かしの歌謡曲」中心だった。施設入居者約30名が聴き、リクエストも受け付けた。曲によっては自発的に手拍子をしながら口ずさんだ入居者もいた	
個人ホール 音楽サロン 音楽スタジオ	多くは個人宅の隣に併設されていて、舞台と客席が同じ高さ、つまり平場になっている。グランドピアノが備えてあり、30～50人程の観客が入る事ができる。月に1回程、コンサートを開催している所もある	【アンケート実施】 A-①② (参考写真 P-③④)
結婚式場 パーティー会場飲食店	【例】結婚式場やパーティー会場ではBGMの生演奏も依頼される事が多い。飲食店では例えばカフェではケーキセット付き、ホテルだとランチやディナー、デザートセット付き、料亭では食事付きで開催するコンサートが多い。飲食という付加価値で更に観客を引き付けている	
レジャー施設	健康センター、温泉旅館、ショッピングモール、デパートなど	(参考写真 P-⑤)

① 演奏形態		
独奏	ピアノソロと言う。1人で演奏する。ピアノソロ曲はジャンルに関わらず非常に多い。プログラムの全てがピアノソロ演奏の「ピアノリサイタル」があるが、他の奏者と共演するコンサートの中でピアノソロ演奏を挟む場合もある	
ピアノ連弾、 ピアノデュオ (2台ピアノ)	連弾は1台のピアノに2人が並んで腰掛けて合計4手で演奏する。ピアノデュオは2台のピアノを使用して演奏する。いずれも両奏者が息を合わせなくてはならないが、音数が増えて厚みが増す為、華やかな演奏効果がもたらされる。近年、ピアノ連弾やピアノデュオによるリサイタルやコンサートも増えつつある	
声楽や合唱との共演 (歌の伴奏)	声楽家も合唱もアカペラという場合を除いては、ほとんどピアノ伴奏で演奏する。合唱団の場合は指揮者がおり、舞台の真ん中に立ち、伴奏ピアノは向かって左側、それらの奥に合唱団がひな壇等を使い列を成して歌うという形である	(参考写真 P－⑥⑦)
他の楽器の伴奏 室内楽共演 (弦楽器、 管楽器、 打楽器など)	オーケストラで使用されているヴァイオリン、ビオラ、チェロから始まり、フルート、オーボエ、クラリネット等の木管楽器からトランペット、ホルン、トロンボーン等の金管楽器、そしてパーカッション、マリンバ等の打楽器がソロ演奏する時、ピアノが伴奏として共演する場合である。もしくはピアノを含む3重奏、4重奏、5重奏とある。この場合は「伴奏」とは言わず「室内楽の共演」とする。ヴァイオリン、チェロ、ピアノの3重奏。クラリネット、ホルン、ピアノの3重奏など。どちらかと言うとジャズやポピュラーで使用されていると思われるがちなサクソフォーン(サックス)も、クラシカルサクソフォーンとして、ピアノ伴奏のオリジナル曲や編曲楽譜を使用して活動している。本来オーケストラや合奏団という人数が多い楽団で演奏する部分を、ピアノ1台もしくは2台で演奏できる様に編曲して演奏する事もある。88鍵もあり、7オクターブもの音域をもつピアノだから可能である	【アンケート実施】 A－③④ (参考写真 P－⑧⑨)
ピアノ協奏曲	ソリストとして指揮者が率いるオーケストラ(管弦楽団)と共演する。オーケストラの奏者の人数は小編成で20人位～最大60人程度である。作品の多くが楽章形式になっており、全楽章で演奏時間20～45分の作品がある。オーケストラではなく吹奏楽団と共演する作品もある。その他、協奏曲のソリストとしてではなく、管弦楽曲にピアノパートが含まれている作品の場合はオーケストラや吹奏楽団の一員として演奏する場合もある	
弾き歌い	保育者養成を目指す幼児教育学科においては1番関連している項目である。ピアノ伴奏を弾きながら自ら歌を歌う。幼稚園、保育園での童謡唱歌を園児達と歌う他、コンサートの中で観客と歌うコーナーを設けたりする時にピアノ奏者が弾き歌いをする場合もある。その場合はピアノ奏者はブームスタンドマイクを使い、弾きながら歌う声を拡声させる	
朗読 絵本読み聴かせ との共演	朗読や絵本の読み聴かせの合間、もしくは音量を小さめにしながら読みと被らせてピアノの生演奏を入れる。既存の曲、又はその為に作曲された曲目を演奏する 【例】 童話「マッチ売りの少女」を読み聴かせながら、ピアノ奏者が電子ピアノにて生演奏を付けた。曲は朗読者自身がお話のそれぞれの場面に合わせて作曲した。	(参考写真 P－⑩)
演劇 ミュージカルとの共演	演劇の合間に音楽を入れたり、演奏者が演奏の合間に朗読、又は芝居をしたりする場合もある。これらをシアターピースと呼ぶ 【例】 O.ヘンリーの短編物語に、作曲家に委嘱して書き下ろした楽曲を挿入、演奏者が朗読 舞台俳優が一人芝居で演じ、芝居の合間、もしくは挿入歌を歌う際にピアノで生演奏を付けたり、またミュージカルの伴奏にピアノが生演奏で参加する場合もある	(参考写真 P－⑪) 【アンケート実施】 A－⑤⑥
舞踊との共演	クラシックバレエ、モダンバレエ、日本舞踊、バロック&ルネッサンスダンス(14～18世紀、ヨーロッパでの宮廷で、王様の前で貴族達が古楽器の生演奏で踊ったダンス) 【例】 日本舞踊との共演では既存のクラシック曲やポピュラー曲をピアノソロやサックスとのデュオで演奏し、それに合わせてオリジナルの創作舞踊を披露した	

④ 演奏曲(選曲)	
・自主公演は基本的に自分達主導で、自分達がやりたい曲を並べてプログラムとするやり方であるが、上記のような依頼公演、依頼演奏では一体どんな曲を求められるのか。それはその演奏会や演奏機会のテーマやコンセプト、観客の年齢層等によって様々であるが、以前から一般の観客はクラシック曲だけのプログラムは、例え有名な曲を取り揃えても退屈と思われる傾向がある。その為、J-pop、映画やTVドラマやアニメの主題歌や挿入歌、歌謡曲、演歌、シャンソン、童謡唱歌等の曲を盛り込む事も多い。観客もそれぞれの状況に応じて老若男女、千差万別、個人差も有り、選曲は難しい。だが観客が「知って、聞き覚えがありそう」な曲が有利には違いない ・そういった曲を楽器で演奏する時、楽器編成によっては楽譜が市販されていない場合がある。その様な場合には奏者が自分で編曲して楽譜を作成する。最近では観客が聴くだけでなく、例えば演奏に合わせて一緒に手拍子をさせたり歌わせたり、演奏に参加させる「観客参加型」の曲を取り入れる傾向が強くなっている 【例】あるコンサートでは、プログラムのクラシック曲が大半だったが、プログラムの最後にお馴染みの季節の歌6曲をメドレーに編曲し、観客と一緒に歌ってもらった ・コンサートにおいて選曲は重要である。奏者のコンサートに対する姿勢や考えが現れる部分だからである。やりたい曲を羅列しただけでは、いくら聴衆好みの曲ばかりでも感動が薄くなる事がある。プログラムに何かテーマとなるものが有り、選曲に対して聴衆が納得出来る事が望ましい	

b. 続いて、ピアノ指導、ピアノを使った教育、その他について紹介する。

乳幼児(リトミック)	親子の触れ合いと音楽による情操教育を合わせ持った目的としたカリキュラムで展開するリトミックが、子育て支援センターや児童館などの福祉施設で行われているほか、未就園児の習い事としてカルチャーセンターや音楽スタジオなどで開講している。その中で音楽やピアノに親しみを持った子どもは、ピアノのグルーブレッスンや個人レッスンに進んでいく事も多い。ピアノのグルーブレッスンや個人レッスンは、就園し集団生活に慣れた、3~5歳頃に始める子が多い	【アンケート実施】 A-⑦⑧⑨⑩ (参考写真 P-⑫)
学生	全体に男子より女子が多い。進捗は個人差がある。小学生高学年から学習塾、中学生以上になると更に学校の部活や定期テストが有り、レッスンの為の練習時間を取り辛くなるのが悩みである。受験生になるとレッスンを止めたり休みに入ったりする生徒が多い。中学生、高校生は年に1回開催される学校の合唱コンクールの伴奏曲もレッスンしている。学生達もなかなか多忙である	
社会人(主婦も含む)	やはり女性が多い。会社員、主婦、医者、保育士、看護師、学校の先生等。初心者から上級者までレベルは様々である。学生時代に習っていて、就職、出産等で空白があった後、再びレッスンを受けていたり、ピアノ講師が更なる研鑽の為にレッスンを受けていたりするケースがある。60歳以上の高齢者が習っている例もあり、それは後の項目で紹介する	
音楽療法	近年注目されている「音楽療法」にもピアノが使用されており、効果を上げている。音楽療法には、音楽を聴く、という事が中心の受動的音楽療法(リラククス効果、癒し効果、回想を促す効果等)と、歌唱活動や、打楽器等を演奏する能動的音楽療法(言語機能や身体機能の改善や向上等の効果)があるが、ピアノは、そのどちらの音楽療法においても使用される楽器のひとつである。美しい音でピアノを奏でる事は、聴く人の情緒にいい影響を与える。また、歌唱活動の際、歌いやすい音域に移調できたり、歌いやすい速さに合わせて演奏できたりする、という利点がある	
高齢者とピアノ	近い将来、超高齢化社会を迎えると言われている現代日本社会。少子高齢化によって年金問題、医療・介護問題等、問題が深刻化する事が予想されている。平均寿命から考えると60歳の定年を迎えてから約20年ある。2017年の統計では100歳を越える人は全国で6万7千人を越えている。そんな社会が到来しているが、ただ長く生きるだけでなく人生を楽しみ生き生きと謳歌する為の「生き甲斐」も必要であろう。高齢者がピアノと触れ合う機会は、ピアノのレッスンや合唱団の練習が多い	【アンケート実施】 A-⑪⑫
スタジオミュージシャン	CD等の作成に際して、レーコーディングスタジオでピアノを演奏しレーコーディングする。DTMでの楽曲制作で、MIDIは楽器の音色が変えられる他、打楽器の入力も出来るため、鍵盤を弾く事が出来る人間がいれば鍵盤一つで様々なジャンルの楽曲を作成する事が可能である。	

【参考写真】

(P－①)



(P－②)



(P－③)



(P－④)



(P－⑤)



(P－⑥)



(P-⑦)



(P-⑧)



(P-⑨)



(P-⑩)



(P-⑪)



(P-⑫)



3. アンケート調査

- (1) 対象 3- I. ピアノが使われる活動に参加したり主催したりしている乳幼児から高齢者38名
3- II. ピアノ演奏者やピアノ指導者などピアノを使った仕事をしている女性21名
- (2) 時期 2017年12月～2018年1月
- (3) 方法 ピアノに対する所感等をアンケート用紙に自由記述してもらった
- (4) 結果

3- I. ピアノが使われる活動に参加したり主催したりしている乳幼児から高齢者38名に聞いた

「ピアノとの活動の中で感じるピアノや音楽に対する所感」の自由記述

A-① 音楽ホール経営者30代男性
ピアノは心を豊かにする事が出来、自由な発想、様々な考え方を見つける事が出来る楽器。足と両手を使うことによる脳の活性。喜怒哀楽を表現し、聴いてくださる方の心に届く楽器。単独演奏は勿論、合唱等の伴奏、他楽器とも合わせられるので、全ての方に関われる楽器であり、音楽の基礎
A-② 音楽スタジオ経営者30代女性
音域が広くオーケストラのように表現豊かに演奏できる。合唱には欠かせない。脇役になったり主役になったり自由自在な楽器。ピアニストと一緒に呼吸しながら歌えるとより良いものができる。人の心を癒す「力」がある。心へ影響を与えるものの中心
A-③ 木管楽器奏者50代男性
ピアノは良きパートナー
A-④ 金管楽器奏者50代男性
ピアノは器楽アンサンブルの中で、音楽の中心になる不可欠な鍵盤楽器として音楽史上、重要なレパートリーを占めている
A-⑤ 舞台役者30代男性
ピアノ奏者は、舞台を構成する上で重要な共演者
A-⑥ 元宝塚歌劇団40代女性2名
・伴奏中心に、様々な曲を自由にアレンジできるところが最大の魅力
・ピアノの演奏があるとより安心し、相乗効果があり、深みを増してくれる存在
A-⑦ 未就園児親子リトミック教室の生徒7名の保護者(自分の子どもの様子)
・子どもがピアノの音に触れ、様々な音に興味を持ち、音と共に身体を動かす楽しさを学んでいる
・ピアノや音楽が人生の楽しみとして側にあり生活の礎になるといい
・リトミックのピアノはTVやCDから流れてくる音楽より音階やリズムが明解で、習う前より家で1音1音しっかりピアノを弾くようになった
・家にピアノがあるので外でのピアノを使った活動へ興味を持ち易いし、真似からの覚えが早い。実際に触れられることが興味、音への関心に大きく繋がっている
・ピアノは知育
・音楽を聴いたりピアノを弾いたりすることで集中力が見についている。ポピュラーな楽器なので、自宅や教室以外でも見かける度興味が強まっている
・姉と一緒に笑顔で楽しそうに鍵盤に触れている
A-⑧ 子育て支援センター・児童館を利用している乳幼児9名の保護者(自分の子どもの様子)
・自動演奏を聴いて踊っている。それによって自然と歌を覚えている
・ピアノは鍵盤を押すだけで簡単に音が出る
・指先を使うのは良いのでピアノを習わせたい。やっぱり音楽は良い
・親子のコミュニケーション、遊び

・ピアノの音を聞くと自然に身体を動かしたり大きな声で歌ったりする。いつもよりのびのびと楽しそうにしている
・音の強弱、テンポの速い遅い、高い低い等、身体を使って感じる事が出来ている
・白い鍵盤だけしか分からなかったのが黒い鍵盤もあるのも分かるようになって成長を感じた
・ピアノの音を聴くとぐずったりしなくなる
・音や音楽に興味を持てる。CD 等より、早さや強弱をコントロール出来るので、楽しい雰囲気でも活動させやすい
A－⑨ 子育て支援センター・児童館施設長 2 名
・0～2歳児の活動の場面で「さあ、今から始まるよ」の合図として幼児達に活動に集中させるきっかけとしてピアノを使っている。幼児達は始まる前までバタバタ走り回っていたりするが、ピアノの音が鳴り始めると静かにお母さんの近くで待機できるようになった。自身の経験から CD などよりピアノの生の音が心に響くと思うからピアノを活用することはとても良いと思う
・楽器が奏でる情感豊かな音が情操教育に果たす役割が大きいのはよく分かっている。生演奏で指導して頂ける先生に感謝
A－⑩ 子育て支援センター・児童館施設職員 2 名
・CD 等の音より生のピアノの音色の方が頭や心にストレートに響くと思う
・アカペラと比べて前奏がある事により歌の始まりが分かりやすい。CD の伴奏(カラオケ)と比べて、生身の子供の動きに合わせて展開しやすい
A－⑪ 高齢者ピアノ学習者 8 名
・子どもの頃習い事で1番好きだったが成長と共に練習時間が無くなり辞めてしまった。大人になりもう一度習い始めた今、ピアノを弾ける時間は自分だけの為に使える大切な時間
・楽器の練習は騒音になることがあるが、電子ピアノの練習はヘッドホンが出来てそれを気にしなくてよいので有難い。昔学校で習った曲をクラシックの手付けの曲として練習するのは、難しいが身が入る
・以前より音楽が好きで CD やラジオを聴いていたが、ピアノを習うようになって一層興味が出た
・ピアノの音が好きで楽しく習っている。1曲弾けるようになった時のことを思い描いて練習している
・ピアノの音は弾く人によって、技術の違いだけではなく演奏者の内面的な違いで音色が違うという事を知り、自分も心に響くような音を弾くことが出来るように、技術面と内面的な事に気を配り練習していこうと思うようになった
・初めてピアノを習いとても脳が活性化された。日々の練習も毎日の生活に潤いが出来嬉しい。若いころに慣れ親しんだ曲が自分で演奏できることに感激する
・脳が活性化されることや音を楽しんだりすることで弾けなかった所が出来るようになるのが嬉しい
・ばけ防止のため家族に勧められ又、自分自身も音楽が大変好きで小さいころからピアノに憧れていて、全然弾けなかったのが弾けるようになり88歳の今とても嬉しくて幸せだ
A－⑫ 高齢者の合唱団 2 名
・合唱がきっかけでピアノが特に好きになった。自分の人生の最後に残るものは音楽だろうと思う
・ピアノは早さを整えてくれる点で貴重な音楽(表現)
・音楽は心の糧

3- II. ピアノ演奏者やピアノ指導者などピアノを使った仕事をしている女性21名に聞いた質問に対する自由記述

設問

- ① 指導も含めた「ピアノに関する活動」は社会の中でどのような役割や功績があるか
- ② 「社会に貢献する理想の在り方」という言葉を聞いた時に感じる事とは
- ③ 演奏・指導以外にもピアノに関する活動の中で力を入れている、力を入れていきたいと思っている事とは

1. ピアノ演奏者、自宅・大学ピアノ指導者(30代女性)
①老人ホームや病院やホスピスでのピアノ音楽はその曲目にもよるが、心癒やされる方が多くいる。また幼稚園や小学校でのピアノ演奏は、習い事の意欲に繋がり、このような公の場所の演奏が社会貢献に繋がると考える

②指導者としての理想は、日本の環境が芸術を育てることに目を向け、将来音楽で生きていくための働き場所が増えることで、指導者として子供に音楽を趣味にするだけではなく、音楽で生きていくための指導が出来れば指導者側も更に発展していくと考える。ピアノ奏者としては、演奏する場や機会を増やしクラシック音楽を馴染みやすいものにし、クラシック音楽をどんどん広めていくこと
2. 小学校音楽講師 (30代女性)
①子どもの成長を助ける、引き出す役割のひとつ
②教育においてのサポート。表現を導く手立て。自己表現の一つ。メッセージを発信する方法の一つ
③即興演奏
3. ピアノ演奏者、自宅・出張ピアノ指導者 (30代女性)
①演奏活動をするのは、音楽業界での新しい感性と演奏編曲スタイルを提示していく事で、日本の昔からある義業界内音楽の在り方を良くも悪くも見直し、更なる発展に寄与するため。指導者としては、特にこどもには思考力を身に付けさせ、物事を論理的、数学的に読み解いていく力を付けさせる。音楽を通して理系的論理的思考で構築検証再現することと、心や感性の充実をはかる
②演奏者は技術者であるという認識
③ライブ活動、レコーディング。自分にとって大きな収入源
4. 小学校音楽講師 (30代女性)
①子どもたちの感性や表現力を豊かにする
②まずピアノ奏者が自分の技術を、人々の感性を磨き表現力を豊かに出来る手段として使う事が出来るという事を認識する事が大切。ピアノ奏者は、人の心を突き動かし感動を与える事や、そういった感性や技術を育てる指導者として生かされることが理想
③子どもの無限の感受性や音楽性を引き出すことを念頭に合唱や合奏の伴奏をしている
5. 音楽経営者 (30代女性)
①音楽教室のボーカル講師をする際にピアノを用いる。ボーカル教室の生徒は年齢層が広く目的もそれぞれだが、身体から無駄な力を取り自分自身の体から出る声を大切にしたいので、カラオケ音源やマイクを使う以前に、歌いたい曲のテンポを落としたりキーを下げたりして生徒に合わせる時ピアノを使う。音程に不安のある生徒にはピアノに触れる事で視覚的効果を使ったり、小さな子どもにはピアノを弾かせたりしながら楽しくレッスン出来るよう工夫している。音楽を楽しみたい全ての人の不安を取り除きながら「好き」を増やしたい
②社会の中での演奏者や指導者のあり方にはたくさんの課題がある。著作権の問題もその一つ。表現することにも自由がままならない。鍵盤楽器を使って教えたり演奏したりすることに創意工夫が大事になる。また演奏者が学校に特別講師として、また地域に「大人音楽授業」として生演奏する場所をもっと増やして行くことで音楽のあり方ももっと変わっていくのではないかな
6. 中学・高等学校音楽講師 (30代女性)
①心の教育。感受性を感化させる。また人の生活を豊かにしていくもの
②音楽療法や被災した土地での音楽活動で自分も含め、人々の生きる糧にしていけること、勇気をもらうこと
③即興で伴奏と初見力
7. リトミック講師、大学ピアノ指導者 (30代女性)
①芸術文化の価値の普遍性を社会に知らしめ、人間の豊かさの追求や欲求を満たす役割
②パフォーマーとオーディエンスが一体となって芸術を高め合うのが理想。それには芸術文化の価値を積極的に認め活用する社会の理解が必要。資本主義社会においては対価としての賃金も順当に支払われたい。社会にそれらの意識を落とし入れる為に、教育や芸術産業や地域福祉の現場で積極的なパフォーマーのアプローチが必要
③幼少期に音楽を楽しめるものと感じる機会を作ること
8. ピアノ演奏家、自宅・出張ピアノ指導者、高校音楽講師 (30代女性)
①対象者が子供であれば青少年の文化教育の基盤作りの担い手であり、対象者が社会人であれば人生を豊かにするための文化貢献の意がある
②音楽、ピアノというのは、人間が最低限息をして生きていくために必要か否かと言われるれば後者かもしれない。しかし、憲法、生存権で定められている「健康で文化的な最低限度の生活」を送るとなった時には必要不可欠なものでありたいと願っている。ゆえに、ピアノ教育、音楽教育を青少年へ提供する事は、少しでも人を豊かに健康に人間らしくするための文化貢献度の高いものであると信じる。これを仕事とする場合の理想の形というのは、そのサービスを受ける側もさる事ながら、サービスを提供する側もそれに見合った見返り【お給料や社会的保証】があつてこそ成り立つものではないかと考える。現在この仕事に従事している人達は文化貢献度に対して、それに見合う保証がもらえているかという点と甚だ疑問が残る。理想の形というのは、貢献度と社会的保証のバランスが取れた形だと考える
③演奏活動

9. ピアノ演奏者、自宅・出張・楽器店・大学ピアノ指導者 (30代女性)
①音楽というのは世界中どこでも昔からあり伝統的なもの。そして現代においても受け継がれているものであり未来においても必要不可欠なものと感じる中で、ピアノはその一部分として人間の教育面や日常、趣味、娯楽、人生においていつも近くにいるようなものであると感じる
②まずは、社会に貢献できる指導者、演奏者になりたくてもなれない人がたくさんいるという現実を理解してほしいということ。好きな音楽を学んできても社会の中で続けていこうとすると生きてく上での経済的保証がないということ。スポーツ選手でもスポンサーがつかない限り続けていこうとするには資金を自分で稼ぐか断念するしかない。これが今も厳しい現実となっている。社会に貢献するためには、続いていくための経済的保証や社会的存在をもっと理解していただきたい
③生の音に触れる。生演奏(年齢関係なく、日常の中で生の音を聴く機会が減少されているのではないかと感じるため)
10. 自宅・出張ピアノ指導者 (30代女性)
①東日本大震災が起きたときにとある紳士に言われた言葉がある。私が「災害が起きたとき、真っ先に切り詰めるのはピアノなどの習い事だと思う。だから被災したら年単位でしばらくの間路頭に迷うと思うし弱い立場になると思う」と発言したら「逆だと思います。音楽は、残したいもの、あえて続けたいもの、続けさせたいもの、です。もし私が子どもに習わせていたら、あえて取り上げません。音楽は癒しですから」と仰った。この言葉はすごく私の胸に響きそう考えてくださる方もいるんだ!と勇気になった
②子どもと保護者、双方と信頼関係を結べること。ピアノ以外の会話もできること。その家族の在り方も私のスタイルも壊さず、どちらも大切にしながらレッスンできること。を心がけながら指導している。奏者としては、第一に私自身が楽しむこと。第二に、聴いてくださる方の中の一々でも共鳴できる演奏ができること、を心がけている
③以前、老人ホームの訪問演奏に月に一回通っていた。月替わりの音楽を楽しめるのと、ピアノ以外の楽器奏者とも出掛けられることが魅力だった。特に三味線と出掛けた時は普段と色合いが変わって楽しかった。再び訪問演奏をする機会に恵まれたら、邦楽とピアノと聴衆の方々が溶け込める内容作りに励みたい
11. ピアノ演奏者 (30代女性)
①音楽療法や、クリニックなどでもBGMが使われているので、痛みを和らげたり気分をリラックスさせたりする効果があるということ。何より子どもたちを教育する上で欠かせないものだと思う。1日の始まりはお歌で始まり、お帰りの際もお歌で終わる、音楽は何処でも欠かせないものになっている
②お行儀の良い印象を受ける。理想の在り方はまだ自分には答えが見つからない
③小さな子どもが生々のクラシック音楽に触れられる機会が日本ではなかなか少ないので、0歳からでも入場OKなコンサートを開いていきたい
12. ピアノ演奏者、ピアノ指導者 (40代女性)
①ピアノに限らず音楽や芸術は必ず社会に影響を及ぼしているが、経済的に困った時は衣食住の中に含まれないため切り捨てられやすい。音楽や芸術の立ち位置は個人や環境によって変わってくる。それでも人が動く原動力に音楽は大きく関わり、感動したり勇気づけられたり心を動かされ、その人々の動きが社会への影響に繋がっている。音楽に触れて小さな「素敵」から広がる世界は無限
②理想の在り方は個人によって全く異なるもの。悪いとされているものも時代が違えば認められることもあるので、様々な事を決めつけず広い視野を持ち続けたい
③弾きたい曲がある人にすぐにその人のレベルにあった楽譜を渡すようにしている(興味を持ったタイミングを逃さない)。自分は音楽を扱うツールとして利用してもらい、音楽を広める役割があると思っています
13. ピアノ演奏者、自宅・大学ピアノ指導者 (40代女性)
①ただ単に指を動かすというものとどまらず、弾ける、ということで達成感を得られたり、前向きになったり勇気をもらえたり、いやされたりするもの
②ピアノ技術や奏法を教える事にとどまらず、対人間という事で生徒の気持ちを受け止めたり時には交換しあうもの。指導者または奏者としてピアノを通して、人々の心が少しでも穏やかに、そして前向きになれるようにするもの
③闘病している方、例えば不眠で困っていたり、またはそれを支える家族の方を、音楽の力で癒したり、少しでも前向きになれるようなきっかけ作りを、演奏やトークでしていきたいと考えている
14. ピアノ演奏者、自宅・大学ピアノ指導者 (40代女性)
①生でピアノ(電子ピアノ)を演奏し、その「音で表現される世界」を聴く方々と共有し、トークやプログラミング、時には他の表現者とのコラボレーションを含めて、非日常的で豊かで創造的な時間を提供する役割(その為にクラシック音楽、歌謡曲、ポピュラー音楽、映画音楽、童謡唱歌等、各種ジャンルの作品を利用しているという考え方)そして、演奏やプログラミングやトーク等、奏者のあらゆる技術や才覚は、その「素晴らしい時間を創り出す事」に奉仕してこそ意味と価値がある

②演奏でも指導でも、その根底には「同胞愛、使命感」があり、例えば演奏なら、奏者、共演者、聴衆、スタッフ、関係者を含めたできるだけ多くの「共有する者達」に「素晴らしい時間」「充実した豊かなひと時」という感動や満足を提供する為の工夫と努力をするのが理想。そして指導においては、初心の練習から「音楽」という創造の行為の第一歩と見なし、その行為を新鮮な気持ちで讀える方向に努め、ある程度のレベルからは「講師と学習者」ではなく「奏者と奏者」として、レッスン＝音楽的瞬間を共有する時間にしたいと願っている
③各種共演者（音楽以外のパフォーマーも含む）が、そのパフォーマンスに思い切り集中できて、その資質を完全に開花させながら能力を発揮できるサポーターを目指したい。クラシック音楽作品だけでなく、多くの場合は作曲家が楽譜に書き残した手掛かりを元に演奏として再現するが、それとは別に楽曲そのものには「楽曲自身が魂」があると思う。それを常に感じ取り、その表現に挑む事ができれば最高
15. 自宅ピアノ指導者（40代女性）
①多くの人が心にゆとりのある生活をする事や豊かな感性をもつことによって社会全体が豊かになる役割
②未来を担う子供の心にすこしでもよい形でかかわることができること
③自身の演奏技術や表現力の向上
16. 自宅ピアノ指導者（40代女性）
①演奏家の場合、演奏を披露し聴衆に（楽しみ）（癒し）（気分転換）など何らかの心理的効果をもたらすと考えられる。聴衆の側がそれを自ら求めチケットを購入し聴きに来る場合、また被災地や病院で被災者や患者に演奏者側が演奏を届けそれが（癒し）（慰め）（励み）になる場合もあると思う。後者は自ら求めた訳では無くともそこにはあたたかい何かが生まれ、小さくはあっても希望になるのではないか。指導だと、多くは一对一に。演奏技術や方法を伝えるのはもちろんだが信頼関係を築くことが大切。指導される側の方が例えば学校や職場、もしくはそれぞれの環境の中でうまくいかなかった時の（拠り所の一つ）になれば。実際過去に小中学生の女子（3名）が不登校になってしまった時は、親御さんの話し相手になり、学校は行けなくてもレッスンには来ることはできたなどの例も。小児麻痺の障害のある方を指導する機会があったが、その時は指導というよりも同じ時間をレッスンという場で共有し方法を探し一緒に練習するという感じだった。指を一本ずつ動かすリハビリの為のピアノ。2年ほど続けた後ハサミを本来の目的として使用できるようになり鉛筆も上手にもてるように、そして発表会に出る事ができた。これは家族にとっても私にとっても大きな（喜び）となった。また多動性障害の生徒は集中してじっとしていられる時間が少しずつ長くなるなどの効果が得られた。このように上記①内、楽しみ、癒し、気分転換、慰め、励み、喜びなど、生きていく上で必要な感情を呼び起こす手伝いができる、ということが役目
②老若男女、立場など関係なく共有共感できるものを考えた時、音楽がその中の一つ。様々な立場や環境で様々な考えや感情が生まれるが、誰もが共有共感できる場や機会をつくり、ピアノを通して、楽しみ、癒し、喜びなどを感じていただけるように関わっていく事がピアノ奏者や指導者としての理想の在り方
③自己研鑽。演奏の練習の為、発表会などに参加したいから、また、指導をする為に必要であるから
17. 出張・スタジオ・大学ピアノ指導者（50代女性）
①人と人とのコミュニケーションに大いに貢献していると思う。また、個人の脳の活性化から地域のコミュニケーションの活性化に至るまで、お役に立てる楽器だと思うので、今後もっともっと人々に取り入れていって欲しいと思う
②ピアノという楽器の弾き方を教えるだけではなく、子供たちにとっては情操教育にも繋がり、ピアノと共に感性の豊かな子、優しい子に育ってもらいたいと願い、シニアの方たちには、ボケ防止などいつまでもお元気でいて欲しいという願いをこめて、音楽の分野だけに留まらず、ピアノという楽器を習った事でその人の人生が少しでも豊かになれるお手伝いできれば、と思っている
③伴奏やアンサンブルなど機会があればしていきたい。音楽を人と分かち合う事はとても素敵で、演奏する側にとっても聞く側にとっても良い体験や素敵な思い出になると思う。ピアノは、主役にもなれるし伴奏にもなれるしアンサンブルの一つにもなれ、色々な形で様々な相手と一緒にパフォーマンスができる稀有な存在
18. 自宅ピアノ指導者（50代女性）
①生きていく上で色々な経験をするがその時癒してくれたのが音楽。その時感じた気持ちを子供達に伝えればと思う
②「社会に貢献する」なんて大きな事は出来ないが、縁あって私が知り合えた子供達には大変な事（練習など）の後は喜びが有ることを知って欲しい
③ピアノ（演奏）と係われば関わる程奥が深いのが解り、まだまだ自分磨きをしたいと思う
19. ピアノ演奏者、自宅ピアノ指導者（50代女性）
①音楽は男女、年齢に関係なく、全ての人に楽しんでもらえるもの。そしてピアノを演奏する事で人々の心に安らぎを与えたり感動を与えたりする事が出来たら、演奏者にとって最高の喜び

②ピアノの音色により、人を勇気づけたり悲しみに寄り添ったり嬉しさを倍增させたり、その時その時の人々の心の拠り所になれるような演奏者になりたい
③現在お寺の永代経や報恩講で法話の前や後でピアノ演奏する事がある。もう4年目になりレパートリーもあまりなくなり現在はフルートの人の伴奏をやって皆さんに音楽を生で聴いていただき、少しでも心が和やかになる事ができればと頑張っている。音楽は人の心を動かす力がありそこにいる人達の心がひとつになる感じがすると思い、私達もそんなふうに皆さんに感じてもらえるように心を込めてやらせていただいている
20. ピアノ演奏者、自宅・音楽スタジオピアノ指導者 (50代女性)
①純粋に音楽への愛好心が育まれれば、その人の人生は潤い精神的に豊かになり充実したものになると思う。そしてそれが社会に反映していく。ピアノは身近な楽器なので音楽の世界への窓口になることが多く、私たちは案内人にもなる大切な役割を担っている
②コンサート会場にて素晴らしい演奏で聴衆を楽しませたり、福祉施設等でボランティア演奏をしたり、指導者としてレッスン生の才能を開花させたりと、社会貢献の形は様々。大きなことではなく、ピアノを介して身近な人に寄り添っていくことも社会貢献に繋がると思う。各々が自分のフィールドで誠意を持って真摯に音楽活動をするのが大切
21. 自宅ピアノ指導者 (60代女性)
①ピアノを演奏する技術と共に、美しいものや美しい音楽に憧れる気持ちや情緒を育て、何かを目指して努力する忍耐力を養う
②音楽に触れる機会から遠ざかっている方たち (例えば病院で療養中の方に演奏をお届けする等) への活動が音楽をするものとしてできる小さな社会貢献
③ピアノ以外の楽器の初歩の段階の生徒の伴奏。その事で導入期からアンサンブルする楽しさ、音楽の楽しさを身近に知って感じる機会にして欲しい。その事によって表現の多様性、可能性を引きだせたらと思う

(5) 考察

私達はピアノ演奏、指導がどの様に社会に貢献できているのかを検証すべく、この様にま
ず社会の中でピアノと関わりのある人達にアンケートを実施した。また併せて本学や本学以
外のピアノ講師達や学校音楽教諭達にもアンケート調査をしたが、その結果いずれも大変興
味深い結果を得る事となった。

アンケート回答の中で「高齢者による合唱団員」の回答があったが、実は合唱団には「合
唱団での活動の充実ぶり」に焦点を当てて設問をしていた。「合唱団で楽しいと感じる瞬間
はどんな時でしょうか」という設問に対し「合唱と指揮とピアノ伴奏の一体感を感じた時」(16
名中14名)、「音程が上手くとれて調和できた時」(同9名)、定期演奏会などで観客席からた
くさんの拍手がもらえた時(同4名)、よく知っている曲や好きな曲に取り組める時(同4名)
という回答が寄せられた。中には「ピアノ伴奏を聴いている時(歌うより好き)」と回答し
た人もいた。合唱団に入って19年以上となるこの人は合唱団に入ったきっかけも「以前から
合唱に興味があったのと、元々音楽が好き、ピアノの音色が好き」という事であり、また「合
唱を含むご自身の音楽ライフについて、日頃から感じられている事、今後に望む事など、ご
自由にお書きください」という設問に対しては以下の様に回答している。『小さい時から音
楽が大好きだった。戦後の貧しかった時代、小学校の3～6年生を対象に無料の合唱団が出
来た。童謡・唱歌を歌い、生きている事が楽しくなった。今は楽器の演奏を聴くのが大好き
で、特にピアノが好き。私の人生で最後に残るものは音楽だろうと思っている。』この様に
高齢者でも合唱団に属し生き生きと合唱を楽しみ、音楽ライフを充実させ、生き甲斐とされ
ている方達がいる事は喜ばしい。そしてこういった各種合唱団を伴奏して支えているピアノ
奏者の貢献も大いに感じるところである。

こうして乳幼児から高齢者まで幅広い年齢層のピアノを学習したい人達、豊かな音楽ライフの為にピアノ伴奏を必要とする人達、ピアノ奏者をパートナーと考えている声楽家や楽器奏者や幅広いジャンルのパフォーマー達、そしてピアノの音色によって癒しや潤いを受けている人達の存在が明らかとなった。

そして本学や本学以外のピアノ講師達や学校音楽教諭達も、一様にピアノやピアノ演奏、奏者や指導者の価値を存分に感じ、個々の理想をもちながら職務を全うしている事が存分に伝わってきた。ソロでも伴奏でもアンサンブル等、様々な形で相手と共演ができる存在。そして音楽療法をはじめ老人ホームやホスピス、各種施設でピアノの生演奏が生かされる事があり、高齢者の充実した音楽ライフやぼけ防止にも貢献している。そして何度も繰り返すが、乳幼児達への幼児教育において音楽の大切さと保育者に必要とされるピアノ演奏力。この様にピアノとピアノ奏者は社会の中で多種多様な役割を持ち得ている事が改めて確認できた。

4. まとめ

以上、社会の中でのピアノ、そしてピアノ奏者の生かされている例を挙げた。様々な人達のアンケート回答に手応えと喜びを感じている。

私達は個人事業主である。だが個々の技量や能力の向上だけを考えて頑張っている、上には上がいるという現実につぶかる。自己研鑽は必要だが、自己だけの発展を考えていても、方向性が判らなくなる時がくるであろう。私達が技術を磨き演奏をする目的は何であろうか。また、どのような方向性でいくべきなのか。以下「奏者の在り方」を考え、提唱する。

① ピアノを演奏出来るようになりたい人達の為に指導する（幼児教育も含む）

指導面でも貢献できる事がたくさんある。老若男女を問わず「ピアノに触れたい、弾ける喜びを味わいたい」と思っている人達がいる。高齢者でもピアノ演奏に生き甲斐を感じている人達がいる。演奏は大変だが、楽しかったり癒しや感動の時間を味わえたりする可能性がある。努力や工夫を重ねるだけの価値があり、それを導いていける事は大変素晴らしい事である。

将来の保育者達に対して、園児達と一緒に音楽を通じて素晴らしい瞬間を共有してもらえる様に指導する事も大変意義がある。

② ピアノを大切なパートナーと考えている人達の為に共演する（共演者の芸術の為に、聴衆の為に）

合唱をはじめ様々な楽器や歌唱の伴奏、オーケストラで演奏する部分を編曲してピアノで演奏する等、前述の通りである。

③ ピアノ奏者の生演奏を好んで聴きたいと思っている聴衆の為に演奏する

現代社会は手軽に音源をダウンロードしたり、すぐに動画が再生したり出来て、いつでも何度でも聴きたいものが聴けるが、それでも私達は生演奏の素晴らしさに誇りをもち続けるべきである。ピアノが好き、ピアノ作品が好きという人達には是非届けたい。その為、個人で研鑽する部分も大切なのは勿論である。技術は音楽に奉仕する為、技術が向上すれば表現で

きる音楽の可能性が広がる。同じ作品を演奏する時も「奏者の個性の違い」がある。音色や解釈や表現の仕方がそれぞれ違う。ある講師から以下の話を聞いた。「ガンで闘病されていた方から、CDではなく、実際のピアノで弾いた『千の風になって』をリクエストされた。その当時『千の風になって』は、とても流行っていてCDも沢山出回っていたが、CDではなく、あなたの音色で聴きたいとの事だった。ピアノは極論、たたけば音が出る。が、しかし、たったその一音に、演奏者の生き様や人生観の出る楽器である事も確かだ。これからもピアノと真摯に向き合い、大切に心を込めて音を出していきたい、と思われた出来事であった。」奏者の研鑽は表現者の生き方そのものである。

【ティーチング・アーチスト】

ここで「ティーチング・アーチスト」という言葉を紹介したい。エリック・ブース著「ティーチング・アーチスト：音楽の世界に導く職業」では以下の様に定義している。『ティーチング・アーチスト (TA) は行為としての音楽の専門家です。私たちが提供する音楽の専門家です。私たちが提供する音楽という最上の贈り物の中に、音楽の意味をうまく見つけ出すという、一人ひとりが持っている能力をうまくサポートし、教育し、啓蒙するのです。』

また久保田慶一氏著「2018年問題とこれからの音楽教育」では『演奏前に演奏者自身がマイクを握り、これから演奏する曲について、プログラムに書いてあるようなことでなくて、どうしてこの曲を演奏するのか、あるいははしたいのかについて、聴衆に話しかけるのです。そして、ただおもしろい曲ですと言うだけでなく、それがどうおもしろいのかを、クイズにしたり、曲のおもしろみを作り出しているリズムと一緒に手拍子で叩いたりします。とにかく、あれやこれやの手を尽くして、聴衆たちをこれから聴く音楽に引きずり込んでいくわけです。』と述べている。これらの著者では「ティーチング・アーチスト」を独立した職業として扱っているが、実際にはこの行為は奏者自身が行っているケースが多いと思われる。奏者はこれ位の事を自身で喜んで行う気概をもつべきではないだろうか。

④ 私達はピアノをツールにした「表現者」として「自分は何を表現しようとするのか、しているのか」という本質を見極める事が大切である

生でピアノ（電子ピアノ）を演奏し、その「音で表現される世界」を聴く方々と共有し、トークやプログラミング、時には他の表現者とのコラボレーションを含めて、非日常的で豊かで創造的な時間を提供する役割であり、その為にクラシック音楽、歌謡曲、ポピュラー音楽、映画音楽、童謡唱歌等、各種ジャンルの作品を利用しているという考え方である。つまり演奏やプログラミングやトーク等、奏者のあらゆる技術や才覚は、その「素晴らしい時間を創り出す事」に奉仕してこそ価値がある。

⑤ 私達は培われた演奏力を社会の中で生かしていく為に「個々の楽器や自身の表現の限界」を客観的に受け入れるべきなのである

そして自分達以外のジャンルの違う「あらゆる表現者」に関心を寄せるべきである。具体的に挙げると、それは音楽と同様に舞台や聴衆に関わる各種演劇や舞踊、能や歌舞伎、浄瑠璃、落語、お笑い、その他あらゆるパフォーマンスなどだけでなく、絵画、美術、工芸、建築、茶道、華道、料理、更に視点を変えて文章による表現（短歌や俳句、詩から始まり文学、あらゆる専門書などの書籍や論文）も含む。こうした、社会の中でのあらゆる「表現」を知

ろうとする事が大切である。学問と分類されている思想や哲学も全てが「表現」なのである。同じ表現者同士という意識の元に、時にはコラボレーションして新たな表現を追求するのも素晴らしい。それにより人脈も増え、新たなネットワークの広がりを見せる事は間違いない。マーケティング的にも可能性が広がるであろう。

⑥ ピアノ奏者、指導者達は同業同志である

今回、本学や本学以外のピアノ講師や各種学校音楽論たちにアンケートを実施し、私達は現場で生きる者同士という事を改めて実感した。多少の考え方の相違はあっても、立場や目指すところ、目的意識、悩みや苦しみ等も共通していて、よく分かり合えるであろう。同志としていつも横に繋がりを感じ、情報交換し、お互いに励まし合い協力し合い、現場での心の支えになると最高である。

4. むすびに

幼児教育に必要とされるピアノ演奏力をつけたい保育者や保育者を目指す学生達がいる。乳幼児から高齢者まで幅広い年齢層のピアノを学習したい人達がいる。豊かな音楽ライフの為にピアノ伴奏を必要とする人達がいる。ピアノ奏者をパートナーと考えている声楽家や楽器奏者や幅広いジャンルのパフォーマー達がいる。ピアノの音色によって癒しや潤いを受けている人達がいる。様々な場所や状況で生演奏を必要とする機会がある。

それらのニーズに対して、私達はこれまでに培ってきた演奏力や音楽的知識で真摯に応えたい。個人事業主として自分の事だけを考えていては、発展性が薄く視野も目的意識も狭くなりがちである。ゆえに私達は「表現者として」自分達以外のジャンルの「あらゆる表現者」にも関心を寄せたり、同じピアノ奏者、指導者達も同志としてお互いに励ましたり協力し合いたい。

これから先、国内でも政治、経済、医療、福祉、自然災害等、様々な問題が尽きないと思われる中、ピアノ奏者は表現者として指導者として広い視野や目的意識を持ちながら、これからも社会の「潤い」の部分としての役割を果たし貢献していきたい。

5. 参考文献

- ・「音楽的成長と発達 - 誕生から6歳まで - 」ドロシー・T・マクドナルド & ジェーン・M・サイモンズ 共著 神原雅之・難波正明・里村生英・渡邊 均・吉永早苗 共訳 (溪水社)
- ・「2018年問題とこれからの音楽教育 激動の転換期をどう乗り越えるか？」久保田慶一 著 (株式会社ヤマハミュージックメディア)
- ・「サステナブル・ミュージック これからの持続可能な音楽のあり方」若尾 裕 著 (アルテスパブリッシング)

研究ノート

音楽講師が保育者育成で心掛けたいこと ～園児の音楽性を伸ばす保育者を育成するために～

太田 由美子 山本 雅士 天石 佐保子 大橋 昌代

**A Desirable Instruction in Music of Early Childhood Education
—To Train Junior College Students to Be Able to Help Preschool Children
Develop Their Abilities for Music—**

Yumiko Ota, Masashi Yamamoto, Sahoko Amaishi, Masayo Ohashi

Abstract

As members of music faculty who give piano lessons to students, who long to be teachers of preschools, we believe the most desirable way of teaching music at preschools would be that nursery teachers sing and/or play the piano live in front of children. In that way teachers are able to appeal and express happiness of playing music to those who listen and watch their performances. We think that is the effective way of having communication between teachers and their students, children. However, that would be possible only when teachers themselves feel genuine pleasure through playing music. Thus it is not good enough for junior college students, trainees preschool teacher, to acquire necessary skills of playing the piano only but feel happiness of performing music.

We face some problems when we examine our piano lessons considering this aim. First, our time for piano lessons are not long enough. They are very limited. Second, all students have the same required assignments, while there are quite a few students who are beginners in piano. It is very hard for novices to accomplish these requirements. In this situation we instructors have to keep in mind that our students are going to be preschool teachers soon after graduation, and they have to help children develop their musicalities as their jobs. To explore what we need as the music faculty for our students to let them sing and/or play the piano delightfully, we surveyed how interpretations of musical pieces help them understand music better. And we obtained information by means of questionnaires to verify ‘the utility value of interpretations of music’.

キーワード：音楽講師、保育者、ピアノ指導、音楽性、音楽的解釈

要旨

私達は幼児教育学科の音楽講師としてピアノのレッスンを担当しており、園における音楽の享受は「保育者自らが園児達に対し生で演奏し歌う事が一番望ましい」と考えている。それは、保育者と園児との間の、音楽を奏でる喜びを保育者自らが体現し園児に伝えるというコミュニケーションのためである。しかし「音楽を奏でる喜び」を伝えるためには、単に十分なテクニックがあればいいわけではなく、保育者自身が音楽から喜びを感じていなければ出来ない事である。この点を保育者養成課程のピアノ指導の現場で顧みた時、私達は時として十分な指導が困難な場合がある。全くのピアノ初心者の学生が多くいたり課題と時間という決められた範囲の中でレッスンが進むなどの理由がある。そのような授業の中で学生達は「音楽を奏でる喜び」を感じる事が出来るだろうか。私達はいずれ学生が園児の音楽性を伸ばす保育者になるという事を常に念頭に置き、保育者養成課程の学生のピアノ指導に当たらなければならない。そこで初心者の音楽的解釈の具体例を挙げたり学生にアンケートを実施したりすることにより「音楽的解釈の有用性」を検証し、「園児の音楽性を伸ばす保育者を育成するために、音楽講師が心掛けたいこと」を確認するに至った。

1. はじめに

幼児教育学科の音楽講師としてピアノのレッスンを担当する私達が考える「保育者(幼稚園教諭、保育士)に求められる事」の1つに、「園生活の中に音楽を取り入れ、園児の音に対する感受性を育て、情感の発達を促す」ということが挙げられる。そのために園児たちに音楽を聴かせたり一緒に歌わせたりする手段としては、CD等の音源を利用する方法もあるが、私達は「保育者自らが生で演奏し歌う事が一番望ましい」と考えている。その理由は、保育者と園児との間に、音楽を奏でる喜びを保育者自らが体現し園児に伝えるという、コミュニケーションが生まれるからである。音楽を奏でる喜びを体現する保育者の姿を目の当たりにする事で、保育者に対する尊敬の念や憧れの気持ちを抱く可能性があり、それが動機となって音楽に対する興味や関心が生まれ、情感の発達や音に対する感性も育つという、理想的な園内の音楽教育の現場が私達の願いとしてある。しかしながら、「音楽を奏でる喜び」を伝える事が出来るというのは、単に十分なテクニックがあればいい訳ではなく、保育者自身が音楽から喜びを感じていなければ出来ない事である。

この点を保育者養成過程のピアノ指導の現場で顧みた時、私たちは果たして常に十分な指導が叶えられているかという、実際のところ困難な場合が多々ある。ピアノという楽器に全くの初心者の学生が多くいる、課題と時間という決められた範囲の中でレッスンが進む、またそれらが重なる、など、その要因は様々である。講師達は懸命に指導しようとするが、カリキュラムで決められた進度まで進めさせなければならなかったり、時間内に授業を納めなければならなかったりするので、つい学生の技術が足りない部分をクローズアップして「あとは練習するように」となりがちである。

そのような授業の中で、学生達は「音楽を奏でる喜び」を感じる事が出来るだろうか。

私達はいずれ学生が「園児の音楽性を伸ばす保育者」になるということを常に念頭に置き、保育者養成課程の学生のピアノ指導に当たらなければならない。そこで本文では、音楽を奏でる喜びを体現出来るより多くの学生を保育者として社会に送り出す為に、私達が常に学生に指導すべき音楽の本質について考察し、まとめる。

2. 保育者をめざす学生に指導すべき音楽の本質について

2- I 音楽の必要性

2- II 音楽性を伸ばす為に

2- II a 学生たちの意識と可能性【アンケート実施】

2- II b 楽曲解説の実践例【アンケート実施】

2- I 音楽の必要性

音楽が人間とどう関連してきたかという知識がまず大切である。保育者をめざすものは、特に、音楽が乳幼児期にもたらす効果について知らなければならない。そして現在の音楽の存在価値を示す例を挙げる。以下は音楽が歴史の中でどう人間と関連してきたかについての論述である。

太古の昔から何千年も続いてきた人間生活の中から必然的に生まれてきた「歌と踊り」。それらは音楽となり、時代と共に発達を遂げてきた。人間の声、或いは人間が作り出した楽器によって奏でられる音が、旋律を伴う曲となり、喜び、悲しみ、怒り、絶望、等、様々な感情が表現されるようになった。また一方で、絵画のように何かの情景を描く描写的な表現方法も生まれた。いずれも音の集合体によって聞き手に訴えかける「表現」として世界各地で発達、進化を遂げてきた。つまり「音楽」は、人間の感情や感覚と直結している表現手段なのである。

『音楽的成長と発達～誕生から6歳まで～』(D.T. マクドナルド& J.M. サイモンズ共著)の第一章「乳幼児期の音楽：過去と現在」の冒頭では、次の一文が掲載されている。「音楽を子ども達に教える必要があるのは、それが人格の形成に深くかかわっているためである。『アリストテレス』歴史上の先駆的思考家・哲学者・心理学者達が、各々の著書や学習理論において、音楽が乳幼児期にもたらす効果について述べている。

1659年にチェコの教育者ヨハン・コメニウスが「大教授学」を刊行し、就学前の音楽教育は、乳幼児期の教育という考え方そのものと共に生まれ、始まった。彼は、乳幼児期教育における音楽の役割は「五感を目覚めさせ、精神を和らげ、発話に良い影響を与え、健康を促進する」ことにある、と主な論拠を置き、「マザー・スクール(母親学校)」にてそれは実施された。しかし、音楽が貴族階級の装飾物であるような時代であった当時、彼の理論はあまりに進歩的過ぎて人々に受け入れられなかった。が、彼が提唱した「乳幼児期は発達上、独自の段階の一つであり、それに固有の教育を必要とする」という考え、音楽に強いて言えば「音楽がそれ自体研究するに値する芸術形式であるだけでなく、倫理的、身体的、そして感覚的に望ましい諸技能の発達に貢献する力を持っている」という考えは残り、後に影響を与

えた。その後、ジャン・ジャック・ルソー (1712 ~ 1778)、ハインリヒ・ペスタロッチ (1746 ~ 1827)、フリードリヒ・フレーベル (1782 ~ 1852) といった哲学者・教育者たちにより、時代と共に展開し、特にフレーベルは、音楽を、就学前の教育の中心に位置付け、「マザー・プレイと童謡集」という歌とゲームの小さなコレクションのテキストを著し、母親と年少の子ども達において実践された。フレーベルは Kindergarten(フレーベルの造語、「子どもの庭」「子どもの国」の意) という学校を作り、その後彼の構想は、幼稚園として世界各国で体系化していく。このようにして19世紀の終わりには概ね、音楽は幼児教育の一環として教育制度に組み入れられた。音楽の役割は、実用的で機能的なものであり、その重要性は広く認められた事になる。また、ピアジェの発達段階、ブルーナーの教授理論、モンテッソーリの設定環境、といった著名な心理学者達の学習理論が、音楽的な知性が他の知的な過程と無関係に発達する訳ではなく、知的な成長の一つの局面である事を示唆し、コダーイ、ダルクロワ、オルフといった音楽家達が幼児の為の様々な音楽的アプローチをメソッドとして残しており、現在の乳幼児期教育の現場において取り入れられ実践されている。

そして現在では、音楽を組み込んでいる教育現場は、義務教育や音楽大学や教育学部のみではない。アメリカでは例えばハーバード、ニューヨーク、イエール、マサチューセッツ工科、スタンフォード、コロンビア大学等、多くの大学でカリキュラムの中に基礎教養として音楽を組み込んでいる。中には音楽院さながらの実技の授業がある大学もある。以下に著者「ハーバード大学は『音楽』を育てる」(アルテスパブリック社刊行、菅野 恵理子著) より引用する。

『21世紀のいま、アメリカの大学はふたたび音楽を学ぶ意義をとらえなおしているようだ。専門的に音楽を学ぶだけでなく、教養として音楽を学ぶことも含め、「音楽を学ぶとは何か」「芸術に触れるとは何か」「芸術をとおして何を学べるのか」を問いかけ、カリキュラムに反映しているのである。音楽のもつ潜在価値を引き出し、豊かな人格形成や人間理解に役立てるのか。「音楽を学ぶ」とひとことで言っても、大学によって位置づけもカリキュラムの組み方も違う。そこに大学の人間観や教育理念が投影されていて興味深い。多くの工夫と努力が払われた結果、音楽や芸術の存在価値はいままで以上に高まっているといえるだろう。』

この場合の「基礎教養」とは「多様な価値観を理解する力を育てる」とか「人間思考力を学び創造力を高める事」を目的とし、私達の「従来の音楽に対するイメージ」に対して、例えば「人間性や知性」「思考や創造」等の新たなイメージを与えてくれるのではないだろうか。以上の流れから顧みて、音楽は、人間の感情や感覚と直結し、また、乳幼児期のみならず重要な役割を持つものとして考えるべき性質をもつものとして、その必要性を説く事ができる。

2- II 音楽性を伸ばす為に

2- II a 学生達の意識と可能性

「保育者自らが園児達に対し生で演奏し歌う事を理想とする」のは「音楽を奏でる喜び」を保育者自ら体現し、それを園児達と共有するというあたたかいコミュニケーションの為である。しかし「音楽を奏でる喜び」を伝えるためには、ある程度のテクニックと音楽的解釈の仕方が身についており、そして音楽行為自体に喜びを感じていなければ出来ないのである。

その保育者に求められる「音楽的解釈」とは何であろうか。ここでは「楽曲の曲想(本質)

を捉え、それにふさわしい表現になる様に努める事」としたい。ただ楽譜に並んでいる音符が弾ければそれで良いというのではなく、楽曲の曲想を捉えて、それにふさわしい表現となる様にする事である。その曲はどんな雰囲気のものか、どんな情景や気持ちを描いているのか…を楽譜から読み取り、どんなテンポ（速さ）や、どんな音の出し方がふさわしいのか…等、タイトルをはじめ、様々な手掛かりを元に想像力も働かせて音楽を捉える事である。

そういった行為、又はその行為ができる能力を一般的に「音楽性」と呼んでいる。私達は保育者を目指す学生達の音楽性も引き出し伸ばす為に、日頃の指導のポイントも見直すべく、まず学生達の現在の意識調査として以下のアンケートを実施した。

【アンケート実施】

(1) 対象 愛知文教女子短期大学幼児教育学科の卒業学年の女子学生39名

(2) 時期と場所 2017年1月

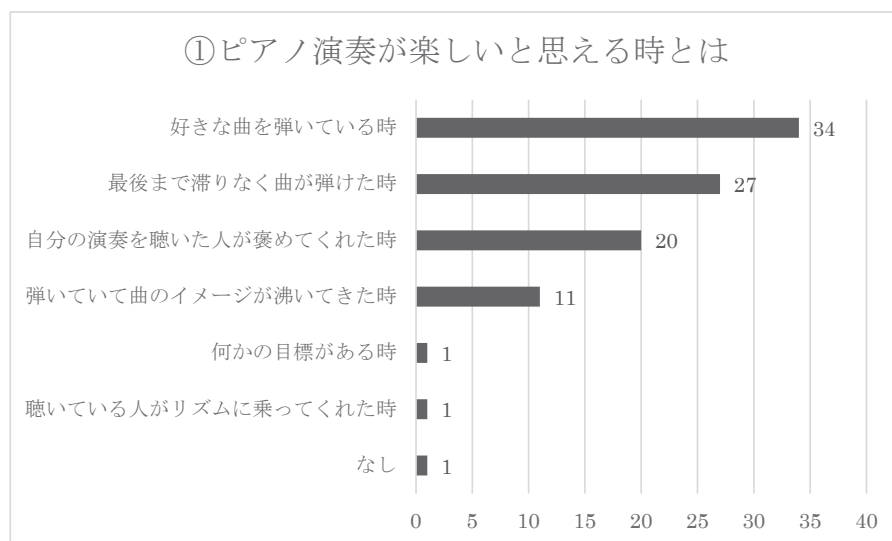
(3) 方法

卒業前の在学中最後のピアノ発表会が終わった後、これまでのピアノ学習について各々に振り返ってもらい、以下の設問にアンケート用紙に記入する形で回答してもらった

- ① ピアノ演奏が楽しいと思える時とは（項目選択）
- ② 他人の演奏を素晴らしい、素敵だと感じる時とは（項目選択）
- ③ あなたにとって「音楽的な演奏」とは（項目選択）
- ④ 保育者になった時どのように演奏したいか（自由記述・キーワードをピックアップしまとめた）
- ⑤ 良い演奏する為に必要と思われる行為は人間的資質や能力とどう関連すると思うか（項目選択）

(4) アンケート結果と考察、設問意図

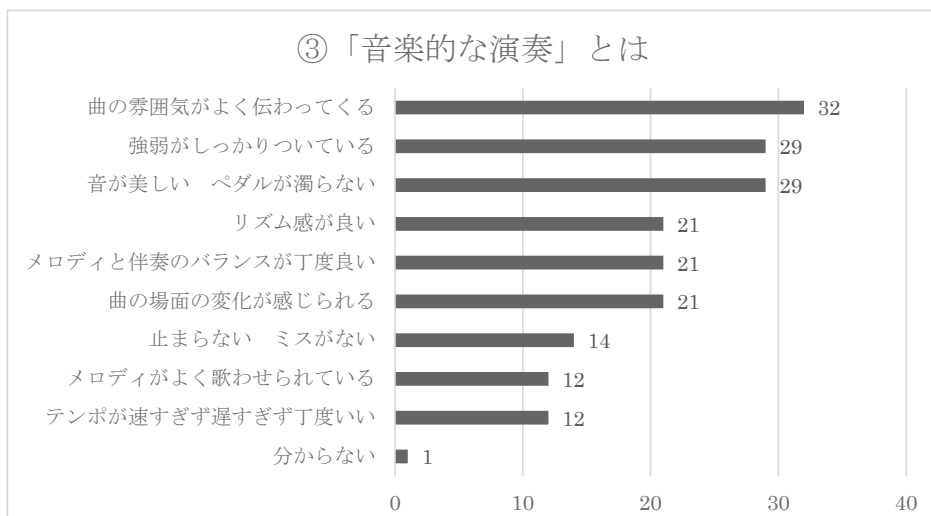
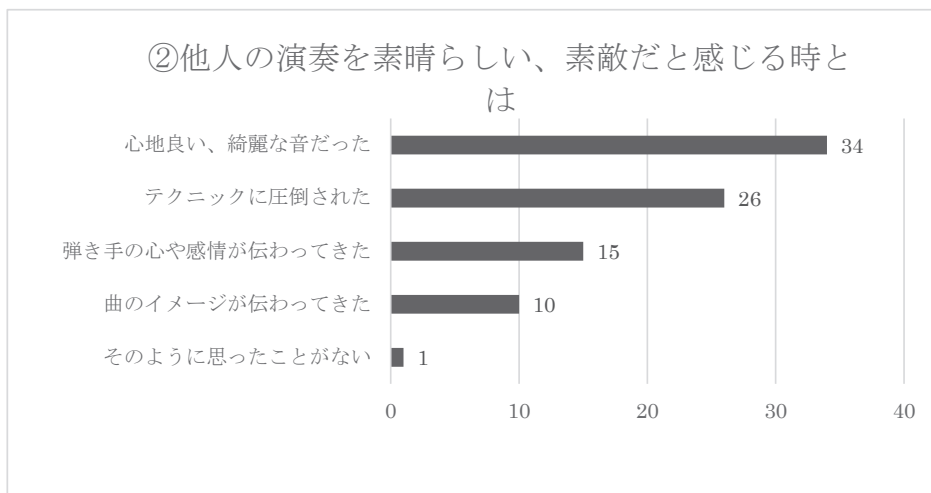
【結果①】



【考察①】

まず演奏していて楽しいのは「好きな曲を弾いている時」が1番多かった。これは当然であらう。そして以下「最後まで滞りなく曲が弾けた時」「自分の演奏を聴いた人が褒めてくれた時」と続くが、これは弾き通せたという喜び、他者からの反応があり認めてもらえると自信や喜びに繋がる事が分かった。そして「弾いていて曲のイメージが湧いてきた時」と答えた人が11名いた。曲のイメージを感じて演奏している学生がいると分かり素晴らしいと感じた。

【結果②③】



【考察②③】

多くの学生が「心地良い綺麗な音」に素晴らしさ、素敵さを感じていると分かったが、これは美しい音を感じる感性があるという事である。続く「テクニックに圧倒された」という

のは分かり易いが、「弾き手の心や感情が伝わってきた」「曲のイメージが伝わってきた」時に素晴らしい、素敵と感じたというのも興味深い。それらは演奏の本質に迫る回答だと思われるからである。そして「音楽的な演奏とは」という質問にも「曲の雰囲気がよく伝わってくる」を筆頭に以下「強弱がしっかりついてくる」「音が美しい、ペダルが濁らない」「リズム感が良い」「メロディと伴奏のバランスが丁度良い」「曲の場面の变化が感じられる」「止まらない、ミスがない」「メロディがよく歌わせられている」「テンポが速すぎず遅すぎず丁度いい」という回答が続き、私達は学生達の「音楽的な演奏」に対する捉え方が妥当な事に安堵し、これからの指導に対する可能性を感じた。

【結果④】

④保育者になった時どのように演奏がしたいか	
楽しい・楽しく（園児・自分自身）	27
元気に	6
止まらず・ミスせず・滞りなく・スムーズに	6
笑顔で・笑顔になれる	5
歌いやすい	5
園児が意欲的になれる	4
テンポを工夫して	3
強弱を工夫して	3
感情を込めて	3
好きになってもらえる（曲や音楽）	3
曲のイメージを持って	2
身体を動かしながら	2
音楽の素晴らしさを表現して	2
引き込めるよう	1
園児の方を向いて	1
リズム感大切に	1
綺麗なメロディで	1
音楽に親しみを持てるよう	1
感性を養うよう	1
テンポよく	1
園児の年齢に合わせて	1
保護者に園児が成長した姿を見せられるよう	1
園児一人一人の個性が出せるよう	1
お友達と楽しく	1
みんなで楽しい空間をつくるよう	1
癒される	1
園児にピアノが合わせて	1

【考察④】

将来、園児達を「楽しく元気良く」歌わせられる様に弾きたいと考えている学生が圧倒的

に多かった。それ以外にもご覧の通り、個々に自分の言葉で考えて積極的な回答が寄せられ、私達は微笑ましく、また保育者としての自覚が芽吹き育っている頼もしさを感じた。そして、これらの回答は音楽的資質や人間的資質を感じさせるものではないだろうか。

更に私達は個々の音楽的素質や才能とは別に「音楽的解釈」の根底にあるものについて考えてみた。私達が「自らの手で音楽を奏でる行為」の一つ一つを分析してみると、私達の日常生活において大切にされる様々な能力と「関連をもつ可能性」があるのではないかと感じたので、例として挙げてみる。

例)

- A 自ら演奏しようとする事
 - 何かを創り出そうとする行為、創造的エネルギー
- B 音をよく聴く、演奏に集中する事
 - 聴く力、何かに集中する力、例えば相手の話に集中して聴く力
- C 美しい音色を出そうとする事
 - 美に対する憧れ、内面の穏やかさ、美しさ、相手に対する思いやり
- D 音を滑らかに繋いで歌わせようとする事
 - 歌を感じる能力、豊かな感受性、穏やかな内面
- E 楽曲の手掛かりに忠実であろうとする、曲の本質を見極めようとする事
 - 作曲家や楽曲、聴衆に対する誠実さ
- F 言葉や手掛かりから情景や場面の雰囲気想像する事
 - 想像力、空気を読む力
- G メロディやハーモニーから「感情」を感じ取る事
 - 人の気持ちを感じる力、相手の気持ちに対する想像力
- H ハーモニーによる色彩の変化を感じる事
 - 変化に対して敏感に気付く力、繊細さ
- I 伴奏を控えめにしメロディを際立たせようとする事
 - 状況を客観的に判断する力、バランス感覚
- J 曲の魅力を感じとり、それを伝えようとする事
 - 的確な把握力、判断力、素晴らしいものを他の人と共有したいという気持ち

この「音楽的な行為と人間の能力を結び付ける」事は、確実な立証をする事は出来ない事は私達も承知している。だが今回、先に挙げたアンケート項目と同様にこれについても学生達にアンケートを行った。

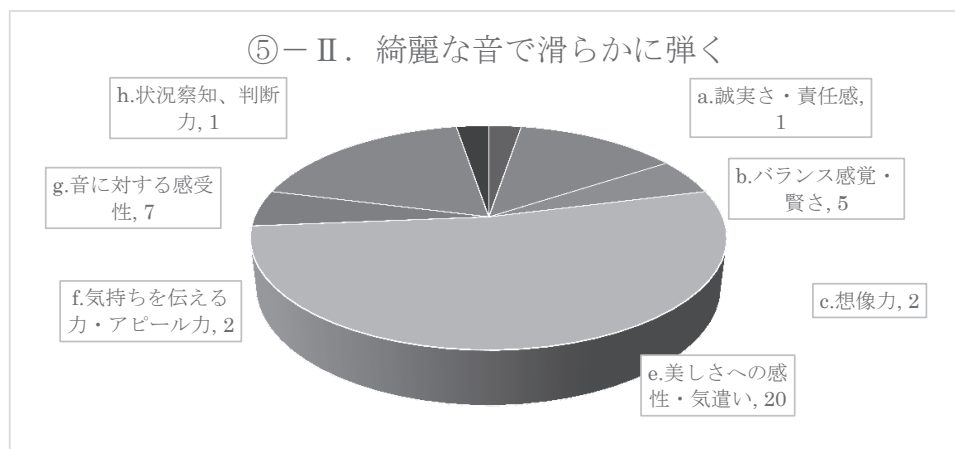
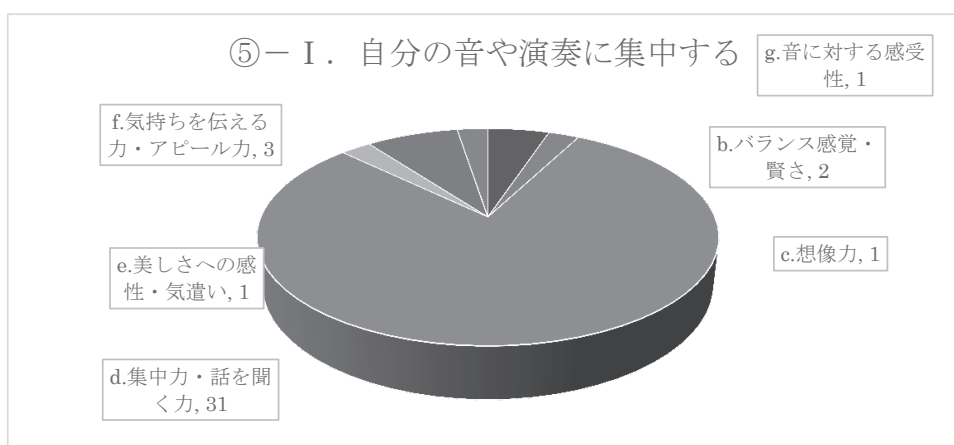
今回の一連のアンケートの狙いは、保育者を目指す学生達に「音楽的な演奏とは何か」を改めて考えてもらう事であった。この項目も「自らの手で演奏する為に必要な要素について考え、それらはどの様な人間力に繋がるのかと模索する」事で、これまでとは違った角度で演奏行為を捉え、ポジティブな要素を発見してもらいたかったのである。

【設問⑤】

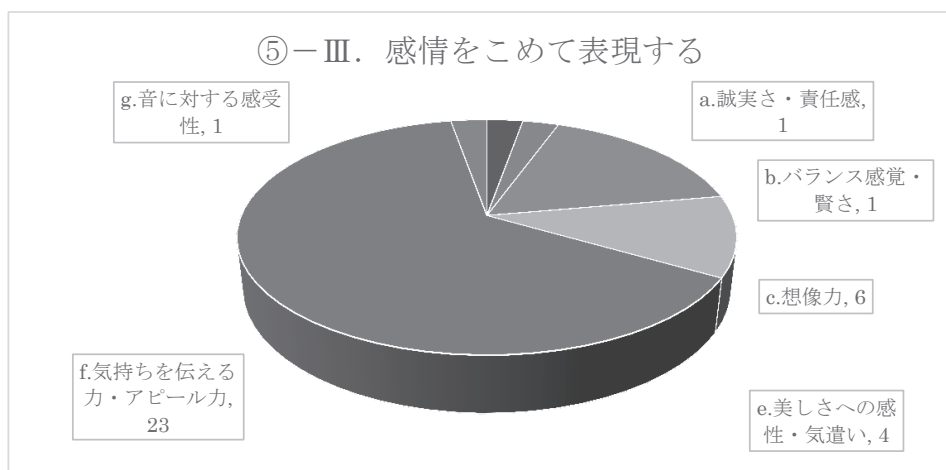
次の1～8の「良い演奏する為に必要と思われる行為」は以下のa～hの中のどの人間的資質や能力と関連すると思いますか。

1. 自分の音や演奏に集中する	2. 綺麗な音で滑らかに弾く	3. 感情を込めて表現する
4. 楽譜上の音符や記号を守る	5. 楽曲から情景やストーリーを想像する	
6. ハーモニーから色彩を感じる	7. 旋律と伴奏のバランスを考えて弾く	
8. 曲の場面の变化を感じる		
a. 誠実さ、責任感	b. バランス感覚、賢さ	c. 想像力
d. 集中力、話を聞く力		
e. 美しさへの感性、気遣い	f. 気持ちを伝える力、アピール力	g. 音に対する感受性
h. 状況察知、判断力		

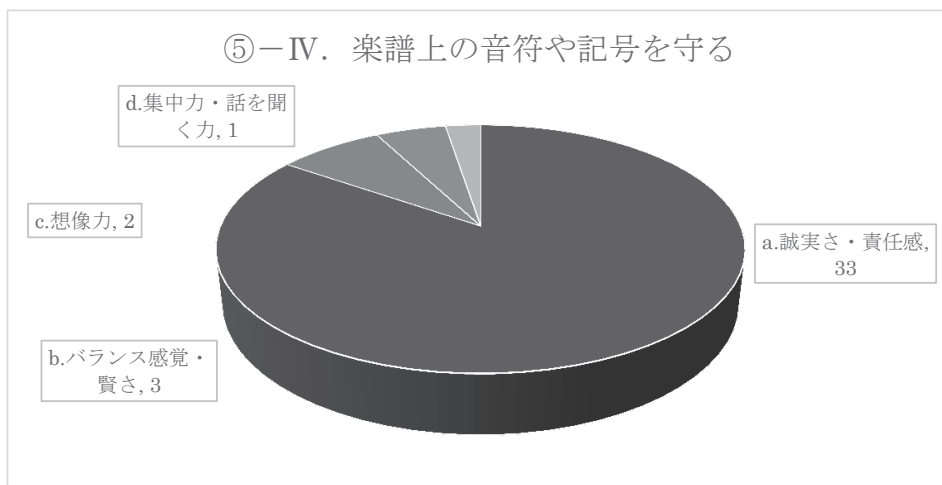
【結果⑤】



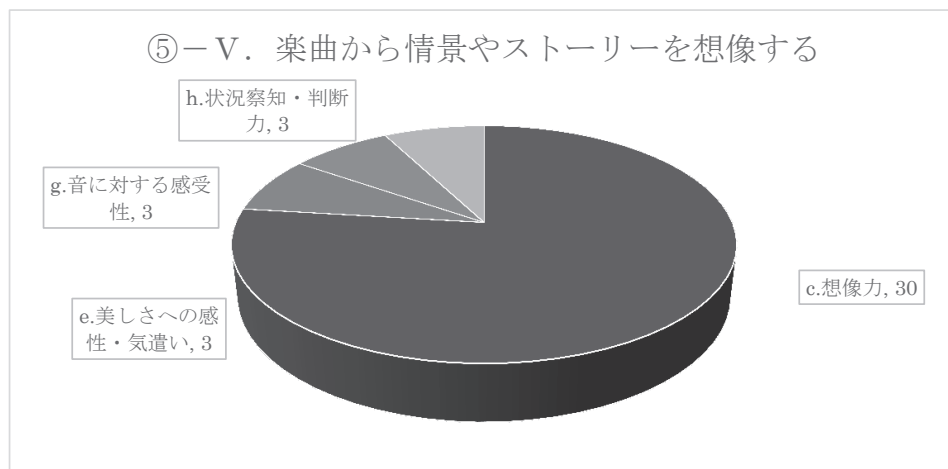
⑤－Ⅲ．感情をこめて表現する



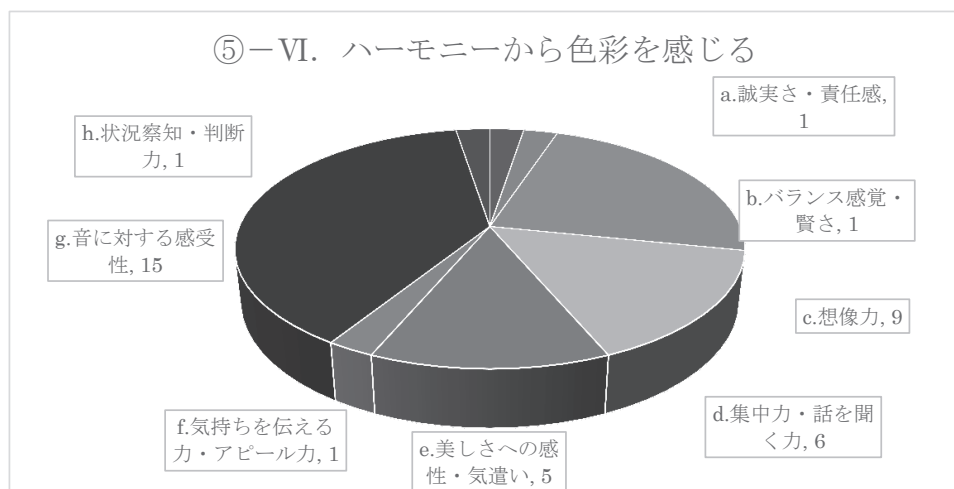
⑤－Ⅳ．楽譜上の音符や記号を守る



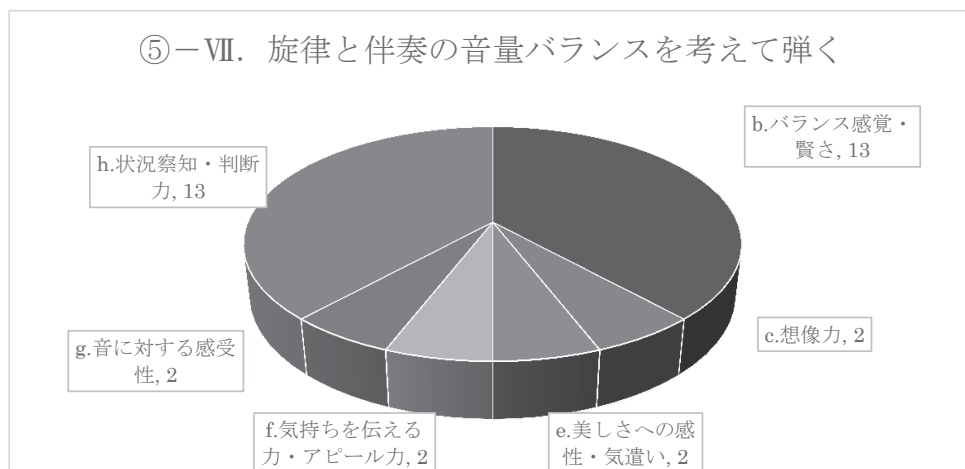
⑤－Ⅴ．楽曲から情景やストーリーを想像する



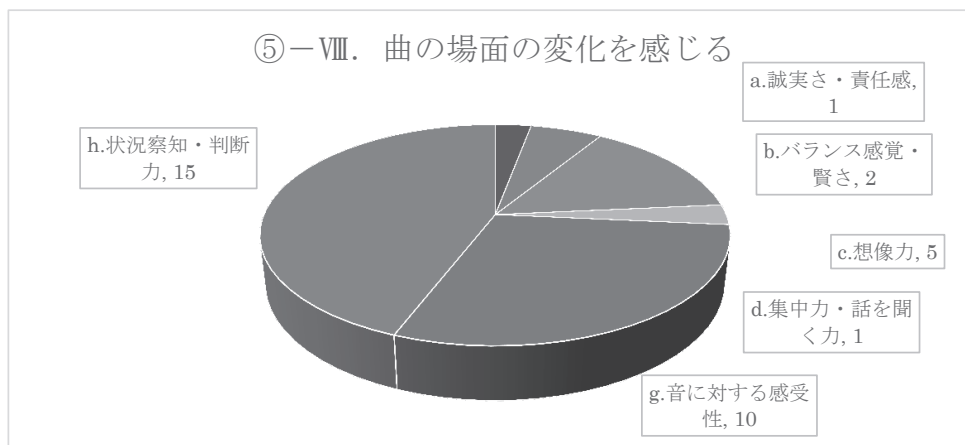
⑤－Ⅵ. ハーモニーから色彩を感じる



⑤－Ⅶ. 旋律と伴奏の音量バランスを考えて弾く



⑤－Ⅷ. 曲の場面の変化を感じる



【考察⑤】

個々の音楽的素質や才能とは別に「音楽的解釈」を目指す時の行為と、人間の能力を結び付ける事は、確実な立証をする事は出来ない為、あくまで可能性として学生達に考えてもらった。「自らの手で演奏する為に必要な要素について考える」事は日頃なかなか無いであろう。そしてその設問に挙げた様な人間の資質も是非、身に付けたり磨かれたりして欲しいと思う。今回の一連のアンケート結果を受けて、私達は「音楽的な演奏とは何か」という問いに対して、学生達は既に個々にイメージをもっている、或いはこれからもっとイメージを明確にできそうであると感じた。それぞれ進度の差はあるが、その中でより音楽的な方向へ導ける可能性を感じた。これらを踏まえ、私達講師は「音楽的なレッスンとは何か」を改めて念頭に置き、心新たに指導に臨みたい。一生懸命なあまり、もしくは時間に追われて、豊かであたたかな音楽的イメージとは真逆な「非音楽的」「機械的」な授業(レッスン)に陥る事だけは避けたいものである。

2- II b 楽曲解説の実践例

冒頭で述べた「音楽を奏でる喜び」を体現する保育者になるためには、楽曲の音楽的解釈を身に付ける必要があると私達は考えている。ここでは「初心者者の音楽的解釈の具体例」を挙げ、学生にアンケートを実施することにより「音楽的解釈の有用性」を検証した。

具体例とアンケートの題材として、本校で生徒の音楽的感性を育てる教材として長年に渡り幼児教育科の教材の一つとして取り入れている「ブルクミュラー 25の練習曲集」を用い、検証に至った。

25曲の中から、特に初心者でも音楽的解釈が掴みやすいと思われる【3、牧歌 9、狩り、14、シュタイヤー舞曲 15、バラード 25、貴婦人の乗馬】の5曲を選出した。

以下に初心者者の音楽的解釈の具体例と学生へのアンケート調査の内容と結果を掲載する。また「ブルクミュラー 25の練習曲」が「楽曲の音楽的解釈」を享受するのに長けている点を、ブルクミュラーという作曲家についてと共にはじめに述べる。

・作曲家ブルクミュラーについて

作曲者のフリードリヒ・ヨハン・フランツ・ブルクミュラー(1806～1874)はドイツのレーゲンスブルクで生まれた。デュッセルドルフで育ち、26歳でフランスに渡りパリで活躍した。当時のパリは産業や鉄道インフラ整備が進み、芸術活動においても華々しい熱気を帯びた国際都市であった。彼は同地の音楽文化の勢いに乗るようにしてピアノ教師、サロン音楽の作曲家、バレエ音楽作曲家として名を馳せた。当時の彼の作品の出版状況やバレエ界から寄せられたコメント、そして時の国王ルイ＝フィリップ1世よりフランス帰化許可状が与えられたところを見ると、彼は安定した仕事ぶりでパリの人々から信頼を寄せられていた事が窺われる。

この練習曲集の原題は『ピアノのためのやさしく段階的な25の練習曲- 小さな手を広げるための明解な構成と運指 作品100』である。この練習曲集が出版された1851年、ブルクミュラー

は作曲家としてバレエ音楽の成功等で既に一定の評価を獲得し、ピアノ教師としてベテランの域に達していた。彼は初心者達の為に当時流行していた音楽様式のエッセンスを伝え、同時に基本的なピアノの演奏技術の向上をはかる事の出来る良質な練習曲を作ろうとしたと考えられる。例えば同練習曲の「アラベスク」は同時代の作曲家ローベルト・シューベルト、同「バラード」「舟歌」等はフレデリック・ショパンやフランツ・リストを意識して、性格小品集や練習曲集が多く生まれた19世紀のピアノ文化最盛期にあった当時のロマン派ピアノ曲らしい表題を取り入れている。

また小さな手のピアノ学習者達でも親しめる様に、片手で1オクターブ以上の音域を押さえる曲は無く、調号は4つ迄、どの曲も2ページ以内に収められている。そしてピアノ教師としての長年の経験から、当時の慣習や楽器の特性に見合ったフレージングや運指が施されている。これらの事がこの練習曲集が世界中の多くのピアノ指導者や学習者に愛用されている所以であろう。

また、保育者を目指す学生へのピアノレッスンに際して、講師の私達も以下の理由で「ブルクミュラー 25の練習曲」が楽曲の音楽的解釈に長けていると感じている。

- ① 1曲ずつタイトルがついていて、演奏の際にイメージが持ちやすい
- ② 曲の技術的難易度が中級者にふさわしく、まとまりがあり、また曲の長さも1～2ページと、中級者にとって長過ぎず短過ぎず丁度良い
- ③ 曲中で使用されている和声(コード)が、大学ピアノ教本で使用されている和声(コード)と共通性(※注1)が有り、大学ピアノ教本を終えた学生が違和感を感じずに取り組める

※注1: どちらの教材も、全体に1度、4度、5度、属7等の基本的な和音が多く使用されて構成されており(展開形を含む)、難解な和音(コード)は使用されていない部分について

この「ブルクミュラー 25の練習曲集」は、昭和10年代から現在まで国内の各出版社から出版され続けている。つまり本校のみならず、長年、国内のピアノ学習者達、指導者達に需要が有り、愛用されている。

・初心者の音楽的解釈の具体例

3. パストラル(牧歌)

step1【調性と拍子とテンポを確認する】

- ・ト長調(長調 = 明るい)、8分の6拍子
- ・Andantino(アンダンティーノ) = アンダンテ(歩く速さ)よりやや速め、だいたい中庸な流れである

14

La pastorale
パストラル(牧歌)

Andantino (♩=56)

p dolce cantabile

step2【タイトルと曲中の音楽用語を確認する】

- ・牧歌 = 牧童が歌う歌。牧人や農夫の生活を主題とした歌や詩
- ・pastorale(パストラーレ)= ショームや笛を使う羊飼いの音楽を模した器楽曲、声楽曲
- ・dolce(ドルチェ)= 優しく、柔らかく
- ・cantabile(カンタービレ)= 歌う様に)

step3【曲の情景や場面を想像する】

- ・タイトル邦訳が「牧歌」となっているところから、牧歌的とは何かを調べてみると『牧歌が聞こえてくるかの様に素朴で叙情的な様子』とある。ゆえに穏やかでのどかな田園風景を連想できる

step4【表現方法について考える】

- ・pastorale(パストラーレ)は『ショームや笛を使う羊飼いの音楽を模した器楽曲、声楽曲』とある事から右手は笛の様に柔らかく伸びやかな音をイメージして弾くと良いであろう
- ・左手の和音は跳ねないで、なるべく控えめに滑らかに弾くと、穏やかでのどかな雰囲気にならう

に滑らかに弾くと、穏やかでのどかな雰囲気に近づいていくであろう

- ・旋律は単旋律で素朴であるが、広々とした土地に立ち遙か遠くを眺めているかの様な気持ちで、装飾音が施された旋律を伸びやかに歌わせて弾きたい



9. 狩

20

La chasse
狩(かり)

Allegro vivace (♩=96~108)

9

cresc.

f

6

12

p un poco agitato

17

23

stirile

29

p dolente

34

39

45

cresc.

51

perdendosi

pp

rallent.

step1 【調性と拍子とテンポを確認する】

- ・ハ長調(長調 = 明るい)→ハ短調(短調 = 暗い)→ハ長調→イ短調→ハ長調 8分の6拍子
- ・Allegro vivace(アレグロ ヴィヴァーチェ)= 生き生きと 急速に

step2 【タイトルと曲中の音楽用語を確認する】

- ・狩 = 狩猟 = 山や森等に出掛け、動物や鳥類を銃で撃ち獲物として仕留めたり駆除したりする事。この曲ではそのリズム感から、馬に乗って出掛けている様子が感じられる。
- ・cresc.=crescendo(クレッシェンド)= 段々強くする ・un poco agitato(ウン ポーコ アジタート)= 少し切迫して
- ・dolente(ドレンテ)= 悲しげに ・perdendosi(ペルデンドスイ)= 消えていく様に
- ・rallent.=rallentando(ラレンタンド)= テンポを段々遅くする

step3 【曲の情景や場面を想像する】

- ・冒頭からの急速な8分の6拍子のリズムからは馬に乗って駆けている様子が伝わってくる。続く右手の動きは銃声とその残響音を表しているかの様であり、左手に現れる和音の響きや動きは狩猟の時に使用した信号ラッパの音を連想させる
- ・13小節目から8小節は少し切迫した不安気なハ短調、またハ長調のテーマを挟んだ後、29

小節目から8小節(繰り返しを含み16小節)は、もの悲しい風情のイ短調になっているが、それら短調の部分はどんな場面であろうか。狩の途中に道に迷ったか、それとも何かアクシデントでもあったのか…。個々に想像して欲しい

・また再現部でテーマが生き生きと演奏された後、遠ざかって消えていく

step4【表現方法について考える】

・冒頭の2小節目からのクレッシェンド(段々強くする)は、4小節目のフェルマータが付いた付点2分音符に向かっていく。これは狩りに向かうエネルギーの高まりや「雄々しさ」の表現であるので、是非意識したい

・テーマの左手の和音は、まるで2本のホルンで演奏している様な響きであるが、この響きを主役として、右手は若干控えめに演奏すると良いであろう

・楽譜に記されているf(フォルテ = 強く)とP(ピアノ = 弱く)の差をしっかりと付けると演奏が立体的になる。ただ上記の左右のバランスは保ちながら、その差が付けられると良いであろう

・ただし短調になっている2箇所(13小節目～、29小節目～)は右手が旋律なのが明らかであり、左手を伴奏として控えめにするべきであろう

14. シュタイヤー舞曲(アルプス地方の踊り)

28

La Styrienne
シュタイヤー舞曲(アルプス地方の踊り)

Mouvement de valse (J. 148 ~ 160)

29

step1【調性と拍子とテンポを確認する】

- ・ト長調(長調 = 明るい)→ホ短調(短調 = 暗い)→ト長調→中間部はハ長調→再現部でト長調に戻る→ホ短調→ト長調 4分の3拍子
- ・Mouvement de valse(ムーヴモン ドゥ ヴァルス)=ワルツのテンポで

step2【タイトルと曲中の音楽用語を確認する】

- ・シュタイヤー = オーストリア：シュタイヤー地方(現在はシュタイエルマルクス)=アルプス山脈の東側に位置しているシュタイヤー地方(アルプス地方)の民族舞曲という事になるであろう
- ・grazioso(グラチオーソ)=優雅に ・dolce(ドルチェ)=優しく、柔らかく ・deciso(デチーゾ)=決然と

step3【曲の情景や場面を想像する】

- ・この曲は3拍子の踊り(民族舞曲)を表現してある。この舞曲とは一体どんな踊りであるか、イメージが湧くであろうか
例えば冒頭から装飾音が登場する。これはステップを表している？それとも踊りの伴奏をしている楽器の音？そして踊りそのものはどんな様子なのだろうか
- ・調性もいろいろと変化している上、左手に注目すると1拍目が八分音符だったり、付点二分音符だったり、四分音符だったり長さがそれぞれ違っている。それらが踊りやステップの変化と感じられる
- ・この曲について、例えば全音出版社の同練習曲集の楽曲解説(北村 智恵氏)では、この曲は色彩豊かなアルプス地方の民族衣装を着た大勢の男女が賑やかに歌ったり踊ったりしている様子を音で情景描写した音楽であり、冒頭の装飾音は鳴り響くシンバルの様な打楽器の音ではないかと推察している
- ・奏者自身がいろいろと考えてたり調べてみたりして、1番しっくりくるイメージを探せると良い

step4【表現方法について考える】

- ・幾つかの踊りやステップの違いを感じて弾きたいが、楽譜に記されている音符の長さや、スラー、スタッカート等に忠実に表現する事が第一歩である
- ・3拍子の2、3拍目は1拍目に比べて軽めに音を出したい。何故なら2、3拍目が重たくなると踊り辛くなってしまう事が想像できるからである
- ・冒頭4小節の後に続く最初の踊りは優雅で軽やかな感じであり、ホ短調になって雰囲気が変わるのが分かる。ここでの装飾音はリズムに乗って軽やかに鮮やかに入れたい。ここでもたついたら、やはり踊りが乱れてしまう
- ・再びト長調の滑らかな部分を経た後、中間部でハ長調となり、一層はつらつとなっている。右手の1拍目から2拍目への大きな跳躍が印象的であるが、ここは音が外れないかと心配し過ぎないで、思い切り表現したいものである

・だが大切なのは、この曲はどの場面も3拍子のリズムに乗っている感覚を忘れない事である

15. バラード

30

Ballade
バラード

Allegro con brio (♩ = 68 ~ 76)

15 *p misterioso*

31

step1 【調性と拍子とテンポを確認する】

- ・ハ短調 (短調 = 暗い) で始まり、中間部でハ長調 (長調 = 明るい) に変わり、再現部でハ短調 (暗い) に戻る 8分の3拍子
- ・ Allgro con brio(アレグめにロ コンブリオ)= 生き生きと、速めに

step2 【タイトルと曲中の音楽用語を確認する】

- ・ バラード = 19世紀ロマン派の性格的作品の中から現れた曲の種類で、物語性やドラマ性溢れる音楽を指す
- ・ misterioso(ミステリオース)= 神秘的な (一謎めいた) ・ dolce(ドルチェ)= 優しく、柔らかく
- ・ animato(アニマト)= 生き生きと
- ・ sf(スフォルツァンド)= その音を強めに弾く)

step3 【曲の情景や場面を想像する】

- ・ バラード = 物語性のある音楽という事で、まずどんな物語かを想像したい
- ・ 全体は速い流れである。そして冒頭の右手だけの和音に続く左手の旋律線の動きは確かに

ミステリオーソ（神秘的に一この場合は謎めいた感じ）である。不安に思いながら駆けている、又は何かに追われて逃げているかの様である

- ・また7小節目、9小節目の左手Aの音はsf（スフォルツァンド＝その音を強めに弾く）で、まるで物陰に隠れていた何かが突然目の前に現れた様なインパクトを与える
- ・中間部は一転して明るくなり、柔らかい雰囲気旋律が右手に現れる。ここは一体どんな場面になったのであろうか、是非想像したい。そして続く再現部で、元の短調の謎めいた場面に戻る。
- ・最後は消えていったかと思わせた次の瞬間、sf（スフォルツァンド＝その音を強めに弾く）で、また何かが目の前に現れたかの様な驚きを与えられて終わる

step4【表現方法について考える】

- ・謎めいた（不気味な）音色や雰囲気を作ると言われても実際にどうして良いか分かりにくいであろうが、実はこの左手の冒頭の旋律線自体が不気味さをもっているのである。つまりこれらをきちんと音の粒を揃えて弾く事で、不気味さが出てくる。その為に右手の和音も粒は当然揃えながら、微かに聞こえる程度に音量を落としたい。その左右のバランスを保ちながら、最終的に楽譜の指示通りに左手の旋律線もP（弱く）になれば、作曲家が描いた世界に近づくであろう
- ・そしてsf（スフォルツァンド＝その音を強めに弾く）も是非効果的に奏したい。曲の雰囲気作りにも大いに関わっており、立体的になり引き締まる。だが強過ぎて音が割れては不快なので、何度も試して丁度良い感じを探すべきである
- ・中間部は明るい長調となり、右手が旋律となり左手が伴奏となる。どんな場面かを想像しながら、旋律は優しく柔らかく滑らかに歌わせたい。そして伴奏である左手は旋律を引き立てる様に2、3拍目の和音をできるだけ優しく奏でたい。

25. 貴婦人の乗馬

step1【調性と拍子とテンポを確認する】

- ・ハ長調（長調＝明るい）→ヘ長調→ハ長調 4分の4拍子
 - ・Allegro marziale（アレグロ マルツィアーレ）
- ＝生き生きと速く、行進曲風に

step2【タイトルと曲中の音楽用語を確認する】

- ・※タイトルに「貴婦人」という言葉がなくて、ただの「乗馬」となっている版もある
- ・貴婦人＝身分の高い女性。上流階級の女性
- ・delicato（デリカート）＝繊細に、柔らかく

step3【曲の情景や場면을想像する】

- ・テーマのリズム感から、乗馬している様子が伝わってくる。上品な婦人が軽々と馬に乗り



こなして楽しむ様子である（画像：カール・ブリュローフ『貴婦人の乗馬』）

・へ長調の3連符の部分はどんな場面であろう。例えば、吹き抜ける柔らかなそよ風か、それとも婦人を乗せて気持ち良く馬が歩いている様子か、はたまた婦人が優しく微笑んでいる様子か…。個々にいろいろなイメージがもてるであろう

・再現部から、また軽やかに躍動する馬の蹄の音が聞こえてくる様であり、最後に向けて徐々に盛り上がっていくのを感じる

step4【表現方法について考える】

・テーマの、スタッカートが付いている八分音符の和音は、つい音が大きくなりやすいが、この強弱記号はあくまでP（ピアノ = 弱く）である。ゆえにこれらの和音は軽く、まるで貴婦人の様に上品な感じに跳ねたい

・三連符の動きもレガートで右手と左手をぴったりと揃えられると、障害物をひよいとしなやかに乗り越えるかの様である

・へ長調の部分はそれまでのリズムカルさから一転、流れに乗って繊細に美しく弾けると、がらりと場面が変わった感じがするであろう



・40小節目からの16分音符を見ると、つい焦りやすいが、細かい音符になっただけで聴く人は速くなった感じを受ける。むしろ慌てず落ち着いて弾いて、聴く人に音符が細くなった事を正確に伝えられた方がフィナーレ感が出るのである

・この曲の最後は単に曲の終わりでなく「25の練習曲の集大成」である。ff(フォルテシモ＝とても強く)の和音はしっかりと鳴らすが、和音と和音の間の休符も「しっかり(休符を感じて)表現」してこそ、集大成にふさわしいフィナーレとなるであろう

【考察】

以上、ブルクミュラー 25の練習曲より選んだ5曲の「楽曲解釈例」を掲載した。

繰り返しとなるが、これらの例が「音楽的解釈」の例と言って良い。ただ楽譜に並んでいる音符が弾ければそれで良いというのではなく、楽曲の曲想を捉えて、それにふさわしい表現となる様にする事である。その曲はどんな雰囲気のものか、どんな情景や気持ちを描いているのか…を楽譜から読み取り、どんなテンポ(速さ)や、どんな音の出し方がふさわしいのか…等、タイトルをはじめ、様々な手掛かりを元に想像力も働かせて音楽を捉える事である。

ステップ1～4のうち、まずステップ1と2は、楽譜に記されている「楽曲の正体を掴む手掛かり」を確認する作業である。まずこれらの作業をきちんと行い、少しでも楽曲の正体を掴んで欲しい。そこから自分なりに想像力をはたらかせ、曲の全体像を掴もうとする事がステップ3である。ここは楽譜を尊重しながらも、あくまでも個々に場面を想像したり物語を考えて、全体像を捉えて欲しい。時にはじっくりくるまで自分でいろいろと調べたり、イメージを探したり膨らませる事が大切である。ステップ4では、想像力を発揮し楽曲の全体像を理解した後、それらを表現する為に、どの様な点に気を付けて、どの様に具体的に演奏していくかという実践の段階である。ここは講師達の指導の力が必要になってくると思われる。

・学生へのアンケート実施

今回、本学ではこのステップ3にスポットを当て、上記のブルクミュラー 25の練習曲より5曲に対して画像や音源を使用した解説を作り、それらを使用して学生達にアンケートを実施した。

その内容は以下の通りである。

【アンケート実施】

- (1) 対象 愛知文教女子短期大学幼児教育学科の卒業学年で就職先の決定した女子学生 7 名
- (2) 時期と場所 2017年10月～2017年11月 愛知文教女子短期大学内
- (3) 方法
 - ① 学生達に上記5曲のうち1曲を練習させる

- ② 講師がその曲に対して下記の解説を行う
- ③ その後もう一度同じ曲を弾かせ、演奏意識がどのように変化したかアンケートした

【解説】

3. 牧歌
・この曲からどのような景色を想像するか話し合わせた後、写真を見せた
9. 狩
・1段目 左手の和音に対して一角笛の音源を聞かせる
・乗馬の画像を見せる
・調が変わる所を区切りとし、学生にどのような場面か想像させ、この曲にストーリーをつける
14. シュタイヤー舞曲
・ブルクミュラーが活躍したフランスでは当時もバレエが盛んであった事を説明。それをふまえ、バレエの画像を見せる
・シュタイヤー舞曲の中にも、バレエのステップの要素もあるかを考えさせた
・1段目 舞台のカーテンが左右に開き踊りが始まる場面
・2段目からの左手もバレエのステップ想像
・ジャンプの場면을想像
15. バラード
・バラードとは、物語、伝説に由来している事を話し、1段目 misterioso、31小節からの dolce の部分にはどんな物語のどんな場面がふさわしいか、どのような音色がふさわしいかを共に考えた
25. 貴婦人の乗馬
・乗馬の画像を見せる
・前述の「狩猟」とは違い、貴婦人の乗馬とはどのような乗馬シーンなのか学生達に考えさせる。実際に体現させる
・3段目 優雅な乗馬シーンから変わり、風が吹いて帽子が飛んでいった、水たまりがあり勢いよく飛んだ、等、学生達にシーンを考えさせる
・へ長調に転調してどのように変化があったか、景色や貴婦人の気持ちはどのように変わったか考えさせる

【結果】

1. 解説を聞く前に、曲の難易度についてどう感じていましたか	
どちらかというやさしい	3 名
どちらかというむずかしい	3 名
かなりむづかしい	1 名

2. 解説を聞く前に、曲のイメージが掴めていましたか	
何となく掴めていた	5 名
よく掴めていた	1 名
掴めていなかった	1 名

3. 解説を聞いた後に、曲が前より弾きやすくなりましたか	
これから弾きやすくなると思う	5 名
弾きやすくなった	1 名
分からない	0 名
回答無し	1 名

【考察】

授業では別の曲をやらなくてはならず、アンケートの為にこの練習曲を練習するのは些か

大変だった様である。担当した講師も本来の授業を遂行しなくてはならない中、大変であったと聞いている。それでも学生達は講師の楽曲解説を興味深そうに聴き、例えば画像を見て「想像していた通りの画像だった！」と目を輝かせたりする等、概ね楽曲に対して手掛かりを元にイメージを膨らませる事の大切さを理解した様だった。「これからは、ただ弾くだけでなく、いろいろと想像して雰囲気が出る様に弾きたい」とアンケートに感想を書いた学生もいた。

このアンケートの後、弾き歌い「雨ふりくまのこ」の動画を見せ、5番まである歌詞の内容を理解した上で、どんな気持ちで弾けばよいのか、どんな声で歌えばよいのか（優しい声、元気な声、柔らかい声等）考えさせたり、実際に演奏されている音源や画像を見せ、色々な演奏の形がある事を知ってもらった。また「ミックスジュース」という曲の歌詞を理解した上で歌詞にあった紙芝居を学生が作り、講師が伴奏して学生達が合唱、それに合わせて紙芝居を行った。紙芝居の絵を見ながら歌う事でより一層イメージが膨らみ、楽しく合唱出来た様子であった。

これら一連の行程で私達講師も、元々中級程度の技術と理解力のある学生達だったとは言え、改めて音楽的な素養に対する可能性を実感したのである。ピアノソロ曲も弾き歌いも音楽的なアプローチは同じなのである。実際は保育者として幼稚園や保育園に就職した後は弾き歌いがメインになるが、弾き歌いでも曲の歌詞や楽譜に記載されている様々な手掛かりから、その曲の雰囲気や情景を想像し、園児達に曲を思い切り表現して魅力をアピールし、一緒に楽しく歌ってもらえたら最高である。

3. まとめ

保育者となる学生達に身に付けさせたい音楽スキルとは、最低限「弾き歌い」の伴奏ができれば良いという単純なものではない。保育者が音楽活動をする時には心のゆとりと豊かさ、そしてそれらを支える音楽的感性とある程度の技術がなくては、本当の意味での音楽享受行為はできないのである。そして園児達にピアノを使用して生演奏で音楽を提供する事は、音楽そのものを伝えるだけではなく、ピアノという楽器をツールにした人間から人間への感性に訴えかける行為なのである。だからこそ生演奏の意義がある。そしてそれは実際に園児達の音感を発達させたり、たくさんの歌を覚えさせたりするだけでなく、ひいては人間が生きていく為に大切な「コミュニケーション能力」を培う事にも繋がるのではないかと推察する。ゆえに将来保育者となる学生達を指導する講師は、時間やカリキュラムに迫られる厳しい状況の中でも「非音楽的」「機械的」な授業(レッスン)にならない様に心掛けたい。

将来保育者になる学生達には、例えばドレミのドを覚えるところ、リズムを手で打つところからが全てが音楽、演奏の一部であるという事実を実感させながら臨ませたい。どんな初歩の練習も既に「表現、創造」の第一歩、それらに携わる喜びを感じながらポジティブな雰囲気の中で行える事が理想である。その中で学生の本当のやる気が引き出されるのではないだろうか。

慌ただしい保育現場の中でも、ピアノの前に座った途端、心にゆとりと豊かさがよみがえ

り「心地良い綺麗な音」を出そうとし「曲の雰囲気がよく伝わってくる」様に、相手に伝わる様に心を込めて弾こうとする保育者を育成できたら、園児達の豊かな情操の発達や成長がより期待できるのでないだろうか。保育者の現場でも、保育者を養成する現場でも、音楽はいつも私達に豊かな可能性や恩恵をもたらしてくれている事を感じながら、いつも新鮮な気持ちで「音楽の喜び」を共有していきたいものである。

4. 参考文献

- ・「音楽的成長と発達 誕生から6歳まで」ドロシー・T・マクドナルド & ジェーン・M・サイモンズ 共著 神原雅之・難波正明・里村生英・渡邊 均・吉永早苗 共訳 (溪水社)
- ・「ブルクミュラー二十五の練習曲 北村智恵 解説」(全音楽譜出版社)
- ・「ブルクミュラー 25の不思議 なぜこんなにも愛されるのか」飯田有抄・前島美保 共著 (音楽之友社)
- ・「新こどものブルクミュラー 25の練習曲」松本倫子 編 (全音楽譜出版社)
- ・「ハーバード大学は『音楽』で人を育てる」菅野 恵理子 著 (アルテスパブリッシング)

研究ノート

ニュージーランド英語に特有の発音と語彙について

笠井 紀世史

A Pronunciation and Vocabulary Guide to Kiwi English

Kiyoshi Kasai

Abstract

One of the things many people find difficult when they visit New Zealand is understanding the accent and pronunciation of the locals. English is the universally spoken language, and one of the three official languages (the other two are Maori and New Zealand Sign Language, NZSL). However, New Zealanders, colloquially known as Kiwis, certainly have a unique accent that can be challenging to those who aren't familiar with it. In this work, you will find some interesting words and pronunciation which are peculiar to New Zealand English, NZE.

1 はじめに

ニュージーランドで話されている言語の割合は、多言語使用者を含み、ニュージーランド英語（以後、NZE と略記）約95%、マオリ語約4%、その他となっており、これら上位2言語とニュージーランド手話が公用語になっている。オーストラリア、シドニーのポートジャクソンから渡ってきたアザラシ猟の一行が英語を話す最初の定住者とされており、このオーストラリア方言を土台として、その後英国の様々な地域（イングランド、スコットランド、ウェールズ、アイルランド）から入ってきたアクセントが交じりあって出来上がったものが今日 NZE と呼ばれている独特の音韻体系をもつ英語である。この稿では、NZE の発話上注意すべき音韻上の特徴と日常使われる独特の語彙について紹介したい。音声学の知識が無くても理解が容易になるように発音のカタカナ表記も所々取り入れてある点をご容赦願いたい。

2 発音

TripSavvy (旅行情報案内) のニュージーランド英語の項に次のような記事が載っている。
[How to Speak Like a Kiwi by Liam Naden Updated 08/05/17]

Kiwi Pronunciation Quiz

What is the meaning of the following words typically spoken by New Zealanders?

- | | | | | |
|----------|----------|---------------|--------|---------------|
| 1 A geen | 2 Ah Noi | 3 Chucken | 4 Cuds | 5 Differ Cult |
| 6 Ear | 7 Lift | 8 Noi Zulland | 9 Sex | 10 Troe |

NZE の発音上の特質を探りながら上記問題の解答を見つけていきたい。

NZE を紹介する website は沢山あるが、その中の一つに NZE の特性を次の 3 つに要約しているサイトがある。[*SPEAK NZ ENGLISH (ZILN DUNGLUSH) IN SIXTY SECONDS*] ① Lips together like a ventriloquist. (腹話術のように口を閉じて話す。) ② Narrow mouth even when smiling (口をすぼめて話す。笑うときでも。) ③ Pronounce a question as a statement and a statement as a question. (疑問文で語尾が下がり、平叙文で語尾が上がる。) ①、②には少し誇張もあるが、話すときに全体的に口の開け方が小さくなる傾向があり、このことが次に述べる母音の発音位置の変化に繋がっていると考えられる。③の現象は、high rising terminal (半疑問形) と呼ばれるもので、断定を避けつつも自説を強調する、もしくは感情を含ませつつ強調する効果があるとされている。しかしながら、言語圏が異なる者にとっては、話への割り込みが許されず、絶えず質問をされて発言の確認を取られているようで不快感を覚えることも起こり得る。③についても後ほど具体例を挙げて考察したい。

(1) 前舌短母音の位置変化 (a short front vowel shift)

ニュージーランドに到着して最初に気が付く発音上の特徴は、三つの前舌短母音 **TRAP** / **DRESS** / **KIT** (音声表記を表す際に用いられるキーワード。それぞれ下線部の /æ/, /e/, /i/ の音を代表している。大文字で表記する。) の発音位置が標準英語 (イギリス英語 Received Pronunciation, RP / アメリカ英語 General American, GA) と異なる点にある。実際の発音を聴くと、時計回りに一つずつずれている (図 1 参照)。これによりリスニング上、混乱を招く場合がある。

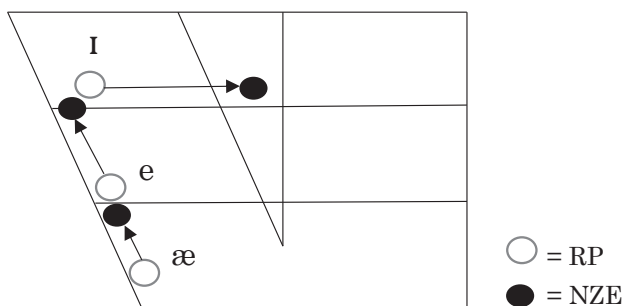


図 1

この図から分かるようにニュージーランド人がイギリスに行くと ham と言うと、イギリ

ス人には hem と聞こえ、同様に cattle は kettle と聞こえる。pen を求めると pin を渡され、pin と言えば pun に聞こえる。[「ニュージーランドのことば—NZ 英語完全解剖」第2章 p41] DRESS vowel は図1の位置よりもさらに引き上げられて、best が beast、bed が bead に聞こえるように FLEECE vowel /i:/ の音域に入る場合もある。筆者もクライストチャーチの大学で最初に受けた講義の中で ‘Any questions?’ の e の発音が *questions* 「クイースチョンズ」と聞こえ、Christians 「クリスチャンズ」と誤解して、どうして宗教が出てくるんだろうと不思議に思った経験がある。

この DRESS vowel の位置変化は誤解の例としてよく使われるので、いくつか挙げておきたい。[NZE]

例1) オーストラリアで働くニュージーランドの医師: ‘Are you feeling **better**?’

彼の患者: ‘I’m not feeling **bitter**.’ (気分はひどくないです。)

例2) ニュージーランド人の旅行者がロンドンの銀行から40ポンドを引き出す際に、

出納係り: ‘How do you want the money?’ (金種はどうしましょうか?)

旅行者: ‘Four **tens**, please.’ (10ポンド札を4枚お願いします。)

出納係り: ‘We don’t have four**teens**.’ (14ポンド札なんてありません。)

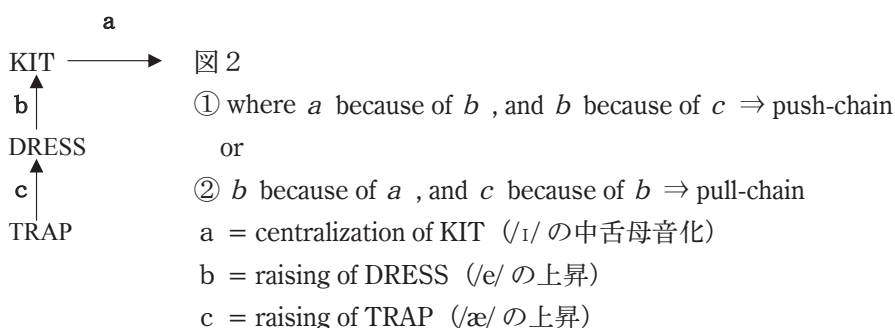
例3) ニュージーランドのラジオアナウンサー: ‘I received fifteen **litres** of support.’

(15通の *letters* が 150 *litres* と聞こえる。)

KIT vowel も ‘fish and chips’ を例に出してよく取り上げられる。標準英語で /ɪ/ で発音される母音が NZE では schwa /ə/ に近いが、それより口の大きさを小さめに半分くらいに開けて、ほとんど聞こえないくらいの曖昧な音で発音される。 *fush and chups* /fʻsh and chʻps 「フシュ・アン・チュプス」。対照的にオーストラリア英語 (AusE と略記) では FLEECE vowel に近くなり、長くはっきりと発音される。 *feesh and cheeps* 「フィーシュ・アン・チープス」。従って、NZE では KIT vowel と schwa の区別がほとんどなくなるので NZE に馴染みがない者には、offices と officers、woman と women の区別が難しくなる。

TRAP vowel は標準英語では /æ/ (アとエの中間音) と発音されるが、口の開け方が小さくなり舌の位置が上がることによって /e/ の音で発音される。従って、cat は ket 「ケット」、mat は met 「メット」、laptop、tablet はそれぞれ「レップトップ」、「テブレット」と聞こえる。海外からニュージーランドへ来た学生が diminutive の Pat ではなく Patrick と呼んでほしいと言っていたが、pet と聞こえるのが嫌だったかららしい。

NZE における前舌短母音の位置変化の連鎖はどのようにして起こったのだろうか。



カンタベリー大学のケビン・ワトソン博士は、「基本的には TRAP vowel が DRESS vowel に変化し、このことが DRESS vowel の位置変化を促し KIT vowel に近づけた。さらに KIT vowel は音の対比を保つため中舌母音化された。[*Linguistics @ Canterbury New Zealand English*: “not an accent; it is a disease.” posted on January 24, 2013]」と説明し、①の **push-chain** を採っている。

(2) 長母音の二重母音化

GOOSE vowel /u:/ は標準英語では円唇後舌母音（口笛を吹くときの口で、舌を奥に引き、奥の方から「ウ」と発音する。）であるが、NZE では舌の位置がかなり前に出て、口の開け方も小さくなる。また、onglide（先行する音の調音から問題とする音の調音に移行する際に発せられる音）が起こり、二重母音化が起こる。例えば、boot が boat に聞こえる。/æ/ が /e/ に、/u:/ が /əu/ に変わるため、野菜園へ「レタス」を買いに行った客が、自分の求めに応じて野菜園の女主人と一緒に働いている息子にレタスの植わっている位置（end row）を教えたと思ったのが、実は息子の名前（Andrew）を呼んだのだと後で分かったという話がある。

FLEECE vowel /i:/ は、舌が /ə/ の位置から /i:/ の位置へ onglide し、fleece は /flois/ ように聞こえる。

THOUGHT vowel /ɔ:/ は、offglide（出わり：音声器官がある音の調音から休止または次の音の調音に移る際に発せられる移行的な音）し、/oə/ となる。その結果、draw と drawer は語尾が同じように聞こえる。また、ニュージーランドの Auckland と米国カリフォルニア州にある Oakland がほぼ同音となるため、空港で行き先について混乱が生じたという話もある。

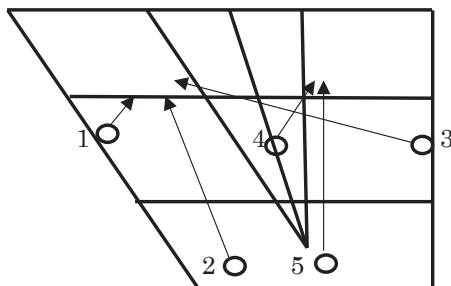
START vowel /ɑ:/ は二重母音化しないが、標準英語よりも舌の位置が中央よりやや前にきて口の開け方も小さくなる。IPA ではこの音を /a/ を逆さにした /ɛ:/ で表す。AusE やアメリカ英語で TRAP vowel /æ/ を使うことが多い語でも NZE では START vowel で発音する。

(3) NURSE vowel /ɜ:/ の発音変化

唇が平らであり開かない母音が多い NZE 中で、この母音は標準英語の /ə:/ の位置より舌の位置を前方に異動させ、唇を丸めた状態で発音する。GOOSE vowel /u:/ の音に近くなり、nurse は noose 「ヌース」、terms は tombs 「ツームズ」に聞こえる。

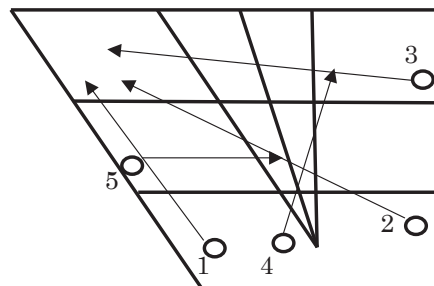
(4) 狭め / 上昇二重母音の発音変化

図3 標準英語の狭め / 上昇二重母音



1 FACE/ei/ 2 PRICE/ai/ 3 CHOICE/ɔi/ 4 GOAT/əu/ 5 MOUTH/au/

図4 NZE の狭め / 上昇二重母音



NZE では、MOUTH については舌がほとんど上部へ移動せずに中央の位置に動くだけなので狭め/上昇二重母音 (closing/ascending diphthong) ではなく集中二重母音 (centring diphthong) に分類する方が正確であろう。最後に唇を丸めることもないので schwa/ə/ に近い音で終わる。

FACE は、標準英語では /ei/ と発音されるが、NZE 或いは AusE では /æi/ になる。次のような today を to die と取り違えるジョークは、よく例として示さる。第二次世界大戦中の北アフリカ戦線におけるイギリス人将校と若いオーストラリア兵の会話：‘Good morning young man,’ says the British officer, ‘Did you come here *to die*?’ ‘No Sir,’ replies the young Australian, ‘I came *yesterday*. (Oi kime yester-die.)’

PRICE は、NZE では /ae/ 或いは /œ/ と発音される。子どもが母親にアイスクリームをねだると次のようになる。‘Can *oi boi* an *oice* cream, Mum?’

(5) 集中二重母音 (centring diphthong) の発音変化

NZE における最も顕著な発音の同化が NEAR-SQUARE merger である。過去において、この 2 語には明確な発音上の区別があったが、21 世に入り、特に若い世代ではこの区別がなくなり、すべて /ia/ と発音される。従って、air は ear、bear は beer、share は sheer、chair は cheer と同音になり、Air New Zealand は Ear New Zealand に聞こえる。ニュージーランドの子どもたちの間で人気のある謎々に次のようなものがある。‘What animal can you drink?’ 答えは勿論、beer である。両音の聞き分けについては、たいていは文脈である程度推測できるが、次に挙げるような場合は混乱を生じる。‘Do modern students really work hard or do they rarely work hard?’

(6) /ɪ/ の発音変化

最後の音節に来る場合と母音の直後に来る場合の /ɪ/ (dark/ɪ/) は、NZE では舌先が歯茎から離れて母音化 (L-vocalization) し、FOOT vowel/ʊ/ に近い音になる。従って、feel は ‘fee-u’ に railway は ‘rai-u-way’ に聞こえる。よく引用される例は、‘a drink of mook (milk)’ であろう。しかしながら /ɪ/ が落ちることにたいしては、あまり抵抗が無いようで、次に挙げるような沢山の例が示されている。‘aw-ways’ (always)、‘vunnerable’ (vulnerable)、‘oney’ (only)、‘warnut’ (walnut)、‘I teyah wot’ (I’ll tell you what) [NZE]

/ɪ/ そのものの発音が変化するだけでなく、/ɪ/ の直前に来る母音にも同化現象が発生する。先ほど例に挙げた milk の場合、まず /ɪ/ が母音化し、次に直前の母音と同化して mook となる。DRESS vowel と TRAP vowel は同化して区別がなくなり、sell と Sal、celery と salary は同一音になる。Wellington は wallington、alps は elps となり、人名の Ellen と Alan も発音上の区別がつかなくなる。LOT vowel/ʊ/ と GOAT vowel/əʊ/ も /ɪ/ の前では同化し、結果として doll と dole の区別がなくなる。また、/ɪ/ の前にくる FOOT vowel と GOOSE vowel が同化して同音となり、full と fool、pull と pool はそれぞれ「フウ」、「プウ」に近い音になる。

real、reel、rill の 3 語についてもすべて同音であるかのように「リウ」に近い音で発音される。雑誌に送られた投書の中に次のような記述がある。「/ɪ/ を発音するためには、舌に少し力を入れる必要がある。これはどうも、ニュージーランド人には難しいことのようなのである。その結果、ニュージーランド人の話し言葉はひどく醜く、しばしば不明瞭に聞こえる…。し

たがって、pool、pull、pill、そして pall さえも、すべて pooh (軽蔑した口調で「なんだ、あはれは」と発音される。bull、bill、ball はすべて booh となる…。」[「ニュージーランドのことば—NZ 英語完全解剖」第2章 p36]

(7) /r/ の発音変化

NZE では、イギリス英語と同様に /r/ の発音について次の三つの現象が起こる。①音節末尾や子音の前で /r/ 音を発音しないノン・ロウティック (non-rhotic) : car, card, butter など。②つなぎの R (linking /r/) : 次に母音がきて /r/ が前後母音に挟まれる形になるとき発音するわたり /r/ 音。例えば、通常は far を /fe:/ と発音し (non-rhotic)、/r/ を発音しない話者が、far away を far-r-away /fe:rəwəi/ と発音する際に生じる。これは語中でも起こる。bearing の原形である bear の /r/ は発音されないが、母音で始まる接尾辞 ing が付くと発音される。③侵入の R (intrusive /r/) : 綴り字に対応する /r/ がいないときに母音と母音の間に挿入する /r/ 音。例えば、Cuba is を /kyú:bə rɪz/ と発音する際に生じる。①、③についてはアメリカ英語には当てはまらない。②についてはアメリカ英語では通常 /r/ を発音するので r-linking は問題にならない。

/r/ 音が /t/ 或いは /d/ と組み合わせあって /tr/、/dr/ となると、/t/ 音が /ʃ/、/d/ 音が /ʒ/ と破擦音になる傾向がある。従って、/tr/ は /ʃr/、/dr/ は /ʒr/ となり、tree は「チュリー」、dream は「ジュリーム」に聞こえる。また、/s/ 音の /ʃ/ への摩擦音化も進んでおり、/st/ は /ʃt/、/sk/ は /ʃk/ になり、students は /ʃʃu:dənts/ 「シュチュードンツ」に school は、/ʃku:ʊ/ 「シュクウ」になる。/str/ は /ʃʃr/ となり street は「シュチュリーツ」に聞こえる。

(8) /hw/ の脱落

ニュージーランドへの最初の移住者たちは明確に 'whales' と 'Wales'、'which' と 'witch'、'whine' と 'wine' を区別して発音したが、今日の NZE では南島のスコットランド出身者の影響が残っている地域を除いてはこの区別はほとんど消えてしまっている。従って、強調のために使われる場合 (Watch out! 「あぶない!」では /w/ ではなく、/hw/ が使われる。) 以外では、すべての語に /w/ が使われる。

ウェールズ出身者を祖先に持つニュージーランド人がラジオでウェールズについて盛んに「危機」とか「重大な結果」などという言葉が出てくので心配していたら実はクジラの現状についての話題だと分かったというエピソードがある。公共の放送等に従事する者は心すべき問題であろう。

(9) grown の2音節化

grown や thrown が tak-en や fall-en などの過去分詞からの類推で grow-en、throw-en と2音節化され e が /ə/ と発音される傾向がある。すでに約半数の人々から誤用ではないとされている。

(10) 半疑問形 HRT (High Rising Terminal: Non-question final rising intonation)

他地域からの訪問者: 'Can you tell me where the grocery is?' ↗

ニュージーランド人: 'There's a dairy down a block. ↗ And then you turn right. ↗

And it's second on the left. ↗

'dairy' を辞書 [NOD] でひくと、'a small local store selling milk and groceries etc.' とある

ので、他地域の grocery store とほぼ同義であるらしい。問題は、質問に答えているニュージーランド人が、相手に場所の説明をしているのになぜ質問をしているような上昇調のイントネーションを用いているかである。上昇調には疑問、ためらい、未決定、不決断、不確かなどの要素が含まれているので、場所を尋ねた訪問者はおそらく「この人はあまりこの辺りのことを知らないな。」と判断して、‘Thanks, I’ll check with someone else.’ とでも言ってその場を離れるだろう。答えている地元のニュージーランド人は相手がなぜそのような反応をしたか分からずに戸惑ってしまったと思われる。そのニュージーランド人が、断定的な陳述をするときに用いる下降調ではなく上昇調のイントネーションを使ったのは丁寧さを示すためであり、相手が必要としている情報をきちんと伝えているか、相手は自分が言っていることを十分に理解しているかを確認するためであった。HRT は話の始めに相手の関心事や価値観を探り、相手との良好な関係を確立するためにも用いられる。

(11) マオリ英語の特徴

基本システムは一般の NZE と同じであるが、次のような特徴がある。

- ① 最大の特徴はそのリズムにある。マオリ語の語構造は日本語と似ていて子音が連続することはなく、すべての語と音節は母音で終わり、ほぼ同じ長さである音節単位でリズムがとられる。従って、弱形が使われることが多い前置詞や代名詞などの機能語でもマオリ英語では強形が使われ、母音がはっきりと発音される。これに対して、一般の英語は音節の長さがそれぞれ異なり、ストレス単位でリズムがとられるためマオリ英語には独特のリズムが生まれる。また、子音群がいくつも現れ、多くの語が子音で終わる英語の中でマオリ語の借用語が使われると魅力的な響きを与えることになる。マオリ語からの借用語については後ほど紹介したい。
- ② 半疑問形 HRT が一般の NZE より多く用いられる。
- ③ NZE の話し言葉の特徴の一つに語尾に ‘eh’ を付けることがよくあるが、マオリ英語ではこの ‘eh’ がより普通に用いられる。付加疑問の代役をしたり (Great meal, eh? 「ごちそうだね。」)、you know や you see と同様の「親密さの合図」として平叙文に付け加えられる。(I really like that dress, eh? 「ねえ、そのドレス本当に素敵よ。」) [「ニュージーランドのことば—NZ 英語完全解剖」第3章 p104]
- ④ マオリ語由来の地名によく見られる ‘wh’ は /f/ と発音される。Whitianga /fitia:ŋə/, Whangarei /fa:ŋərei/ など。

3 語彙

ここでは、NZE 及び AusE に特徴的である指小語尾 diminutive を使用するハイボカリズム ‘hypocorisms’ (愛称、赤ちゃん言葉(特に成人による使用)) 及びマオリを起源とする語を含めニュージーランドにおける日常語の中で特に使用頻度が高い語彙を取り上げて考察したい。

(1) ハイボカリズム (縮小形)

辞書的な意味でハイボカリズムを定義すると「接尾辞 ‘y’ 或いは ‘ie’、時には ‘o’ を伴

う短縮形の用法」となる。これによると、「知ったかぶりをする人 know-all」は ‘smarties’、‘灯油」は ‘kero」になり、人に使うと ‘Charlie’ (Charles) や ‘Dotty’ (Dorothy) などの愛称となる。

‘o’ で終わる縮小形は AusE により多く見受けられる。‘rego’ (registration「登録」)、‘servo’ (service station「ガソリンスタンド」)、‘ambo’ (ambulance「救急車」)、‘avo’ (avocado「アボカド」)、‘this arvo’ (this afternoon「今日の午後」)、‘on compo’ (in receipt of workers’ compensation「労災保険受給中」)、‘smoko’ (a tea break「喫煙休憩時間・お茶の時間」)、‘journo’ (journalist「ジャーナリスト」)、‘wino’ (someone addicted to cheap wine「安酒ばかり飲むアル中」)。

次に挙げる語は幼児語的で子供っぽいと指摘される。‘hottie’ (a hot-water bottle「ゆたんぽ」)、‘cardy’ (cardigan「カーディガン」)、‘lolly’ (lollipop「飴・キャンディー」)、‘nappy’ (napkin「おしめ」)、‘crappy’ (「くずのような・くだらない」←crap「糞・くず」)、‘horsey’ (「おんまさん」)、‘doggie’ (「わんわん」)、‘duckie’ (「アヒルちゃん」)、‘littlie /litəli:/ (a young child「幼児」) 文中では次のようになる。‘If the kiddies (children「子どもたち」) put on their cardies (cardigans) and eat their veges (vegetables「野菜」) they can go to kindy (kindergarten「幼稚園」).’

昔から使われている語もある。‘toughie’ (a tough person or problem「タフな人、難問題」)、‘sickie’ (sick leave「(時には仮病による) 病気休暇」)、‘mozzie’ (mosquito「蚊」)、‘ratty’ (irritable「怒った」)、‘golden oldies’ (「昔懐かしいメロディー」)、‘jelly’ (gelignite「ゼラチンダイナマイト、ゼリグナイト: 爆薬の一種、ニトログリセリンのゼリー状の塊が主成分」)、‘brickie’ (bricklayer「煉瓦職人」)、‘pokie’ (poker machine「スロットマシン」)

地名も縮小される。‘Aussie’ (Australia オーストラリア)、‘Tazzy’ (Tasmania タスマニア)、‘Brizzy’ (Brisbane ブリスベン)、‘Dunners’ (Dunedin ダニーディン)、‘Welly’ (Wellington ウェリントン)、‘the Takas’ (the Rimutaka Ranges リムタカ山脈)、‘Pori’ (Porirua ポリルーア)、‘Tiki’ (Opotiki オポティキ)

これら縮小形は政治等の分野にも現れる。‘pollies’ (politicians 政治家)、‘bennies’ (beneficiaries 信託受益者、年金・保険金・遺産などの受取人)

[カンタベリー大学エリザベス・ゴードン博士による The Press への寄稿文 ‘NZ English – is it really just baby talk?’ 2010年8月7日付より]

(2) マオリ語からの借用語

TVNZ などの放送メディアはマオリ語の語彙や名称の発音、とりわけ地名の発音については、マオリ語を歪めるおそれがある英語化された形態ではなく、マオリ語そのものにできるだけ近い発音を用いることを方針にしている。その結果、極度に崩れたマオリ名の英語化はほとんど見られなくなった。

NZE に対するマオリ語の影響は、主として次の3分野に分かれる。①マオリ族の社会や生活に関する語 ②土着の植物相、動物相に関する語 ③地名等の固有名詞 それぞれについてニュージーランド社会で日常よく使われている主な語を挙げてみたい。

① kiwi (キーウィ) 本来はニュージーランド産の飛べない夜行性走禽を指すが、ニュージーランドの国鳥であり、ニュージーランドを代表するシンボルになっている。また、大

文字で始めて Kiwi、ニュージーランド人 (New Zealander)、ニュージーランド・ドル、ニュージーランド英語などを表す。オスが巣作りや子育てをすることから、ニュージーランドでは家事に協力的な夫を「キーウィ・ハズバンド (kiwi husband)」と呼ぶ。

haka (ハカ) マオリ族の出陣踊り、ラグビーチームの踊り

hangi (ハングイ) 地面に穴を掘って作ったオーブン、これを使った料理

kai (カイ) 食べ物

kete (ケテ) 主に亜麻で編んだかご

mana (マナ) 権威、権力、威光 ex. This success further increased her *mana*.

marae (マラエ) 集会所として用いられる囲い地

pa (パー) マオリ族の(防御柵をめぐらした)丘の上の村

Pakeha (パーケハ) ヨーロッパ系の白人

poi (ポイ) 長短のひもがついた小さく軽いボールで歌やダンスに合わせてくるくる回す。

puku (プク) 腹、胃

tangi (タングイ) 葬儀、哀悼歌

tapu (タブ = taboo) 首長や神の聖性を表すとともに禁忌・禁止をも表す。

tiki (ティキ) 人類を創造した神であるティキの像(お守りとして身に着ける。)

wahine (ワヒネ) 女性、妻

whare (ファレ) マオリ人の家、共同家屋、羊毛刈り込みのためなどの仮小屋

② 木と灌木を表す語

kauri (カウリ) カウリマツ (kauri pine)、ニュージーランドに自生するナギモドキ属の常緑高木で、樹脂 (カウリコパール) を採る。

manuka (マヌカ) オーストラリア・ニュージーランド原産の背が低い常緑灌木で、葉は芳香性が強く、白かピンクの花が咲く。(red) tea-tree とも呼ばれる。

matai (マタイ) オーストラリア・ニュージーランド産のマキ、建材

nikau (ニーカウ) ニュージーランド原産のナガバケヤシ (nikau palm)、特に寒い気候に適応した珍しいヤシで、「世界でもっとも南に生えるヤシ」とも言われている。最大で高さ 15m、葉の長さ 4 m ほどにもなる。

pohutukawa (ポーフツカワ) 真紅の花をつけるニュージーランド原産のフトモモ科常緑樹、海岸の砂浜や岸壁に生え、成長は遅いものの、高さは 15 ~ 20m にもなる。クリスマスの頃に咲くことから、「クリスマスツリー」とも呼ばれる。

ponga (ポングア) = silver (tree) fern ニュージーランドに自生するシダの 1 種、ニュージーランドはシダ植物の宝庫であるが、とりわけ樹木ほどに成長するシダ植物が自生しているのが特徴となっている。ponga は「ツリー」と言われているとおり、大木に成長する(木生シダ)。銀白色の葉は神秘的でマオリ人の信仰の対象とされた。ニュージーランドのアイデンティティの象徴であり、1956年から国章に使われている。

rata (ラーター) 深紅の花をつけるニュージーランド産のメトロシードロス属 (オガサワラフトモモ属) の高木、その暗赤色の堅材

rimu (リム) ニュージーランド産マキ科リムノキ属の高木、家具・建材

totara(トータラ) ニュージーランド産のマキの一種、材は家具・建築用
鳥を表す語

kakapo(カーカーポー) フクロウオウム (owl parrot)、ニュージーランド産、国際保護鳥
moa(モア) 恐鳥、絶滅したニュージーランド産の無翼の巨鳥、最大の種では3 m近い体
高に成長する最大の鳥類であった。

pukeko(プーケコ) セイケイ (青鷄 swamphen)、クイナ科の鳥

takahe(タカヘー) ノトルニス、ニュージーランド産、飛力のないクイナ科の近年絶滅し
た鳥

tui(ツイー) エリマキミツスイ (parson bird)、ニュージーランド産

weka(ウェカ) コバネクイナ、ニュージーランド産、翼の退化したクイナの一種

魚貝を表す語

hapuka(ハープカ) スズキ科の食用魚

moki(モキ) ユメタカノハダイ、ユメタカノハダイ科の食用魚

paua(パーウア) ヘリトリアワビ、ニュージーランド産、貝殻は飾り・釣針として用い
られる。

pipi(ピピ) ピピ貝、ニュージーランドで食用とするイソハマグリ科の二枚貝の一種

tarakihi(タラキヒ) タラキヒ、ニュージーランド産のタカノハダイ科の食用魚

toheroa(トヘロア) ニュージーランドのイソハマグリの一種

昆虫を表す語

huhu(フフ) カブトムシ、幼虫は食用になる。

katipo(カティポー) セアカゴケグモ (redback spider)、ニュージーランド産のヒメグモ科
の小さな毒グモ

weta(ウェーター) ニュージーランド産の大型のカマドウマ科の昆虫

③ 地名

ニュージーランドの地図を見ると分かるように、オークランド、ウェリントン、クライス
トチャーチといった大きな都市にはヨーロッパ系の名前が付いているが、それらを除いて
北はレインガ岬から南のティワイ岬に至るまでマオリ語の地名が地図の隅々まで行き渡っ
ている。

(3) その他の語彙と表現

クライストチャーチ市にある CPIT(クライストチャーチ工科大学、現在は Ara) で
TESOL(英語教授法)の講義担当者に日常よく使用する語及び表現の書き出しを依頼した際
のリストがあるのでその一部を紹介したい。

ankle-biter – toddler, a small child 小さな子ども、ちびっ子、砂利

bach – a casual holiday home, often by a beech or river 海岸などの小さな家、小別荘

bitser – mongrel dog 雑種犬

Chrissy pressies – Christmas presents クリスマス・プレゼント

cuppa – cup of tea, as in cuppa tea 一杯のお茶

down the gurgler – down the drain 無駄になって、水泡に帰して

dunny – unsewered outdoor toilet, any toilet (屋外の) 便所

duvet – quilt, doona 羽毛の上掛け

flat – apartment, a name for rental accommodation that is shared アパート

footie – rugby union or league, as in ‘going to watch the footie’ ラグビーリーグ

full tilt – going very fast, using all your power, as in ‘he was running full tilt.’ 全速力で、全力を挙げて、フル回転で

good as gold – extremely well-behaved, (indicating approval, agreement, etc.) Fine, OK, No worries. 子どもが大人しい、行儀が良い、問題なし、OK

greasies – fish and chips の俗語表現「脂ぎったもの」

happy as larry – very happy めちゃくちゃ幸せ

hard yakka – hard work つらい仕事、重労働

kick the bucket – die 死ぬ、くたばる。語源は、「首つり自殺をするときにバケツ (bucket) の上に乗り、首をロープにかけてからバケツを蹴っ飛ばすところから」と言われているが、諸説がある。

lift – elevator エレベーター

loo – bathroom, toilet トイレ

lurgy / lurgi – a fictitious, highly infectious disease; often used in the phrase "the dreaded lurgy", sometimes as a reference to flu-like symptoms 病気、病、流感、イギリスの人気ラジオ番組 The Goon Show で作られた架空の伝染病より。おそらく allergy の変形であろう。

motorway – freeway 無料自動車専用道路

naff off – go away, get lost, leave me alone うせろよ、消えちまいな、ほっといて

piece of piss – piece of cake, easy, not hard to do わけないこと

pong – bad smell, stink 悪臭

quack – medical doctor 医者・軍医、必ずしも軽蔑的ではない。

rattle your dags – hurry up, get moving 急ぐ、早くやる。dags というのは羊の臀部の羊毛に鈴のように絡まった糞のこと。羊が走るとそれらがコミカルに揺れることからきている。

rust bucket – decrepit motor car ぼろ車、ひどくさびついた車

scull – consume, drink quickly 一気飲みする

scroggin – trampers’ high energy food including dried fruit, nuts, chocolate, etc. 徒歩旅行者が持ち歩くレーズン、ナッツ、チョコレートなどを用いたスナック

shandy – drink made with lemonade and beer シャンディー、ビールとレモネードの混合飲料

shark and taties – fish and chips を表す俗語、tatie = shortened form of potato with diminutive ‘-ie’ (tatie は potato の短縮形)

sparkie – electrician 電気工

sprog – child 子ども、赤ん坊、ガキ、新兵、新米、語源は、sprig 或いは sprout

stubby – small glass bottle of beer ビールの小瓶

take-away – food to be taken away and eaten, fast food outlet 持ち帰り用の料理 (を売る店)、

ex. Let's have a *take-away* tonight.

tiki tour – scenic tour of an area 特にあてもなくニュージーランドの自然を楽しむ観光旅行

togs – swimsuit, bathing costume 水着、男性用女性用関係なく、競泳水着から水泳パンツ、ビキニなど、どんな水着にも使う。

up the duff – pregnant 妊娠して、出来ちゃった

whinge – complain, moan 泣きごとを言う、愚痴をこぼす、めそめそする

4 まとめ

イギリス圏なので生粋のイギリス英語が話されていると思い込んで出掛けると、意外に訛りの多い言葉に出会って少々戸惑うことになる。母音が入れ替わるので街に出て地元の人と話をすると、初めは何を言っているのかまったく理解できない場面も多々ある。でもこれも個性だと思えば次には無性に真似をして話したくなる。大学や語学学校の教員はイギリスで教育を受けた人が多く、完璧な RP を話すので、本格的にイギリス英語に取り組もうと思っている人も何も心配はない。国民性はおおらかでフレンドリーであり、楽天家で親切な人が多い。本年度から本学においても「ニュージーランド研修」が実施される。ニュージーランドで最先端の保育を学ぶとともに、キーウィ英語にもぜひ触れて地元の人たちとの交友を楽しんでもらいたい。

References

- 著者 Elizabeth Gordon & Tony Deverson 訳者 沢田敬也・小原純子 1998
「ニュージーランドのことば—NZ 英語完全解剖」 オセアニア出版社
- Jennifer Hay, Margaret MacLagan and Elizabeth Gordon 2008 *DIALECTS OF ENGLISH NEW ZEALAND ENGLISH* Edinburgh University Press [NZE]
- 小栗敬三 「英語発音の知識」 1976 篠崎書林
- Tony Deverson and Graeme Kennedy 2012 *NEW ZEALAND THE FUTURE OF NEW ZEALAND ENGLISH OXFORD DICTIONARY* Oxford University Press
- Jim Johnson 2016 *Australia & New Zealand Accent* Accent Help
- Elizabeth Gordon 2010 *NZ English-is it really just baby talk?* Saturday, August 7, 2010 MAINLANDER C7
- Elizabeth Gordon 2013 *Story: Speech and accent Te Ara—the Encyclopedia of New Zealand* Retrieved August 14, 2017, from <http://www.TeAra.govt.nz/en/speech-and-accent>
- Christian Langstrof 2006 *Vowel Change in New Zealand English—Patterns and Implications* Retrieved August 16, 2017, from https://ir.canterbury.ac.nz/bitstream/handle/10092/930/thesis_fulltext.pdf?sequence=1&isAllowed=y
- Greg Goodyer 2012 *SPEAK NZ ENGLISH IN SIXTY SECONDS !* Retrieved July 5, 2017, from

https://www.youtube.com/watch?v=lm9Ez_5LQNU

New Zealand English: “not an accent; it is a disease.” posted on January 24, 2013 Linguistics @ Canterbury Retrieved July 10, 2017, from <https://uclinguistics.wordpress.com/2013/01/24/new-zealand-english-1/>

「ニュージーランド英語の発音」 Retrieved September 25, 2017 from <http://www.rondely.com/zakkaya/hatu/nz.htm>

「ニュージーランド英語」 Retrieved October 1, 2017, from <http://www.rondely.com/zakkaya/sekai/nwz.htm>

研究ノート

豊かな言葉を育むために

(現場経験を通して)

加藤 智子

Building Expressive Vocabulary for Pre-schoolers —Through Hands-on Experiences at the Jobsites—

Tomoko Kato

Abstract

What parents and teachers who are involved in the care of children say and do has great influence on their growth process due to the fact that early childhood care is conducted through environments. Above all, adults play an important role in aiding young children's language development. Words are often used accompanied by emotions. It is, therefore, essential to provide a proper environment in which children growing mentally as well as physically can learn language in an appropriate manner. Thus the author compiled a report on what she had practiced in a Domain 'Language'. It reflects her 38 experience in kindergartens and therein lies what teachers should be and cherish for the purpose of building expressive vocabulary for pre-schoolers.

キーワード：幼児期の教育、環境、言葉、幼稚園

1 はじめに

幼稚園教育要領の総則において、幼稚園教育の基本として「幼児期の教育は生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、幼稚園教育は、学校教育法に規定する目的及び目標を達成するため、幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とする」とある。

幼児期の教育は「環境を通して行うもの」である。しかも、その環境は学校教育法第22条にあるように「適当な環境」でなくてはならない。その環境は、教師や保護者など子どもの

周りにいる大人が意図して整えていくものである。

そう考えると、例えば周りの大人が美しい言葉を使っていれば、それを耳にした子どもは必然的にそうした美しい言葉を使うようになるに違いない。互いを尊重し合いながら交わす言葉の中に子どもがいるとするなら、その中で育つ子どもは思いやりに満ちた言葉を使うようになるに違いない。殺伐とした環境の中よりも潤いのある環境の中にいた方がいいに違いないと思う。

学生時代は、環境を漠然と捉えていたが、幼稚園教諭となって子ども達と生活するようになり、言葉による環境の大切さを感じてきた。38年間、幼稚園教諭として子ども達と関わってきた中での実践を基に「豊かな言葉を育むために」教師はどうあったら良いか、何を大切にしたら良いかを考えていきたい。

2 幼稚園の教師としての保育実践

(1) 絵本との関わり

私は幼少期、父親の膝にすっぽりと埋まって絵本や体験話をしてもらった。父親の感情の入った豊かな声での話に笑い、泣き、悔しがり、怒り、といった心を揺さぶられる体験をした。そんな環境にあっただけ絵本や物語等の「お話」が好きになり、読んで聞かせることを得意とした。

○研究保育

新任で勤務した幼稚園の園内研究が絵本についてであったことも幸いした。研究の機会が常にあり、研究保育では必ず「絵本」を使った保育が求められた。年齢、時期、興味に合った絵本を選び、立案して臨んだ。先輩の先生方から、絵本の持ち方、めくり方、声の大きさ、間の取り方等も含め、子どもの様子を見ながら読み進めているか厳しく指導していただいた。先輩方の研究保育では、自分にはない雰囲気や醸し出し方や子どもとの一体感を目の当たりにし、感動しながら学びの機会を得た。当時2年保育であったので、4歳児、5歳児にふさわしい絵本を話し合いながら選び、指導計画の中に位置付けることも学んだ。

○失敗からの学び

私は絵本の中の登場人物になり切りすぎて失敗をしたことがある。4歳児の担任時子ども達は狼や悪者の出てくる「おおかみと七ひきのこやぎ」「三びきのこぶた」「さんびきのやぎのがらがらどん」等の話が大好きで、読み聞かせをした時のことである。

十分な間を取って、狼になり、狼の声を出した時、一人の女の子が「こわいよー」と泣き出してしまったのである。絵本の世界に浸りきっている子どもにとって、あまりにも臨場感あふれる演出は、怖さが先立ち、絵本の楽しさにはつながらなかったと思う。ほどほどに読み進める必要があると思った。何度か読み進めていくうち、その女の子も先生が声を出しているということが分かるようになり、怖い声にも慣れて私の声も絵本も楽しむことができるようになっていった。

○絵本を生活の中で活用して

入園して慣れてくると、子ども達は園庭を所狭しと駆け回る。3歳児は教師に追いかけて

もらうことも、教師を追いかけることも、その触れ合いによって楽しいと感じられるからこそ、追いかけてこや鬼ごっこを好む。3歳児は体の動きがうまくいかずに何でもないところでよく転ぶ。そこで、この絵本は子ども達の心を捉えるに違いないと何回も読んでいたのが松谷みよ子作「いたい いたいは とんでいけ」である。

むっちゃんむがつく むうざえもん

ころんで おひざをすりむいた

あんあんあん あんあんあん いたいいたいはとんでいけ

ちちんぷいぷいとんでいけ むこうのおやまへとんでいけ・・・

転んだ子どもを膝に乗せ、「痛かったね、びっくりしちゃったね」と話しかけ、すりむいたところを撫でながら上記のようにリズムカルに歌うように「いたいいたいはとんでいけー」と語り始めると絵本を読んでもらったことを思い出してか、泣いていた子が笑顔になっていった。周りに集まった子ども達も笑顔でその様子を見ていた。絵本の力を借りて、子ども達を笑顔にすることができた体験の一つである。

○絵本を要約、リスト作成

研修の一つに「名古屋市立幼稚園教育研究会」があり、その中で教材研究が位置付けられており、多くの先生方と一緒に絵本を要約する機会があった。

「子どもが喜んだり、もっと読んでといたりした絵本は」「教師自身が感動した絵本、好きになった絵本は」という視点で絵本を持ち寄り、教師たちが絵本選びの参考になるようにと200字程度の要約をして絵本リストを作成した。初年度は40冊がリストとなり、名古屋市立幼稚園全園に配布された。

(2) 保護者との関わり

初めての集団生活となる幼稚園。それは子どもだけではなく保護者にとっても不安に満ちた始まりである。担任はどんな先生なのか、我が子は困ったことに遭遇しないか、友だちはできるか、怪我はしないか等手元から離れていく子どもに対し、不安な表情を見せる。そんな時、教師のすることは、穏やかに優しく子ども一人一人に丁寧に接することである。その姿勢が保護者を安心させる。まずは信頼関係を築くことが大切である。

○保護者会・学級懇談会

入園時、始業式時、最初に保護者会が開催され、園長から園の教育方針を始めとした1年間の教育への取り組み等が話される。そして、それを受けて学級懇談会が開催され、担任としてどのように学級経営をしていくかを中心に各保護者も我が子のことも含め自己紹介をしていく。送り迎えのある幼稚園なので、常に我が子を通して顔を会わせるから、我が子のために保護者も一生懸命である。

若い頃の自分には説得力が不足していたと思われるが、2人の子どもを持つようになると頷いて話を聞いてくれる保護者が多くなり説得力が増したような気がする。よく伝えていたのは、家庭教育が基本であるということである。どのような子どもにしたいかという願いを持つならば、それはどのような自分（親）であるかということ、つまり、思いは行動となって表現されるのでそのまま反映されるということである。特に、親子での会話、夫婦での会

話を大切にしたいことを伝えた。具体的には、子どもは耳で目で学んでいるので、単語ではなく文章で会話をしたいと伝えた。つまり、子どもにとって家庭での環境は学習の機会となっていることを伝えると共に、家庭での温かい雰囲気作りをお願いしてきた。

私たちが発する言葉には、感情が入っている。教育の基本の中の一つである、相手の立場に立ってみるということ、それが言葉に反映されている。穏やかな心もちでいる場合は心も柔らかく、動作もなめらかであり、発する声の大きさもほど良いものである。実践するのは難しいが、意識するということが大切であり、機会ある毎に啓発に努めてきた。

○保護者とのティータイム

一人一人の誕生日には、全職員が共通認識し、「おめでとう」と声を掛けるが、保護者にも参加してもらって行うのが月に一度の誕生会である。遊戯室で全体の会を行い、移動して保育室で誕生の秘話などを聞きながらのスペシャルタイムを過ごす。子どもにとっては最高の日である。そして、保護者にはさらに移動してもらい園長とのティータイムを迎える。紅茶とクッキー等を用意し、誕生を祝いながら、本日の会での我が子の様子等から成長してきた喜びを伝え合うというものである。

ここでも、言葉を大切にしてくださっている保護者をねぎらい、成長の喜びを共有する。気心知れた仲間とは言え、多少の遠慮はあるが、子育ての悩みも出され、互いの経験からアドバイスもされる。温かい関係づくりが、気持ちを穏やかにし、それが子どもに還元されていく。この日には、父親も休暇を取って一緒に歓談される方も数人あった。中には、都合によってティータイムができない方もあり、そんな時は、顔を見たときに、声を掛けていくようにした。

○PTAによる我が子の「いいところ探し」

保護者と共にPTA活動を進めてきた中に、我が子の良いところを探してみようというものがある。そのきっかけは、保護者と話している時のこと、我が子の悪いところばかりが気になってしまうというものだった。つい他の子どもと比べてしまう、兄弟姉妹と比べてしまう、そして落ち込んでしまうというのである。ならば、良いところはどうか そう考えたことはあまりないということから、我が子の良いところ探しを活動として進めてみようということになった。

我が子の良いところをメッセージカードに書き入れてもらい、それを木の実に見立てた。メッセージカードはクラス毎に色とりどりの木の実となり、子ども達の目を引いた。保護者は、子ども達が見ることを前提に子ども達が読めるよう、ひらがなで書いてくれた。漢字を使用したときにはルビが打ってあった。大きなクラス毎の木は、できるだけ子ども達に見えるような高さにし、踏み台を並べて高いところも読むことができるようにした。子ども達は自分で拾い読みをする事も多かったが、担任や園長に読んでもらうことを喜んだ。書いてあることをゆっくりと「〇〇さん、大好きだよ。いつもにこにこしてうれしいよ。生まれてきてくれてありがとう」といった内容を読んであげると、この上なく嬉しそうな顔をして、飛び上がったり抱きついたりして喜びを表現した。このメッセージカードはその後切り取り、保存できるよう台紙に貼り直して返却された。温かな言葉が生み出す幸せな親子の様子が想像できた。この企画によって家庭での会話も弾み親子の結びつきが一層強まったことを感じ

た。思いを文字にし、相手に伝えるということ、文字は相手へ気持ちを伝えることのできる手段であることも子ども達には生きた学びとなった。

幼児教育の手法の一つに「褒めて伸ばす」ということがある。日常、一人一人をしっかり見ていれば必ずや良いところは見付かる。いかに子どもを観察し、その変化に気付くことができるか、それを温かい言葉で子どもにも保護者にも伝えていくという作業は教師にとってやりがいのある仕事である。子育てを、幼稚園と家庭とで連携して行い、その成長の喜びを共有し合うことは教師としての醍醐味であろう。

(3) 子どもとの関わり

私が勤め始めた時代は、2年保育が主流で3歳までは家庭で保育することが大切であるとされてきた。しかし、世の中は変化し、家庭教育を支援していく必要性が問われるようになり、3年保育が広まっていった。初めての集団生活をする2年保育4歳児と3年保育3歳児とでは、発達の違いがあり対応に戸惑うことも多かった。

3歳児の担任としての失敗がある。「みんな」と声を掛けたものの誰一人として反応しないということがあった。保育は「子ども理解」から始まると言われるが、どれだけ発達を分かっていたのか発達をとらえ切れていない自分に焦りを感じた。3歳児には全体をまとめる言葉よりも一人一人を意識した言葉掛けが大切であることを最初の出会いの時に思い知らされた。「みんな」ではなく、「○ちゃんも、△ちゃんも、□ちゃんも・・・」と20人いれば20人の名前を呼び、そしてそれが「みんな」であることを伝えるのである。子ども達は、自分の名前が呼ばれるのをワクワクした表情で待っていてくれた。一人一人に声を掛ける基本は、この出会いから学んだ。

○子どもに分かりやすい言葉

子どもに通じる言葉、子どもの心を捉える言葉、子どもを伸ばす言葉は、実践を通して学んできた。

子どもは「早くしなさい」と言ってもどうすることが早くする事なのか分かっていないことが多い。「片付けを早くしましょう」と言うよりも、教師と一緒に片付けをしながら絵本は得本棚へ、ままごとのごちそうはごちそう入れへ、茶碗は棚へ、ブロックはブロックかごへ、積み木は形に気付かせながら積んでいく等、具体的に行動して知らせていくことが結果的に早く片付けることにつながるのである。「片付けをすると気持ちが良いね」「美味しくご飯が食べられるね」等、片付けに伴う気持ち良さを伝えることで子どもは片付けをすることが大切だということを学んでいく。また、「10数える内に座りましょう」と言えば「早く座りましょう」と言うよりも子どもには分かりやすい。

子どもはいつも褒められたいと思っているので、プラスの言い方をしていくことが大切である。そのためには、教師自身がプラス思考であることが求められる。褒め上手な教師は、子どもの心を捉え、持っている可能性を引き出すことにつながるからである。常日頃、温かい言葉にあふれていれば子どもはより安心して生活できる。それは、学級経営上基本となることであろう。

褒め上手になるために、教師も保護者も実行したいことがある。

- ・心を込め、目を見て褒める。
 - ・具体的な内容で褒める。(絵や作品は上手という言葉を使わない。工夫したところを見付けて褒める)
 - ・褒めるタイミングを逃さない。
 - ・結果だけでなくその過程も褒める。
 - ・当たり前のことで継続していることを褒める。
 - ・自分で褒めにくいときは、第三者を通じて間接的に褒める。
- といったことを意識して実行したいものである。

○言葉遊び

文字への関心は、個人差が大きいので、手始めは自分の名前を手掛かりにして遊ぶ。遊び着のスマックには名前が刺繍してあったり名札を付けたりしている。もちろん、ひらがなである。例えば、全体で集まった時に手を洗いに行くとか、移動するときに並ぶとかといった場面で、「あ」のつく人からと投げかける。子ども達は、名札を見ながら、友達と「あきら」「あんな」等と確認をして動き出す。自分の名前は見て分かるので、作品や持ち帰り絵本に教師と一緒に名前を書くなど機会あるごとに楽しんで行うようにした。名前だけではなく「あ」のつく食べ物とか動物とかも考えてみるようにした。そして、なぞなぞやしりとり等の言葉遊びへと移行した。

しりとり、なぞなぞ等の言葉遊びは、教材がなくても遊ぶことができる楽しい遊びである。5歳児は言葉だけでも内容を空想できるようになるので、言葉遊びを大変喜ぶ。簡単ななぞなども、次第に言葉を工夫しながら出題できるようになる。ミニノートを作れるよう紙やホチキスを準備しておく、子ども達は自分なりになぞなぞを書き留めたり、絵本を作ったりしていた。昼食前や降園前等、クラス全体の場で出題をするを楽しみにして遊んだ。この経験は、親子での通園風景にも表れていた。楽しんで言葉遊びをしている親子の様子から豊かな心、豊かな言葉が育まれていることを感じた。

3 終わりに

実践してきたことの一部の報告ではあるが、幼稚園において大切にしたいことは教師の在り方も含め以下のとおりである。

子どもの発達を理解することは不可欠である。3歳児では語彙が少なく仕草や態度で思いを表現することも多いので、教師はそれを汲み取って自分の思いが伝わる良さを味わえるようにしたい。4歳児では、友達とつながっていくことが嬉しくなる時期でもあるので、言葉のやりとりを通して友達とつながる嬉しさを味わえるようにしたい。5歳児では、友達と協同して遊ぶことが多くなるので、自分の思いや考えを言葉で表現し伝え合う喜びを味わえるようにしたい。

発達を分かった上で教育課程を基本に指導計画を立案し、カリキュラムマネジメントを実行したい。子どもは様々な人や物との出会いや関わりを通して心を動かす体験をしていく。「わあすごい」と思わず伝えたいくなるような気持ちになり、「ねえ見て見て」と伝えたい、聞

いてもらいたいという思いになる。子どもの伝えたい、聞いてもらいたい誰かとは、園では教師や友だちである。言葉を交わす喜びを味わえるようにし、教師との温かな信頼関係を基に友達とのつながりをつくっていくようにしたい。

言葉は感情を伴うので、教師は気持ちをコントロールできるようにしておかなければならない。子ども達が豊かな体験と共に心が豊かになれば言葉も豊かなものになる。感動体験がたくさんできるようにし、子ども達の心の成長を支えたいものである。

この度の幼稚園教育要領改訂では領域「言葉」のねらいにおいて「言葉に対する感覚を豊かにし」という文言、内容取扱いにおいて「幼児が生活の中で、言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること。その際、絵本や物語に親しんだり、言葉遊びなどをしたりすることを通して、言葉が豊かになるようにすること。」という文言が付加された。つまり、絵本や物語、言葉遊びは幼児期にふさわしいものであること、小学校教育を前倒しするのではなく、基礎となる力を身に付けられるようにすること等を意識していく必要がある。これらのことを踏まえ、幼稚園教諭になるための言葉の授業において、大切にしなければならないことを学生たちと共に考えていきたいと思う。

引用・参考文献

幼稚園教育要領（平成29年告示） 文部科学省

松谷みよ子作 いたいいたいはとんでいけ 偕成社

研究ノート

家庭支援における教授内容の検討

—「家庭支援論」「保育相談支援」「相談援助」の科目の連携に向けて—

祢宜 佐統美 浅野 順子

**A Review of Teaching Strategies in ‘Family Support’
—Heading towards Collaboration among ‘Family Support,’
‘Consultation and Support in Childcare,’ and ‘Social Work’—**

Satomi Negi, Junko Asano

Abstract

The linkage among the following three subjects, ‘Family Support,’ ‘Consultation and Support in childcare,’ ‘Social Work’ would be inevitable to handle parents’ requests for nursing services. The aim of this study is to demonstrate the ideas of graduating students about ‘family support’ or ‘consulting skills’ and to review the teaching content of those subjects accordingly. We conducted a questionnaire survey for them in December, 2017, which shows that they strongly feel the necessity of acquiring knowledge and skills of family support as a nursery teacher.

キーワード：幼児教育、家庭支援論、保育相談支援、相談援助

I. はじめに

2011（平成23）年度の保育士養成施設における保育士養成課程では、「保育相談支援」の新設と、「家族援助論」が「家庭支援論」に、「社会福祉援助技術」が「相談援助」への変更が施行された。保育指針の改定を踏まえた養成課程の見直しである。以下は2010（平成22）年に出された「保育士養成課程等の改正について」の中間まとめ¹⁾からの抜粋である。「保育相談支援」の新設については、

保育士の「保護者に対する保育に関する指導（児童福祉法第18条の4）について具体的に学ぶことが重要であるため、「保育相談支援」を新設する。保育指針第6章の内容を踏まえ、保育実践に活用され、応用される相談支援の内容と方法を学ぶ。その際、「相談援助」

「家庭支援論」等の科目との関連性や整合性に配慮することが必要である。
とある。また、「家族援助論」から「家庭支援論」への変更については

家庭、地域などを視野に入れた支援のあり方や支援体制について理解することが必要となっているため、変更する。

となっており、「社会福祉援助技術」から「相談援助」への変更は

社会福祉士等の養成等において、「社会福祉援助技術」が「相談援助」に改められたことを踏まえるとともに、保育との関連で相談援助の内容や方法について学ぶことが重要であるため「相談援助」に変更する。

と記されている。

「保育相談支援」「家庭支援論」「相談援助」の3科目それぞれが関連・整合する必要性が強調されたのであるが、それぞれの科目が違う教員が担当していることもあり、必ずしも関連・整合されているとは言えないと思われる。そこで、本研究の目的は、保育士を目指す学生が、家庭支援の内容や相談技術についてどのように考えているのかの現状を明らかにし、家庭支援の教授内容を検討すると共に、この3つの科目の連携の意義について検討することとした。

Ⅱ. 研究方法

1. 対象者と調査方法

研究対象者はA短期大学幼児教育学科の卒業学年の学生で、1部(2年課程)2年生65名と3部(3年課程)3年生70名の合計135名である。2017(平成29)年12月に自記式質問紙調査を行った。

2. 調査内容

調査内容は、「子どもの話を聞く」「子どもの精神的支えとなる」「愛情を持って保育する」「保護者に子育ての楽しさを伝える」「保護者に子どもの保育所での様子を伝える」「保護者の悩みを聞く」「保護者と一緒に悩みを解決する」「保護者との信頼関係を構築する」「保護者へ子育てに関する情報を提供する」「家庭の精神的支えとなる」「発達に合った支援・アドバイスをする」「時間のない保護者への支援」「障害がある子どもへ支援する」「外国籍の家族へ支援する」「家庭の事情に合った支援をする(個別対応)」「園全体で支援する体制を作る」「子育て支援における地域の関係機関と連携する」の保育士として必要な家庭支援に関する17項目について、「4:非常に思う」「3:少し思う」「2:あまり思わない」「1:全然思わない」の4段階評価で聞いた。また、「保育に関する知識や技術などの専門性を持つ」「子どもをよく理解している」「わかりやすい文章で、連絡ノートやクラス便りを書くことができる」「保護者や目上の人に適切なコミュニケーションをとることができる」「保護者に子どもの様子や保育内容について説明することができる」「保護者の話をじっくり聞き、正しく理解することができる」「保護者が子どもをかわいい存在と感じられるような伝え方ができる」「保護者との信頼関係を築くことができる」「保護者の気持ちを受け止めることができる」「保護者とともに、子どもの成長の喜びを共有できる」「保護者一人一人の自己決定を尊重できる」「保護者

や子どものプライバシーの保護、知り得た情報の秘密保持が守れる」「子どもの最善の利益を尊重できる」「子どもと保護者の安定した関係に配慮することができる」「保護者同士の関係づくりを援助することができる」「保護者の養育力の向上のため支援することができる」「保護者や家庭との距離を上手に保つことができる」「保護者や家庭が孤立しないように支援することができる」「子どもや保護者の変化に気づける観察力」「子どもや保護者の気持ちに寄り添う」「子どもや保護者を受容する」「子育て支援に関する地域の社会資源を知っている」「地域の関係機関、団体等との連携及び協力を図ることができる」「子育てに関する制度や法律について説明することができる」の家庭を支援するために必要な技術や知識に関する24項目について、「4: 非常に必要」「3: 少し必要」「2: あまり必要ではない」「1: 全然必要ではない」の4段階評価で聞いた。

3. 倫理的配慮

調査対象者に対して、本研究への協力は自由で、調査への参加・不参加により評価等の不利益が生じない事、個人名が特定されない事等を、口頭と文章で説明し研究協力を依頼し、質問紙提出をもって同意の意思確認を行った。尚、本研究は愛知文教女子短期大学研究倫理委員会の承認を受けて実施した。

Ⅲ. 結果

1部65名、3部70名の計135名(100.0%)の回収があり、欠損値を除く1部61名、3部69名の計130名(96.3%)が有効回答である。

表1 保育士として必要な家庭支援に関する内容

子どもとの関わり	子どもの話を聞く	3.8
	子どもの精神的支えとなる	3.7
	愛情を持って保育する	3.9
保護者との関わり	保護者に子育ての楽しさを伝える	3.9
	保護者に子どもの保育所での様子を伝える	3.9
	保護者の悩みを聞く	3.9
	保護者と一緒に悩みを解決する	3.9
	保護者との信頼関係を構築する	3.9
	保護者へ子育てに関する情報を提供する	3.8
	家庭の精神的支えとなる	3.6
様々な家族形態への関わり	発達に合った支援・アドバイスをする	3.9
	時間のない保護者への支援	3.7
	障害がある子どもへ支援する	3.9
	外国籍の家族へ支援する	3.8
	家庭の事情に合った支援をする（個別対応）	3.8
連携	園全体で支援する体制を作る	3.9
	子育て支援における地域の関係機関と連携する	3.9

保育士として必要な家庭支援に関する内容に関して、17項目全てにおいて3.6ポイント以上の回答で、多くの学生が必要だと考えていた。一番低いポイントの項目は「家庭の精神的支えとなる」3.6ポイントで、次いで「子どもの精神的支えとなる」「時間のない保護者への支援」の2項目が3.7ポイントであった（表1）。

表2 家庭を支援するために必要な技術や知識に関する内容

日常の保育	保育に関する知識や技術などの専門性を持つ	3.9
	子どもをよく理解している	3.9
	わかりやすい文章で、連絡ノートやクラス便りを書くことができる	3.8
相談技術・会話	保護者や目上の人に適切なコミュニケーションをとることができる	3.9
	保護者に子どもの様子や保育内容について説明することができる	3.9
	保護者の話をじっくり聞き、正しく理解することができる	3.9
	保護者が子どもをかわいい存在と感じられるような伝え方ができる	3.9
相談技術・対人	保護者との信頼関係を築くことができる	3.9
	保護者の気持ちを受け止めることができる	3.9
	保護者とともに、子どもの成長の喜びを共有できる	4.0
相談技術・倫理	保護者一人一人の自己決定を尊重できる	3.8
	保護者や子どものプライバシーの保護、知り得た情報の秘密保持が守れる	3.9
	子どもの最善の利益を尊重できる	3.9
相談技術・関係性	子どもと保護者の安定した関係に配慮することができる	3.9
	保護者同士の関係づくりを援助することができる	3.8
	保護者の養育力の向上のため支援することができる	3.9
	保護者や家庭との距離を上手に保つことができる	3.9
	保護者や家庭が孤立しないように支援することができる	3.8
資質	子どもや保護者の変化に気づける観察力	3.9
	子どもや保護者の気持ちに寄り添う	3.9
	子どもや保護者を受容する	3.9
地域	子育て支援に関する地域の社会資源を知っている	3.8
	地域の関係機関、団体等との連携及び協力を図ることができる	3.8
	子育てに関する制度や法律について説明することができる	3.7

家庭を支援するために必要な技術や知識に関する内容に関して、24項目すべてにおいて3.7ポイント以上の回答で、多くの学生が必要だと考えていた。「保護者とともに、子どもの成長の喜びを共有できる」は4.0で、全ての学生が「非常に必要である」と答えた。一番低いポイントの項目は「子育てに関する制度や法律について説明することができる」3.7ポイントであった（表2）。

IV. 考察

1. 保育士として必要な家庭支援に関する内容

「保育士として必要な家庭支援に関する内容」の項目で、低いポイントとなったのは「家

庭の精神的支えとなる」「子どもの精神的支えとなる」であった。家庭や子どもの精神的支えは、他の項目に比べ家庭支援とは結びつかなかったと言える。「保育士養成課程を構成する各教科目の目標及び教授内容」の「家庭支援論」では、保育相談支援の基本として、「信頼関係を基本とした受容的かかわり」という内容が決められている。そのため、家庭支援論のテキスト^{2) 3) 4)}の多くには、「家庭支援の基本」として関わり方の基本姿勢や倫理等が記述されており、「相互の信頼関係」「保護者の気持ちを受け止め」「家族への情緒的支え」という言葉が記されている。授業の中でも、家庭を支援するためには対象者の気持ちを受容し精神的にも支えることが必要と話しているが、「家庭支援」という言葉から「精神的支え」に至る前に、「保育所での様子を伝える」「悩みを解決する」「アドバイスをする」という項目が頭に浮かぶのではないかと考えられる。ただ、「保護者との信頼関係を構築する」という項目も高いポイントとなっており、支援過程の理解はできていると思われるが、これについては後述する。

2. 家庭を支援するために必要な技術や知識に関する内容

「家庭を支援するために必要な技術や知識に関する内容」の項目で、全員が「非常に必要」と答えたのが「保護者とともに、子どもの成長の喜びを共有できる」であった。祢宜 (2017)⁵⁾の幼児教育学科の学生を対象とした調査では、「保護者支援に関して、「保護者とともに、子どもの成長の喜びを共有できる」ことは自信がある」という結果となっている。学生は、保護者とともに子どもの成長の喜びを共有できることに関しては、自分でできるという自信があると同時に、家庭を支援するためには必要と考えていた。

「家庭を支援するために必要な技術や知識に関する内容」の項目で、低いポイントとなったのは、「子育てに関する制度や法律について説明することができる」であった。保育相談において相談内容⁶⁾は「育児の知識・技能・方法に関する相談」のように保育技術や成長・発達に関するものばかりではなく、「地域の子育て支援資源に関する相談」のように制度やサービスに関するものもある。田中ら (2009) 調査⁷⁾の家族援助の視点を持って保育に携わるために身につけなければならない能力で、「子ども達ではなく家庭全体を理解する視点」「わかりやすく伝えるためのコミュニケーション能力」「家族との面接等における受容的な態度や問題解決を図る技法」「問題を早期に発見する気づきの視点」の高いポイントに比べ、「家族援助に関する社会資源（保健所や児童相談所等の知識）」が8.1%と低い結果となっている。子育てに関する社会資源に関しては、「保育相談支援」「相談援助」「社会福祉」「家庭支援論」「児童家庭福祉」「障がい児保育」「社会的養護」といった科目の中で出ていると思われ、各科目間の教授内容の摺り合わせが必要と言える。

3. 3つの科目の連携

本調査において、「家庭を支援するために必要な技術や知識に関する内容」で、「日常の保育」「相談技術・会話」「相談技術・対人」「相談技術・倫理」「相談技術・関係性」「資質」「地域」のどの分野も必要と答えていた。これは、家庭を支援する事に関して学ぶ「家庭支援論」を理解するためには、上記の各分野を学ぶ「保育相談支援」「相談援助」との連携が必要で

あると示唆していると言える。

2019（平成31）年度から施行される予定である「保育士養成課程等の見直し」⁸⁾では、保育士による子育て家庭の支援に必要な知識の基礎的理解を促進するためと、子育て支援に関する実践力を重視する観点から、「家庭支援論」から「子ども家庭支援論」への教科目名の変更と、以下の教授内容の集約・再編が行われる。

子育て支援に関する具体的・実践的な内容の充実

保育の専門性を活かした子育て支援に関する実践力を重視する観点から、保育士が行う具体的な支援に関連する教科目の目標及び教授内容について、再編整理することが必要である。また、当該再編整理に伴い、「子育て支援」に関する教科目を新設することが適当である。

《教授内容等の再編整理》

- ・現行の教科目「相談援助（演習1単位）」及び「保育相談支援（演習1単位）」の目標及び教授内容のうち、子ども家庭支援の基本的な事項については、新たな教科目「子ども家庭支援論（講義2単位）」に移行した上で、保育士による子育て支援の特性や実践的な事項（支援の具体的内容・方法・技術、事例検討など）については、新たな教科目「子育て支援（演習1単位）」の教授内容等として、再編整理する。《教科目の再編・新設》
- ・「相談援助（演習1単位）」、「保育相談支援（演習1単位）」
→「子育て支援（演習1単位）」、「子ども家庭支援論（講義2単位）」

「保育士養成課程等の見直しについて—より実践力のある保育士の養成に向けて— 検討の整理」より引用

図1 「子どもの育ちや家庭への支援の充実」における見直しの方向性

「子ども家庭支援論」で子育て家庭を支援する意義や基本・体制・現状等を学び、「子育て支援」で保育士が行う子育て支援の展開や方法・技術を習得することとなる。その学びが効果的なものとするためには、2つの科目が連携していくことが必須となる。科目間連携をする事は、教員間連携をする事であろう。お互いの科目において、内容の精査は勿論であるが、効果に関しても共有していく必要がある。それぞれの科目において、講義前・講義後の学生の姿を評価し、どこで効果があったのか、あるいはなかったのかの検証を行い、教育方法を確立していく必要があると考える。

V. 今後の課題

質問紙調査を行ったが、各項目の差があまりない結果となってしまったため、各項目の精査をすることが今後の課題である。また、2018（平成30）年度は3科目、2019（平成31）年度からは2科目となるが、科目間連携を行う際の評価尺度を開発していく必要があり、そのための新たな調査が更なる今後の課題である。

引用文献

- 1) 厚生労働省（2010）『保育士養成課程等の改正について（中間まとめ）』平成22年3月24日 保育士養成課程等検討会
<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2010/03/s0324-6.html>（2017.12.30 閲覧）
- 2) 上田衛（2016）『保育と家庭支援』（株）みらい、p.p95～106

- 3) 川井一心 (2011) 『新 保育士養成講座 家庭支援論』全国社会福祉協議会、p.p22 ～ 28
- 4) 溝口元・寺田清美 (2012) 『家庭支援論』アイ・ケイ コーポレーション、p.p12 ～ 13
- 5) 衿宜佐統美 (2018) 「学生が感じる保護者のイメージの変化ー相談援助におけるアンケート調査からー」『保育と保健』24(1)、p.p
- 6) 寺村ゆかの・伊藤 篤子 (2013) 「子育て支援「つどいの広場」における相談のあり方に関する一考察 (4) 大学サテライト施設でのアウトリーチ・サービスにおける相談内容と継続事例の分析」『心の危機と臨床の知』14、p.p45-57
- 7) 田中利則・米山岳廣ら (2009) 「保育所における家族援助の実態に関する研究」『湘北紀要』30、p.p21-38
- 8) 厚生労働省 (2017) 『保育士養成課程等の見直しについて～より実践力のある保育士の養成に向けて～ (検討の整理)』平成29年12月4日 第9回保育士養成課程等検討会

研究ノート

造形表現の基礎的理解と指導法への活用

早矢仕 清貴

A Basic Understanding of Formative Expressions and Its Application to Instruction Methods for Children

Kiyotaka Hayashi

Abstract

The purpose of this study is to verify practical effectiveness of the way students, who have appreciated the fun of formative expressions through learning step by step about materials and techniques they use when making their images into concrete shapes in their works, instruct children, making use of their knowledge and experience. We take up ‘three-dimensional shape of paper’ as the introductory course of lesson to understand basic concept of formative expressions.

キーワード：造形、立体、指導

I. はじめに

本稿の対象とする学生は愛知文教女子短期大学幼児教育学科第1部1年生で、造形表現の授業を受講する3クラス87名の学生である。幼児教育学科第1部の学生の実態は、美術の授業を受けたのは中学校まで、高等学校では芸術科目で美術を選択しなかった、または選択科目としてなかったという学生が約8割を占める。また多くの学生が美術に対し苦手意識を持っていることは、初回の授業での教師からの問いかけで明らかである。保育者を目指す学生にとって、まずは造形表現に対する苦手意識をなくすることが重要であると考え。幼稚園教育要領においては、表現として「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」こととしており、ねらいには「感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。」としている。保育者がそれを伝えるためには自らそれを体験し、造形表現の楽しさを理解することが大切である。造形表現に対し苦手意識を持つ学生のほとんどは「イメージ通りに表現できない」「イメージそ

のものが浮かばない」と感じている。造形体験が少ないことから自信が持てないことや、造形表現の本質的な活動に理解が狭く、出来上がった作品のみの評価に固執するところにあると考える。造形表現の本質的な活動の楽しさは制作の過程における工夫や創造する中にこそあり、その楽しさを享受した末の成果物である作品に自ずと形になって表れるものである。日名子孝三氏、長谷川悦子氏も、保育の領域における「表現」について苦手意識を持っている学生が少なくないとし、その要因として学生自身に実体験を伴う楽しい経験や感動の不足と、子どもの「表現」と「芸術活動」の違いについての理解不足を挙げている。¹⁾

本研究では造形表現の基礎的理解に関わる授業内容「紙の立体分野」の活動を取り上げ、段階的な学びを通して、素材の知識や表現技法を学びつつ作品のイメージを形にしていく過程で、工夫や創造することなど造形表現の本来の楽しさを体験する学生の姿と、その学生が指導する側に立った時、その学びを子どもたちとの関わりにどのように生かすことができるかについて、子どもの造形活動に参加した学生の姿から考察する。

Ⅱ. 実践研究の方法

造形表現の基礎的理解を深めるための段階的な学びについて

1. 画用紙1枚から作り出す高い塔の制作
2. 曲面を持った単純な立体制作トレーニング
3. 1.2.の課題終了時に振り返りレポートを提出、その内容を考察する
4. 色画用紙によるモビール制作
5. 4.の課題終了時に振り返りレポートを提出、その内容を考察する
6. 子どもとの造形活動に参加した学生の姿から、1.2.4.の課題取り組みが子供たちへの指導にどのように生かすことができたのか考察する

Ⅲ. 実践内容

幼稚園教育要領には表現として1ねらいの(2)に「感じたこと、考えたことを自分なりに表現して楽しむ。」、造形と深く関わる内容として内容の(1)に「生活の中で様々な音、形、色、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。」、(2)には「生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする」、(3)には「様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。」、(4)には「感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。」、(5)には「いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。」、(7)には「かいたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりなどする」など挙げられる。それらねらい及び内容を踏まえて紙による造形を授業で行った。紙の種類は豊富で、厚さや、大きさ、性質によってさまざまな役割を果たし生活の中で役立っている。特殊なものでなければどこでも入手が可能で、きわめて廉価、特に段ボールや新聞紙などは無料で入手できる。用途は作画の支持体として、立体表現の素材として、その他、覆う、隠す、敷くなどパフォーマンスの小道具として広く活

用できる。また、子どもにとっても身近な素材で扱いやすく、表現者や表現手段を選ばない可塑性の高い素材といえる。段階を追った紙の制作は、はじめに授業1.を行い、その内容を十分理解したうえで2.を行った。

1. 「画用紙1枚から作り出す高い塔の制作」²⁾の概要と学生の姿

〈目的〉

紙の特性を知る。

道具の使い方や紙の加工技法を知る。

制作の充実感・達成感を味わう。

〈授業概要〉

八つ切り画用紙1枚から、限られた時間（約70分）の中で、自立する構造体を制作する。140cm以上の構造体を最低限の高さとし、クリアした後は記録が伸びる度に計測し、再チャレンジも可能であるとした。

はじめに、道具の安全な使用法についてレクチャーした。使用する道具はカッターナイフ、定規、スティックのり、カッターマット。保育の現場では子どもたちにカッターナイフを持たせることはないが、保育者にとって直線切りやまとまった数の教材を準備するのに大変便利である。次に紙の加工技法について説明する。紙は折ったり曲げたりすることにより、それのみで自立する構造体が容易にできる。さらに定規を使用した折り方は、構造体として丈夫できれいな仕上がりになることを説明した。

〈学生の活動の様子〉

140cmをクリアするためのコツを説明したことにより、ほとんどの学生は制作にスムーズに入ることができた。しかしカッターナイフを使用した経験が少ない学生にとって直線切りがうまくできない。定規が切断中にずれてしまう、紙がきれいに切れず、無理に引き離してしまう学生が目立った。定規をしっかりと固定し、2～3度刃を通すよう指示したが、それでもうまくカットできない学生がいた。道具の使用には力の加減など経験的な慣れが必要なため、安全面が確保されていれば多少の歪みや切断面の不揃いは良しとした。開始30分ほどで既定の高さを超える作品が出てきた。カットと折り加工を丁寧に行い、基底部を大きめに作成した学生の作品である。また対照的に基底部に柱を複数本立てたり、接着剤を使用せず、かみ合わせだけで塔を作成する学生の姿も見られた。とても規定の高さに届かないと予想されたが、発想のユニークさを尊重し、そのまま作り続けるよう指示した。また他者の制作を見て、判断ミスに気付き再チャレンジする学生も少なからずいた。既定の高さを超えた学生はその後順調に記録を伸ばしていった。この段階になると、上へ上へと繋ぐ単純作業に気持ちは集中し、70分の制作時間に200cmを超える高い塔が何本も教室を飾った。今回の授業においては254cmが最高記録であった。

2. 「局面を持った単純な立体制作トレーニング」の概要と学生の姿

〈目的〉

1. 「画用紙1枚から作り出す高い塔の制作」での紙の特性と道具の理解を踏まえ、さらに新しい加工技法と道具の使用法を知ること、立体制作のイメージの幅を広げる。

〈授業概要〉

1枚の画用紙から教師の指示に従い、順を追って5つの局面を持った立体を制作。

- ① 3 cm幅の帯の両端に切り込みを入れ、それをかみ合わせて仕上げるリボンに似た立体を制作。
- ② 3 cm幅の帯の両端に2カ所ずつ切り込みを入れ、それぞれ咬み合わせる。2つのループを持つ立体を制作。
- ③ 6 cm幅の帯を使って馬を制作、背中の曲げ次第で老若など表情が変化することを経験。
- ④ 10 cmの帯を使って2枚の同形の楕円を切り取る。ゴム用の接着剤を利用して2面が曲面を持つ立体を制作。
- ⑤ 円切カッターを使用して円錐形を制作。

〈学生の活動の様子〉

授業1.での制作を通して定規とカッターナイフの使用方法を理解し、力の加減を体験的に学んだことにより、学生たちは帯の切り取りをスムーズに行っていた。曲げ加工には机の角を利用して曲面作りを行ったが、道具以外の身の回りのものを使っての加工に多くの学生が興味を示していた。次に保育現場を想定して、立体を作り上げる度に見かけ遊びを行った。学生は、①から魚やてるてる坊主、ロケットなどを、②からウサギや自転車など、③から曲面を持つことで表情が出ることを、④から顔や体、亀やボールに見立てたり、⑤の円錐形においては山やロケット、コーンや尖塔に見立てるなど子どもの気持ちになって、想像の世界を楽しんだ。

3. 1.2. の制作についての振り返りレポートの内容と分析

紙の特性が理解できましたか？

- ① よく理解できた55%
- ② まあ理解できた42%
- ③ あまり理解できなかった3%
- ④ 理解できない0%

〈自由記述〉

- ・ 紙は柔らかいだけでなく強い構造体になることを知った。
- ・ 机の角を利用して紙の局面をきれいに作ることができることを知った。
- ・ 工夫次第でいろいろな形ができることを知った。
- ・ 紙はどんな形も自由自在に作ることができることを知った。

- ・曲面を持たせることでいろいろな表情ができることを知った。
- ・円錐形は円を基にできることを知った。
- ・新しい発見ができた。

〈考察〉

学生は単純な加工で強い構造体になること、意図しなかった形に変化したこと、平面と曲面の違いや凹面と凸面の違いにより見た目の表情が変わることや、机や定規の角を利用した曲げ加工などに新鮮な驚きを示していた。自由自在に変容する紙の面白さに気付き興味を持ったことがうかがえる。また円切りカッターやカッターナイフ、各種の接着剤を利用した紙の加工を初めて体験した学生がほとんどで、紙の素材と同様に道具に対しても興味を示していた。保育士にとって、今回使用した道具は教材準備や各行事のための教室飾りなど保育現場で十分活用できるものである。技法や道具の取扱いになれるためにも紙による制作の機会は今後必要であると感じた。

4. 「色画用紙を使ったモビール制作」授業の内容と学生の姿

〈目的〉

紙の素材、道具について理解した上で、単純な曲面を持つ立体制作を行う。1.「画用紙1枚から作り出す高い塔の制作」と2.「局面を持った単純な立体制作トレーニング」で学んだ立体作品を基本形としてモビールを制作する。発想と工夫を繰り返しながら形にしていく過程で、造形表現本来の楽しさを経験する。

〈授業概要〉

3つの立体で構成されたモビールを制作する。

①制作トレーニングで学んだ5つの基本形を基にアイデアスケッチを行う。

(ひとつの基本形を利用して、また2つ以上の基本形を組み合わせて、また5つの基本形からアレンジして独自の形に挑戦するなど、ストーリーに合わせて大まかな構想を練る。)

②アイデアスケッチを基に色画用紙を使って3つの立体を制作する。

③作品一つ一つに糸を通し、その糸を2本の竹ひごに結び付けてモビールを作る。

④造形教室に張ったひもにつるして展示する。

制作中は一つの机を4人で利用し、互いに作品を鑑賞したり意見交流を行って、イメージがさらに広がる環境とした。

〈学生の様子〉

アイデアスケッチで大まかな構想をし、早々と作品制作に取り掛かかかる学生もいれば、スケッチの段階で、また立体に起こす段階でなかなか進めない学生もいた。アイデアが浮かばない学生においては自分の身の回りからアイデアを出すこと、またスケッチから立体への移し替えに困惑する学生には5つの基本形に立ち返って考えるように指導した。制作過程においてはグループの中で互いの作品に触れ、アイデアを出し合う姿が見られた。課題とした

3つの立体は、後に制作したものほど工夫が施されており、制作することで新たな発想と工夫が生まれたものとする。

5. 4. の制作について振り返りレポートの内容と分析

(1) 自分のイメージ以上の作品ができましたか？

- ①よくできた 20%
- ②まあできた 68%
- ③あまりできなかった 12%
- ④できなかった 0%

〈自由記述〉

- ・ バランスの良いきれいな配色を考えた。
- ・ 立体に興味を持った。
- ・ もう少し工夫すればよかった。
- ・ 自分が思っていたものより良くてできた。
- ・ いろいろな発想が浮かんで思っていたものよりうまくできた。
- ・ さらに道具の取り扱いや素材について知り、発想力を高めたいと思った。

〈考察〉

「自分のイメージ以上の作品があまりできなかった」という学生は12%あり、自由記述から「イメージ通り作るのが難しかった」「何を作ろうかアイデアが思い浮かばなかった」、ほかに「技術的な面でうまくいかなかった。」などが主な要因と考える。しかし88%は「よくできた」「まあできた」と答えている。多くの学生の自由記述には「工夫」「発想」に触れており、制作過程においてより良い作品を作ろうと思ったことがうかがえる。

(2) 制作は楽しかったですか？

- ①たいへん楽しかった 73%
- ②楽しかった 26%
- ③あまり楽しくなかった 1%
- ④たいへんだった0%

〈自由記述〉

i) 工夫・思考することの楽しさ・喜びについての記述

- ・ 思い描いた形に近づいていったので毎時間ワクワクしていた。
- ・ イメージを形にするのにはどうしたらいいのか考えながら制作するのは楽しかった。
- ・ 周りと比べることなく自分は自分なりに楽しくできた。
- ・ 工夫することの楽しさを知った。
- ・ こうすればこうなるなどいろいろな発見があった。

- ・新しい発想を思いつき、工夫することにやりがいを感じた。
- ・頭の中でイメージしたものを具現化するうちにアイデアがさらに広がった。
- ・素材を手に取り道具を使って加工することでアイデアがどんどん出てきた。

ii) 充実感・達成感についての記述

- ・自分が考えたもの以上の良い作品ができて嬉しかった。
- ・黙々と没頭できた。
- ・作品が完成した時は嬉しかった。
- ・図工が初めて楽しいと感じた。
- ・ものを作る楽しさや完成した時の達成感を感じた。
- ・こうすればこうなるなどいろいろな発見があった。
- ・うまくいかないことにも向き合って完成までしっかり制作する楽しさを知った。

iii) 他者理解についての記述

- ・みんなそれぞれ考え方が違うことを実感した。
- ・グループの中で相談したりアドバイスし合った。
- ・自分とは違う表現を行う学生を見て「そうやって立体を作ることもできるんだ」と刺激になった。

iv) 将来についての記述

- ・保育士になったら子どもたちといっしょに作って飾りたい。
- ・将来保育者として子どもと関わることを考えれば楽しく制作を行う経験はとても良いことだと思う。
- ・子どもたちにも嬉しい！できた！という体験をさせたい。
- ・ぜひまた挑戦したい。
- ・想像力を豊かにするため色々チャレンジし視野を広げたい。

〈考察〉

授業を通して学生の99%は楽しかったとの感想を得た。その理由として、イメージしたものをいろいろ工夫しながら形にしていくこと、その過程を通して完成した時の達成感が持てたこと、友達作品を見て共感したりアドバイスし合うなど一緒に考える時間を共有できたことなどを挙げている。またこの経験を幼児への造形活動に生かしたいという意見もあった。段階を追った紙の立体制作を行なったことで、素材の特性や道具の扱いを理解するとともに、指導する者としての視点を持つことができた。

6. 新聞紙による子どもの造形活動に参加した学生の指導の様子について

〈目的〉

新聞紙を使った子どもの造形活動にスタッフとして参加する。授業における経験を子どもの支援にどのように応用し保育者の指導力として活かせるか実践的に学ぶ。

〈概要〉

5歳から小学2年生までの10名を対象に子どものための造形教室を行った。教師のサポートとして幼児教育学科第1部1年生の学生5名が参加し、それぞれ2名の子どもを担当した。学生にはあらかじめ講座の意図と流れを説明し、子どもの自主的な活動を尊重した支援となるよう伝えた。

〈子どもの造形活動の概要〉

新聞紙でいろいろなものを包むことから始まり、気が付いたら自分自身も含め、教室全体が新聞紙で包まれてしまう不思議な世界を体験。自分を取り囲む環境がどんどん変化していく、日常の空間から徐々に不思議な空間へ移行する場の変化を楽しむ。

①日常で見かける小物を用意し、新聞紙と麻ひもを使ってしっかり梱包する。

(何が始まるのか次の活動への期待感を持たせる)

②小物が置かれた机やイスを新聞紙と麻ひもを使って梱包する。

(小物からそれが置かれた周辺まで新聞が広がる不思議な風景を体験)

③梱包したものを中心に四方に新聞紙を敷き広げる。

(活動範囲が広がることでさらに期待感を広げる)

④こどもたち自身の膝下まで新聞紙とマスキングテープを利用して包む。

(日常で行わない行為に興味が高まる)

⑤腰まで新聞紙とマスキングテープを利用して包む。

⑥肩まで新聞紙で包む。

⑦新聞紙で作ったお面をつける。新聞を貼り合わせたスクリーンと梱包した小物を背景に、新聞をまとった子供たちを撮影し完成とする。

〈環境構成〉

講座は壁の一面が鏡張りになっている特別教室を利用、変化していく自分の姿を見ながら活動ができるように配慮した。

〈学生の様子〉

学生たちは子どもに寄り添い、「いいね」「きれいに包めたね」「上手」など言葉掛けを行いながら子どもの要望に応じて道具を用意したり、ひもを切ったり、テープで貼ったり、梱包が不完全な部分を指摘したりと子ども自身では行えないパートを支援していた。新聞紙を使った①～⑤までの活動は、子どもにとっても学生にとっても初めての経験、戸惑いながらも包むという行為を楽しんでいた。⑥においての活動は体という包む対象が大きいため、それまでのテープで無理やり留めていく方法ではうまくいかない。学生は子どもと相談しながらあれこれ試した末、新聞紙をそれぞれ両肩から降ろし、胸のところで胴体に巻いた新聞紙で留めたり、巻きスカートのように新聞紙を腰に巻くなど各グループが工夫しながら体を包み込んだ。さらに偶然できた新聞の塊をリボンに見立てて飾り立てたり、色付きの新聞を利用して彩りを楽しむグループも出てきた。次第に制作は体を包み込む行為から飾って楽しむ

行為に変化し、やがてあちらこちらで鏡に向かって洋服仕立てごっこが始まった。子どもたちのはしゃぐ声やそれに応える学生の声も明るく、今回の講座で最も活気ある時間となった。

VI. まとめと課題

紙による立体造形を行うにあたり段階的な学びとなるよう授業展開した。道具の使い方や初歩的な紙の加工技法を知ることから始め、次に曲面を持った基本形体を制作、自由に変容する紙の特性を理解した上で本作となるモビールの制作に入った。制作しながらの道具の取扱いや素材の特性の理解とモビール作品の基本となる立体制作は、課題とした制作物のイメージの喚起を容易にし、イメージを形に起こしていくプロセスにおいても、変容する素材への興味が新たな発想を呼び起こし、工夫のあるモビール作品が多く生まれた。アンケートには制作を楽しんだと答えた学生が多いが、その理由として発想すること・工夫することを挙げた学生が多くいた。

上記の体験は、子どもの造形活動においてスタッフとして指導する側に立った時に活かされた。新聞を使つての造形は学生達にとって初めての経験であったが、戸惑いつつも子どもたちの要望に応え順調に支援を行っていた。しかし活動後半、体を包み込む活動はそれまでと違い、単純にテープで留めていくだけではうまくいかない。子どもと一緒に新聞紙を付けては外しを繰り返しながら活動を楽しむうちに、新聞のリボンができたりカラー刷りの一面を使つて彩を出したりと本来の目的に遊びの要素が加わった。学生との活動が子どものイメージを広げ新たな発見や発想につながったものとする。また学生自身も制作過程における発想や工夫など創造することの楽しさを、子どもが楽しむ姿を通して振り返ることができたようであった。吉田収氏・宮川萬寿美氏は以下のように述べている。「子どもたちは(中省略)様々な表現活動を通して、遊びやイメージを豊かにし、感性を養っていきます。子どもの素直な気持ちを読み取り、感動を形に表していく過程こそ保育者の求められるものです。大切なものは、表現の技法のみではなく、表現を引き出し、尊重し、共感し、楽しさを共有できる保育者の感性です」³⁾。子どもの造形活動に参加した学生は、保育者が持つべき感性にわずかながらも触れることができた貴重な体験をした。

本研究は1年次前期を終了した学生を対象に行った。入学間もないこともあり、ある意味においては参加した学生自身が持ち合わせていた資質が大きく関わっていたと言えなくもない。今後、1年を通して造形指導を学んだ学生を対象とし、子どもの活動の指導においてその学びをどのように生かすことができるのか、今回の考察と比較検証したい。

参考文献

- 1) 日名子孝三・長谷川悦子 文京学院大学人間学部研究紀要 Vol.17,p.6
- 2) 生活の造形 工芸ユニット68, 鳳山社 ,p.19
- 3) 吉田収・宮川萬寿美編著,2015,「造形表現」, 青鞥社, はじめに

研究ノート

保育実践指導の検討

— 絵本の読み聞かせを通して —

真下 あさみ 伊藤 久美子 柴田 法子 安藤 彩子

A Study of Child care Practice

— about reading a picture book to children —

Asami Mashita, Kumiko Ito, Noriko Shibata, Ayako Ando

Abstract

There are a lot of child care practices which students who learn to be preschool teachers should learn, for instance singing with a piano and reading a picture book to children. Among them, reading a picture book to children is one of the most important practices because this is indispensable for the preschool teacher. However, many students are not good at performing in the presence of children. In order to overcome this problem, they need to set up a concrete project and get much experience through child care practice.

The purpose of this study is to propose an effective method of teaching the students reading a picture book to children based on importance of practice or experience.

キーワード：保育実践、絵本の読み聞かせ、保育指導法

1. はじめに

現在、ほとんどの保育者養成校では高校生向けにオープンキャンパスを催している。保育の仕事は人気の職業であるが、実際にどのような仕事をするのかを具体的に知るために高校生はオープンキャンパスに参加し、保育の仕事内容について詳しく説明を聞いたり、保育実践を部分的に体験したりして保育職への理解を深める。昔は保育の仕事は子どもが好きであれば誰でもできると言われてきた時代があったが、現代は子どもとの関わりだけでなく保護者対応や子育て支援に関する多様な技術と能力が問われ、これらのことは保育所保育指針や幼稚園教育要領にも明示されている。高校生はオープンキャンパスに訪れ各養成校で色々な

話を聞き、様々な体験を通して最終的に保育への道を志すことになる。それは好ましいことであるが、オープンキャンパスでの体験は楽しさを重視している。例えば、ピアノを習ったことがない人にも養成校はやさしく対応する。絵本の読み聞かせも手遊びも自分がするわけではなく、先輩がやってくれる上手な実演を子どもの立場で見て楽しく体験するのである。もともとピアノ演奏をはじめとした保育実践は子どもの前で行うものであり、保育実践とは人前で何かをすることなのであるが、オープンキャンパスでの模擬体験では高校生は子どもの立場で体験するのであって人前で自分が何かをすることではない。高校生は先輩が行う保育実践を楽しく体験するのだ。そのような経過をたどって高校生は保育者を目指して入学してくるが、いざ大学で保育実践を習い、自分が行う立場となって授業に参加して初めて保育者になるためには自分が人前で実践しなければならない現実に直面するのである。学生はそれぞれに育った環境も違えば、これまでの体験の内容や質、量も違っている。また、保育者としての資質も様々であり、個々に性格も違っていて、学生たちに保育実践をしてもらおうと、楽しく実践できる者もいれば、経験不足だったり自信がなくて緊張し、スムーズに実践できない学生も多い。つまり、このような学生たちの保育実践の指導には、現代の学生の傾向に合わせた指導の工夫が必要になってくるのである。

実際に保育現場で保育者が行う保育実践は種類も方法も多種多様であり、さらに対象の子どもに応じて臨機応変に対応する能力が求められる。子どもとの生活や活動場面において求められるものには、ピアノ・歌等の音楽的技能、運動的技能、表現的技能、言語的技能、造形絵画的技能など、学生が習得すべき保育実践はたくさんある。しかも学生は実習までにある程度の実践力を身に付けなければならないので、実習で行う保育実践を不安に感じる学生もいる(2012真下ら)。そのため個々の学生に応じた指導には苦勞している。例えば、手遊びなど一見、簡単に実演できそうなものでも保育者が子どもの前で行う保育実践としてみると技術的には相当の練習を要するのである。ここで様々な保育実践の全てを網羅して論ずることは困難であると思われるため、今回は学生が必ず実習で体験するであろう「絵本の読み聞かせ」に焦点をあて、現在の学生の状況や気持ちを分析しながら保育実践指導について検討するものとする。この研究を保育者養成教育のなかでの実習指導や保育内容関連授業における保育実践指導法の改善、開発のために役立つ基礎資料としたい。

2. 保育実践としての絵本の読み聞かせと表現について

保育を学ぶ学生は、子どもが好きであり、子どもと関わることを楽しいと感じている。そして、子どものかわいらしい姿を見たり、直接的な関わりやふれあいを通して保育者になりたいという気持ちが強くなり、自分が保育実践を行うことについても関心が高くなる。保育現場における保育実践や子どもとの関わり方は多様であるが、そのひとつとして絵本を使った実践や関わりが挙げられる。

学生が実習先で絵本を読み聞かせたとき、子どもたちが絵本に夢中になる姿を見たり、「もっと読んで」などといった言葉を聞いたりすると、読み聞かせが子どもと自分を繋ぐ大切な経験であることを体感する。多くの保育現場では、年齢が低い乳児から幼児まで、ほぼ

毎日、保育者が子どもたちに絵本を読み聞かせている。また、そのほかにも子どもが自由遊びの際に絵本を手にとって「読んで」と保育者（実習生）にせがんだり、子どもが遊びのひとつとして自発的に絵本を読んだり見たりすることもある。学生が絵本を通じて子どもと関わる時、子どもはいったい絵本の何に興味を示しているのか、絵本を見て子どもはどのように反応するのか、子どもは絵本を見て人と関わるためにどのような表現をしているのか、このようなことを実際に学生は体験しながら、絵本と子どもとの関係や表現について学ぶのである。子どもが興味を持った事柄は、その子どもの受け止め方であり、さらにそれぞれの表現があって、学生がそれらを理解することによって、子どもとの関わり方や絵本の読み聞かせを少しずつ工夫していくことになる。

学生自身も子どもの頃に絵本を手にとって見たり、読み聞かせてもらった経験があるため、絵本が子どもの生活にとって欠かせないものであることは十分理解している。また、授業を受けたことによって絵本の重要性を認識しているため、実習で読み聞かせを経験することは当然のこととして準備を進めていく。絵本はただ文字を読んで絵を見せればよいわけではなく、作者の思いや話の持つ意味を読み手がしっかりと受け止め、思いを巡らせて読む必要がある。そのためには絵本に示された作者の表現を、読み手がどれだけ奥深く受け止め、想像力豊かに読みすすめるかが重要になってくる。つまり、読み聞かせには、読み手の読み聞かせの表現力だけではなく、他者の様々な表現を読み取る力も必要なのである。

学生の表現力の調査（2016伊藤・齊藤）では、いくつかある表現方法のうち、それぞれの表現が好きかどうかを質問した。「思ったことを言葉で表現することが好きか」という質問に対し、とてもそう思う、どちらかというそう思うを合わせると約40%の学生が好きであると答えている。反対に、約60%の学生が言葉での表現は好きではない、どちらでもないと答えている（図1）。また、「人前で歌を歌ったりダンスをすることは好きか」の質問に対し、約50%の学生が好きではない、どちらでもないと答えている（図2）。それぞれの質問に対し、約20%の学生が言葉の表現、人前で歌ったりダンスをすることは苦手と答えている。これは受動的に授業を受けてきたこれまでの経験や、大人になった学生が人前で何かを表現することは恥ずかしいと思う気持ちが強くなったとも考えられる。しかし、保育者として子どもを前にして行う保育実践の技術を習得するためには、絵本の読み聞かせをはじめとして、人前で表現する経験を積み重ねていくことが、学生自身の表現力を高めるとともに、子どもの表

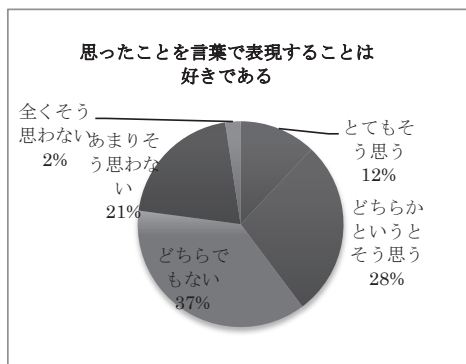


図1 言葉の表現

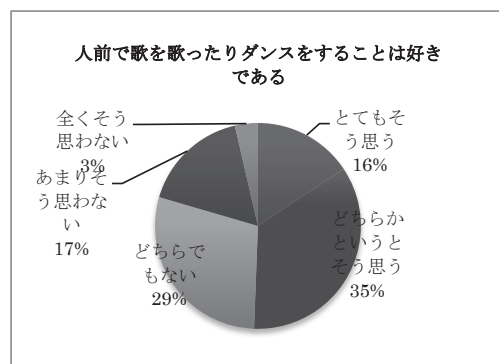


図2 ダンスや歌の表現

現を読み取る力を養うことにもつながる。

3. 調査方法

(1) 対象

短期大学に通う2年課程および3年課程の卒業学年の女子学生 126名

(2) 時期と場所

時期：2017年11月

場所：愛知県 女子短期大学内

(3) 方法

幼稚園実習2回、保育所実習2回、施設実習1回を全て終了した学生に保育実践としての「絵本の読み聞かせ」に関するアンケートを実施した。

質問内容は、①学生の本や絵本に対する気持ちと現状 ②実習での絵本の読み聞かせ経験 ③実習中の実践に対する意識と意欲 ④実践の自己評価 ⑤実践について注意されたこと ⑥実践で悩んだこと、苦労したこと ⑦今後への意欲についてである。これらの内容について、さらに具体的な細かい項目を示した質問を行い、とてもそう思う、そう思う、そう思わない、全くそう思わない、の4段階リッカート尺度によって回答を求め、学生の実態を調査した。なお、調査においては、その目的を十分に説明し同意を得たうえで実施したものである。

4. 結果と考察

(1) 学生の現状と実習での読み聞かせ経験について

はじめに、図3を見てみると「現在、本を読むことが好きですか」という質問に、そう思

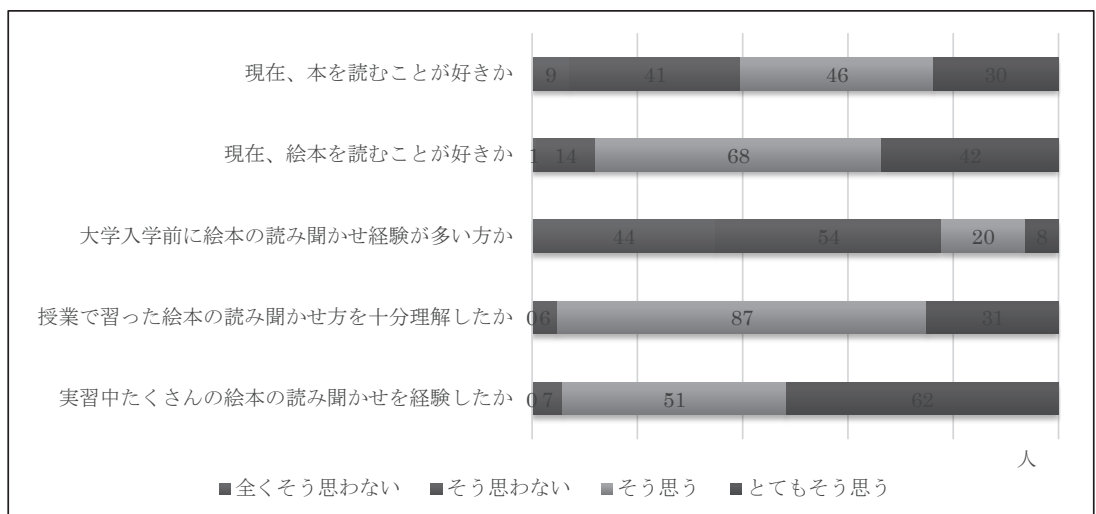


図3 学生の絵本の読み聞かせに関する現状

わない、全くそう思わないと答えた学生は合わせて50名いるが、「現在、絵本を読むことが好きですか」という質問に変わると、そう思わない、全くそう思わないと答えた学生は合わせて15名となり激減することがわかる。これらのことから、本は読まないが、絵本を読むことは好きであるという現在の学生の姿が見えてくる。同じ書籍というカテゴリーにもかかわらず、本と絵本で、なぜこのような差が出るのか。理由を考えてみると、例えば保育内容指導法「言葉」の授業のなかで、学生に絵本の読み聞かせを行わせた場合、なぜその絵本を選んだのかをたずねると、絵がかわいかったから、短くて読みやすかったからといった意見が数多く出てくる。このことから、絵がかわいい、話が短く読みやすいといった視覚的なものが、学生の絵本に対するハードルを下げ、本とは異なり、「絵本」であれば気軽に手に取り、読む機会を増やしている可能性が考えられる。

また、「大学入学前に絵本の読み聞かせの経験は多い方ですか」という質問において、そう思わない、全くそう思わないと答えた学生は合わせて98名であり、入学前には絵本の読み聞かせをほとんど経験していないことが明らかになった。つまり、多くの学生が絵本との接点が少ない状況で入学してくる。しかし、「授業で習った絵本の読み聞かせ方を十分理解しましたか」という質問において、そう思う、とてもそう思うと答えた学生は合わせて118名であった。これは、大学での授業を受け、児童文化財である絵本に数多く触れるなかで、技術的な読み聞かせ方を学ぶのみではなく、絵本の重要性についても理解したことが示されている。だが、理解しただけでは実践力は身に付かない。実際の保育実践の場では、子どもたちや保護者の前で何かをする機会が多く、その素材が持つ良さを伝えていくことが重要である。そのためには保育の5領域（健康・人間関係・環境・言葉・表現）全てから保育内容を捉え、様々な角度からアプローチし、多面的な学びを行うと共に、保育者が工夫しながら保育実践を行う必要がある。その点では机上の学びが多い大学での授業とは異なり、保育現場での実習は、学生が様々なことを体感しながら実践を学べる貴重な経験の場となる。

次に、「実習中、たくさんの絵本の読み聞かせを経験しましたか」の質問に対して、そう思う、とてもそう思うと答えた学生は合わせて113名であり、ほぼ全員が該当することが判明した。

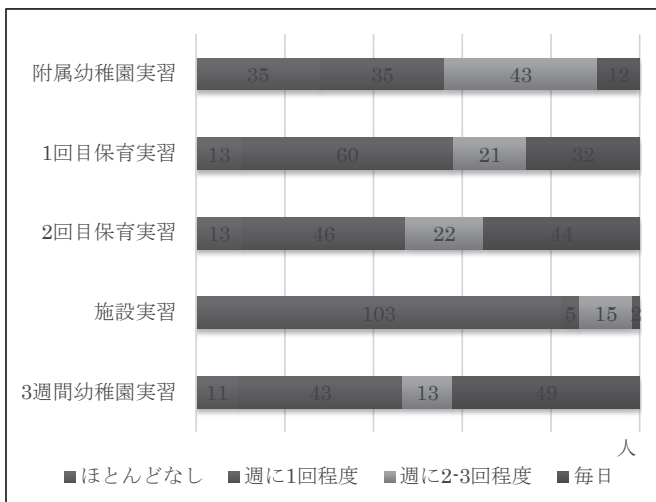


図4 実習中の読み聞かせの頻度

この結果から、保育現場では絵本の読み聞かせは欠かせないものであり、実習生である学生も園では数多くの読み聞かせの経験が出来ていることが示された。

図4を見ると、今回は5回にわたる実習の場における読み聞かせの経験頻度を調査したが、初めての実習にあたる附属幼稚園実習では観察実習の要素が強いためか、毎日読み聞かせをした数は12名と1割にも満たず、非常に少ない。

しかし、次の保育実習では、1回目

の実習から毎日読み聞かせをした学生が32名、さらに2回目の保育実習では44名と、次第に読み聞かせの経験が増えている。また、在学中における一番後の実習となる3週間の幼稚園実習では、実習の総仕上げという意味合いもあり、毎日絵本を読み聞かせる人数が最も多くなっていた。これは、多くの実習経験を積んだことにより、学生自身が実践することに抵抗がなくなり、絵本の読み聞かせに対しても、ある程度の自信を持って行うことが出来るようになったことが推察される。

（2）読み聞かせに対する学生の意識、意欲と自己評価について

図5を見ると、「あなたは実習中、絵本の読み聞かせをしたいと思いましたか」の質問に、とてもそう思う、そう思うと答えた学生は合わせて110名である。そう思わない、と答えた学生は、図6の理由をみると「苦手だから」と答えている者もいて、人前で話すことを苦手とする学生は子どもの前で実践することも苦手と感じているようだ。読み聞かせをしたいと答えた多くの理由は「子どもの前で読む体験をしてみたいから」である。これは自分の読み聞かせによって子どもの反応がどのようなものかを見てみたいという好奇心や期待が働いていると考えられ、自分の読み聞かせがどれくらい子どもたちを引き付けられるのかを試してみたいと思っているのではないかと推察される。また、「絵本が好きだから」を理由とした学生も52名おり、これは保育者を目指す学生の特性としてよく見られる傾向である。また66名の学生が「実習には必要だと思ったから」を理由として挙げている。この結果からは、先にも述べたが、絵本の読み聞かせは保育現場において必要なものであり、学生は、実習を保育実践の経験をする機会として捉え、絵本の読み聞かせはやっておくべきだと認識していることが明らかになった。つまり、多くの学生は実習の意義をしっかりと理解し、そのねらいを全うしようという意欲がうかがわれる。

逆に、実習中に読み聞かせを行わないと「実習評価に影響するから」と答えた学生が11名おり、これは自分が周りの人たちからどのように見られているか、評価されることを強く意識していると考えられる。過剰に評価を気にして実践を行うことは好ましくない。最近の学

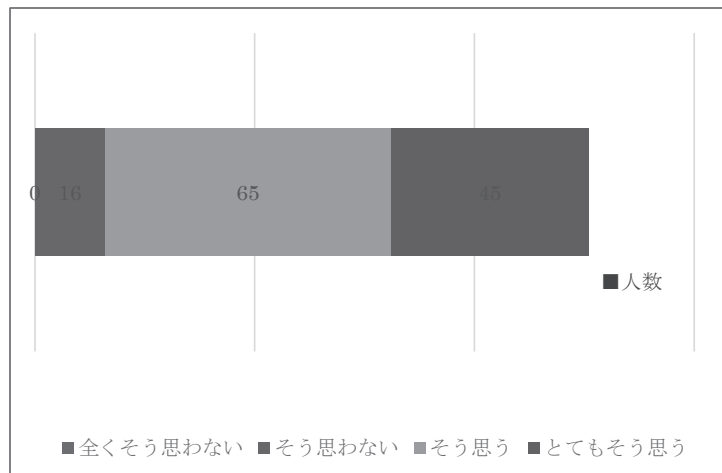


図5 実習中、読み聞かせをしたいと思ったか

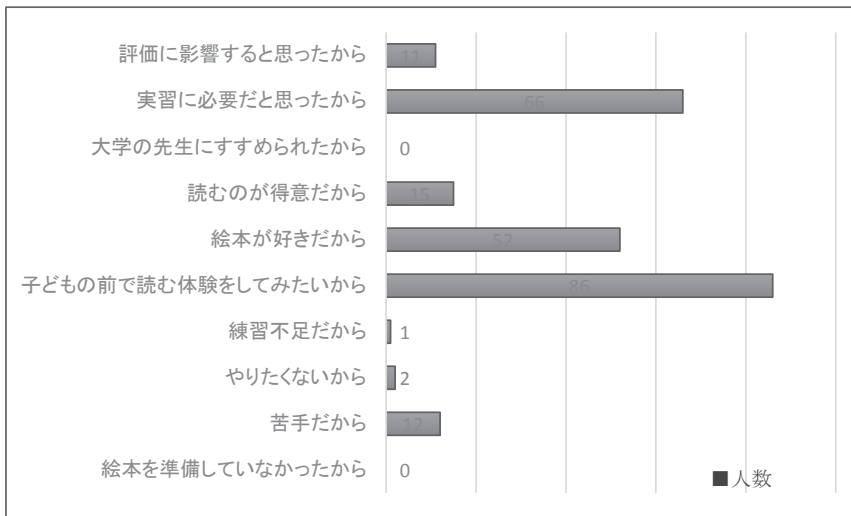


図6 実習中、読み聞かせをしたいと思った理由（複数回答可）

生は、自分個人に向けられた意見や評価を受け入れることを苦手とする学生も多く、もっと広く視野を持ち、どのような意見も受け入れる柔軟な心を持つことが大切である。

また、実際に実習中に読み聞かせを行い、それがうまくいったかどうかという質問に対して、学生の自己評価は「うまくいった」と回答した学生が102名であり、多くの学生が高い評価をしている（図7）。学生に聞いてみると「子どもが喜んでくれたから」「子どもと一緒に楽しめたから」と答える者が多く、これは、学生自身が上手に読めたこと以外に、自分の読み聞かせで子どもたちが喜んでくれる姿を目の当たりにして学生も感動し、達成感を味わうことが出来たからだと考えられる。また、「好きな絵本だったから」と答える学生もいて、自分が好きな絵本は自分にとって読みやすい絵本であり、読み聞かせの表現もより豊かになることが推察される。読み手がゆったりと落ち着いて読むことで、子どもたちにもその表現が

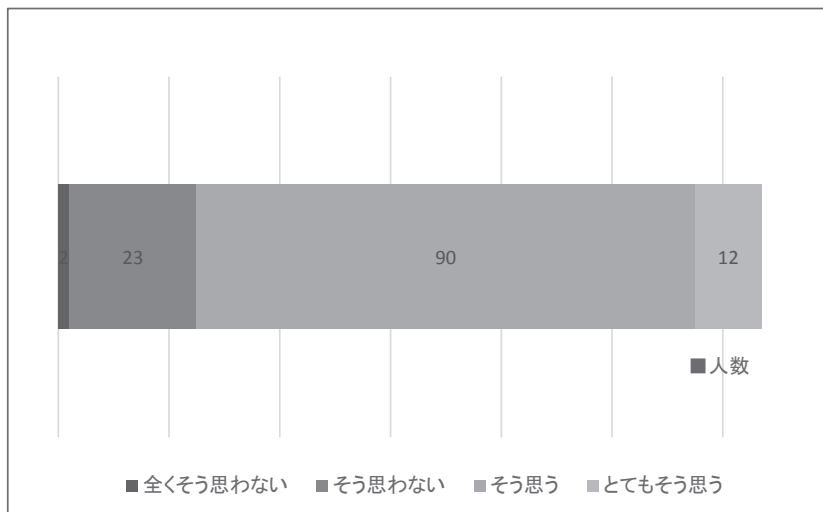


図7 実習中に行った読み聞かせは上手くいったか

しっかりと伝わる。さらに、苦手な絵本をわざわざ選ぶことは無いとしても、どのような絵本においても、読みこなすためには練習が必要であることは言うまでもない。練習するという事は、絵本の内容を理解し、作者の意図を読み取り、豊かな表現力を持って読み聞かせるということである。実習で絵本を読み聞かせる際には、自分の好きな絵本を選んで練習し準備しておくことも、より良い実践に結びつけるひとつの方法である。

一方で「うまくいかなかった」と回答する学生も少数いる。学生に尋ねると「苦手だから」「緊張したから」という者が多く、ピアノ演奏や弾き歌いなども「緊張する」ことで本領を発揮できなかったという報告をよく耳にするように、これは、どのような場面でも起こりうることであり、緊張することなく絵本を読むためには、人前で読む経験を積むことである。そのためには通常の授業のなかで行う実技発表の場面において、学生が大勢の人の前で保育実践を披露する機会を豊富にもつことが効果的である。

また、なかには「練習不足だった」と感じている学生もいる。準備不足のまま実践を行った意識の低い学生が存在することは問題である。実習において初めて経験する絵本の読み聞かせは、自分がいかに十分な準備をして臨んだかを理解するための基準ともなる。つまり、自分ではしっかり練習をしたつもりでも、子どもの前ではスムーズに読めなかったことで、初めて自分は練習不足だったと気づくのである。子どもにとって豊かな時間となる絵本の読み聞かせの時間を、実習生である学生自身にとっても貴重な学びの場とするためには、何度も下読みをして練習することはもちろん、学生が自分の好きな絵本を選ぶことも、緊張を軽減し、自信をもって読めるようにするために役立つ方法のひとつだといえる。

(3) 学生が実習中、読み聞かせをして注意されたことについて

学生に、実習中、絵本の読み聞かせ実践を行った際、どのようなことを注意されたのかを調査したところ、図8のような結果となった。まず、最も注意されたことは「導入」「終わり方について」である。これは、学生が事前準備として絵本を読むこと自体の練習はしているのだが、子どもを相手にしているという実践的なイメージを持って練習ができていなかったことを示している。学生は、保育実践の全体像として、絵本の読み聞かせをどのように始めるかを考えたり、子どもの反応や様子を十分イメージできていないのである。子どもたちは絵本をみて、いったいどのような反応をするだろうか、読み終わったあと、どのような言葉を発するだろうかといった子どもの姿を想像することは、保育実践を計画するうえで非常に大切なことである。子どもの姿を予測し、子どもたちの反応に対してどのように対応していくか、様々な子どもたちに対する対応の仕方など、あらかじめイメージを持ってシミュレーションしておくことが重要なのだが、学生はこれを理解していない。このことから、授業のなかで行う絵本の読み聞かせ指導においては、ただ絵本を上手に読むことを指導するのではなく、子どもの前で実践することを意識して、導入から終わりまでのシミュレーションをしながら絵本の読み聞かせを練習することの必要性を学生に伝えたいうえで、実践指導をするべきである。

次に、学生が多く注意されていたのは「絵本の持ち方」である。これは、実際に子どもたちを前にしたとき、緊張や経験不足から絵本が傾いてしまったり、子どもの様子を見ながら

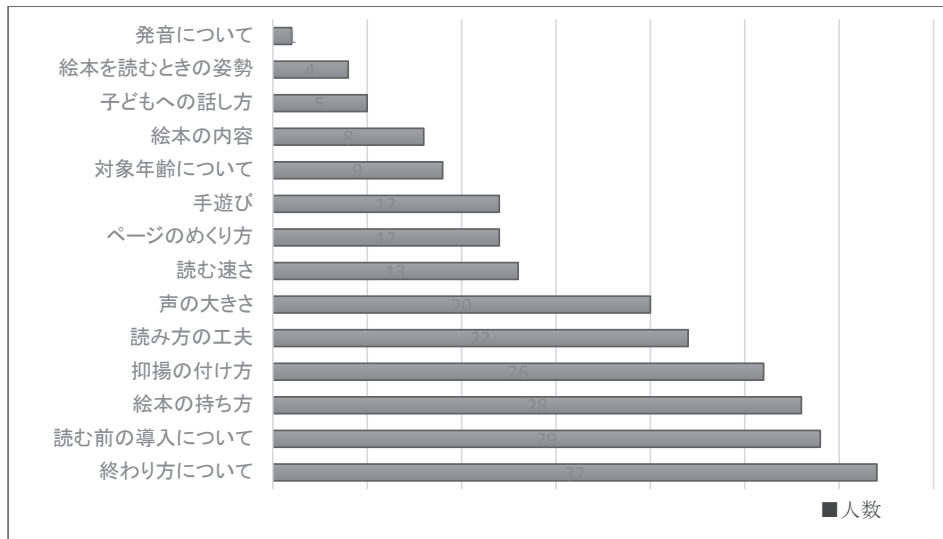


図8 絵本の読み聞かせ実践で注意されたこと（複数回答可）

絵本の持ち方を工夫出来なかったことが関係しているのではないと思われる。これについては、事前に子どもの前で読むイメージをしてから実際に人前で実践し、誰かに指摘してもらいながら、絵本の見せ方に気を付けて練習を重ねることが必要である。そのほか、学生が注意されたことは「抑揚の付け方」「声の大きさ」「読み方の工夫」などであるが、これらに関しては、読み聞かせをする際の子ども的人数、対象年齢、状況などによって臨機応変に対応できるよう経験を積み重ねることが望まれる。しかし、実習中に全ての年齢のクラスで実践を経験出来ない場合も多い。そのため、授業のなかでも、乳児クラスの子どもに膝の上で読む場合と、3歳以上児の幼児クラスで全体に向けて読む場合とでは読み方が違うことなど、実際の保育現場がイメージできるような指導を取り入れることも必要である。さらに、実習する園では指導する先生によって考え方の違いなどがあるため、絵本の読み聞かせに関しては多様な捉え方があることも伝えておく必要がある。また、実習園で担当クラスが決まったら、学生は、その子どもたちの前で読むということを意識して練習するべきである。ただ、絵本を読む練習をするのではなく、どこに座って読むのか、絵本をどのタイミングで見せるのか、いつ始めるのか、子どもたちが集まらなかったらどうするのか、読んだ後はどのように絵本を置き、どのような話をするのかなど、考えられる状況をたくさん予測して、臨機応変に対応するためのシミュレーションをしっかりと行ってから練習を積み重ねることが重要なのだ。これまで絵本の読み聞かせについて受け身側であった学生が、いかにして人前で行う側に意識を変え、保育者としての意識を高めて読み聞かせを行うことが出来るかが課題なのである。そして、これをサポートするために授業においては学生が入学した1年生当初から、しっかりと実践指導をしていく必要がある。

（4）学生が実習中、読み聞かせをすることで何に悩んだかについて

学生に、実習中、絵本の読み聞かせ実践について悩んだことを聞いてみたところ、図9のように「絵本の選び方」「子どもの引き付け方」「対象年齢」「導入の仕方」「終わり方」など

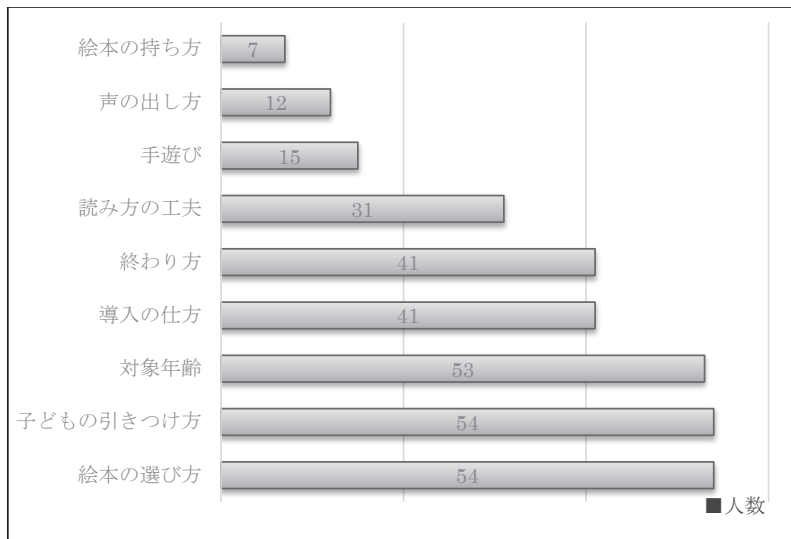


図9 実習中、絵本の読み聞かせについて悩んだこと

を理由として挙げた者が多く、学生が悩んだのは、意外にも絵本を読むこと自体ではなく、始め方（導入）や終わり方であることに注目したい。この結果からは、学生が保育実践としての絵本の読み聞かせの全体の流れをイメージ出来ていないことが浮き彫りとなった。

学生は、実践に向けて絵本を読む練習を十分にしていたとしても、実際に子どもたちの前に立つと、始め方や終わり方を考えていなかったため、そのあたりを注意され悩んでいるのではないだろうか。このような結果を受けて、教員は、入学当初の1年生の頃から、絵本の読み聞かせとは「子どもの前に座るところから、読み終わって、次の活動や動きに移るまでが読み聞かせである」ということを学生にしっかり伝え、指導しておく必要がある。また、「絵本の選び方」や「対象年齢」は複数の授業で指導していると思われるが、これらを、多くの学生が悩む要因として挙げている結果をみると、学生の理解度は低いようである。さらに、実習園や担当保育者によっても考え方の違いがあることが、学生の絵本選びを難しくさせている実態があることもわかった。実習園や担当保育者の考え方は様々であるが、そのような時もじっくりと話を聞き、絵本に対する多様な考え方を受け入れていくことが、学生の絵本選びの幅を広げていくのではないと思われる。教員はそのようなことも踏まえて、実習中は臨機応変に対応するよう授業のなかで伝えながら指導にあたらなければならない。

（5）絵本の読み聞かせに対する今後の意欲について

全ての実習を終えた学生に「就職後も積極的に絵本の読み聞かせをしたいですか」という質問を行った結果、図10が示すように、そう思う、とてもそう思うが合わせて118名となった。このことから、多くの学生が保育者になった際も、積極的に絵本の読み聞かせをしたいと考えていることがわかる。

その理由であるが、図11を見ると「子どもには大事だと思うから」が99名と最多であり、人格形成の基礎を培う大切な時期の子どもを預かる保育者としての自覚が、学生にも芽生え

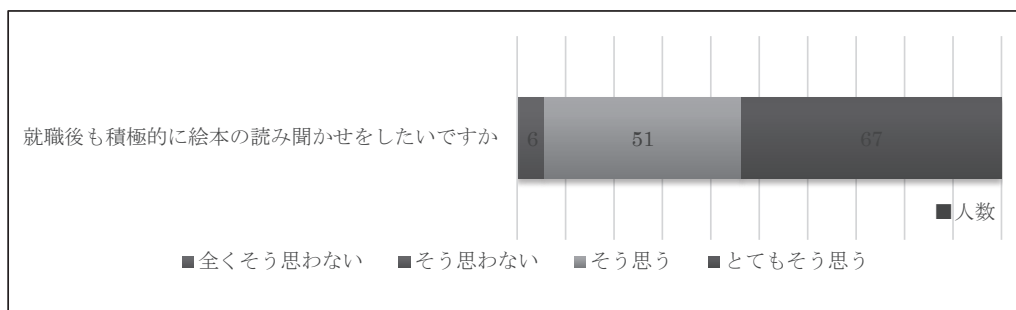


図10 絵本の読み聞かせに対する今後の意欲

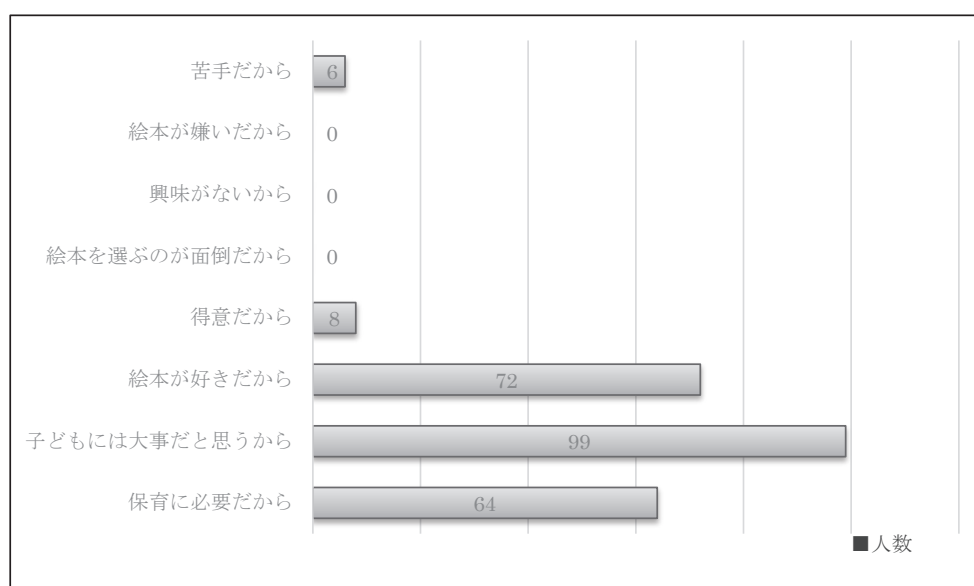


図11 就職後の絵本の読み聞かせ回答における理由（複数回答可）

ていることがわかる。次いで多い理由は72名の「絵本が好きだから」となるが、これは学生自身が、保育実践の場において楽しみながら、すすんで文化財である絵本を選択し、子どもたちのために読み聞かせを行おうとしている姿勢が現れている。

また、(1)の質問「現在、絵本を読むことが好きですか」(図3)という問いにおいて、全くそう思わない、そう思わないと答え、元来絵本を読むことが好きではない学生が合わせて15名いたが、(5)の質問「就職後も積極的に絵本の読み聞かせをしたいですか」(図10)という問いになると、全くそう思わない、そう思わないと答えた学生は7名となった。つまり(1)の質問「現在、絵本を読むことが好きですか」に対し否定的な回答をした学生は15名であったが、就職後の絵本への取り組みを尋ねると、否定的な回答は7名へと半分以上に減ったことになる。

このことは、子どもの最善の利益を優先し、保育者として絵本の読み聞かせをしたいと考えている学生が多いということが示されており嬉しい結果となった。しかし、(5)の質問「就

職後も積極的に絵本の読み聞かせをしたいですか」に対し、全員が前向きな回答とならなかったことは、保育者養成校の教員として非常に残念なことである。なぜ、このような回答をするのか、その理由を解明し、そのような学生への指導を検討していくことが必要である。

5. まとめ

本研究は、保育のあらゆる場面で実践される絵本の読み聞かせに焦点をあて、学生がいま何を悩み、何を気にしているのか、学生の現状はどうかを明らかにしながら、学生の実態を把握し、保育実践の指導方法の改善を検討するものである。

今回の研究結果からは、次のようなことが導き出された。まず、保育実践としての絵本の読み聞かせで学生が悩んだこと、現場で注意されたことは「絵本の読み方」自体ではなく、導入や終わり方といった、保育実践の全体の流れをイメージできていないこと、および子どもの姿を予想できていないことであった。それをこれまでの授業内容のなかでは十分に指導出来ていなかった可能性がある。絵本の読み聞かせについては色々な授業のなかで扱っているのだが、どれも絵本の選び方や読み方を重視し、全体の流れの計画や個々のシミュレーションまでの指導には至らなかった点が最大の問題点である。学生は、その重要性に気付いていないため、今後は、学生に対する絵本の読み聞かせをする際の注意点として、子どもの姿をイメージして導入から終わりまでをしっかりと考えることを指導するものである。

次に、学生のなかには人前で実践することを苦手とする者が多いことである。これには、実践練習の場を豊富に持つことが求められ、授業や実習のなかで、いかに学生が人前で実践する機会をつくり、経験を積むかが問題となる。緊張したり、恥ずかしいと思う気持ちは、経験を積み重ねて慣れることでしか克服できない。しかし、一人ではその経験は出来ないため、大学の授業のなかで、そういった機会を計画して十分に経験させることが必要である。教員は、これを頭にいれて授業計画を工夫しなければならない。そして、実践の仕方は、ただ絵本を読むという実践ではなく、子どもの前で読むことを想定して導入から終わり方までの全体の流れを実践することが最善の練習方法である。子どもが前にいることを意識し、人に見られることに慣れ、観衆を実感しながら実践する経験を積み重ねることが大切なのだ。学生一人一人に時間を割いて模擬的に全体の実践をさせるのはなかなか難しいことだと思うが、何とかそのような時間を計画的に授業に組み込むことが今後の課題である。

最後に、学生が絵本の素晴らしさを実感し、理解して子どもに読み聞かせることである。最近の学生は新聞を読まない者も多く、活字離れが著しい。携帯電話の普及によって通信機能は元より情報を得ることも辞書の機能もスマートフォンを使用している。これは自分自身で文字や文章を書くこと、すなわち自分で表現すること自体が減っていることにもつながっている。今の学生は言語表現を含めて、全般的に表現することに慣れていない。忙しい今の学生はほとんど本を読まない。本のなかにはあらゆる文章表現があり、その独特の世界に浸って感動したり、人生を考えたりする体験も少ないのではないだろうか。人は、あらゆる表現に触れて心を動かされ、自己表現が磨かれることを実感して欲しい。

絵本にも同じように深い表現の世界がある。絵本を通して、子どもは物の概念を知ったり、

色の美しさに感動したり、主人公と自分を重ね合わせて疑似体験をするなど、絵本は想像力を豊かにする。そして、その絵本と子どもをつなぐのが保育者であり、絵本の読み聞かせが子どもの心や感性を豊かに育む。このことを学生はしっかりと認識して実践に取り組むことが望ましい。そのためには、まず、自分自身が絵本の世界の素晴らしさを実感することも大切である。自分が絵本を好きになれば、人前で実践することが恥ずかしいという気持ちよりも、伝えたいという思いが強くなるだろう。そして、その思いを伝えるとともに、子どもと絵本のつなぎ手として表現をするということを意識して読み聞かせを行うと良い。絵本の世界を伝えようとする思いは、全体の実践の流れとして、導入の仕方や終わり方にも自然に通じるものとなる。

保育実践の指導は、教科書を使って教えるような方法では指導できない。しかし、指導法に工夫を要する保育の実践指導には、絵本の読み聞かせをはじめとして、どの実践も子どもの豊かな感性を育むために保育者が行う大切なものであることを学生に十分に知らせながら指導していくことが教員の使命である。

＜参考文献＞

西川宏子2002「保育学生における絵本の読み聞かせの理論及び方法の修得に関する研究」～絵本を読み聞かせられる立場に立つ経験を取り入れることを通して～中国学園紀要（1）pp37-41

真下あさみ・太田由美子・国藤真理子・早矢仕清貴・星野秀樹・朴賢晶 2012「保育学生の
実習に対する不安について」

愛知文教女子短期大学 研究紀要 第33号 pp27-37

文化庁 2013「国語に関する世論調査」

伊藤久美子・齊藤陽子 2016「サンドシアターを通して身に付く保育学生の表現力について」日本教育情報学会第32回年会論文集 pp66-69

厚生労働省 「保育所保育指針」2017年3月告示

文部科学省 「幼稚園教育要領」2017年3月告示

研究ノート

実習指導授業におけるグループワークの取り組み

村上 浩美 朴 賢晶 星野 秀樹
国藤 真理子 伊藤 久美子 玉田 裕人

An Approach to Newly Adopted Group Work in the Guidance of Childcare Practice

**Hiromi Murakami, Hyun-jung Park, Hideki Hoshino,
Mariko Kunito, Kumiko Ito, Hiroto Tamada**

「保育実習指導」の授業の中でグループワークを行い、その効果や方法について検証し、グループワークをする意義がより高められるようなより良い学習方法を考えた。

研究方法は、実際に行った三つの事例を次の二つの視点から検証し、よりよい学習方法を考えるというものである。一つ目は、課題がグループワークにふさわしいものかということ。二つ目が、グループワークの進め方や役割分担などの内容は適切かということである。そして、その結果から今後の課題も提示する。

Abstract

We adopted group work in the guidance of childcare practice and verified its effects trying to find out more appropriate methods to make the most of this approach.

In this paper, we discuss three cases from the following two points of view considering if there is a better approach. One is whether or not the theme of the discussion is suitable for group work, and the other is the properness of its procedure and role-sharing in the group. Finally, from the results obtained, we illustrate some problems awaiting solutions.

キーワード： アクティブラーニング、グループワーク、保育実習指導

1. はじめに

グループワークを行うことによって、他者の自分とは違った考え方や意見に触れ、考えの幅を広げたりより深く考えたりするようになる。また、他者に自分の考えを提示し理解してもらうために、相手に分かるように伝える練習になったりもする。幼児教育において協同しての育ちが求められる中で、学生自身もグループワークを通して、協同することの意義を感じ協同しようという意欲が培われることが望まれる。

「保育実習指導」の授業の中でグループワークを行い、その効果や方法について検証し、グループワークをする意義がより高められるようなより良い学習方法を探っていきたい。

2. 研究の方法

授業の中で、グループワークを行い、その効果を図るために次の2点を考える視点とする。

- ① 課題がグループワークにふさわしいものか
- ② グループワークの内容は適切か（進め方や役割分担 等）

3. 事例1：施設実習前の学習

授業のねらい — 実習に役立つように自分が実習する児童福祉施設に関することをグループで調べ発表し、施設への理解を深める。

(1) 授業の流れ

① 2または3人で課題に取り組む

- ・自分が実習を行う施設（児童養護施設、乳児院、児童発達支援センターの中の1施設）と同類の施設で実習する学生2～3名で1グループになり、その施設に関する事で何を調べたいかをテーマ決め、調べたことを紙（A4サイズ1枚）にまとめ資料とした。
- ・グループのメンバーは学生自身で決めた。
- ・学生が何をテーマにしたらいいか決める際の参考になるように、教員が以下のキーワードを提示した。

【乳児院・児童養護施設で実習する人】

乳児院・児童養護施設共通・・・施設の現況と課題（親の状況、子どもの状況）／愛着障害・反応性愛着障害／児童指導員と家庭支援専門相談員（ファミリーソーシャルワーカー）の仕事／心理療法／発達障害（ADHD：注意欠陥多動性障害、LD：学習障害、AS：アスペルガー症候群）／コミュニケーションスペアレンティグ（CSP: Common Sense Parenting）／セカンドステップ

乳児院・・・乳幼児突然死症候群〔SIDS〕／乳児院倫理綱領

児童養護施設・・・地域小規模児童養護施設（グループホーム）／ユニットケア／小・中学生の発達・ギャングエイジ／社会福祉士の仕事

【児童発達支援センターで実習する人】

施設の現況と課題（親の状況、子どもの状況）／アドボカシー／療育（愛護）手帳／スモールステップ／臨床心理士の仕事／作業療法士・作業療法／理学療法士・理学療法／視能訓練士・視能訓練／言語聴覚士の仕事／ダウン症／自閉症／

- ・資料は、読み手が分かりやすいように、文字ばかり書くのではなく、図や表、絵などを入れ工夫するように学生に伝えた。

② 発表する

まとめた資料について、みんなの前で発表した。(資料は、印刷して他の学生に一人1部ずつ配布する)

発表時間は約5分。発表はただ資料を読むだけではなく、聞いている人が分かりやすいように、例やデーターを用いるなどして工夫すること、また発表に興味を持つように、発表の途中で他の学生への質問を1問以上入れることを課題にした。

③ 他の学生や教員から資料や発表に対する評価を受け質問に答える

質問者(学生2名と教員)が発表や資料に関して良かった点を述べその後発表者に質問した。発表者が質問に答え、発表者の誤答に対しては教員が訂正したりフォローしたりした。発表者が答えられない時は、調べてくるよう宿題とした。

④ 自己評価、他者評価をする

発表者、質問者、その他の学生が、教員が用意した項目について、自分の考えや意見をまとめ教員に提出した。

【発表者のまとめの質問項目】

テーマ _____

- 発表はうまくできましたか。該当するところに○を付けてください。

① 良くできた	② まあまあできた	③ どちらでもない
④ あまりうまくできなかった	⑤ 全くできなかった	
- 発表内容や発表に対する意見・感想(「こうするとよかった」という意見も書いてください)

【質問者とその他の学生用のまとめの質問項目】

- 該当するところに○を付けてください。
 - 発表の内容

① 十分理解できた	② やや理解できた	③ あまり理解できなかった
④ 全く理解できなかった		
 - 発表の仕方

① 大変良かった	② 良かった	③ 普通	④ あまり良くなかった
⑤ 全く良くなかった			
- 発表内容や発表に対する意見・感想(「こうするといいい」という意見も書いてください)

(2) 結果

【学生が決めたテーマ】

教員が提示したキーワードをテーマにする学生もいれば、キーワードを具体化してテーマにする学生もいた。また、それ以外のテーマにした学生もいた。主に以下のようなテーマであった。

・愛着障害・反応性愛着障害

・乳児院の現状と課題

- ・乳幼児突然死症候群
- ・児童養護施設の子どもの現状
- ・児童養護施設の現状と課題
- ・コモンセンスペアレンティング
- ・社会福祉士の仕事
- ・児童指導員と家庭支援専門相談員
- ・発達障害の種類
- ・自閉症
- ・運動機能障害
- ・児童虐待について
- ・心理療法
- ・小・中学生の発達・ギャングエイジ
- ・セカンドステップ
- ・スモールステップ
- ・地域小規模児童養護施設
- ・ADHD：注意欠陥多動性障害
- ・AS: アスペルガー症候群

【授業に対するアンケート結果】

① 質問：自分たちで調べてみたことは、実習に役立ち「調べてよかった」と思えますか。

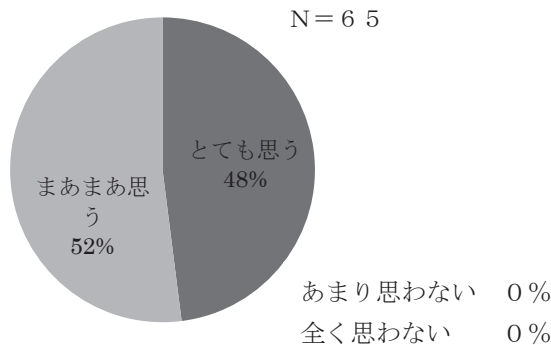


図1 アンケート結果 事例1

② グループワークについての感想（記述式）

【グループワークに対する感想】

- ・自分で調べることで講義より頭に入り、より深く理解できた。
- ・自分たちで調べたりまとめたりするから覚えられる。
- ・全然分からなかったことがだんだん分かってきて楽しかった。
- ・ペアの子が調べた内容と合わせてより深く分かった。
- ・一緒に調べた人と実習に対する不安や悩みを共有できた。
- ・ペアの子の意見も聞けてよかった。

【他のグループの発表を聞いた感想】

- ・みんなからの資料で知識が増えてよかった。
- ・色々なことが勉強できてよかった。
- ・同じ学生なので、疑問に感じるところもだいたい同じなので、知りたいことが知れた。

(3) 考察

視点① 課題がグループ学習に：ふさわしいものか

グループの学生と実習に対する不安や悩みを共有でき「不安や悩みを抱えているのは自分だけではない」と少し安心すると共に、相手の考えや意見を聞いてグループの学生との関係を深める学生もいた。また、分担して課題に取り組み、より深く理解することができたと回答した学生もいた。このことから、グループワークとしての効果が少なからずあると考える。今後はその効果がより多くの学生に得られ高まるよう、グループワークの仕方を考える必要がある。例えば、テーマを決めるときに、互いが思う実習に対する不安や期待、疑問、知りたいことなど十分に話し合う時間を確保すると、より積極的に調べようとすると思う。また、そのことを通し互いのことを知り関係が深められると思う。

視点② 授業の進め方や内容は適切か

教員から与えられた一つのテーマではなく、自分たちが実習を前に調べたいことだったので、興味もあり必要もあり調べようとする意欲が高まり調べる課題としては適していたものだったと思う。

また、教員とは違った学生目線で課題について調べまとめられているので、他の学生の発表を聞くことは、知りたい内容であったり、難しくなく感じて理解しやすかったりする良さがあると思う。

発表に対して、質問者を設けたことで、質問者もしっかり発表を聞き質問しようとするし、発表者も質問に答えられるよう努力はしていた。しかし、中には調べた内容が浅いグループもあったので、教員がもう少し深い内容になるように質問をして答えられないときは宿題にして調べてくるようにさせた。

4. 事例2： 模擬保育

授業のねらい — 活動のレパートリーを増やし、保育方法を考え深める。

* 学生が、実習中に行える活動の数が少ないので、様々な活動を知る機会にし、その活動を模擬保育することで、よりよい保育方法を考えられるようにしていくことをねらいとしている。

(1) 授業の流れ

① 一人一つ、活動の指導案を書いて提出する

② 5～6人のグループになり提出した活動の中から模擬保育する活動の一つを選ぶ

グループ間で、自分が提出した活動の指導案を説明した後、模擬保育用の活動を選んだ。

③ グループで模擬保育の準備をする

模擬保育するにあたって、学生が考えた指導案を基に、予想される子どもの活動や援助方法をグループ討議して考えた。グループで保育者役1名と子ども役になって模擬保育を行うのだが、2名の子ども役の性質をあらかじめ決めておくようにさせた。一人はおとなしく自分の考えや思いを表すことに消極的な子ども、そしてもう一人は、保育者の話が理解できず活動を嫌がったり、落ち着いて行動できなかったりする子どもであった。その上でその子どもたちはどういう行動をとるかを想定しそれへの対応を考えるようにした。

④ 模擬保育する

1グループごとに模擬保育を行う。他のグループからも子ども役として数名参加した。その他の学生は模擬保育を参観した。

⑤ グループの学生が自己評価する

模擬保育後、うまくいかなかった点や予想しなかったことなどを話した。

⑥ 他の学生が評価する

よかった点や改善点等を話した。

⑦ 教員が評価し保育方法について助言する

教員が、学生の意見を補ったり別の考え方を提示したりもした。

(2) 結果

【授業に対するアンケート結果】

質問①：授業（活動を選び指導案を書くところから、模擬保育の実施まで）において、有意義だったことはありましたか。N = 70名

あった 69名 なかった 1名

質問②：有意義だった点（記述式 N = 69）

知らない活動を知れた。	48%
実際にやっているところを見られて保育方法が分かって参考になった。	28%
グループで話し合ったことで、予想される子どもの姿やそれへの対応の仕方が、色々考えられてよかった。自分では考え付かないようなことも出てきてよかった。	28%
実際にやってみて改善すべきところが分かったり発見があったりしてよかった。	23%
遊びの進め方や子どもへの対応を学べた。	19%
他者の指導案の書き方が参考になった。	7%
子ども役になることで子どもの気持ちも理解できた。	3%

表1 アンケート結果 事例2

【グループワークについての感想】（記述式）

- ・計画を立てることの大切さを感じた。
- ・指導案を書く大事さやどのように書けばよいか書き方を学べてよかった。
- ・子ども役が学生であっても、もし子どもだったらということを考えながらやることができたし、見ることができた。
- ・指導案を書くだけでなく実際にやることで学生みんなが参加できるのでとても深い授業だと感じました。
- ・見るだけでなく、実際に保育に子ども役として参加したり、よかったところ、直したほうが良いところなどを考えたり他の人の話も聞けて良かった。楽しかった。
- ・もっといろいろ知りたいと思った。
- ・後期にもこういった授業があれば就職した後も使えそうです。

(3) 考察

視点①：課題がグループ学習にふさわしいものか

- ・ 4 回目の実習を済ませた後であったので、部分実習を経験済みの学生が多く、保育を考える力も随分備わってきた後であったので、他とは違う自分なりの考え方を発言出来るようになり、グループ学習の効果があったと考える。
- ・ 指導案作成に終わらず、実際に動いて模擬保育を行うことによって分かることもあった。保育者と子ども役それぞれの役を決め模擬保育を行ったので、グループで行う意義があったと考える。

視点②：授業の進め方や内容は適切か

- ・ 実習前に指導案の提出であったので、指導案を書く練習にもなったし、部分実習で行う活動を考える予習にもなったと思う。進め方は、考えたり話し合ったりする時間を適度にとり適切であったと思う。
- ・ 「実際にやっているところを見られて保育方法が分かって参考になった。」との回答が 28%、「実際にやってみて改善すべきところが分かったり発見があったりしてよかった。」との回答が 23% あったことから、座学に終わらず実際に動いて模擬保育を行ったことは、内容の効果であると考ええる。
- ・ 保育方法を具体的に考えられたこと、自分が知らない活動のレパートリーが増え、その保育方法が参考になったことなどの効果があり学習内容としては適切であったと考える。

5. 事例 3： 実習後の学習

授業のねらい ― 保育所実習を振り返り省察し保育者になるための課題を明確にする。

(1) 授業の流れ

① 実習を振り返り一人で質問用紙に記入する

保育実習 I（保育所）実施後、教員から与えられた質問用紙に沿って、自分の経験したことや考え等を記入した。

② 5～6人のグループになり用紙の項目内容について発表し合う

③ グループ内容を他グループに入って伝え合う

- ・ グループの一人が他のグループに入って自分のグループで話し合ったことを伝えた。その後、グループの人は入ってきた他グループの一人に自分たちのグループで話し合ったことを伝えた。

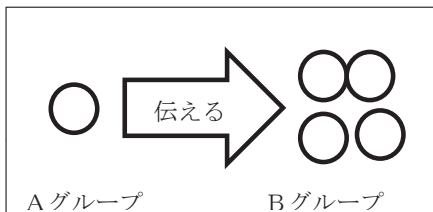


図 2 A グループから B グループへ伝達

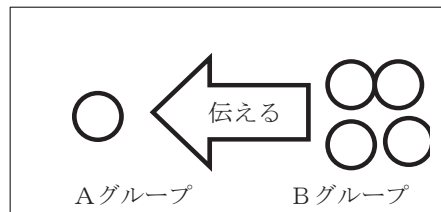


図 3 B グループから A グループへ伝達

○ 伝えた内容は以下のことである。

- ・実習日誌の書き方でご指導いただいたこと
- ・保育士の方がされた一斉活動や簡単な遊び（手遊び、クイズ等）
- ・実習で困ったことや疑問点、その解決方法
- ・保育実習Ⅱに向けての課題

(2) 結果

【授業に対するアンケート結果】 N = 64

質問①：他の人の実習の話を聞いて、どう思いましたか（記述式）

自分が知らない遊びや対応の仕方があって参考になった。	59%
自分と同じようなことで悩んだり困ったりしたことを知り安心した。	14%
次の実習に向けてすべきことや準備することがより分かった。	8%
自分では解決できなかったこともグループで話し合うことによって解決方法が見えてきた。	3%

表2 アンケート結果 事例3-①

質問②：保育実習Ⅱに向けての準備・課題は何ですか（記述式）～グループでの話し合いの前と後～

	話し合い前	話し合い後
様々な遊びや手遊びのレパートリーを増やし、練習する。	34%	80%
ピアノの練習をする。	25%	61%
子どもについての理解を深める。発達段階を調べておく。	8%	25%

表3 アンケート結果 事例3-②

(3) 考察

視点①：課題がグループ学習にふさわしいものか

大勢の前で自分の考えを発表するよりは、5～6人の小グループで発表する方が、気楽に話せるという利点があり、限られた時間の中で一人が話す時間が多くあるので、より具体的に話すことができ、他者から多くの情報を詳細に得ることができると思う。

また、自分では解決できなかったことが、グループで話し合うことで解決方法が見つかったという結果もあり、グループワークの意義があると思われる。たとえ解決方法が見つからなくても、解決するために協力して考えることができたなら、アクティブラーニングとなる。見つからないときは、教員がフォローして、解決方法を導き出すようにするといいと考える。

視点②：授業の進め方や内容は適切か

- ・他者の意見を聞くことによって、次の実習前に準備しようと思う事柄が増えるとともに、準備の必要性をより深く感じた学生が増えたことから内容としては適切であったと考える。
- ・グループの一人が他グループに入って自分のグループで話し合ったことを発表することは、各グループでの話し合いの前に学生に伝えてあったので、他グループに伝えられるようグループ内の他者の話を注意して聞き理解するよう努めたと思われる、実践した内容や進め方で学習効果があったと考える。

6. まとめ

事例1、2、3ともに、グループワークとしての効果は少なからずあると思うが、授業のねらいを考えたとき、事例1はグループでなくても、学生一人への課題とした場合でも、ある程度の効果が得られるのではないかと考える。それに対し、事例3は、グループワークによる学習効果は大きいと思われる。限られた授業数の中、多くの学びがあり考えの深まりが得られるようにグループワークの効果を把握して取り入れていく必要があり、グループワークによって、個々人で行うより効果を得るための工夫が必要だと思う。そしてその中で、協同する意義を感じ、協同する意欲を培うことも考えていく必要がある。

グループワークは、グループの構成メンバーによって取り組み方が違いその学習効果も違ってくる。一人一人がグループワークの効果を高めようと意識をもって取り組むことが必要であり、意識が持てるような授業の方法を今後考えていきたい。

CONTENTS

STUDY ARTICLES

Improving Students' Level of Knowledge and Skills with Regard to Expressive Activities for Care Providers —An Approach to 'Sand Art' —	Kumiko Ito	1
Effective Support Method of Developing Musical Expression Ability Necessary for Preschool Teachers. —Instructional Support Program for Piano Lessons to Be Adopted at Schools for Childcare Education—	Mariko Kunito, Hiroto Tamada	21
A Way of Support Provided by Childcare Workers as Part of an Interpersonal Environment —Focusing on Childcare Workers Engaging in the Care for children with Developmental Disorders along with Their Parents—	Midori Nakamori	29
Research for Consciousness on Human Rights of College Students —Compared with That of People in Aichi—	Jyunichi Hoshina, Motoo Tanaka	45

STUDY NOTES

Consideration of a Process of the Baking Snack for which a Chemical Swell Action was Used	Shoko Ario, Mayumi Hara, Yuko Iwata	69
An Overview of the Current State of Preschool Education in New Zealand —On the Basis of On-the-spot Investigation of Kindergartens and Nursery Schools There —	Noriko Akatsuka	75
Important Roles of Pianists and Piano Teachers in Our Society	Mariko Ito, Yumi Kurata, Eriko Horiuchi, Chie Igami	89
A Desirable Instruction in Music of Early Childhood Education —To Train Junior College Students to Be Able to Help Preschool Children Develop Their Abilities for Music—.....	Yumiko Ota, Masashi Yamamoto, Sahoko Amaishi, Masayo Ohashi	107
A Pronunciation and Vocabulary Guide to Kiwi English	Kiyoshi Kasai	131
Building Expressive Vocabulary for Pre-schoolers —Through Hands-on Experiences at the Jobsites—	Tomoko Kato	145
A Review of Teaching Strategies in 'Family Support' —Heading towards Collaboration among 'Family Support,' 'Consultation and Support in Childcare,' and 'Social Work' —	Satomi Negi, Junko Asano	153
A Basic Understanding of Formative Expressions and Its Application to Instruction Methods for Children	Kiyotaka Hayashi	161
A Study of Child care Practice — about reading a picture book to children —	Asami Mashita, Kumiko Ito, Noriko Shibata, Ayako Ando	171
An Approach to Newly Adopted Group Work in the Guidance of Childcare Practice	Hiromi Murakami, Hyun-jung Park, Hideki Hoshino, Mariko Kunito, Kumiko Ito, Hiroto Tamada	185

AICHI BUNKYO WOMEN'S COLLEGE

INAZAWA CITY, JAPAN

2018.3